

緋弾のエリア —瑠璃神に愛されし武偵—

あこ姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

凶悪犯罪が多発する現代日本。

そんな凶悪犯罪に対抗すべく新設された資格が「武装探偵・通称武偵」。

その武偵を育成する高校、東京武偵高校。

そこに通う水無瀬風優。

彼女にはフツージやない理由があった。

フツージやない彼女が仲間たちと織り成す物語。

お知らせ

この度、暁様での連載がスタートしました。

マルチ投稿になりますが、宜しくお願いします。

追記；リメイク版反映しました。(2019/11/27)

サブタイの後に「★」がある場合はリメイク版となっております。

## 目次

弾籠め	人物紹介	1
再装填	人物紹介Ⅱ	6
Collaboration with	Side Shuya	
第001射	初接触(ファーストコンタクト)、乗能(チカラ)と超能(チカラ)	10
	Side Naya ★	
第002射	接触(セッション)——猛襲の機械兵(マリオネット・フォース)	21
	Side Naya ★	
第003射	攻防(ブロッキング)——可憐なる舞踏(フレイムダンス)	35
	Side Yui ★	
第004射	決戦(デュエル)——超乗の一撃(クライシス・スイープ)	48
	Side Naya ★	
第005射	接敵(マッチング)——氷炎の激突(パニッシュメント・レクイエム)	65
	Side Naya	
I L a b a m b i n a d a I, A R I A :		
装填	★	78
第001弾	空から降ってきた少女と瑠璃姫	82
	★	
第002弾	遠山侍と瑠璃姫と...	87
	★	
第003弾	その後の新学期の朝	95
	★	
第004弾	凧優とキンジとアリア	101
	★	
第005弾	凧優とキンジとアリア@Night	109
	★	
第006弾	平穏なき夜	113
	Side Naya ★	
第007弾	平穏なき夜	& 120
	Side Aria & Kinji	
A f t e r	★	

第008弾 朝が来ようが変わらぬものもある ★

第009弾 ウラ取りと条件 ★

第010弾 転校生と本気の戦い ★

第011弾 最短最速バスジャック解決法（真似はオススメできない）

い ★

第012弾 バイト中でも、有事の場合は参加する。 ★

第013弾 魔術師の対峙 ★

第014弾 舞台に集い始める武偵たち ★

第015弾 天上の舞台で舞うは…… ★

第016弾 戦闘だつて大切な学びの場 ★

第017弾 対立、武偵殺しと魔術師

第018弾 その頃のキンジと、役者は揃う

第019弾 返り☆討ちと、ついでにダイナミック着陸？

第020弾 ことの終わりは何故か病院で

### AA編①

第021弾 もうひとつのはじまりは戦姉妹試験勝負

第022弾 裏で策を練る人を標的は知る由もない

第023弾 私闘（ケンカ）する程仲が良い。

第024弾 自分の実力を知るには先ずは自分の身体から

第025弾 サイカイとデアイはイガイなバメンで起こるもの。

I

第026弾 サイカイとデアイはイガイなバメンで起こるもの。

II

第027弾 凧優登場 Iフルート 【着ぐるみ無双】

第028弾 救われの姫は王子の心を救う I

129

134

146

156

173

185

198

203

217

229

233

244

254

263

273

282

292

303

316

331

338

第029弾 救われた姫は王子の心を救う Ⅱ | 352

第030弾 脅迫じみた伝言と参加申請 | 365

第031弾 顔合わせで相まみえるはバカと不運 | 369

第032弾 強化合宿、新たなチカラを習得せよ！ | 385

第033弾 開幕、カルテット。穿つは毒の一撃（プワゾン）

395

えくすとら | えでいしよん

リサのとあるいちにち | 409

アリアのとあるいちにち | 415

あかりのとあるいちにち | 422

超聖戦？バレンタインデー | 429

理子のとあるいちにち | 437

## 弾籠め 人物紹介

主人公

名前：水無瀬 凧優

年齢：17

誕生日：4月2日

身長：168cm

体重：52kg

所属：東京武偵高校2年A組（物語開始時）

所属学科：強襲科（メイン、Rank A）

情報科（掛け持ち Rank A）

衛生科・狙撃科（自由履修）

携行武器：MATEBA Modello 66 Unica

トーラス ジャツジ M513 ジャツジマグナム

ウルティマラティオ（PGM）ヘカート

## II

フォールディングナイフ×2

小太刀×2

長太刀×2

色金定女（日本刀／長太刀）

ダガーナイフ（投擲用・複数所持）

ワイヤー

愛車：トヨタFT86

カワサキZZR1400（2008年仕様）

イメージCV：寿美菜子さん

説明：銀髪セミロングで紅色の瞳が特徴。

スタイルは標準より少し良い（本人談）

人付き合いもそんなに悪いほどではない。ぶっちゃけいえば

「特筆することないフツー」。

戦闘時は状況判断次第で臨機応変に対応できるオールラウンドで大体が平凡。

そんな彼女だが、記憶力がずば抜けて良く、対象を一度（それも一瞬）見ただけで、完璧に再現可能。

技のクオリティも本家と差異は全くない。

情報戦でもその記憶力・完全再生能力を遺憾なく発揮する。

その為、武偵高校入学前は各地を転々と回って技を習得していた。

無論、両親の方針である。

修行地のひとつに「間宮家」もあつた為、間宮あかり・ののか姉妹とも仲が良い。

それもあつてか、イ・ウーにスカウトされ、所属する事となる。

イ・ウー活動時の序列はN.O. 3。（知らぬ間にN.O. 2に昇格）

イ・ウー活動時の二つ名は「魔術師」, 「氷天の魔女」。

そして、研鑽派の党首も周囲からの強い要望と満場一致で務めることになる。

武偵としての二つ名は「凍て付く一刀」

瑠璃色金の適応者で「心結び」をしているが、色金に取り込まれていない唯一の成功例。

（瑠璃神曰く、「よく解らないけれど凄く安心するから。取り込むなんて真似は絶対嫌。」）

瑠璃神の能力を借りることで身体能力等を向上させることができる。

### 第1段階

髪の色が瑠璃色に変化する。

能力の出力は30%〜50%

能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強。

傷を負った際の自己治癒可能（他者への使用不可）

### 第2段階

髪が瑠璃色に変化し、唐棣色はねずいろの瞳に変化する。

ついでに髪の長さもロングになる。

出力は55%〜70%程

第1段階に比べ能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強率増加

治癒力を他者へ使用可能。

回復量は自身に使うよりも劣る。

第3段階

第2段階の容姿で髪型が一部三つ編みになっている。

出力は75%〜80%くらい。

第2段階に比べ能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強率増加。

治癒力を自身に使う場合、瀕死でもなんとかなる。

他者への使用の場合は重傷者の回復がギリギリ。

この段階から髪を能力で変化させる広範囲系武装「七叉槍」が使用可能になる。

油断さえしなければ使用後の入院は回避できる。

第4段階

第3段階の容姿で髪が鬢つぽくなっている。

出力は100%〜Infinity

通称『瑠璃神モード』

瑠璃神の能力を全開放させた形態。

主人格は夙優。

神の能力を開放しているので凡ゆる点に於いて第3段階と比べ物にならない。

治癒力は自分に使う場合と他者に使う場合の差は無い。

その反面、強大すぎる能力故に身体の負担が大きい。

入院は非回避・・・通り越して最早確定。



## 第5段階

第4段階の上位に位置する形態。

出力は計測不能。

最早瑠璃神そのもの。

威力等全てにおいて人外レベル。

死者蘇生も出来るとか出来ないとか。

主人格は瑠璃神。

身体の負担は凄まじく、長期入院確定で済めば良い方。

運が悪ければ肉体が能力に蝕まれ死亡する。

プロ・アルマティオナー・クリュスタリナー・パシレイア  
術式兵装・“氷の女王”

自身の持つ能力（氷を操るIIジャンヌと同系統）の最終形態。

広域殲滅魔法である「アントス・パゲトウ・キリオン・エトーン千 年 氷 華」を発動遅延術式（解放・

固定）を組み合わせて発動させた後、自身の体内で技の威力を巡らせるようにさせる（掌握する）事によって完成する形態。

発動時に周囲数キロに自らの氷圏を展開させ、支配圏に置く事ができる。

その範囲内であれば、上級レベル以下の氷属性の技を無詠唱かつ、無制限で発動させることができる。

瑠璃の能力は治癒力と体内での技の維持に使う程度なので、第2・5段階に比べ、燃費はいい。

大体は「魔法先生ネギま」に登場するエヴァジェリン・A・K・マクダウエルと同様。

形態の出力は85%〜95%位で第3段階と第4段階の間くらいの強さ

瑠璃神 / みしまかりん 三嶋花梨

身長：164cm（人間時）

体重：47kg（人間時）

Size：84―85―84（人間中）

所属学科：強襲科・CVR（RankS）

携行武器：コルト ダブルイーグル

DW ダン・ウエツソンリボルバーM15―2

日本刀×3

イメージCV：水樹奈々さん

緋色金・瑠璃色金・璃璃色金に続く瑠璃色金に宿る意志。

緋緋神・瑠璃神・璃璃神に続く4人目の色金姉妹。続柄的には璃璃神の妹。

普段は瑠璃色金の欠片が埋め込まれたネックレスに宿る。

スタンス的には緋緋神よりだが、平和主義。

性格は超のつくほど人見知り。(緋緋神曰く、「人嫌いじゃないのが可笑しい」)

心を開いた人間にはすぐ甘える甘えん坊。

時より台詞の中に顔文字を入れることもある。

そんな彼女だが、戦闘中に感情が昂ぶると緋緋神っぽくなることもある。

普段は人間『三嶋花梨』みしまかりんとして東京武偵高校に通う。

テニス部に所属しており、後輩からの信頼も厚い。

バレンタインデーでもかなりチョコを貰うほどである。

しかし、元来の人見知りもあり、人と接するのが苦手。

テンパる事も多々有るが、人見知り克服目指し頑張っている。

器となる人間との適応条件は「瑠璃神自身が心を開ける人間である事」のただ一つ。

しかし、前述の性格から主人公以外での適応者は誰一人いない。

瑠璃神の適応者候補はこれまでに主人公以外にもいたが、全員が「条件不一致」であった。

その結果、その候補者全員は精神崩壊を起こし直ぐに死亡した。

故に「瑠璃巫女」が存在せず、主人公が史上初の「瑠璃巫女」となった。

## 再装填 人物紹介Ⅱ

NAME 姫神ひめがみ 結衣ゆい

AGE 16 (初登場時)

身長 164cm

体重 47kg

Size 73—56—79

所属：東京武偵高校2年A組 (初登場時)

所属学科：強襲科 (Rank A)

携行武器：S & W PC M686 Plus

日本刀 (長刀×2, 小太刀×4)

金属矢 (投擲用)

愛車：ヤマハ・FJR1300AS (2008年仕様)

容姿 茶髪 (ロング・アホ毛装備) で碧眼。

貧乳。 (発言したら、逆鱗に触れる)

イメージCV：井口裕香さん

説明：初登場第010弾「転入生と本気の戦い」

性格は天真爛漫そのもの。少し……かなりの天然入り。

故にチームメイトから「バカ」認定を受けている。

だけど、戦闘になればそれが嘘のように無くなる。

(作戦は猪突猛進の脳筋系が多いけど)

イ・ウー所属 (現役) の炎を操る超偵。

イ・ウーでの二つ名は「紅蓮の魔女」。本人はノリノリで名乗っ

ていた。

武偵としての二つ名は「焰イクスプロージョンの旋刃」

あと、イ・ウー内で「魔女連合」なるものを結成した張本人で

ある。

イ・ウー時代のエピソード

① 情報を持っている人物に情報を吐かせるために尋問したところ、何故かお相手はトラウマ付きの精神崩壊起こしてた。

(その後、全員総出で相手のトラウマを治した。)

② ちよつとしたいざこぎで喧嘩になったところ、そのフィールドがほぼ焼け野原に。

多額の賠償請求が来たため、会計監査担当・桐ヶ谷瑞穂に風優が怒られた。

翡翠 / 椎名翠<sup>しいなみどり</sup>

身長：161cm (人間時)

体重：45kg (人間時)

Size：83―56―85 (人間時)

容姿：翡翠色のロングヘアー (サイドテール)、紅い瞳

イメージCV：戸松遥さん

所属学科：強襲科・狙撃科 (Rank A)

携行武器：スタームルガースーパーブラックホーク

CIS ウルティマックス100

トンファー

鎖付き短剣

初登場は「第010弾 転校生と本気の戦い」

後に結衣と共にまえがき担当になる。(主に出番そこだけ)

色金に宿る神の眷属の1人。

自身の御神体は日本・新潟県糸魚川の姫川流域にあると言われてる。

瑠璃神の直属の眷属で瑠璃を「瑠璃姉様」と呼び、慕う。

故に瑠璃神に仇を成す者には容赦なし。

相棒である結衣の天真爛漫さに手を焼いている時もあり、基本的に抑制役である。

しかし、「結衣以外の相棒はそうそう簡単に居ない」という程信頼している。

翡翠の能力を使う者は容姿が翡翠と同じく、翡翠色の髪に紅い瞳に

変化する。

基本は相棒である結衣が身に付けている翡翠のチョーカーに宿っている。

普段は実体化して椎名翠として東京武偵高に通っている。

実体化して戦闘することが可能でその際は風属性の能力を駆使しつつ、接近戦多様のインファイター。

(だが、誰も遠距離攻撃に弱いとは言っていない)

但し、実体化して戦闘する際に能力を多く消費するため、長時間の先頭には不向き。

(出来ない事はないが、能力の強さは普段と比べ劣化する。)

霧島 葵 (きりしま あおい)

身長：157cm

体重 36kg

東京武偵高 2年A組所属

所属学科：情報科・強襲科・救護科 (Rank A)

携行武器：トールラス・レイジングブル Model 444 (Ult r a l i t e)

日本刀 (長×2・小×4)

超能力：有り (水系能力)

愛車：ホンダ CBR1100XX スーパーブラックバード

容姿：緑でぼさぼさの髪に銀色でぱっちり目

イメージCV：日笠陽子さん

初登場は「第020弾 もうひとつのはじまりは戦姉妹試験勝負」のあとがき。

本編初登場は「第023弾 自分の実力を知るには先ずは自分の身体から」。

性格は「優しい」。

ツンデレ娘の扱いも何のその。

偶に「オカン」とか言われることも。

その際は「誰がオカンだつて・・・？」とツツこむ。  
弄りすぎると逆鱗に触れ、水没させられるので要注意。  
腰のあたりを触られるのが物凄く弱い。  
少し触られただけで一気に崩れるほど。  
故に理子あたりはかなりの頻度で制裁されている。  
主人公（風優）とはイ・ウー時代からの顔見知り。  
カツエの一番弟子（自称）で「魔女連隊」でもカツエの秘書的存在。  
イヴェリタさんからも「カツエの世話ヨロシク！」と言われている。

Collaboration with Side  
| Shuya

第001射 初接触（ファーストコンタクト）、乗能  
（チカラ）と超能（チカラ） Side | Naya



武偵殺しと水蜜桃<sup>鈴木</sup>・夾竹桃<sup>姉妹</sup>の一件が終わって数日後の昼休み。

私・水無瀬凧優は相棒の三嶋花梨<sup>瑠璃神</sup>・友人でパートナーの峰・理子・リュパン4世、遠山キンジ、神崎・H・アリア、腐れ縁の姫神結衣とその相棒である椎名翠<sup>翡翠</sup>と共に昼食を摂っていた。

こういう場面を過ごしていると「私にもやっと日常が戻ってきた！」と強く実感できる。

「いや……なゆなゆの場合、自業自得だと思うよ。無茶するから入院が長引く結果になったんでしょ。そうブラド<sup>お父様</sup>も言ってたじゃん」

理子が今食べようとしていたベーグルサンド片手に呆れ顔でツツコんだ。

「うっさい、理子。アンタと言いブラドと言い、アンタ達は私のオカンか何かか?」

理子のツツコミが余りにもぐう正論だったのでちよつと反論する私。

「……だったら、無茶せずに気をつければいいじゃん。……あ、ミナの出汁巻き貰いっつと」

それを私が一番言われたくない相手・結衣に言われ私が大層悔しがっている隙に私のお弁当箱から出汁巻きを奪い、それを食べてしまおう結衣。

「なっ……あーっ、それ、私の会心出来だったから最後までとっておいたのに……」

出汁巻きを結衣に奪われたのに気付いた私は結衣の胸倉掴んで思いつきりシエイクした。

「残しとくミナが悪いんだよ……」

シエイクされててもフツに反論する結衣。

「むう………。じゃあ、ヒメの弁当、明日から作らないから」

ここまで結衣にぐう正論をぶつけられて不服な私は結衣の明日の弁当を盾に脅迫する。

因みに『ヒメ』とは結衣の渾名である。

「んなつ……ちよつと、それ卑怯じゃないの!？」

私に弁当を盾に脅迫された結衣は私に喰いかかってきた。

「うっさい。食い物の恨みは恐ろしいの!」

私は結衣の反論をその言葉で片付け、それを聞いた結衣は（；；  
へ）ぐぬぬ……とした表情だ。

「あ……これ、まーた始まんのかな、キーくん、アリアん、るーりん、みーたん」

それを見ていた理子は何かを察し、呆れ顔で呟いた。

「俺が知るか。つか、俺に振るんじえねえ」

面倒事になる事間違いないので関わる事自体拒否のキンジ。

「良くもまあ、飽きずに同じ展開になるわよね（モグモグ）」

自分のお弁当（重箱）を食べながら完全に他人事のアリア。

「風優は偶にてんで幼稚になる時があるしなあ……」

呆れたように自分の相棒を見ている花梨。

「で、結衣も似た様などころあるからなあ………」

花梨と同じく呆れたように自分の相棒をみている翠。

案の定、私と結衣、2人の口論は取っ組み合いの喧嘩に発展していった。

理子達も、そして教室にいた皆までもが、「ああ……また始まったか」という視線で喧嘩を見守っていた。

だが、これ以上長引くと私と結衣の能力で教室が壊滅しかねないの  
で………

「二三理子、頼んだ（わよ）」

毎度、結衣と私のケンカ抑止役の理子にアリア達は頼んだ。

「ハイハイ、やっぱり理子の出番ですか……」

ウエニアント・スピーリトウス  
『来れ雷精』



アエリアーレス・フルグリエンテース  
風の精!!  
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ  
雷の暴風」

クム・フルグラフティオーニ・フレット・テンベスターズ・アウストリーナ  
雷を纏いて吹きすさべ 南洋の嵐

理子は溜息をついて呆れながらも始動キーなしで高威力の技を発動させ、雷を纏った暴風が喧嘩中の2人を襲ったのでそこで喧嘩は終了となった。

尚、これが毎日の日課となりかけているのでクラスメイトは誰も気に留めていなかった。

いやあ、慣れって……………怖いよね。

そして、なんと技をまともに喰らったあの二人は無傷だった。これも慣れによる賜物なのだろうか……………。

そして、教室もまた無傷だった。どんだけ対策が施されているのであろうか……………。

「んで、なゆなゆは昼からどうすんの？」

先ほどの騒動が何も無かったかのように私に尋ねる理子。

「え？ まあ、フツーに最初に情報科インフォルマに顔出してそれから強襲科アサルトかな」  
私も先程の事が無かったかの様に答えた。

「へえ…………そーなんだ（モグモグ）」

自分のお弁当のハンバーグを食べながら相槌を打つ理子。

その時、放送が鳴った。

「水無瀬・姫神・榎熊・沖田・土方。以上の5名は今から3分以内にマスターズ教務科に來い。来なかったり遅れたらぶち殺したるからな！（ブツンツン）」

めっちゃやどストレートな呼び出しである。

あの声は蘭豹か…………。何かあったのか？

「ブチ殺されたらたまったもんじゃないし、行くか…………」

「そだね。ミナ」

私が移動の為に立ち上がるとそれに同意した結衣も立ち上がる。

「んじや、私は精神体に戻るね、風優」

「私も精神体に戻るからな、結衣」

花梨と翠は普段の精神体と呼ばれる姿に変化した。

これにより、花梨と翠の姿は私と結衣以外からは認識されなくなっ

た。

花梨と翠の姿の変化後、私とヒメは瞬間移動で蘭豹の下へ急いだ。瞬間移動で教務科の前に到着し、ドアを開けて中に入る。

所要時間は2〜3秒ってところかな。うん。

「おう、お前から来たか」

そう言っただけ私達を迎えたのは呼び出し主の強襲科主任教諭の蘭豹先生だ。

「もう、驚かないんですね……」

平然としている蘭豹に皮肉を言う私。

「そりゃ、毎回そう来るから大体予想できるわ。教師舐めんな」

それをこれまた平然と返す蘭豹。

「別に舐めてないですけどね……。あ、マキ久し振りね」

私はそれを苦笑いで返し、蘭豹の横に居た同年齢くらいの少女に声を掛ける。

彼女の名は大岡茉稀。

元々は東京武偵高に所属していて、私とPTを組んでいた。

が、ロンドン武偵局に招集の際にスカウトされてそのまま今はロンドン武偵局に所属している。

今でもイ・ウー関連等でロンドン方面に赴く際は私とPTを組んでいる。

「風優ちゃん、久し振り」

マキの方も私に気付いて手を振って返してくれた。

「まさかとは思うけれど、日本に来た理由ってロンドンで何かあったから？」

マキは大体がロンドンに居るはず。

だから、日本に来たのは理由があると踏んだ私はマキにそれとなく尋ねてみた。

「あはは……やっぱり鋭いね、風優は。正確には休暇中にロンドンから連絡があったんだけどね」

マキは私に言い当てられ、苦笑いしつつも自分が此処に来た理由を明かした。

「そっか……。休暇中に災難だったね」

私はそれから暫くマキと雑談に花を咲かせていた。

私がマキと話しているのを見て不思議に思った結衣は私に質問する。

「ねえ、ミナ、あの娘と随分仲良いみたいだけど、知り合い？」

「あー、まー、そんなところかな。去年は此処で、その後は依頼でロンドン行った時に何回かPT組んだりしてたし」

「そうなんだ。納得」

あつさり納得してもらえて良かった。掘り下げられたらどうしようかと焦ったわあ……………。

マジで結衣がバカで助かったwww

「で、そっちの娘は誰なの？ 見たところ友人っぽいけれど」

マキは自分が知らない女子と話しているのが不思議だったらしく、その女子生徒の事を私に尋ねた。

「ああ……。マキは私がほぼ休学状態なイ・ウーメンバーだって知ってるわよね？」

コクンと頷くマキ。

「で、そのイ・ウー時代からの腐れ縁っーか、幼馴染かな？ 名前は女神結衣っていうの」

「女神結衣です。宜しくお願いしますね？ 大岡さん」

私の紹介に何時もとは打って変わって優等生モードで自己紹介する結衣。

「うん、宜しくね？ 女神さん。あ、私の事はマキで良いから。あと、敬語もなくていいよ」

それを聞いたマキは右手を結衣に差し出す。

「わかり……。わかったよ。改めて宜しくね、マキ。私の事も結衣とかヒメとか好きに呼んで？」

結衣はそう言つてマキと握手を交わす。

「りよーかい。これからも宜しくね！ 結衣」

これでああ見えて結構人見知りの結衣にも知り合いが増えた。良き事よ……………。

「で、後のメンバーは到着してるんですか？」

私は結衣とマキのやり取りをホンワカ見守りつつ、蘭豹にメンバーの到着状況を確認した。

「約1名を除いてもうすぐ来るやろ」

そう蘭豹が返した直後だった。

「すいません。遅くなりました」

2人の女子生徒が不意に入ってきた。

私とマキ、それに蘭豹は別に気に驚かなかったけど、ヒメはというと……かなりビビってた。

昔から不意に弱いとはいえ、流石にないわ。明らかにビビり過ぎである。

確か鑑識科レビアの沖田さんと尋問科ダギユラの土方さんだったな。彼女達の専門学科の生徒とは情報科絡みインフォルマで会う事も少なくはないが、実を言うと正直面識無いんだよね。今が初対面。

沖田さんの方はなんとというか……裏舞台よりも表舞台向きな感じがする。

で、土方さんの方はなんとというか……レキと似た感じに思えるのよね。性格というか何というか。

まあどつちも、私の勘なんだけどね。

武器は………刀系だな。これは確信に近いものが有る。

「……？ 何か、私に御用でも？」

私の視線に気付いた沖田さんが尋ねた。

「うえ！… ううん。何でもないよ？」

私はポーカーフエイスを保ちつつ答える。

「そう……ですか？」

何か納得行っていない様な沖田さん。

「うんうん、そうそう」

私は悟られ無いように必死に肯定する。

「焦ってる気がするのですが……」

土方さんから凶星を突かれる様な指摘を受ける。

「別に。何もないから安心して？」

私は些か強引にはなるが、何も無い事を強調し、話を終了させた。  
「そう……ですか」

私の弁明が通じたのか、沖田さんと土方さんは引き下がってくれた。

うわあ………妙に焦ったわ、今の。

変に推測立てて相手を不快にさせるのは良くないもんね。

「……で、蘭豹、あと一人は……？」

「教師を呼び捨てにすな！ 『先生』付けんか、アホユイ。まったく、アイツはどこで油売ってんだか……」

結衣は結衣で不在者を蘭豹に尋ねたら、見事に注意されていた。

馬鹿だな。呼び捨て通用すんの私と花梨と翠と絢香緋神だけだったの。

何度注意されれば気が済むんだよ。いい加減学習しろつての。

「スイマセン。遅れ………(ゴッ)(スツ×4)(ぱしっ)何すんだよ」

堂々と遅れてきた男子生徒は不機嫌そうに入室したと同時に蘭豹が分厚いバインダー(殺傷力高)を男子生徒狙いで投擲。

私達4人は被害を受けないようにそれを回避。

蘭豹は、このようなことが有ると毎回このオチなので私達は慣れている。

不機嫌そうに受け止め、蘭豹に反論する男子生徒。

「うっさいわ、アホオ。堂々と遅れおつて」

「折角、人がー「遅れたらダメじゃん」……マキもいたのかよ」

男子生徒は不機嫌さ全開で反論するも、マキによって遮られていた。

マキの事を下の名前でもしかかも呼び捨て。唯の同級生では無さそうな気がする。

「……？ 幼馴染か、何かなの、マキ」

「あー、うん。そんなところかな」

やっぱりそうだったか。

「なんで、『絶対零度』がいるんだ、こんな所に」

え、いきなり凄い二つ名が来たんですけど。

『絶対零度』言うからには氷系だよな。……まさかとは思うんだけど。

「え……？ それって……私のこと……？」

「ああ。お前、水無瀬だろ？ A組の。結構有名な二つ名だぞ？」

「こんな予想正解してほしくなかったな！ しかも、かなり有名なのかよ！ マジで初耳なんですけど。」

「えっと、ソース元は誰なの……？」

「予想出来るけど、一応首謀者聞いておくか。」

「確か……理子だった気がするが」

「男子生徒は躊躇も無くあっさり答えた。」

「予想通りか……少しO☆H A☆N A☆S H Iが必要だね。」

(暗黒微笑)

「ふうん。そっか。情報ありがとう。御免なさい、蘭豹先生、一瞬で終わる用事済ませてきますんで」

「お、おお……早く行ってこい……」

私は取り敢えず、蘭豹に一言断りを入れて転移した。転移先は勿論、理子の所ですよ。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

注釈：この間の出来事は後書きにあるオマケ参照をお願いします。

by 作者

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「お待ちせしてすいません。終わりましたんで大丈夫ですよ」

「そ、そうか……」

「ねえ、ミナ、理子にナニしたの？」

「え？ ちょっとしたO☆H A☆N A☆S H Iした後デリドウスカブルスに凍てつく氷枢で閉じ込めてきた」

「容赦ないね。相変わらず」

「自業自得よ。まあ、でも直ぐに脱出するでしょうけど」

「……そうなんだ」

「『流石、『絶対零度』』」

「なんか、私以外の面々が呆れていた。なんか貶されてない？まあ、カンだけど。」

「で、蘭豹先生、私達を呼び出した理由は？」

「話が脱線していたのを本筋に戻す私。」

「おお……そうやった。大岡、説明せえや」

「ロンドン武偵局から、『欧州を拠点とする犯罪集団が東京で脱走し、屯っているので拠点に乗り込んで、捕縛せよ』と、依頼がありました」  
「またロンドン武偵局絡みか。で、なんで俺達6人なんだ？ アリアとかでもいいだろうに」

「……ねえ、マキその依頼書貸してくれる？」

「あ、うん」

マキから依頼書を受け取って接触感應能力を使う事にした私。

「成程。『敵は人間120人程。それに+αで機械人形多数。人間の敵のうち、10人が元・英国特殊空挺部隊所属、そしてもう10人が元・ドイツGSG-9所属』か……。確かに私達の方が適任かも」

「ん……？ 水無瀬って超偵だったのか……？」

樋熊君が私が超偵なのかを尋ねた。恐らくは先程の瞬間移動と接触感應能力で予測したのだろう。

「んー？ ま、一応ね。あとヒメもね」

「そだよ。Gは測ったことないけど」

結衣の言葉に驚きを隠せてない樋熊君。

「S研所属なのか？」

「いや、私とヒメはS研所属じゃないの。私が強襲科と情報科の掛け持ち」

「で、私が強襲科の所属なの」

私と結衣の言葉に「だよなあ……」と納得した表情の樋熊君。フツーに学科所属生徒の名簿閲覧すれば解るよね。

「そうなのか。で、水無瀬と姫神は何の能力持ちなんだ？」

「私は氷を操る能力ね。まあ、威力は弱いけれど水と雷系も出来るわ」

「私は炎を操る能力かな。白雪と同系統と思ってくれていいかも」

「そうか……。で俺の方だが」

樋熊君は私と結衣が能力の説明をしたので、フエアにする為に自分の能力の説明に入ろうとしていた。

「所謂、『特異体質持ち』なんですよ。 バーサク・シンドローム・タクティクス B・S・T、通称『バー

ストモード』と呼ばれるやつね。トリガーが死に瀕した時……極限状態に陥った時に発現するんだっけ」

「ああ。その通りだ。何で知っている」

シユウヤ君はかなり動揺していた。表情は、動揺を隠すためにポーカーフェイスを貫いているけど、内面からそういう風に感じ取れる。「まえ以前に資料で見たから。それで覚えてるだけ」

イ・ウーお手製の「実力者危険度別リスト」でだけど。……そんな真実は言える訳無いが。

だが、彼ならそこら辺も推測できてるかもしれない。

上手く？ 納得して貰えて………はないようだ。

「成程な。で、今から行くのか？」

現状では少し厳しいと判断したのだろう。樋熊君は私に尋ねた。

「できるなら早い方が良いけど、武装整えてからの方が良いなら、時間決める？」

樋熊君の質問にそう返す私。

アイツ等も何時こちらの動きを察知して逃亡を始めるかもしれない。

だが、準備不足の状態で挑むのも正直、無謀といわざるを得ない。「ああ。そうだな……今から20分後に正門前でどうだ？」

20分後か。それくらいならば、逃亡させずに任務完了出来るだろう。

「「「了解！」「」」」

その後、私達は一旦解散した。

さてと、やるからには本気出す。服装は違えどイ・ウーのNO.2



『魔術師』のフル装備。

「へ気合い入ってるね、凧優」

「まあね。久々に思いつきりやれるから……かな？」

「へ死なないでよね」

「解ってるよ」

「へそれならよし」

20分後、私達は再び校門前で集合し、ヒメと私の瞬間移動<sup>テレポート</sup>で敵の拠点・奥多摩に乗り込んだ。

続くんだよ。

第002射 接触（セッション）—— 猛襲の機械兵  
（マリオネット・フォース） Side Nayu ★

「はい到着……つと」

私とヒメの瞬間移動テレポートで到着したのは原生林であった。

座標的に奥多摩の相手様の本拠地に近いはずなただけど……

「こんなの何処にあるか解ないじゃん、コレえー！」

私が思いつけていた事をヒメがきつちり代弁していた。てか、そんなに大声で叫ぶなし。

「結衣ちゃん………そんなに大声で叫ぶと見つかるよ!」

凜音が、慌てた様子でヒメを制止する。

「大丈夫でしょ………。見つかったら記憶消すか、ぶちのめせばいいだけだし」

「………」

私を除く4人が言葉を失っていた。

確かにその通りなんだけど！ 確かにそうなんだよ！

現にイ・ウー時代は私もそうやっていたけども！

でも今それやったらマズイの！ それぐらい解ってるよ！ この

脳筋思考！

「……なあ、姫神アイツ何時もあんな感じなのか……?」

樋熊君、かなり呆れてるじゃん！

「………恥ずかしい事に、毎回」

私は深い溜息をつきながら答える。

上手く行くのかなあ………。コレ。のっけから超不安なんですけど………。

「た、多分大丈夫だよ！ 私達がサポートするから!」

「そうですよ。そんなに思い詰めないでください」

「あ、ありがとう………」

凜音ちゃんと歳那ちゃんが励ましの言葉をかけてくれて、更にフォローを買って出てくれた。

マジで貴女達いてくれてよかったわ。私一人だと負担が大きくてしょうがない。

「ねえ、早く行こうよー」

結衣バカはそんなのお構いなしに私達に催促していた。

貴女のこの話題なのに……ねえ……。

全く……一度氷漬けにしてやろうかしら。そうしなきゃ気が済まん。

「おーい……。顔が怖いことになってんぞ」

樋熊君が呆れ顔で指摘してくれた。

「あつ……ごめん／＼」

私も大概だったな。コレ。結衣バカと同類扱いされちやいそうだ。その恥ずかしさもあつて超赤面の私である。

「……で、どうするんだ」

完璧なポーカーフエイスを取った樋熊君が尋ねる。

「んーやっぱり地道に聞き込みじゃない？」

「そうね。それが最善策ね」

「じゃあ……あその川で釣りしている人に聞いてみよーよ」

ヒメが指をさした方向にある川には釣りをしているオッサンがいた。

この辺は清流で鱒とか釣れるからだろう。

……とか、思ってたら、マキの

「で、誰が聞きに行くの？」

この言葉でオッサンに話を聞く前に誰が行くかと話し合いになった。

「……この中で釣りの経験がある人、挙手」

樋熊君の釣り経験者を募る。

「私あるよ」

と、マキ。

「私も」

と、私も挙手。

イ・ウーに居た頃はヒマあれば息抜きにやってたのよね。よく一緒

にやってたのはアキ、ブラドとかだけど、偶に教授<sup>シャーロック</sup>。

「私は無いかな」

と、凜音。

「私ありません」

と、歳那。

「私もー」

と、結衣。

結衣は炎系だから水場に一切近づかなかったのよね。故にアリアと同じく泳げないwww

「俺も一応ある。じゃあ、釣り経験者から選別するから——俺とマキと水無瀬の中から良いな？」

樋熊君の言葉に私を含めた全員は頷く。

「で、接触者だが……自分でこういうのはあんまりかもしれないが、俺はこういうのには向いていないと思う。特に相手が男性である場合は尚更な」

樋熊君の言葉に一理ある。

確かにこの場面、女子の方が聞き出せそうな気がする。CVR……所謂ハニトラ的技術関連の理由っぽいけど。

後は、山奥で男子と話して嬉しいやつはいないと思う。これは重要じゃないかな。

……となれば、

「じゃあ、私かマキの方がいいってこと？」

私がそう提案すると、

「……そうなるな。正直申し訳ないとは思ってる」

樋熊君は肯定し、若干俯いた。

「気にしないで。私達チームでしょ？」

私は樋熊君を励ます為に今自分が思っていたことを伝える。

そして、私の言葉にマキが続ける。

「そうだよ。困った時こそ助け合うのがチームだよ？……それに」

「私たちチームメンバーなんだから、そこまで謝ることはないと思うよ？ 人には得意不向きがあるものなんだから」

「……そう……だな」

私とマキの言葉に樋熊君は顔を上げた。

「ありがとう」

樋熊君の感謝の言葉。

それを素直に受け取っておくべきなのだろうけど……ね、

「そんな、感謝されるほどのことじゃないよ」

「そうだよ、これも助け合うことだしね」

私とマキが揃って同じようなことを言った。

さて、聞き込みの候補者は絞られた。

「じゃあ、私と凧優どっちが行く？」

マキも同じ事を思っていたようだ。

「んー、私の方がいいんじゃないかな？」

普段はあまり自身を推さないけれど、ここでは敢えて立候補した。

「なんで？」

これにはマキも疑問が隠せなかったみたいだけど、これにははっきりとした根拠がある。

「マキは諜報よりの武偵だからスニーク抜き足スニークの能力が高過ぎるってところから、こういう場面じゃあまり向いてないと思うんだよね」

気配もなく背後から来ると人は警戒心を高めちやうから判断したのだけでも。

「——たしかに。じゃあ凧優、お願いしても良い？」

マキは私の発言に納得したみたいだ。

「俺からも頼んで良いか」

「良いよ」

こうして、話し合いの結果、オツサンへの聞き込みは私がする事になった。

何も持っていないと不自然だし、釣り道具一式持って行こう。

釣り道具はタロットの『愚者』の能力の一つ、『愚者のセカイ』で用意した。

こういう場面ですごく重宝されるのよね。どんな荷物でも格納できちやうし、何時でも取り出せるから、デカイバッグとか要らない

じゃん。

私が聞き込みに行っている間は、残りメンバーは木陰に潜みつつ待機である。

「こんにちは。隣いいですか？」

「おう……。嬢ちゃんも釣りに来たのか？」

「ええ。このあたりは鱒がよく釣れますから……。よつと」

釣りに来て自然に話しかけた体を装う為に実際に釣りを行う。

久々だな。釣りするの。武偵になってから、何かと忙しくて全然してないものね。

「だよなあ……。ここの鱒は焼くと結構美味しいしからなあ。お……。来た」

オツサンはそこそこ大きい鱒を釣り上げた。

「ですねえ……。あ、私も来た」

私もオツサンと同じくらいの鱒を釣り上げた。

「へえ……。なかなかやるじゃねえか。小娘」

「そうですか？ あ、まだだ」

また鱒を釣り上げた。大きさはそこそこ。

暫く釣ってたら軽く10匹くらい釣れた。

釣ったのは一度、鮮度保ちつつ格納して食糧にしますかね。

「そんだけ釣れるなら俺も釣りてえよ」

「……。？ 何かあったんですか」

「俺は食料調達担当でな。少ないと上からボコられるのよ」

『上』……。？ 何か変な感じがする。

「何かの組織の下っ端なんですか、貴方は」

「まあ……。そんなところだ」

肯定してるわあ……。まさかとは思うけど……。カマかけてみるか。

「もしかして、この辺に屯っている組織と何か関係あるとか？」

「……。っ！ 嬢ちゃん、サツの関係者か!？」

物凄い動揺っぷり……。まさかのビンゴ！ でした。

此処までの大物釣れるとか微塵にも思ってみなかつたわ。

「私は武偵ですが?」

『武偵』……。あの何でも屋か。つて言ってもまだガキじゃねえか」  
私の答えにオッサンは動揺したものの、私の姿を見て安堵していた。

「ええ。確かに私は高2ですよ? でも……」

「何だよ?」

「甘く見ないほうがよろしいですよ?」

「何言ってるんだ、お前」

「なら、自分の体の状態を見てみたらどうです?」

「身体……な、っ……何時の間に!」

おっさんは驚いていた。

まあ、無理もないわな。だって、いつの間にか自分の身体が凍ってるからね。

ホラ、鮮度保つには血抜きするのが良いじゃん?

だけど、今は出来ないし。だったら凍らせておいた方が良くって話なのよね。

「さて、これ以上続けるなら氷漬けにするけど? (ニツコリ)」

「……………(；；。D。)(」

オッサンはかなり怯えていた。

吊し上げて本拠地が何処に有るか吐かせよう。

あれ? なにこのトラウマ発症した顔。そんなにやり過ぎてないはずなんだけど。

「……………どこがだよ。完全にやり過ぎじゃねえか」

榊熊君は呆れ顔。

「あはは……風優は変わってないね」

マキも苦笑いだった。

「前もあんな感じだったのか……?」

「まあ……うん。イ・ウーのメンバーってああなる傾向あるみたいだし」

「私は違うけどね」

あ、ん? 何バカな事言ってるのかなあ? 結衣ちゃんは。

「ヒメのも似たような物じゃん。つてか、お前のは私よりタチ悪いからね？」

「え？ そうなの？」

うわあーお……………無自覚だったんかい。

「そうなの！ どこに初っ端から精神崩壊させる奴がいるの？」

「してたの？」

まさかとは思っていたがそのまさかだったよ！

「してたわ……………後処理がおかげで大変になるの！」

もう、今思い出しただけでも泣けてくるわ。あの時は結衣以外の全員で必死に後処理したんだから……………

「そうだったんだ。ドーりで何も喋らないわけだ。あれ？ どうしたの、シユウ君」

うわ、無自覚って……………いや、バカって怖いわ。

「姫神、それに水無瀬もイ・ウーのメンバーだったのか!？」

樋熊君が驚いて私に問いかける。

「え？ うん。そうだよ。現役で今はほぼ休学状態だけど」

事実だし、肯定する私。

「じゃあ、姫神も？」

「うん。そだよ。私が『隠者』・ミナが『魔術師』だよ」

「水無瀬が『魔術師』って事は『氷天の魔女』なのか……………？」

「あー、たしかそんな二つ名もあったっけ」

二つ名で呼ばれてたけど、興味なかったからなあ……………自分から名乗る時に偶に使うくらいだったし、アレ。

「で、姫神が『紅蓮の魔女』……………」

「そう呼ばれることは少ないけどね」

「……………マジかよ。マキは知ってたのか？」

「うん。ユイのは初めて聞いたけど、凧優のは前から知ってた」

「ドーりで……………納得行ったわ」

「それはなによりで」

私達が会話している隙に逃げ出そうとしたオッサンは、アツサリ凧音と歳那に捕まっていた。



バカだなあ……………。私たちから逃げ出そうなんて考えない方がいいのに。

その後、樋熊君がオツサンの前に屈んだ。

「あの一、あんたらの本拠地教えてくれない?」

樋熊君は穏やかな表情で尋ねた。

「誰が言うか」

まあ、そうだよねえ…………。

「頼むよおじさん、あまり酷いことはしたくないんだよ。だからさ、吐いてくれない?」

「駄目だ」

おお…………結構口堅いな。

「じゃあ、どうなつても知らないよ?」

「何があつても口開かないからな」

あ…………、これフラグ立ったかもしんない。

「歳那」

「はい」

樋熊君が呼ぶと短く返事をした歳那は、オツサンを立たせると、全員から離れた所へとオツサンを連れて行った。

「じゃあ、ちよつくら尋問してくる」

樋熊君はそう言い残すと歳那の後を追った――

5分程して3人が戻ってきた。

ええ……………。

まず私が抱いた感情がそれだった。

何故なら、オツサンは顔面蒼白だったからだ。えつと…………ここに綴居なかつたよね?

樋熊君と歳那何したのさ!?

その結果、本拠地はここからなんと徒歩10分の近さだったので、オツサンに道案内させ本拠地に乗り込む事にした。

本拠地に着いた直後、樋熊君が此方に銃火器を向けられているのに気づき、私達を庇う様に前へ出た。

「嬢ちゃん達、伏せろ!」

更にその前にオツサンが出てきて、私達を庇って撃たれた。

「怪我は無い……………な……………?」

私達はオツサンに駆け寄る。

樋熊君が傷を診ると、首筋を深く殺られていた。

「無いよ。なんでこんな真似を!?!」

私は必死になってオツサンに問い掛ける。

止血は……………出来てない……………。大動脈を殺られてる……………!!

「お前さんと同じ年頃の娘がいるんだ。……………親としての矜持だ」

オツサンは苦しい筈なのに、笑顔でそう答えた。

「じゃあ、生きてよ! 娘さんと無言の再会なんてダメ!」

オツサンの言葉の直後にマキが口を開いた。

「そうよ、アンタはこんなところで終わる人じゃないでしょ!」

「嬉しいねえ。だが俺は今のままじゃあ娘どころか家族にさえも顔向け出来ねえ。だから、これで良かったんだよ。おい、その兄ちゃん「なんだ?」

「お前さんがこの嬢ちゃん達をしつかり護れ。そう約束してくれ」

「ああ。約束する」

「頼んだ……………ぜ」

オツサンはそういった後、静かに息絶えた。

「どうしてこんな末路はをオツサンは辿らねばならぬのだ? 私達を案内したが故に裏切り者認定されたのか?」

それとも、「こんな下つ端なぞ捨て駒に過ぎん」ってか。胸糞悪い。私達はオツサンが撃たれた方向を見るとそこには機械人形オートマタが居た。もうぞろぞろとウザイくらいに。

「ねえ、ミナ……………これってあれと同型な奴にしか見えないんだけど」

「うわあ……………確かに。なんて厄介な」

「お前等アレと闘った事あんのか?」

私と結衣が見た事のあるモノに嫌悪感を示すと樋熊君が尋ねる。

「まーね。気を付けないと装甲結構硬いからちよつとやそつとじゃ傷つかないんだよね」

「そーそー。無駄に統制機能も高いし、更に厄介なんだよね」

「アレはP・A・Aに比べるとどんな感じなんだ？」

「水蜜桃みっちゃんの乗ってるアレか……。アレは中に人が乗り込むタイプだけどこっちは完全に無人機」

「それに……。それよりも戦闘力や武装も比べ物にならないね」

私と結衣はイ・ウー在籍時に実験と称して眼前の機械人形オートマタと闘った事を思い出し、答えた。

「なっ……。マジかよ」

「それじゃあ……。勝ち目はほぼ無いの……。？」

「いや、そんな事ないわ」

私はガンホルダーからマテバフルオートモデロ6ウニカセイを取り出し、速射で懐にある制御チップを破壊する。

私の銃から放たれた、454カスール弾で懐の制御チップを撃ち抜かれた機械人形オートマタは突如として動かなくなった。

「制御チップさえ正確に破壊してしまえば、統制命令はおろか、駆動命令も無くなるわ」

「つまり、こうなっちゃえば只のガラクタ。それに中は無人だし9条にも抵触しないよ」

「成程な……。何も気にせず全力で行けるわけだ」

「まあ……。そうね。あ、そうだ。シュウヤ君にこれ渡しとく」

そう言っって私はカードホルダーから1枚のタロットをシュウヤ君に渡した。

「これは……。タロットカードか？」

「そう。戦車チャリオットのカードよ。カードを手持って『来れ』アデアットと言えば、貴方の実力を最大限に引き出すことができるはず」

「そうか、ありがとな」

「礼には及ばない。死なないでよね」

「当然だ。そっちこそ死ぬなよ」

「解ってる。死んでたまるもんですか。来れ、アデラット魔術師マジシャン」

魔術師のタロットを顕現させる。このカードは最近、瑞穂さんの協力で作り替えたんだよね。

その効果は  
「プロ・アルマテイオーネ術式兵装・クリユスタリネー・パシレイア氷の女王」

の無詠唱顕現である。

因みに………他の術式兵装も出来る様にしたんだよね。

「ミナ、私のもお願いっ！」

「あんまり無茶しないでよ？ 下手するとアンタの術式兵装は暴走しちゃうんだし」

そう注意しつつも、ヒメに『ハーミット隠者』のタロットを渡す。

「解ってるよ。それまでに片をつけなければいいんでしょ。来れ、ハーミット隠者

！ 術式兵装・シム・フアブリカートウス・アブ・インケンド獄 炎 煉 我」

ヒメも無詠唱でシム・フアブリカートウス・アブ・インケンド獄 炎 煉 我の形態に変化する。その直後

だった。複数の機械人形が私めがけ襲ってきたのは。

「か弱いJKに団体様でえげつな………」

そう言って私は腰の日本刀（長刀）を抜く。

直後、何故か「お前が弱い訳がないだろ………」的な事を言われた気がしたので、「何か文句でも？」と笑顔で濃密な殺気とともに御返ししておく。

全く、失礼な………！ こうなったら、その八つ当たりもアイツ等にしておこう。

「エンシス・エクス・セクス・エンシスエクスキューションソード」

そして日本刀を術式で纏う。

本当はこの術式は右手に顕現させる技だけど、こういう感じにもできちゃうんだよね。

「せりやあつ」

一気に振り抜いて襲ってきた奴らをぶった斬る。

この術式、結論から言うと言消し飛ぶんだよね。全部。

んなもんで、9条がある以上、対人では使えないんだよね。イ・ウー時代は遠慮なしに多用してたけど。

でも……無人機だし、殺人もないから今回は問題ないよね☆

第2波・第3波・第4波・第5波と襲ってくる軍団を私はそれを次々にぶった斬る。そしておまけに自身を独楽の軸に見立てて回転して

の広範囲への攻撃。

第6波、第12波が一気に来たので、

「契約に従い、我に応えよ。闇と氷雪と永遠の女王  
咲きわたる氷の白薔薇眠れる永劫庭園！ 来れ  
永久の闇、永遠の氷河！ 氷れる雷をもて魂なき人形を  
囚えよ、妙なる静謐、白薔薇、咲き乱れる永遠の牢獄  
終わりに白き九天！」

雷を纏った氷の竜巻がその周囲に氷の荊棘を伸ばしながら触れた  
機械人形を一度に凍らせていく。機械人形達も抵抗といわんばかり  
に障壁を展開させているが、そんなのお構いなしに障壁諸共凍らせて  
いく。

まあ、これも肉体が壊れず精神だけが生き永らえ、恐怖が永遠に続  
くから、並の人間であれば間違い無く精神が崩壊するという精神殺し  
の技である。

幾ら肉体は殺していないといえど、精神はバツチリ殺しているの  
で、9条に抵触すると思つて対人戦では自制しているが、今のコイツ  
等は無人だから、問題はない。

結衣の方も燃える天空で容赦なく殲滅していた。  
直後、通信が入った。

「ミナ、あの術式使うんでしょ。だったら、今しかないよ！」

私達全員の奮闘もあつて半分位までは減った。範囲内には収まる  
だろう。

私はフィールドの中心点上空に移動する。

「全員、聞こえる？ 今から残つてる奴らを私がいる所を中心にして、  
150ft（およそ45m）四方までの範囲内に機械人形を誘導させ  
て！」

インカムで全員に指示を飛ばす。

「「「了解！！」」」

機械人形が範囲内に誘導される。

「ヒメー！」

「解つてる！ 瞬間移動お！！」

その後、巻き添え防止のため、シユウヤ君達をヒメの瞬間移動で上空に避難させてからのトドメの一撃。

ト・シユンボライオン・デアアコネートー・モイ・ヘー クリュスタリネー・バシレイア エビゲネートー  
「契約に従い、我に 従え、氷の女王。 来れ、とこしえのやみえいえんのひょうが!!」

150ft。その範囲内全てが凍る。だが今回はこれだけでは終わらない。

「パルサイス・ゾーア イス・トン・イソソ・タナトン・ホス・アタラクシア コスミケー！カタストロフエー  
「全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也」 “ おわるせかい ”

凍結した機械人形を完全に残す事なく粉碎する。別に対象を氷の中に半永久的に閉じ込める “ムンドウス・ゲラックス おおるせかい” でも良かったのだが、跡形も無く消したかったので、今回は此方にした。勿論、これも対人禁止技である。

「こんなものかな。協力感謝するわ」

「気にすんな。同じパーティーなんだから。……てか最後の凄まじいな」

「まあ……私の最凶技だしね」

「そんな大技使って大丈夫なのか……?」

「うん。それは問題無い。回復しとくし」

そう言っただけは『プロ・アルマテイオーネ クリュスタリネー・バシレイア術式兵装・“氷の女王”』を解除し、腰に下げているポーチから回復結晶(※能力者必須の回復アイテム)で今消費した分の回復を行う。

「さて……次、行こうか」

「……ああ! (うん!) (はい!)」

私達は次の敵が待ち構えるフロアへと向かった。

「あ、水無瀬、ちよつと良いか」

「ん、どうしたの?」

樋熊君に呼び止められた。

「俺の頼みを……2つ聞いてくれないか?」

「いいけど、どんな頼み?」

私は予想もつかなかったし、首を傾げる。

「1つ目は、この任務クエストが終わったら、あのオッサンを遺族の元

に返してあげるのを手伝ってくれないか？」

「もちろん。寧ろ断る理由なんてないよ」

元々、そうするつもりだったからね。

「そうか、ありがとう。で、2つ目だが——」

樋熊君は改まって私の方を向いた。

「お前に俺の情報体質を教えた奴が誰なのかを教えてください」

……………《アレ》のことねえ……………

「——分かった。でも、あまり多くは語れないよ？」

一応は機密度SSSの代物だしね。

「機密保持と身の安全のためだろ？ その事なら重々承知している。だから、話せる所まででいい」

「了解。じゃあ、私からも1つお願い」

「私のことを『風優』って呼んでほしいな」

苗字呼びつてのも他人行儀すぎてちよつと好ましくもないんだよね。それに……交換条件くらいあってもいいじゃない。これくらいなら安いもんでしょ？

「まあ、それくらいなら構わないぞ——風優」

あ、シユウヤが照れてる。一瞬、『カワイイ』と思った私が居たよ、ここに。

「じゃあ、みんなが待ってるし行こうか」

「そうだな」

私とシユウヤは皆んなと合流するために再び進み始めた。

続くんだよ。

第003射 攻防（ブロッキング）——可憐なる舞踏（フレイムダンス） Side「Yui」★

ミナの最凶技、「おわるせかい」で跡形も無く機械人形オートマタを葬り去った私達は次のフロア……3階にある闘技場で食事タイムで休憩していた。

私的にこの建物に闘技場が無いフロアが存在しないと思うのは気のせいだろうか？

そういう考察は置いてだね……

「敵陣のど真ん中でなにしてんの?!」

とか思うだろうが私達に認識障害の術式を掛けてあるので相手からは見えないし問題は無い。それに、

「腹が減っては戦ができぬ」

って言うじゃん。これ大事。

敵の気配もこの周辺は無いから無問題。モーマンタイ

「ネタが古い」

……？ んなもん気にすんな。

食事内容は……アレだよ。ミナが漢を貫いて散ったオツサンを尋問した時に釣つてた鱒。その塩焼き。

火の方は私の方で用意した。こういう時の炎系能力者は便利だよ  
ね！

そんな事はさておいて。

ミーティングだよね。先ずは。

この先何があるか予想もつかないし、大体の対策を改めてここで講じておいたほうがいいだろうと考えていると……。

「……」

何故かミナを含めた私以外全員の視線がこちらに向いている。

「……何なの、一体」

「……いや、珍しいこともあるもんだなあ……と」

いきなり何を言い出すんだ、コイツ等。



「何が」

「」「ヒメ（姫神）（結衣）（結衣ちゃん）（結衣さん）がそんなこと考  
えるなんて」「」

全員が一字一句違わずにハモってそう答えた。

ええ!? 幾らなんでもそれ、酷くないかな!?

確かに私のモットーは

「猪突猛進」

だけでも!

それでも、最低限の策くらい講じてから行動するからね!?

っーか、ミナ、お前はそれ解ってるだろ? ワザとか!? 態とだつ  
たらタチ悪いよ!?

「いや、だつてアンタ、そんなこと一度もなかったじゃん」

「ソロでの任務の時はマトモにやってるよ!?! 失礼な」

「あーそうだった、そうだった。メンゴメンゴwww」

笑ってやがるよ……コイツは。さっき仕返しのももりか?

なんなの……もう。

呆れているのもつかの間だった。

「……………っ! ねえ、ミナ」

何か、居る。そんな気配を感じた。

「ん? どうしたのさ、ヒメ」

「感じるよ」

「マジか……」

私の言葉にミナ…… 風優も警戒心を高める。

「……………」

私と風優の発言が何のことかサツパリな歳那は首を傾げていた。

「どうかしたの、2人とも」

凜音が代表して質問する。

「敵襲。しかもいっぱい」

私は時間もないし簡潔に答える。

「何人くらいなの、結衣」

「んーと、ざっと118人位かな」

「多いな。個々の強さはどれくらいなんだ、姫神」  
「まあ、そんなに強くない。そこそこ強いのが18人。あとは雑魚だね」

雑魚は群れすぎてウザい感が無くもない。

「そうか。じゃあ、全員で突破の方が最善策だな……………」

「いや、私とシユウヤは先に進んだほうがいいと思う」

柊弥の策に風優は異を唱えた。

「……………どうしてだ」

「だって、その奥に居るんだよ」

風優の言いたい事を私が代弁した。

「『居る』……………?」

「うん。今来る奴等よりもはるかに格上の奴が居る」

私と茉稀で対処しても良いとは思っただけど、風優と柊弥が対処した方が确实だし時短になるだろう。

「……………成程。その手練は私とシユウヤで対処したほうが良さそうね」

風優は私の意図に気付いたらしい。

流石は付き合いが長いだけある。

「大丈夫なのか？ 相手の人数も多いが」

「大丈夫だって、シユウ君。私達がそんなに簡単に負けると思う?」

「そうだよ。私達なら心配ないから」

「シユウヤさん達は先に進んでください」

「解った。ここは頼む」

柊弥の方は茉稀達を心配していたが、逆に茉稀達に諭され折れたようだ。

「不様に負けんなよ、結衣」

「誰がそんな負け方するとも? そっちこそさっさと終わらせて来なよ、風優」

「もともとそのつもりよ」

私と風優は相変わらずな減らず口を叩き合う。

だが、これがいい。適度に引き締まるからな。

「風優」

「ええ。行こう、シユウヤ」

風優と柊弥は次のフロアへ向かう為、歩を進めた。

2人の姿が見えなくなったところで扉が開き、構成員十幹部が雪崩  
込んできた。

「たった4人でこの数に挑むとか正気か、小娘達」

「お生憎、正気なんだよね。さっさと倒れなさい」

正直、お前達みたいな雑魚を相手する時間は短時間で済ませたい  
だよ。

「中々、上物ばかりだな」

「……………サイテー」

マキが嫌悪感を示していた。

無理もねえわ。私だったらもつと酷い対応になるだろうな。確  
実に。

「なー、ボスこの娘達生け捕りにしてお持ち帰りにしてもイイつすよ  
ね?」

は…………? 何言ってるんだこの下衆は。

「…………好きにしろ」

「よっしやあ! 痛くしねえから安心しな。嬢ちゃん達」

「誰が安心なんてできるか。つか、とつとと消えろ」

うわあ……………凜音さんキレてる…………。

無理もないか。間違えて殺さないといいけど。

「私達に大人しくお縄につかれなさい。さもなくば…………」

『さもなくば……………?』……………?

「死んだ方がマシな状態にさせます」

え…………? 何言ってるの? 歳那。もしかしなくとも「精神的に殺  
す」の??

いやいや、止めてあげて!! 前科アリ(まくり)の私が言えないこ  
となんだけどさ!

「<来るぞ、さっさと構えろ、結衣>」

きいん!



「魔法の射手 連弾・火の571矢」

私は一瞬動揺したが敵と同じ数の炎の矢で迎え撃つ。

「へえ……結構やるのね、小娘」

「そつちこそ、やるじゃん。オバさん」

「んなっ……まだ私はピチピチの32歳よ！ まだオバさん呼ばわりされのに8年早いわ！」

32歳で「ピチピチ」は無理があるわ。てか、むしろ痛いし最早アウトでしかない。

しかも、「あと8年早い」て。私的に既にオバさん扱いだとは思っただけ。

「アンタ如きにコレをするのは些か大人気ないんだけどね」

そう言っただけオバさんは詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 氷の女王 疾く来たれ」

静謐なる 千年 氷原王国 千年 氷華」

これって……風優と同じ術式だよな……。

「解放・固定、  
千年 氷華 術式兵装」

「氷の女王」

空間が一気に氷に閉ざされる。

この術式を風優以外にも使える人いたんだ……けど、風優よりは随分と格下だな。

「ダンマリしてるけどもしかして怖気づいちゃったかしら？」

うわあ、あの程度で天狗か……。

『井の中の蛙大海を知らず』ってこの事を言うんだらうね。

「まあ無駄かもだけど貴女の本気見せて見なさいなwww」

あーあ。舐められたもんだな、私。

だったらお望み通り本気見せるとしますか……。

「来れ 深淵の 闇 !! 燃え盛る 大剣 闇と」

影と 憎悪と 復讐の 大焔 我を焼け 彼を焼け」

「其はただ焼き尽くす者奈落の業火」

「術式兵装・ 獄 炎 煉 我」

氷に閉ざされた空間は一変して炎に包まれた。

「んなっ……………私の氷が……………」

この一瞬にしてフィールドの支配権が奪われる様に愕然とするオバさん。

「(・・ム・・) バカ。この程度で私が怯むとでも？」

『この程度』ですって……………」

私の煽りにまんまとのせられるお婆さん。

「ああ……………そうだよ。生憎、あんたより格上のが同僚と一緒にいるんでな」

「氷……………まさか、『氷天の魔女』!？」

どうやらオバさんは風優の事を知っていたようだ。

というか、寧ろ風優の事を知らない人は居るのだろうか。

「せーかい。じゃあ私のこと知ってるよね？」

「まさか……………お前、『紅蓮の魔女』!？」

「そうだよ。それは裏の二つ名だけどね」

そうそう。イ・ウーで活動している時のね。

「だつたら……………お前を降した私は最強ってことね！」

クリュスタリザティオー・テルストリス  
こ おる 大地!!」

フラグランティアー・ルビカンス  
「……………紅 き 焰」

放たれた爆炎は氷の柱をいとも容易く溶かしてオバさん(32・独身)を襲い、モロに喰らったオバさんの術式兵装が解除され、お約束通り地に平伏した。

「終わったね……………。結衣」

「あ、マキ、凜音、歳那。そっちも終わったんだ」

「うん。今さつきね」

「他愛もなかったけどね」

「ええ。憂さ晴らしにもなりませんでしたが」

……………と言う割にはスッキリした顔してるけどさ、凜音に歳那は一体何したの!？」

「あはは……………」

苦笑いのマキに何があったかは聞いたら負けかも知れない。

そう思ったその直後だった。  
どくん……………。

「!?」

いきなり、濃度の強い能力が体内に流れてきた私は膝をついてしまった。

「結衣ちゃん!? 大丈夫!?!」

マキが私の方に駆け寄る。

「来ないで……………! 私を置いて今スグここから逃げてっ!!」

私がそれを制止する。

「何馬鹿なこと言ってるの! 結衣がそんな状況なのに置いて逃げる事なんて出来ない!」

マキは激しく私の願いを否定する。

このままでは暴走が始まり、マキを襲ってしまうだろう。

それを回避したい私はなんとかして体内を巡る能力を抑えようとする。

あつ…………ダメ…………抑えられ…………ない…………。

ヤバ…………い…………暴走…………しちゃう。

「顕現……………翡翠」

私は意識が吞まれていく中、相棒翡翠を实体化させる。

これで、マキ達を死なさずに済むだろう……………。

翡翠……………後は…………頼んだ…………よ…………

その直後、私の意識は闇の奥深くに呑み込まれた。

Side Out……………

Side Nothing

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

色金に宿る神の眷属で結衣の相棒である翡翠が顕現し、その後結衣は焔に包まれた。

そして焔が解除され プロ・アルマティオネ 術式兵装・シム・ファブリカートゥス・アップ・インケンド 獄 炎 煉 我 の姿

となった結衣は人間とは思えない咆哮を上げて仲間であるはずの  
茉稀マキに襲いかかった。

茉稀は慌てて氷華と炎雨を抜刀し、防御をするが、結衣の攻撃の重さは普段とは比べ物にならないほどに重く、防御を破られ、軽く風船のように吹っ飛ばされる。

茉稀は壁に強く激突した。

「マキちゃん!」

「マキさん!」

咄嗟にちゃん付けで呼んでしまったことに気を止める暇もないほどの勢いで、凜音と歳那が茉稀の下へ駆け寄る。

茉稀は、何かを訴えようとしていた。

何、何を伝えたいの……?」

考えている凜音達の眼前には、ユイが居た。

今度は凜音と歳那がユイの標的になってしまったようだ。

2人は直前になるまでユイの存在に気づいておらず、凜音達が気付いた時には……ユイがめのまえにいた。

このままでは全滅非回避な状況に陥っているその時だった。

ユイが横から何者から殴り飛ばされた。

「大丈夫、二人共?」

女性は何事も無かったかのように凜音と歳那に話しかける。

「は、はい……」

「貴女は一体……」

凜音と歳那は戸惑いながらも口を開いた。

「そういう話は後にして。貴女達は茉稀ちゃんにコレを使って」

結衣を殴り飛ばした女性……もとい、翡翠は回復用の結晶を凜音達に渡す。

復活したユイは標的を翡翠に変えて襲いかかり翡翠はユイの攻撃を防御・回避で受け流していくと同時に凜音と歳那が茉稀の下に急ぎ、翡翠から渡された結晶を使う。

歳那が使用すると、結晶は眩い光とともに茉稀の傷を癒していく。

「マキちゃん大丈夫!」

「うん……ありがと……。凜音、歳那」

茉稀は、立ち上がり、加勢しようとした。



「マキさん、貴女はここで私と一緒にいてください。傷は癒えました  
が危険です」

しかし、それを歳那が引き止めた。

「え……、でも」

「大丈夫。私が行くから」

凜音が力強くそう言つて、腰の日本刀を抜く。

すると、日本刀の刀身が突如として光で覆われる。

「これって……さつき、凧優ちゃんがやってたのと同じ……」

「うん。何故出来たかは不明なだけだね。でもこれだったら大丈夫  
な気がするの」

そういつて凜音は微笑んだ。

「無茶……しないですよ？」

「解つてる」

茉稀の言葉にそう言つた凜音は、こちらを標的に変えたらしいユイ  
を迎え撃つためにその場を後にした。

茉稀を頼むよ、歳那。仮に何かあつたら、彼に合わせる顔がないん  
だから。

その感情と共に。

再び凜音に標的を変えたユイが襲いかかってくる。

翡翠もその後を追うが、度重なる戦闘と長時間の具現化による影響  
もあつて能力の衰退を免れられていなかった事もあり、ユイに追いつ  
くことは難しかった。

ユイの攻撃が凜音に向かって放たれる。

「——ッ！　このッ！」

凜音はその攻撃を受け止めると、強引に弾く。

その間にユイは、私との間合いを詰めてきた。

「——ハアッ！　天然理心流——『流水』ッ！」

普段とは打つて変わつて冷静な凜音は、ユイの攻撃を見切り返り討  
ちにする。

どことなく動揺した様子ユイは、何かを生成し始める。

ユイはこのままでは殺られると思ったのか羽根を生成し上空へ逃れようとする事を理解すると同時に、凜音は反射的に地面を蹴った。それにより行われた跳躍は、普段の比にならない程の高さまで上がる勢いで上昇してくるユイの先へと回り込む。

「天然理心流奥義——『乱流』ッ！」

凜音は光を放つ刀身を、乱れる気流の様に振り感覚のみであるが、一振り一振りを正確にユイの翼を細切れにする。

「オオオオオオオオオオオオ」

翼を細切れにされたユイは咆哮を放ち、光と共に消えた。

「消え………た？」

「おそらく、瞬間移動で退却したのだろう。すまん。助かった」

「いいえ。お礼はいいです。貴女は一体……？」

凜音の疑問に答えるかの様に、翡翠は言った。

「そうだったな。私の名は翡翠。色金に宿る神の眷属の一人だ」

「色金の眷属………？」

凜音はピンと来ていなかったようだ。

「詳しいことは省くけれど、簡単に言うとなら色金の神と同等の存在かな」

「そうなの……。で、貴女は結衣ちゃんとどんな関係なの？」

「パートナーだ」

翡翠は簡単に結衣との関係を明かした。

「じゃあ、貴女は結衣ちゃんがどうなったのかも解ってるのよね？」

「飽く迄も推測だが、結衣が対峙した奴が仕込んだものによるものだろう」

「『仕込んだ』………？」

「ああ。おそらくそれには大方『体内を流れる能力のバランスを破壊させる』力があつたのだろう」

「それで………バランスを破壊された結衣ちゃんは」

「お前の考えているとおりだ。自分でも抑えられなくなって暴走したのだろう」

凜音の問いに翡翠は推測ではあるが結衣の身に起こった事を説明

する。

「じゃあ……貴女が抑えることが出来たんじゃ……」  
「その時、私が動ければ出来た。だが、何故かその瞬間だけ結衣とのリンクが切れたんだ。それでリンクが戻った時には、もう吞まれる寸前だったんだ」

「そんな………!」

凜音は思いついた仮説を翡翠に問うたが、翡翠からの返答は『否』だった。

「抑えるにももう遅かった。これは計画されてたんだろう」

「そっ……か。ゴメン、いきなり責めたりなんかして」

「別に。気にしていない。まずは回復。その後は風優達に報告ね」

「うん、解った」

凜音は、翡翠の言葉に頷くと茉稀と歳那の元へと向かった。

「マキさん! ……マキさん!」

2人の元へと向かうと、歳那が茉稀のことを必死に呼んでいた。

「歳……那?」

「よかった、気がついたみたいですね」

茉稀の無事を確認し、凜音はホッとしていた。

「……ユイは?」

茉稀の質問に

「ユイは逃げたよ」

翡翠がそう言った。

「貴女は?」

翡翠とは初対面な茉稀は質問した。

「私は翡翠。ユイの相棒みたいなものさ」

茉稀の質問に手短に答える翡翠。

「色金の眷属の?」

「そう。私は瑠璃色金の眷属」

茉稀は何やら納得したらしい。

「ユイは、なにがあったの?」

「恐らくだが、外部からの力により暴走させられたのだと思う」

「……とまあ、今こんな話をしても仕方がない。少し休もう」  
「そうですね……」

翡翠の言葉に茉稀は頷いた。

「大丈夫ですか？」

「うん、もう平気だよ」

そう言った茉稀は、歳那に見守られながら立ち上がった。

「どこに行くの？」

凜音は茉稀を呼び止めた。

「連絡しなきゃでしょ？ ちょっとシユウ君に連絡してくる」

「うん」

そう言って凜音は茉稀を見送った。

続く。

第004射 決戦（デュエル）——超乗の一撃（ク  
ライシス・スloop） Side N a y u ★

結衣達に軍勢を任せ、私とシュウヤは先に進む道中、再び機械人形が襲ってきた。

個々はそんなに強くもないし、なんら気にする事もない——筈なんだけど、リポップ多いだろ。絶対に。

最初は倒して5秒に1体のリポップだったのが、段々とリポップする間隔が短くなって、0・25秒に1体の割合になってたんだよ。

この時の私も

「もうこれでリポップ間隔短くならないでしょ」

と思つてた時もありましたよ。

だけど現実には甘くないってハッキリ解んだね。

今度はリポップする数がどんどん増えてきて0・25秒に20体のリポップするから、0・0125秒/体の間隔か。

お蔭で今私達の居る通路は黒い（機械人形オートマタ）しか見えない。通路の床とか壁何処にあるんだよ。

その黒い奴はもう台所で蠢くGにしか見えんないんだけど。

殺虫剤撒いても機械人形が駆動停止する訳でも無いし、どうするか  
な。

なんて考えながらも色金定女で斬り伏せていく。

それでも減らない黒い奴を相手している時だった。

「なあ、風優」

「なにー！」

隣で絶賛応戦中のシュウヤから声が掛かった。

「この座標から物の転送できるっ？」

シュウヤは私の目の前の敵を薙ぎ倒しながら1枚のメモを渡した。

「この座標？…できるけど」

「飛ばして」

「了解」

そう言った私の手元にはAK—Mが、足元にはリュックサックがあった。

「はい」

「ありがとうございます」

AK—Mを受け取ったシユウヤは武偵弾『炸裂弾』<sup>グレネイド</sup>を装填し、即座に掃射する。

これで一度にかなりの数を倒せたことには間違いないんだけど、救援人員じゃないな。人じゃないから『救援物資』がリポップしてきやがる。

「埒があかない……」

そう言った私の内心は

『ガチでウザりたい。もう我慢の限界なんですけど（ニツコリ）』

これに尽きる。

早くこの蠢く奴等を殲☆滅させてえよ……。

この後の私の行動は迅速だった。

「契約に従い我に応えよ闇と氷雪と永遠の女王」

咲きわたる氷の白薔薇眠れる永劫庭園！

エビゲネーテーター・タイオーニオン・エレボス・ハイオーニエ・クリュスタレ

来れ永久の闇永遠の氷河！

氷れる雷をもて魂なき人形を囚えよ

メタ・トウ・ブシユクル・クラウヌ・シユラプ・タ・アプシカ・ヒュボケイリア  
タウマステ・ガレーネーレウカ・ロダ・アンティスメナ・アイオーニオン・テスモーターリオン  
アペラントス・レウコス・ウラノス  
終わりに白き九天！」

雷を纏った氷の竜巻がその周囲に氷の荆棘を伸ばしながら触れた機械人形を一度に凍らせていく。

機械人形達も抵抗といわんばかりに障壁を展開させているが、そんなのお構いなしに障壁諸共凍らせていく。

そして序でに機械人形の発生装置も破壊しておいた。

「あーっ、スッキリしたあ」

私はそう言って満面の笑顔でその隣ではシユウヤがドン引きしていた。

まあ……なんつーか、解らなくもないよ、うん。シユウヤの気持ちちは。

でもこうあからさまにされると、傷つくわ。

「ぶろーくん・はーと」って奴よ。それが初戀の相手だったら尚更ね？

……………閑話休題。

『アペラントス・レウコス・ウラノス』  
『終わりなく白き九天』で遮蔽物を全て抹消し、私達は通路をひたすらに進む。

すると暫くして、何処かの部屋に辿り着く。

ここは……………さっきの闘技場と構造が似てるって事は此処も闘技場となれば、1フロアに最低でも1つは闘技場有る事になるのか……………？

思うんだけど、組織の予算の使い方間違っているだろ?! どんだけ戦鬪狂の集まりなんだよ、此処は。イ・ウーでも此処まで闘技場は無いぞ!?

シユウヤも呆れてるだろうな。

そしてこの闘技場、無駄に広い。さっきの闘技場よりも広い。

本当にこの組織、『ネオランビス・アステイル』の資金使用方法が大丈夫かと思えてくる。

私が見る限り、この闘技場には罠の類いは仕掛けられてない様だ。

「さて、どうするかな」

そう思った刹那、突如として魔法の矢が私達を襲う。<sup>サギタ・マギカ</sup>

私は左に、シユウヤは右に難無く回避した直後に中央に巨大な障壁が出現した。

私とシユウヤを分断するのが目的だったか……………。

この障壁を破壊する事は不可能ではないが、無駄に能力を使う訳には行かない。

此処は現れる敵を個別撃破するのが最善策だろう。

「そう。それが最善手や。やけど、ウチを倒せたららの話やけど」

声のした方向を見ると、そこには蒼髪にオレンジのメッシュが特徴で碧と朱鷺色のオッドアイの私と同年齢の少女が居た。依頼書の情報通りだと名前は確か……………

「貴女、橘 琴葉ね」

たちまなことは

「そう。そういうジブンは水無瀬凧優やろ」

「そうよ。結構有名なのね、私」

「そらそうやろ。あんたは裏でも結構有名やからな」

「やっぱり私の異名『氷天の魔女』は伊達じゃないって訳か。」

「そつかあ……………そんなに有名だったんだ、私。まあそれはさておき。橘琴葉、貴女、こちらにおとなしく投降する気は有る？」

「凧優、それは愚問や。ウチを投降させるのであれば、三本勝負で勝つことや」

『三本勝負』……………？ 何をする気？

「三本……………勝負」

「うん。1戦目は拳銃だけの勝負、2戦目は刀剣だけの勝負、3戦目は何でも有りの勝負や」

なるほどねえ……………私、今凄くワクワクしてる。スイッチ入るところ思うのは昔から変わらないな。

「どう？ ワクワクするやろ？ 凧優」

私の思考を読むかのような琴葉の発言。

「確かに凄くワクワクしてる。良いよ。面白いからその勝負乗ってやんよー」

今の私に断る道理も無いのでその勝負に乗った。

「さよか。やったら、改めて名乗らせて貰うわ。『ネオランピス・アステイル』首領、『羅威撃』橘琴葉……………」

『イ・ウー研鑽派』党首、『氷天の魔女』水無瀬凧優……………」

琴葉が名乗ったので私も名乗る。

「いざ、参る!!!」

二人がハモリ、お互いがホルダーから拳銃を取り出す。

琴葉が取り出した拳銃はイタリア・ベレッタ社が1977年に対テロ用として開発した拳銃、「ベレッタM93R」、対する私が取り出した拳銃はイタリア・マテバ社が1996年に開発した半自動作動方式の回転式拳銃、「MATEBA Modello 6 Unica」である。



私と琴葉、互いに牽制の意を込めて銃弾を放ち、2人の放った一発はお互いに相殺される。

琴葉の持つM93Rの装弾数は20、対して私の  
6 U n i c a  
の装弾数は6……。

連鎖撃ち・五重奏で全弾弾きつつ攻撃した方が良さそうだ。でないと、手数で負ける……………。

「連鎖撃ち・五重奏」

私は一発の銃弾で琴葉の銃弾五発を全て相殺する。

それが全部で四発。だから五×四＝二十発。つまりは琴葉のM93の全銃弾をこれで相殺できる……。そして、私が発砲した銃弾は六発。だから残りの二発で琴葉にダメージを与える事ができる……………！

「中々におもしろい手段やけど、甘いねん。ウチへ簡単にダメージを与えられると思ったら大間違いやで！」

私の策を嘲笑うかのように琴葉は『ベレッタPx4』をホルスターから取り出し追撃を加え、ベレッタPx4の銃弾によって私の放った銃弾は連鎖撃ちで叩き落とされ残りの8発は私を襲う。

私は負けじとホルスターからブラジル・トラス社が2008年に製造した『トラス ジャッジ M513 ジャッジマグナム』を取り出し応戦する。

『連鎖撃ち・四重奏』で全て撃ち落とし、残弾で琴葉に向かって『銃弾延髄切り』を行うが、琴葉はそれを読んでいたかのごとく全て紙一重で回避する。

紙一重で回避されたことによって尚更に私のフラストレーションも溜まり、あろう事か焦りが出てくる私。

現状は完全な「拳銃格闘」の状態である。

互いの実力が拮抗しているそれは、宛ら将棋の——それも、一手のミスすら許されぬ——終盤戦の如く。

己に僅かにでも焦りが生じれば、形勢は逆転する。逆もまた然りではあるが、兎に角、油断はならない。

そんな緊迫した状況に今、私は置かれているのだ。

一手一手の鋭撃を躲し、避け——相手のミスを窺うこの戦況で、まさか、判断を間違えるとは思ってもよらなかった。

あろう事か、読み間違えをしまい琴葉の銃弾を捌ききれずにモロに受けてしまった。

モロに受けてしまった事で怯む私。そうなる事によつて必然と出来る隙。

この生じてしまった一瞬の間によつて、流れが完全に琴葉の方へ傾いてしまった。

私も流れの修正を試みるが時は既に遅し。

一度傾いてしまった流れは戻す事は出来ずに……いや、戻す事すら許されずにそのまま、詰め<sup>トドメ</sup>まで持つて行かれた。

「この勝負、ウチの……勝ちやね。風優……」

ベレッタM93Rの銃口を私の額に突きつけ、勝利宣言を行う琴葉。

「確かに……。この状況じゃあ、私の負けね……。琴葉」

私はこの状況から逆転できない事を理解<sup>悟</sup>し、素直に負けを認めた。

「さてと、立てへん？ 風優？ もし無理やったら、ウチが手え貸したる」

「大丈夫……。だって」

そう琴葉に返して私は自分で立ち上がろうとするが、全力でやったが故に体力の殆どを消費してしまっていた。

立ち上がった瞬間によろけてしまい、更にはふらついて倒れそうになつてしまう。

「ほら、しっかりしい。ウチには風優がフラフラやつて解つとるんやから」

そう言つて倒れそうになる私を寸前で受け止め、私を支えてくれた。

「……………ゴメン」

私は恥ずかしくなつて小さな声で答えた。

この時、琴葉のカッコ良さに惚れそうになつたのは気の迷いだと思いたい。

「風優、ウチに惚れたんか？」

「……………っ！ 何この娘。どうしてこんなに核心付いてくるの!？」

怖っ!!

「……………ばか」

私は恥ずか死しそうな気持ちを必死に抑え、そう返す。

私の返しに萌えポイントがあったのか知らないが、琴葉は私から必死に視線を逸らしていた。

「風優、狡ずるいねん……そんなん」

と琴葉が呟いていたのも聞かなかったことにしよう。うん。それがいい。

「風優、これっこて」

そう言つて琴葉が私に渡したのは回復結晶だった。

「……………どうしてこれを私に？」

3本勝負で完封するのなら、そのままダメージを重ねるのが最適なのは。『敵に塩を送る』って奴なのか？

「ちやうつて。ウチは正々堂々、常にお互いが全力の勝負を望んどるだけ。手負いの奴に勝つてもおもんないわ」

「……………ナニソレ。ホントに戦闘狂なんだから」

「こないな性分やねんやからしやあないやろ」

「ホントにそうね。……………2戦目は刀剣のみの勝負だっけか」

「せやで。今からやるか？」

「いいわ。受けて立つ。『体力回復させなきゃよかった』なんて言わないですよ？」

「言わへんつて」

私と琴葉はお互いに腰の鞘に入った刀に手を添え、琴葉は刀を素早く鞘から抜き私に斬りかかる。

私は一番ダメージが入るタイミングを伺う。その瞬間はごく一瞬。その刹那を逃すわけには行かない。

私の攻撃範囲に琴葉が踏み始めたその一瞬に鞘から素早く色金定女イロカネサダメを抜く。

「巖流……………燕返し！」

私は巖流の居合技を琴葉の脇腹にぶち当てる。

モロに喰らった琴葉は吹き飛ぶ。

本来、鞘を捨てて行う『巖流・燕返し』は修練次第で鞘有りでもかなりの速度に達することができる。

「やるやん。風優う」

刀を地面に刺して吹っ飛びを軽減させて着地し、ニツと笑みを零す琴葉。

「当然。琴葉もその程度じゃないでしょ」

「ウチを舐めるな！ 行くで！ 風優！」

「来な」

琴葉は瞬動で間合いを詰め斬りかかり、私はそれを受け止めて弾く。

琴葉が先程と剣撃の軌道を変えて斬りかかり、私はそれを読んで防いで弾いてカウンターで返すという罠取り合いが続く。

罠取り合いの膠着状態から先に行動を起こしたのは琴葉だった。

「神鳴流奥義……桜花乱舞！」

罠取り合いの状態から私は吹き飛ばされる。

距離を取って体制を取り直すつもりなのだろう。

そして、吹き飛ばされた私は対応が遅れる……………

「なあーんて思ったら大間違い。甘いんだよ！ 巖流……飛燕返し！！」

巖流、飛燕返し。

それは敵との距離が離れている時に使う間合いを詰めてからの燕返しである。

虚空瞬動を駆使して吹き飛ばされた際の力もベクトルの向きを変えて接近に使う。

一気に間合いを詰められた事に琴葉は驚き、防御体制に入るが少し遅かった。

私の放った一撃は確実に琴葉に入った。

「かはっ」

琴葉はその場に蹲ってしまいが、刀を杖がわりにしてなんとか立ち

上がり、構え直す。

「もう、そろそろ決着付けよ。お互い体力も限界に近いしさ」

「せやな。次の一撃で終いにしよか」

「神鳴流決戦奥義 真・雷光剣!!」

琴葉の刀の剣先に電気エネルギーを帯電させ、剣を振り下ろすと、剣先に蓄えられた電気エネルギーが爆発することで広範囲が破壊されていく。

限界近い私がこれを喰らえばタダでは済まないであろう。

「神鳴流秘剣・一瞬千撃・式刀黒刀五月雨斬り!!」

私は動じず、手首の速い返しによって、雷撃を一瞬で切り刻む。

「う、嘘やろ!? 雷撃を切り刻むなんて規格外すぎるやろ!」

「私は『魔術師』だよ? 有り得ない事を現実にするのなんて容易きこと。さて、まだ続ける?」

「いや……。負けやで……。ウチの負けや」

琴葉が両手を挙げて降参の意を示したのを見て私は刀を鞘に戻し、回復結晶を琴葉に投げ渡す。

「ホラ、これで回復しときなさいよ」

「……なんや。人の事を『戦闘狂』と言っておいて、ジブンも大概な戦闘狂やね」

「否定はしないわ。事実だもの」

「さよか。次で最後の勝負やけど、やるからには全力で行かせて貰うで? 風優」

「……………面白い。臨むところよ」

琴葉の回復が終わり、結晶が砕け散ると同時に私と琴葉は右手を前にかざし、詠唱を始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い我に従え

氷の女王 疾く来たれ 静謐なる 千年

氷原王国 千年氷華

「フォル・テイス・ラ・テイウス・リリス・リリオス 契約に従い

我に従え 高殿の王 来れ 巨神を滅ぼす

燃ゆる立つ 雷霆 遠隔補助 魔法陣展開

カブテント・オブイエクタ・アー・ プリムム・アド・デキムム・ アーレア・コンステット・ イントウス・セー・  
第一から第十 目標捕捉 範囲固定 域内  
プレマント・スピリトウス・ アド・プレッスラム・クリティカレム・ トリプス ドウオープス モ  
精霊圧力 臨界まで加圧 3 ……2 ……臨界圧  
カフトラム・デイスユンゲス・ オムネー・ スピリトウス・フルグラノレリス・ フォルティシマー・エミツタム・  
拘束解除 全雷 精力解放  
ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサト・キーリプル・アストラペー

詠唱の終了と共に私は右手の掌に氷属性・広域殲滅の「千年氷華」を琴葉は雷属性・広域殲滅の「千年の雷」を

発現させる。

「解放・固定、千年氷華」  
エミツタム・エト・スタグネット アントス・バゲトウ・キリオン・エトーン

「解放・固定、千の雷」  
エミツタム・エト・スタグネット キーリプル・アストラペー

そして発動遅延の術式を発動させ、右手の掌に術式を留まらせる。  
「掌 握」  
コンプレクシオー

この詠唱と共に留まらせた術式を握り潰し、術式自体を自身への変換させる。

「術式兵装・氷の女王」  
フロ・アルマテイオーネ クリュスタリネー・バシレイア

「術式兵装・雷 天 大 壮」  
フロ・アルマテイオーネ ヘー・アストラペー・ヒューベル・ウーラス・メガ・デユナメネー

これによって、私は全身に氷を纏った姿に琴葉は雷神に近い姿に変化した。

私と琴葉の変化時に発せられた波導で先程までフィールドの真ん中に聳えていた障壁が一瞬で消え去った。

此処で障壁の耐久力が底を着いたのであろう。

私と琴葉はそれにお構いなしで3本勝負の最終戦を始めようとした。

しかし、それができなかつた。

何故ならば、乱入者が多数居たからだ。

大体はおそらく術式で作り上げた精霊である。

強さは…そこそこといったところか。だが、この数を一人で捌ききるのはキツイ物がある。

そして精霊より強い能力を持つ人（オバさん）が1人。

姿を見るに「術式兵装・氷の女王」。詰まるは私と同系統の能力者。

強さ的には私よりは格下だが。

そしてよく見ると所々が焦げている。

炎系の能力者………恐らくは結衣と戦ってあっさり負けたんだろう（笑）

「………琴葉、あの人は誰なの？」

「アイツの名前は宮原心晴みやはらこはる。ネオランピス・アステイルのNo.3で氷の能力者ステルスでアイツ自身、自分でお姉ちゃん言ってるけど、実際は32歳でおばちゃんや」

私が琴葉に今現れた女性の説明をしてくれた。

うん。確かに32歳だと『オバさん』認定だわなwww。『お姉さん』と呼ぶには抵抗が有るというか……無理だろwwwなんつーか、痛い。

「ちよつと、琴葉ちゃん？ それは失礼すぎないかしら？」

オバさん……もとい、心晴さんは不服だったようだ。

「事実やろ」

琴葉は直球で肯定した。わー、直球だなあ（棒）

「んなつ!? じゃあ、もういいわ……。そういう減らず口叩けなくしてやるわ。その侵入者のお嬢ちゃんも一緒にね」

心晴さんは怒り心頭で青筋浮かべながら琴葉にそう告げた。

……ん？ よく考えたらサラツと私、巻き添えにされてない？ 無

関係なのに!?

「いや、何言うтонねん……。『侵入者』つちゆう時点で無関係じゃないやろ………」

私の考えを読んでか、琴葉は呆れながら返した。

「あー……そつかあ。んじゃあ………共闘してくんない？ 琴葉」

私は琴葉にダメ元で共闘を頼んだ。

「別にかまへんよ。寧ろウチから頼みたいくらいや」

「そう、良かった。協力お願い」

「了解や」

「話変わるけど、どうするの？ 三本勝負の最終戦」

「んー？ 『引き分け』でええやろ。こないな状況になってもうたし」  
「解ったわ。で、どっちが担当するわけ？」

「風優はおばちゃんの方や。ウチは精霊人形の方を殺るわ」  
「了解」

こうして、私と琴葉は共闘して心晴さん+精霊人形を（人間は殺さない寸前まで抑えて）殲滅する事になったその時だった。

「フツ、クツ、クハハハハハハハ」

「ないよ、剣ないよお!!」

私のいるフィールドの反対側から（心底ウザさ満載の）高笑いが聴こえた。

確か……あつちはシュウヤが闘っていたはず……………。

そこではシュウヤが組織のN.O. 2の男、黒沢凌牙くろさわりょうがに追い詰められていた。

そして、彼の武器である霧雨と雷鳴は遠くに弾き飛ばされて地面に刺さっていた。

かなり……ヤバい状況だな……………。

そして、あの幹部格の男、確か毒武器が主武装だったはず。……具体的に言うとサルコシニル筋弛コシニル薬コリン入りの無針注射器持つてそうだな……………。

「あるよ、主武装毒武器あるよお!!」

そう言つて取り出したのはサルコシニル無針注射器だった。

……………おうふ。凌牙アイツ、マジで持つてやがったよ。

となるとヤベーな。今の状況で武器がないシュウヤには分が悪い。だが、霧雨と雷鳴を拾つて渡す時間はない。

だったら……………どうすれば……………

そう思った時に私の目に入ったのは自分の腰に下げていた刀、色金定女イロカネサダメ。

私は即座に色金定女を鞘から抜いてシュウヤへぶん投げた。

それと同時に色金定女の隣を飛ぶ一本の刀。誰かのだと思えば、その刀は琴葉が投げたものだった。

シュウヤは自身に投げられた二本の日本刀を見事に受け取り反撃に講じた。

ふう……………これで大丈夫かな。



「……………ねえ、琴葉、なんで貴女も刀を投げたの？」

「理由？ ……ただ、ウチはアイツのやり方が気に喰わへんかった。ただそれだけや」

「そっか」

「風優……………話もエエけど、来るで!!」

その直後、闇属性を纏った吹雪が私を襲う。

アレは……………『闇の吹雪』……………。

だったら……………こうするか。

私は何時もは刀に纏わせて発動させる術式、『エクスキューションソード』を右手に発現させて闇吹雪をぶった斬った。

「へえ……………結構やるじゃない。だったら、これはどう？ 捌く事はおろか、回避も難しいわよ?」

心晴さんの放った『氷槍弾雨』ヤクラテイオ・グランディニスによって多数の氷の槍が降り注ぐ。

私は臆さずに複数の氷の刀を操作する『氷刀輪舞』を駆使して全て撃墜する。

「だったら……………これでっ!!」

「させないよ」

心晴さんは巨大な氷塊を作り、ぶつける『氷神の戦鎚』マウイ・アキローニスを繰り出そうとした。

だがしかし。その前に私は『こおる大地』で阻止。

凍ってしまって動けなくなってしまった心晴さんに私は近づく。

「くっ……………。この私が二度も負けるなんて……………もういい、殺してよ」

心晴さんは自棄っぱちでそう言った。

「……………殺さないよ。だって今の私は武偵だもん。でもまあ武装解除くらいはしておくけれどね」

私はそう答え返し、武装破壊技・氷結・武装解除フリーゲランス エクサルマティオーを使用する。

心晴さんの武装は全て破壊された。服は……………当然残してある。だって、この場で素っ裸ほんほんすーは拙いだろう。キツチリ男性が居るこの場

で。

欲情する阿呆も何処からともなく湧き出てくるだろうしな。

そう思っていたら、琴葉とシユウヤも終わったようだ。

「あ、2人とも終わったんだ」

「ああ」

「あんな精霊人形対した奴やなかったわ。数はウザかったけど」

「流石の琴葉さんでもそう思うのね。何も思っていないと思ったわ」

心晴さんが横から口を挟んだ。皮肉たっぷりである。

「いやいや、心晴さん何言うтонねん。ウチかて人間やからな!? あ

たかも人外みたいに言わんといてくれる!?!」

琴葉は心外だったらしく、心晴さんに突っかかる。

「「いや、そんなことないでしょ」」

まさかのN.O. 2以外全員からの返答である。

「なんでや!! ……てか、それは人外風優だけに言われとうないわ!!!」

「何言ってるの? 私が人外認定な訳無いじゃん」

「「どの口が言ってるんだよ(んねん)(のよ)」」

まさかの私以外ハモった返答である。

シユウヤに言われるとは思ってもみなかったよ……………。

初戀の相手にそれ言われると落ち込むよ……………やっぱ。

「ふうーん、風優ちゃん、あの男の子、柊弥クンだっけ? 彼のこと好

きななんだ?」

「ふえ……………くあwせdrftgyふじこーp!!!」

いきなり核心を突かれ、日本語がグッバイする私である。

「(o^o) ♪ 案外、可愛いところあるじゃない、風優ちゃんは」

「うにゆう~~~~~~~~////////」(きゅぽんっ)

「あらやだかわいい、この娘!! 私のことは『心晴』で良いわよ!」

照れて、恥ずかしさ頂点になって恥ずか死寸前の私は心晴さん……

じゃなかった心晴に抱きしめられていた。

「おいおい……………どうしたんだ? 風優。っーか、なんだこの状況」

「シユウヤにも原因があると思うんやけど。あと、ハルさんのは何時

もの事やから(笑)」

琴葉は「これくらいは日常茶飯事」って気持ちと「鈍いんやな、シユウヤって」という呆れの半々で答えた。

「本当にオメデタイ奴等だな、アンタ等は」

この日常系の会話をぶち破ったのは、シユウヤとの闘いに敗れ、縛られた凌牙だった。

「ああん？ それはどういう意味や、凌牙」

不機嫌さMaxで凌牙に掴みかかり、尋問しようとする琴葉。

この時、私が琴葉から感じた『蘭豹と綴を足して2で割ってゆとり先生の殺気をぶち込んだようなもの』を気のせいだと思いたい。割とマジで。

「どうしたもこうしたも無いんだよなあ……。だって、仲間に殺されるわけだしさあ」

凌牙は狂気じみた笑みを作り、そう答えた。

『仲間に殺される』って一体どういう事!？」

私は凌牙に問い詰めた。

「まんまの意味に決まってるんじゃないか、風優さんよ。お前のお仲間、えっとお……姫神結衣つつたつけか? そいつに俺が細工を施したんだよ」

『細工』……………」

「ああ……そうだ。もうそろそろ暴れまわってる頃だろうよ」

「……………てめえ、何バカなことしてくれやがってるの? 自殺志願者か?」

衝撃の事実を聞いた私は無意識に凌牙の首を絞めていた。

「ギブギブギブ……武偵が人を殺すなんて……………」

「知らねえんだったら、教えてやるよ。暴走した結衣は一番厄介で、闘争本能の赴くがままに行動する理性もない獣なんだよ」

「え……じゃあ、俺の手足になつて行動は……………」

「する訳ねえだろ。その前に殺されて人生終了だろうよ」

「…………俺、殺される……のか…………?」

私に自身の理想を砕かれ、殺されると知った凌牙の表情は絶望に染まっていた。

「でも……<sup>コイツ</sup>凌牙をみすみす見殺しにはせんやろ？ 凧優」

琴葉が私に尋ねた。

「当たり前じゃない。今の私は『凍て付く一刀』<sup>アイス・エイジ</sup>。武偵だからね。殺人<sup>コロシ</sup>は御法度なもの」

私は答えた。

「……それじゃあ、裏の顔の時は殺すのね」

心晴の質問に……

「ま、厄介事持ち込んだとしてその憂さ晴らしに……殺るかもね(笑)」  
私は肯定した。

「……で、話を戻すんだが、どうするんだ？」

呆れモードを終了したシュウヤはこれからの対策を尋ねた。

「止めるしかないでしょ。私達で」

「でも……この人数で大丈夫なんか？」

「キツイね……。引き分けまでは持ち込めるだろうけど」

「そんな……。じゃあどうするのよ？」

琴葉の質問に対する私の答えに心晴は困惑していた。

「だから……止めるには下で別れた仲間と合流するしかない。私の勘  
だとおそらくは……だし」

「どういう事だ……？」

「多分、既に交戦してる。ま、ユイは逃げただろうがな」

「マジか……。マキ達無事だといんだけど……」

シュウヤは心配そうな面持ちだった。

まあ、無理もない。

その直後シュウヤに通信が入った。御相手はマキだろう。

このタイミングでの通信って事はやっぱり暴走ユイと交戦してい  
たか。

シュウヤがマキとの通信を終えた直後だった。

「……つ、凧優ちゃん」

心晴が何かを感じ取ったようだ。

「……どしたん、ハルさん」

琴葉が心晴に尋ねる。

「……来るわ」

心晴は手短に答えた。

「思ったより早いな。まあ良いや。………総員、戦闘準備」

私の言葉に戦闘態勢に入るシュウヤ・琴葉・心晴。

そして、私達のめのまえに暴走ユイが顕れた。

続くんだよ。

第005射 接敵(マッチング)——氷炎の激突(パ  
ニツシユメント・レクイエム) Side Nay u

私達のめのまえに顕れたユイ……。

見た目はまだヒトの形を保ってはいる。

だが、もう感じられる限りでは理性はほぼ呑み込まれている……。ユイの中にある結衣に呼びかけるのは無理そうか……。そう私が考えている瞬間の出来事だった。

私・琴葉・ハルが捉えることのできない速度で既に柊弥をユイは潰していた。

ユイを挟み込むような陣形でユイの背後にいた柊弥はユイが放った技、フラグランテイア・ルビカンス紅き 焰による爆炎を回避のしようもないゼロ距離でモロに喰らったからだ。

「……グフツ?!」

柊弥がまるで紙人形のように吹っ飛び、犬神家状態と言っても差し支えない状態で壁に突き刺さった。

「シユウヤあ!!」

私は柊弥の突き刺さった方向へ駆け出す時、私は気付いていなかった。  
ユイの次なる標的が私だと言う事に。

「……ツ！ ハルさん!!」

「ええー!」

轟ッ

琴葉とハルが私のフォロワーに入るべく駆け出したが、ユイの放った炎属性の拘束魔法、「紫炎の捕らえ手」カプトウス・フランメウスに琴葉とハルは阻まれてしまった。

琴葉とハルは何か自力で脱する事を試みてはいるが、焰の柱の内  
部には強固な結界が張られ、破壊しない事には出るに出不れない。

それに加え、周囲の焰に焼かれる事こそ無いが代わりに熱波が凄  
い。宛ら蒸し風呂……サウナである。

結界内部がサウナ同様であれば、無論逆上せる事だったり、熱射病の症状が出たりもする。故に術式の破壊に手間取っている琴葉とハルは既に熱射病の症状が出始めていた。

……この状況からすると、あの二人の助力を請うのは難しいとなれば、私が単独でユイの相手<sup>あいつ</sup>をせねばなるまいか。

あの状態のユイを1人で相手するのは厳しいが、やらねば。でない……その先にあるのは死。本気ださねえと……。

ユイは既に左手を地面に翳したと同時に黒い杭が私に向かって襲いかかってきた。

あれは……影を能力で変換した杭……。それが大量に……と、なればあの技は「万象貫く黒杭の円環」……だったら——

「氷 槍 弾 雨!!」

私は周囲に展開させた大量の周囲に展開させた大量の氷片の槍を一気に降らせて攻撃する。を一気に降らせて攻撃する技で反撃する。

この技は上から下方向のみの攻撃なのだが、今のような地面からの技の相殺であれば、最適解だ。

私の放った氷片の槍は思惑通りに黒い杭を全て打ち砕いていく。勿論、このまま後手で行動するつもりはない。

「こ お る 大 地」

大地から鋭い氷柱を出して攻撃する技でユイの行動を封じ、確実にダメージを与える……はずだったのだが、ユイは無数の影を変換させた帯状の武器を重ねて相手の物理&魔法攻撃を防ぐ盾とする術、<sup>ウンブラエ・セブテンクレクス・バリエース・アンティゴルボリス</sup>「影布 七 重 対物 障 壁」で完全に防いでいた。

ダメージを与える事が出来ず、私は舌打ちをする。

ユイは自身の身丈の倍は超える大きさの大太刀——<sup>ひひのおおだち くれなゐ</sup>「狒々之大太刀・紅」を取り出し刀身に焰を纏わせ、その状態で刀を振りかぶり、<sup>けんふうかばくえんへき</sup>「劍風華爆焰壁」を放った。

刀から放たれた爆炎は私を焼き尽くさんと襲いかかる。

爆炎に臆することもなく、自分の持つ<sup>イロカネサダメ</sup>「色金定女」を抜刀し、刀身に「エクスキューションソード」の術式を纏わせる。

纏わせた術式の効果によって、触れたものを強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させ、物質によっては効果を受け付けないものも存在するが気体への相転移は「蒸発」を意味し、効果範囲に強大な破壊をもたらしてあらゆるものが消し飛ばせることも可能で相転移した物質は大量の融解熱、気化熱を吸収することで周囲の温度を大幅に下げて、相転移を回避しても低温に曝すという二段構えの攻撃を繰り出す事も可能だから爆風消しにはもってこいなのだ。

「剣風華爆焰壁」の爆風を全て消し飛ばした後、私はユイに一撃を喰らわそうとしたが、ユイはそれを読んでいたかの如く、更に二段構えで  
フラミウム・グラディウム・テトク・ヴェルサティレム  
「まわ<sup>る</sup> 焰<sup>の</sup> 剣」を放つ。

ちい……やっぱりそういう気配察知の発展系は厄介だ。暴走した事によって元々高スペックなのがチート級になつてるだもん。お陰で有効打が当てる事が出来てねえ……。

このままじゃあ、ジリ貧なのは解ってるが、この着弾すると爆発する剣を何とかしないと……。私は若干舌打ちをしてイロカネサダメを持ったまま特攻するが勿論、ただ特攻するわけじゃなくて、剣が飛んでくる軌道を予測しつつ弾き飛ばしながら。

少しだけ掠りそうになりながらもギリギリで被弾せずにユイに接近し視線の死角の上空から奇襲をかける。

このまま、何も反撃がなければ手痛くなくとも多少のダメージが入っただろう。しかし、ユイは影を変換させた帯状の武器を100本  
セントウム・ランケアエ・ウンブラエ  
くらい束ねて一気に放つたり、波状で攻撃する技、「百<sup>の</sup> 影<sup>槍</sup>」を放つた。

私はそのまま「エクスキューションソード」を維持させ、帯を全て玉砕しようとしたが回避の際に運悪くこれまでに蓄積されたダメージが襲いかかり、行動が遅れてしまった。

帯の被弾ダメージは決して小さいものではなく被弾毎に回避スピードと精度が落ち、更に被弾………という悪循環に私は陥ってしまった。

段々と呼吸も荒くなつてきていて、予測の精度もダダ下がりになつてきている。



……一度、呼吸を整えねば。そう思った時に影の帯が私を貫きそのまま地面へ叩きつけられる。

地面に叩きつけられたのと同時に「エクスキューションソード」の術式は解除されてしまい、ボロボロの体に鞭を打つようにイロカネサダメを杖がわりに荒い呼吸を整えつつもなんとか立ち上がる。

「ラスト・テイル マイ・マジックスキル マギステル」

ト・シユンボライオン・ デイアーコネット・モ ホ・テユラネ・フロゴス エビゲネーテートー・ フロクス・カタルセオース・  
「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎」  
フロギネー・ロンフアア・ レウサン・トーン・ ビユール・カイ・ テイオン・ ハ・エペフレゴン・ソドマ・  
燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを 焼きし 火と硫黄  
ハマルトートウス・エイス・クーン・タナトウ  
罪ありし者を死の塵に」

ユイがこの戦闘が始まってから初の言語を発していた。

……………！ 不味い。この詠唱はモロに喰らったら私は完全に終わる……。

私は慌てて同威力の魔法の詠唱を開始する。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック」

ト・シユンボライオン・ デイアーコネット・モ ヘー・クリユスタリネー・バシレイア ノリス・エビゲネーテートー・  
「契約に従い 我に従え 氷の女王 疾く来たれ」

ガ・レー・ネー・バシレイア・トーン・パゲトウ・キリオン・エトーン  
静謐なる 千 年 氷 原 王 国」

ウーラニア・フロゴシス  
「燃える天空」

アントス・パゲトウ・キリオン・エトーン  
「千 年 氷 華」

焰と氷。

二つの属性の広域殲滅魔法がぶつかりあった。

この二つは魔法の階級・威力としてはほぼ互角なので普段であれば相殺される。

だが、私はこれまでのダメージに加え、魔法もかなり多用していたので、技の出力が弱かった。

となれば必然的にユイが放った「燃える天空」に私の放った

アントス・パゲトウ・キリオン・エトーン  
「千 年 氷 華」が押され始めていた。

このままじゃ負ける……。

そう思った時だ。

「フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ」

ト・シユンボライオン・ デイアーコネット・モ・ モイ・バシレク・ウーラニオーノン・ エビゲネーテートー・  
「契約に従い 我に従え 高 殿 の 王 来れ」  
アイ・タル・ス・ ケラウネ・ホス・テイテーナス・ フテイレイン・ ヤクトウム・エクステンデンテース・  
巨神を滅ぼす 燃ゆる立つ 雷霆 遠隔補助

キルクリ・エクスタント・カブテント・オブイエクタ・アー・ブリームム・アド・デキムム・アーレア・コンステット・魔法陣展開 第一から第十 目標捕捉 範囲固定  
イントウス・セー・ブレマント・スピリトウス・アド・プレッスーラム・クリティカールム・トリプストウオープス・モ  
域内精霊圧力臨界まで加圧 3……2……臨界圧  
カブトゥラム・デイスユングェス・オムネーシス・スピリトウス・フルグラノレリス・フォルティシメー・エミッターム  
拘束解除 全雷 精神力解放  
ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサト  
百重千重と重なりて走れよ稲妻  
「千の雷」

後方から雷属性の広域殲滅魔法の援護があつた。

今のは……一体……？

「大丈夫？ 風優」

「凜音!? どうして此処に!？」

私の援護をしてくれたのは先程別れて別働隊だつた凜音だつた。

「詳しい話は後。先ずはこれを玉砕させるよ!」

凜音の言葉は最もだ。

私は今一度呼吸を整え、能力を高める。

先程まで威力が段々と弱まっていた「千年氷華」の威力が

戻り、「千の雷」と共に「燃える天空」を逆に押し返そうとして

いた。

暫くぶつかり合っていたこの戦いにも終焉が訪れる。

「千年氷華」が次第に「千の雷」と結合し、

「燃える天空」を呑み込み始めた。

爆炎は雷と氷に呑み込まれるうちに勢い自体が弱まっていた。

私と凜音は更に能力を高める。最後まで気を抜いてはいけない。

更に威力が高まった氷と雷は完全に爆炎を呑み込んだ。

しかし、弱まったとはいえ爆炎の威力は依然強い。

呑み込まれ、消失した爆炎と共に氷と雷は相殺されて消失した。

………結構能力を使つてしまい、立つ事は出来ているがぶつちや

けやバイ。

殆ど残つてねえよ……。戦えるまでに時間は要すだろうよ。

凜音の方も……息が上がってるし見る限りじゃあ……そうそう長

くは持たないだろうな。

まあ、無理もない話なのだけでも。

あんな大技やってピンピンしてんのは最早人外だよ……。私がそ

う思っていたその時だった。

得体の知れぬ殺気を感じユイが居た所を見る。

ユイは居たはずの所に既にいなかった。

一体何処に……………私は極極僅かに感じられる気配を頼りにユイを探す。

……見つけた。場所は……………………凜音の右斜め後ろでしかも凜音の死角で凜音からは見えない。

ユイは既に「奈落の業火」を放とうとしている。

ヤバイ……早くアレを防がないと。私は凜音の下に駆け寄ろうとする。

が、これまでの疲労が祟って動け……ない……。畜生……動いてくれよ。

その時だった。私の横を誰かが駆け抜けた。

「……………『螺生』」

私の横を駆け抜け、凜音をユイから守ったのは……………先程、ユイによって吹き飛ばされ戦闘不能に陥ったハズの柊弥だった。

柊弥の『螺生』によってユイの身体は動きが鈍くなっていた。

その証拠に気配察知も感度が悪くなっているようだ。

これは……………またとない好機だ。今であれば、ユイを一度撤退させるまでのダメージは与えられるだろう。

これまでのダメージ蓄積量もそんなに少なくはないはずだからな。

私・柊弥・凜音は一斉に攻撃を仕掛ける。

ユイの迎撃は被弾すると大きく勝機も下がってしまう。故にユイの攻撃は回避せねば。更に回避行動に配分を強くすると今度は攻撃の決め手に欠けてしまう。だから、回避行動は必要最低限に抑えて残りを攻撃に……………。

それを心掛ける事にしよう。

ユイの気配察知の低下によって生じた穴につけこむ様に錯乱を入れつつも攻撃を入れていき柊弥と凜音も連携を取って陽動と攻撃を上手く織り成して、ユイにダメージを与えていく。

次第にダメージの蓄積量が上昇していくユイ。段々と動きも鈍くなってきた。

私達が絶え間なく確実にダメージを与えた事によって、ユイのダメージ量が危険域に達したらしく、ユイは瞬間移動テレポーションでこの場から離脱した。おそらく、回復させるために離脱したのだろう……。

……これで一先ずは戦いが終わったって事でいいのかな……。  
……あ、やば。一安心したら、意識が飛び始めてきたぞ。

無茶……しすぎたからかあ……。でも……みんな……無事で……良かった……。

この直後、私の意識は直様に飛び、その場に崩れ落ちるのだった。

私が目を覚ましたら、そこは先程の場所とは違う闘技場だった。まだ外壁に損傷等は見られないからおそらくは先程の上のフロアなのだろう。

私が目を覚ました事に気付いた茉稀と凜音がこちらに駆け寄ってくる。

「凜優っ！……もう大丈夫なの？」

「マキ……。ええ。大方体力も戻ってるわ」

茉稀が涙目で私を抱き締めたので私も茉稀を抱きしめ、更に頭を撫でた。決して「百合い……」とかではないのでご安心を。

「いや……何ついて安心すればいいの……」

この空気を見かねたのか(若干)呆れ顔の凜音からツツコミが入る。

「さあ？ 私も解んないや。凜音は……大丈夫なの？」

「ええ。回復結晶も併用したので問題も無いし、能力の使用による身体への不調も無いよ」

「そう……。良かった」

私は凜音の「身体への異常は無い」という言葉を聞き、一安心する。

凜音が先程使っていた能力チカラは私と同じ……瑠璃神のもの。瑠璃神あの能力チカラを使えるのは水無瀬、沖田、秋山。この三家の血筋のみ。凜音は沖田家の人間だから使えても可笑しくはない。

だけど、あの能力チカラは適性の低い者が使用すると負担は凄まじく最悪

死に至る。

故に恐らく初使用であろう凜音にもそのリスクがあつたのだが、見たところ問題はなさそうだし、上手く適合ができているのだろう。

私はこの後、回復結晶でまだ回復しきれない分を取り戻す間に凜音から私が意識を失っている間にあつた出来事を聞いた。

まず、今回の件の下手人である「ネオ・ランビスアステイル」の皆様はゆとり先生が引取りに来たらしい。

最大級のバカをやらかした黒沢凌牙とか言う奴は、不服でゆとり先生に反抗したらしいが秒速で沈められたらしい。まあ……当然といえば当然だろう。

流石、SDAランクアジア最強………第1位様だ。

因みに補足を入れると私が3位、蘭豹が14位、兄さんが12位、結衣が42位、葵が23位である。

今でこそ過去の頭部狙撃による損傷で最盛期の頃までは至ってはいないものの、小夜鳴<sup>ブラド</sup>の治療によって6割方は戻っている。

治療を担当した小夜鳴<sup>ブラド</sup>曰く、「任務とりハビリを怠らなければ、夏には戻るだろう」とのこと。

なお、その光景を見ていた柊弥達はかなり驚いていたとか。

そりゃあ……知っている人少ないし当然といえば当然か。

そんなゆとり先生に逆らう事なく、琴葉達は連行されて行つたらしい。

「行つた」が「逝つた」にならない事を祈るばかりである。

凜音の報告を聞いた後、私は周囲を見渡す。

私がいる位置の隣では、柊弥が歳那の治療を受けていた。

「いぶきどのおおほらへ  
氣吹戸大祓」

「たかまがはらにかむづまります  
高天原爾神留坐」

「かむろきかむろみのみことをもちて  
神漏伎神漏彌命以」

「すめがみたちのまえにまうさく  
皇神等前爾白久」

「くるしみうれふわがき  
苦患吾友乎」

「まもりめぐまひさきはへたまへと  
護惠比幸給閉止」

「ふじわらのあそみひしかたせいなの  
藤原朝臣土方歳那能」

「生魂乎宇豆乃幣帛爾」  
いくむすびをうづのみてぐらに  
そなたへたてまつえうことをもろもろきこしめせ  
「備 幸事乎 諸聞食」

確か……あれはあまりにも膨大な能力を使うが故に1日に1度のみしか使用できない使用された方も激痛が伴う完全治癒の術式だった筈だ。

アレを使える人はそんなに居ないと聞いた事はあったが、歳那が使えるとは思っていなかった。

それを使えるという事は歳那の実力もランク以上だという事なのだろう。

「ねえ……風優。あのね、私、風優に話したいことがあるの」

歳那と柊弥の方を見ていたら茉稀に話しかけられた。

「……………？ 話？ 私に……………？」

「うん」

「……………良いよ。話して」

「うん。実はね——」

私は茉稀がユイによって意識を失った時に聞いた声についてのことを聞いた。

「へまさか……………ねえ……………。風優、私を実体化させて！>」

この依頼が始まってからずっと精神体になっていた瑠璃神が実体化させると懇願した。

どうやら、茉稀の話に心当たりが有るらしい。

「解った。……………来たれ、アデアット女The Empress帝」

私が女The Empress帝のタロットを発動させる。

その効果で瑠璃神が私たちと同じ肉体を伴って実体化する。

「おい……………マジかよ」

「嘘……………」

「ビックリです……………」

実体化した瑠璃神を見て柊弥達が驚愕していた。

それは……………無理もねえか。

だって、実体化した瑠璃神。それは強襲科アサルト、超能力捜査研究所S所属の武偵高生徒、三嶋花梨みしまかりんそのものだったからだ。

「お前が瑠璃神だったのか……？」

驚きの状態で柊弥が代表して花梨に質問する。

「……あれ？ 言ってなかったっけ。うん。そうだよ私が瑠璃神」  
サラッと自分が瑠璃神だと暴露する花梨。

「……どうして、実体化して武偵高の生徒に……？」

茉稀が最もな質問をする。

「だって、精神体で見てただけだけどなんていうか……物足りなくなっ  
てさ」

花梨は苦笑気味に答える。

ぶつちやけ、花梨の編入は楽だったよ。蘭豹が乗り気だったおかげ  
で。

「貴女が武偵高に生徒として居るって事は……」

凜音がある推測を口にする。

「うん。居るよ？ 姉様達……緋緋神に瑠璃神、璃璃神も生徒として  
……ね」

花梨はまたアツサリ（柊弥達にとって）衝撃の事実を暴露した。

「因みに誰のですか……？」

「んーと、ホラ私と同じ苗字の人が3人いるでしょ？ 緋緋姉様が三  
嶋絢香、瑠璃姉様が三嶋瑠樺、璃璃姉様が三嶋凜花だよ」

歳那の質問にもアツサリ答える花梨。

しかし、全部衝撃の事実過ぎて柊弥達は理解が追いついていないよ  
うだ。

この状況には私も「あはは……」と苦笑するしかあるまいて。

「話を戻すけど、茉稀ちゃんが私の能力を使うのには2つのモノが必  
要なの」

『2つのモノ』……？」

「そ。1つ目は凜音ちゃんも必要なんだけど『瑠璃色金のカケラのペ  
ンダント』、それに2つ目は『凜優のタロット』ね」

「2つ目のタロットはすぐに用意できるだろうけど……1つ目のペン  
ダントは大丈夫なの？」

「私が居れば簡単よ。凜優、『うつわ』を2つ頂戴」

「ああ……『うつわ』ね。はい」

花梨の要望で私は結晶部分が透明の雫型のペンダントを2つ投げ渡す。

ペンダントを私から受け取った花梨はそれを右手で握り締めた。

右手が瑠璃色の光に包まれたあと、花梨の右手には結晶部分が瑠璃色に変化したペンダントがあった。

数秒で瑠璃色金のペンダントを生成した花梨はそれを茉稀と凜音に渡した。

「凜優……タロットを茉稀ちゃんに渡して」

「解った。はい。マキ、これを……」

そう言っただけで私は『瑠璃神モード』になる為に必要な4枚のタロット、『魔術師』『力』『吊るされた男』『死神』を茉稀に渡した。

「え……これを私に渡して凜優と凜音は大丈夫なの……?」

私からタロットを受け取った茉稀は最もな質問をし、受け取るの躊躇っていた。

「ええ。問題ないわ。私と凜音は元々瑠璃神の能力に適性がある家系の出身なの。だから本来はタロットの媒体は不要なの。まあ……私の場合には負担を完全にゼロにする為に使ってるんだけどね」

私はそう答えた。

ぶつちやけ、この瑠璃神の能力チカラの行使時に起きるバックファイアも私にとっては微細なモノでそんなに気にならないのだが、完全なノーリスクで行使するのにタロットを使用しているのだ。

私の答えに納得したのか茉稀は私からタロットを受け取った。

私と茉稀と凜音が瑠璃神の能力チカラを行使し、歳那が翡翠の能力チカラを行使、そして柊弥が『戦車』The Charriotで強化されたバーストモードを使用する……。

これでユイに対抗しうる戦力は揃ったはずだ。

それに柊弥に渡した『戦車』The Charriotの効果でユイの暴走した能力を鎮静化……封印する事もできる。

これについてはイ・ウー随一の呪術士、霸王・パトラのお墨付きでもある。



結論としては、私と凜音、茉稀がユイへの陽動とダメージドライバー役、

歳那がユイを足止めしておく為の捕縛役、

そして……最後に柊弥が要である封印役……である。

私は今の計画を『対ユイ戦第2R作戦会議』と称し、柊弥達に説明した。

その間、柊弥は表情には現れていないものの知れるとマズイという感情が有った。

それが気になった私は柊弥にその事を問うた。

最初ははぐらかそうとしていたものの、私の追求に観念したらしく『戦車』が黒沢凌牙によって破壊された事を明かした。

私はその事を聞き、帰還後は一度黒沢凌牙に死ぬ半歩手前のOH ANASHIをする事を心に決めた。尚、向こう様の要望は全却下だ。

破壊された事を悔やんでも仕方ないので、タロットを修復するのに翡翠のチカラを借りることにした。

その為には翡翠を実体化させねばならないのだが、私では不可能なので今、翡翠とリンクを結んでいる歳那に『女帝』のタロットを渡し、歳那に翡翠の実体化を行って貰った。

実体化した翡翠が強襲科・超能力捜査研究所所属の武偵高生徒、椎名翠の姿だったので柊弥達は花梨の時と同じく驚愕していた。

特に柊弥に至っては普段、強襲科でペアを組んでいることも多いので特に驚いていた。

翠は柊弥達の質問に花梨の時と同様にアツサリと答え、受け流していた。

その衝撃の事実にフリーズする柊弥達を横目に翠はパッと凌牙に破壊された『戦車』を修復した。

『戦車』の修復が終了したと同時に私はある気配に気付く。

それに気付いたのは凜音も同様で私は凜音と茉稀に『瑠璃神モード』へ、歳那に『翡翠モード』へ、柊弥に『バーストモード』になるように促した。

そして私も『瑠璃神モード』になった。

その変化が終わった後に、私達の目のまえには気配の正体……回復を  
終えて更に禍々しい姿に成り果てたユイが居た。

私達とユイの最終決戦の幕は静かに開幕したのだった。  
続くんだよ。

I L a b a m b i n a d a I , A R I A :  
装填 ★

—空から女の子が降ってくるって思う？

昨日放送していた映画ではそういうシーンがあった。

まあ、私は見てないが。別に興味ある内容ではなかったからね。

同居人は見ていたみたいだね。

それはさておき、映画とか漫画とかでよくある導入シーンではあるよね。

そういうのって、不思議で、特別な事が起きるプロローグ。

そのストーリーでは主人公は正義の味方とかになって大冒険……  
というのがお約束みたいな？

『ああ、だからまずは空から女の子が降ってきてほしい！』……なんていうのは浅はかってモンだ。だってそんな子は普通の子な訳がない。』

「普通じゃない世界に連れ込まれ、正義の味方仕立てられる。……そんなことは現実において危険で、面倒なことに決まってるんだ。」

これが私の同居人、遠山キンジ（性別・男）の論である。

実にTHE・平凡人生を望む彼らしい論である。

まあ、私・水無瀬風優（性別・女）はそうは考えないが。

「なったら、なった。ケースバイケースで乗り切る。」

これだ。楽天的と思うかもだが、実はすごく難しい。

……そんなことはさておいて。

ああ、今日も朝に飲むコーヒーは美味しい……。

この朝のコーヒータイムは（男子）寮の自室での至福の時……  
ここで、疑問に思った方もいるであろう。

「なぜに女子が男子寮に住んでいるのか。」……と。

答えは武偵高校らしい答え？だった。

「酔った勢いで喧嘩した教師（誰とは言わない）が投げた手榴弾が被爆して大破。修理に莫大な金がかかるので、それより安価な取り壊しで

済ました結果、入寮者の方が溢れた結果です。」

「……身も蓋もない。」

「あ、おはよう。キンジ。」

「ああ、おはよう。風優。」

前述の同居人こと、遠山キンジはトランクス一丁の格好であった。寝起きだし、当然の格好である。

ここで、一々叫ばない私。

もう、なんというか慣れた。

それも女性としてどうかと思うが。

「もうそろそろ来る頃だし、着替えてきたら？」

「もうそんな時間なのか。わかった。」

私の助言に従い自室へ着替えに戻るキンジ。

私は飲み終わったコーヒーカップを洗う。

洗い終わったその時、

……ピン、ポーン……

慎ましいチャイムが鳴った。

ほら、やつぱり。

私は玄関の方へ行き、扉を開ける。

がちや。

玄関の扉の前に立っていたのは、純白のブラウスに臙脂色の襟とスカート……東京武偵高校の女子制服（冬服）に身を包んだ、黒髪の絵に描いた大和撫子だった。

彼女の名は星伽白雪。実家は由緒ある星伽神社。

つまり、彼女は巫女さんである。

キンジとは幼馴染で白雪はキンジの事を「キンちゃん」と呼んでいる。

「あつ、キ……風優ちゃんおはよう……。」

「あつ……ごめんね？ご期待に添えなくて。キンジはさつき起きたばかりで今着替えているから……。」

「え、あ、ううん。気にしないで、風優ちゃん。」

「えつと、今日はどうしたの……って、成程ね……。」

「うん。ほら、私、昨日まで伊勢神宮に合宿に行つてて、キンちゃんの世話何もできなかつたし、それに凧優ちゃんばかりに迷惑かけるわけにもいかないから。」

「もう、そんなに気にしなくてもいいのに……。せつかくだし、リビングで待つてたら？ キンジももうすぐ来るはずだし。」

「え、いいの？」

「私だって決定権の半分はあるから……ね？」

「お……おじやますっ。」

白雪は角度で言つたら90°位の深いお辞儀をしてから玄関に上がった。

靴は言わずもがなきちんと揃えてある。

白雪を迎え入れて私は学校に行く為、準備を整える。

「凧優ちゃん、もう行くの？ 今日早いね。」

「まあ……ね。ちよいと野暮用もあるから。じゃ、あとよろしく。」

「うん。いつてらっしやい。また後でね。」

「うん。また後で。」

白雪に後を任せて、私は寮を後にして、情報科の分室に向かう。

「さて……と。遂に動いたか。武偵殺し。しかし、標的小さいなコレ。」

私のスマホに表示された武偵殺しの情報。

「確かに規模がどんどん大きくなってたのに、確かに変かも。何か目的でもあるのかな？」

「目的？」

「へうん。ほら、今回の電波傍受なんだけど、かなり単純だったよね？」

「確かに……。情報科所属でなくとも良いくらいに単純なパターンだった……。」

「へて、事は武偵殺しが狙つてるのって……。」

「……成程。しかし、まんまとやられたな。でも……。」

「へでもっ？」

「まんまと乗つてあげようじゃないの。そんなでもって、この私を敵に

回した事を後悔させてやんよ！」

「へうんっ！だけど、1つ追加！>」

「何よ。瑠璃。」

「<『私達を』だよっ！風優。>」

「はいはい。わかってるって。急いでキンジと合流するよ。瑠璃」

「<◇◇◇>、了解！ 風優！>」

フツの女子高校武偵の水無瀬風優。

人に好意を示すも適合者が存在しない色金に宿る神。

一度機嫌を損なえば死さえ有り得る気難しい色金の神。

数多の謂れを持つ瑠璃色金に宿りし意志・【瑠璃神・瑠璃】。

混じりそうに無く通常であれば、相反する2つの存在。

これは、その2つの存在が適合している物語。

続くんだよ

## 第001弾 空から降ってきた少女と瑠璃姫 ★

「へ風優、該当の自転車は予想通り第二グラウンドに向かっている。」

「まあ、人気の無い所だったら、そこしかないからね……。」

「へで、どうするの……？」

「被害者……キンジの救出と自転車破壊を同時に……かな。」

「『同時』ってのは幾ら何でも風優一人じゃ……。」

「うん。キンジと並走してる厄介物もあるし、一人じゃ無理。」

「へじゃあ、どうするの……？」

「協力者に頼むのよ。丁度いい人材が女子寮の屋上にいるみたいだし」

「へ屋上に……？」

「そう。屋上に。」

そう言うってから、右耳に装着の通信機を繋げる。

「アリア、もうそろそろそつちからも視認出来る範囲内に入るから準備お願い。」

「わかったわ。手筈通りに行くから、そつちは頼んだわよ、風優。」

「わかってる。任せなさいな」

ぷつん……。

通信を終了した私は準備に取り掛かる。

背中に背負っていた狙撃銃（対物）を取り出す。

ウルティマラティオ（PGM）ヘカートII。

フランスのPGMプレジジョン社が開発、製造しているウルティマラティオシリーズの中でも最大口径モデルの銃で対物ライフル。

人物に向かって使う代物ではないが、今回は大丈夫だろう。

狙いが人じゃないから9条には抵触しないだろうーしき。

弾を装填し、スコープでキンジの自転車を追いつつ、その時を待つ。

それと同時にアリアが女子寮の屋上から飛び降りてパラグライダーで滑降。

そして、爆弾付きの自転車を必死に漕ぐキンジの方へ降下。

ぐりん。

ブランコの様に体を揺らしL字型に方向転換。

左右の太もものホルスターから銀と黒のコルトガバメントを抜く。  
バリバリバリバリッ！

キンジが頭を下げるより早く、問答無用のセグウェイ<sup>厄介物</sup>破壊。

流石、アリア。ランクスは伊達じゃない。

ホルスターに銃を戻したアリアは、スカートのおしりを振り子みた  
いにして

キンジの頭上へ。

キンジの真上に陣取ったアリアは……げしっ！

踏んだ。キンジの脳天を思い切り。

気流を捉えたアリアは上昇。

そして再びグラウンドの対角線上めがけ、急降下&キンジの方にU  
ターン。

ぶらん。

さつきまで手で引いていたブレークコードのハンドルに爪先を  
突っ込み逆さ吊りの姿勢になってそのまままっすぐ飛ぶ。

となれば、キンジと対面状態。

それは、キンジとアリアが抱き合う形となるわけで。

ああ、そういえばキンジが昨夜見ていたアニメ映画にもこんなシー  
ンあったな。

まあ、男女の位置が今のシチュと逆ではあるけれどwww

そう思っていたら、キンジとアリアは上下互い違いのまま、空へ攫  
われていく。

キンジが自転車から離れ、自転車の爆弾が作動する刹那の瞬間を逃  
さず、私は引き金を引いた。

ヘカートの銃身から射出された12.7x99mm NATO弾  
は自転車の爆弾めがけ飛んでいく。

NATO弾が爆弾の壁に一瞬触れたその時だった。

爆弾の圧力感知センサーが反応し、爆弾起動のカウントダウンが開  
始された。

そのカウントダウンは通常であれば5〜10秒位あるだろうが、こ



の爆弾は違った。

カウントダウン開始1秒で爆弾は起動し、閃光・轟音・爆風に包まれた自転車は木っ端微塵になった。

勿論、「木っ端微塵」なのだから修復は不可能に限りなく近い。

修復よりも新しく購入した方が確実に安価で済むだろう。

間一髪助かったキンジとそれを助けたアリアは体育倉庫の方に吹っ飛んでいった。

さて、キンジ達と合流せねば。

そう思つて、私はヘカートを仕舞つた。

・・・それと同時に違和感を感じた。

「ぬったりしていつてね!!」

振り向くと緊張感の欠片もないセリフと共に、現るUZI付きセグウェイ。

全部で60台くらいか。

明らかが多いでしょ・・・

なんでや。オーバーキルにも程がありすぎるわ。

あと、ここは新潟ではなく東京・お台場だ。

「突っ込みして現実逃避してる場合じゃないでしょ!来てるとよ!!」

瑠璃に注意され、現実に戻される私。

ここで無抵抗だったら即お陀仏確定だ。

だが、そんなの真っ平御免。

だから、切り抜けてやろうじゃないの。

「瑠璃、少し能力チカラ使わせて貰うよ。——来れ、アデラット Strength」

私が Strength 力のタロットカードをカードホルダーから取り出し、発動させる。

すると、私の銀色の髪に瑠璃色のメッシュが入る。

この状態で自身に宿る瑠璃神の能力が使える状態の第1段階状態になり、

身体能力等が大幅に向上する。

能力を使う際は主人格が瑠璃になるが、この段階では主人格は私のままである。・

「さて……と、銃弾は温存しておきたいから、今日はこっちで行くか。……少し痛いけど。」

そう言つて、私は小太刀を2本抜く。

此処で「色金定女」を使つても問題はないが、切り札は温存。これに限る。

「へなるべく無傷で切り抜けてよね。治療で能力使うと持続短くなるし。」

「ざらつとハードル上げないでよ……。まあ善処する。」

そう言つて、セグウェイに突貫する私。

セグウェイはそれを感知し、装備されているUZIを発砲・一斉射した。

銃弾の雨が私に向かって降り注ぐが、被弾はしなかった。

てか、被弾なんざさせねえよ？

治療で能力なんて使いたくないし。

私は手に持っている小太刀で全部弾く。若しくは斬る。

キンジの呼び方だと「弾丸逸らし」「弾丸断ち」と言つたところだ。

銃弾の雨の半分を切り抜けた今のところ、全く被弾せずに無傷で済んでいる。

こんなの、無傷でいなすのは、通常状態では無理だ。すくなくとも。

この状態だからこそ、無傷でいられるのだ。

最も、相棒の鍛錬が無ければ今の私は無傷では居ないだろう。

しかし、このままいつまでも防御だけでは埒があかない。

なので、弾いている弾丸を攻撃利用する。

その方法は単純に「弾丸の弾く方向を変える」ただこれだけだ。

その狙いはセグウェイに後付けで装備された制御チップ。

そこを破壊すれば、セグウェイ・UZIを破壊せずに鎮圧できる。

が、制御チップのサイズが大きい……訳なくかなり小さい。

通常ならば、狙いを定めるだけでも一苦勞だろう。

そう、通常ならば。

先程も言つたとおり、私の身体能力は瑠璃の能力によって大幅に向上されている。



第002弾 遠山侍と瑠璃姫と・・・



さて、確かあの体育倉庫に突っ込んだはず。

音からして跳び箱の中だと思っただけだな…………。

そう思った私は体育倉庫に赴き、キンジとアリアの無事を確認しに行く。

「アリア、キンジ、だいじょり…………。(きゅほんっ!)」

二人の様子を見た瞬間、急速に顔を真っ赤に染め…………

「…………お邪魔しましたっ!おふたりはごゆっくりっ!」

ばたむっ!

そう言っつて、即座に扉を閉めた。

ワタシハナニモミテナイデスヨ?

「へ明らかに動揺してるやん。何を見たのさ?一体。」

「瑠璃には刺激強いと思うよ…………。うん。」

「へその答えに納得する訳無いじゃん。私のほうが歳上なのに。」

「それでもものっ!」

「へ動揺しすぎ…………。尻優」

瑠璃の指摘に反論しようとする。

だが、もう内心は保ってられなかった。

そんな私が取る行動は唯一つ。

『ここは立ち去るが勝ち。』

そう思っつて戻ろ…………。「ちよつと、待て(ちなさい)!!」

…………なにか異論でも?

「異論しかないわっ!!」

ナニコレこのハモリよう。息ピツタシだな。あなた達。

「へもうパートナー組んじやえはいんじやね?こいつら」

偶然だな、瑠璃。私もそう思う。

「…………大体、跳び箱の中で馬乗りになっているあなた達を見て私は空気を讀んだのだけど?」

「だから、その前提から間違っつてるんだよ!(のよっ!)」

「はいはい、仲良し乙。」

「二人の話聞いてない。コイツ！」

アリアとキンジの仲良しツツコミを華麗にスルーした私は何かを察した。

自分で言うのもアレだけど私の気配察知能力はもう人外レベルらしい。

それも武偵・傭兵等の戦闘職に就く人の気配察知能力のランキングでも第2位だつてさ。

因みに世界最高峰、第1位の座は高天原ゆとり先生である。

あの人に敵う奴はそうそういないだろう。・・・シャーロック・ホームズを除いて。

・・・そんな事自慢してる場合じゃなかった。

早よ行動しないと瑠璃にどやされる。

「・・・！伏せて。」

「え・・・？」

「早く！」

二人の頭を掴み跳び箱の影に伏せる私。

華奢な体躯のUZIから轟音と閃光を伴って射出された無数の銃弾は、右螺旋回転を維持して虚空を斬り裂いていく。

それらは宛ら、意志を持ったかのように存在を主張して累乗的に撒かれる弾幕であり、同時に致死性の暴力であり——対象を穿つ為にしか目的を持たない、傀儡だった。

弾幕の被害に遭い傷つく備品。(さすが防弾仕様。壊れてない。)

「うっ！まだいたのね！」

そう言つてホルスターからガバメントを取り出し応戦するアリア。先陣隊で襲撃してきた7台を完全破壊する。

「風優、あと何台いるの？」

「あと、33台かな。さっきのは牽制用みたいだし。」

「そう。風優の方の銃弾のストックは？」

「大丈夫。まだ余裕あるわ。」

「OK。アタシ一人だこのままじゃ火力負けするから、第二陣以降のバックアップをお願い。」

「了解。」

そう返事を返し、アリアの方を見やる。

今、アリアはキンジの顔に胸を押し付けたまま応戦している。

無論、そのアリア本人は射撃に集中しており、気づいていない。

ああ、これアウトだ。

アリアの胸の小さい膨らみでなってるな。キンジ。

そう、ヒステリアモードに……。

「強い子だ。それだけでも上出来だよ。」

「は……？」

いきなり口調がクールになったキンジにポカンとしているアリア。

気持ちはわからんでもない。

そして、ポカンとしているアリアをお姫様抱っこして倉庫の端まで運ぶ。

「ヒステリアモードになったんだね。キンジ。」

「そっちのお姫様のおかげだね。」

「そう……。」

ヒステリアモード……。

それは遠山家に遺伝する特異体質。

正式名称はHSS、ヒステリア・サヴァン・シンドロームといい、性的興奮を感じると思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する。

その反面、魅力的な異性を演じて子孫を残す「ことに由来してるため、「女性を高い知力と身体能力で守り女心を驚掴みにするカッコいい男性」になる。

この説明はあくまで「ノルマーレ」の方。

派生もあるらしく、それによって全部変わってくるらしい。

さて、私の方もなりますか……。

「瑠璃」

「へ解放具合は？」

「第2段階……かな」

「へんじや、タロットの方宜しく」

「来れ、アデラット Strength、The 戦車、Death 死神」

発動させたタロットが眩い光を放ち、私の容姿が瑠璃色のロングヘア、唐棣色の瞳に変化する。

先程の第1段階と違い瞳の色も変化している。

この状態だと瑠璃の能力を5割くらい引き出すことができる。

まあ、さしずめ「第2段階」といったところだ。

「いくよ。キンジ。」

「おや。そっちも瑠璃姫になったのかい？」

「ホント、この姿をそう呼ぶのつてアンタだけよね。」

「これは失礼。で、どうするんだい風優？」

「無論、全制圧。但し、セグウェイ自体は破壊せずに。」

「これはまたハードル上げるね。狙いどころは？」

「セグウェイにあるスピーカーの下。そこにある後付けの制御チップ。」

「OK。では、お掃除・・・いや、お片付けの時間だ。」

「そうね。スタート。」

私の発した言葉の合図にしたかのようにセグウェイは二手に分かれる。

キンジに7台。私に残りの26台。

「たまたちりしていつてね！」

そんな合成音声と共に私に向かってくる。

そして一斉射撃。

全く、ただだけ警戒されてんの。

あと、さっきの「上沼垂かみぬつたり」とは違って「田町」になってるし東京都内にはなっただけども。

「語呂が悪すぎるっつーの。」

私はそう言ってホルスターからマテバモデル6ウニカセイを取り出す。マテバモデル6ウニカ。

イタリアのマテバ社が1996年に開発した半自動作動方式の回転式拳銃である。

その独特の機構から、「オートマチックリボルバー」とも呼ばれる。

回転式拳銃としては部品点数が多く、構造が複雑で、製造コストが高いものとなった。更に、可動部分が多いため、より砂塵や汚損に弱い……という問題点はあるものの、私のお気に入りのお拳銃である。「舞え、銃弾よ」

私はセグウェイのマイクロUZIから発射された銃弾が弾かれて制御チップに着弾するように銃弾を撃ち込む。

私の撃った銃弾が壁の役目を果たし、相手の銃弾はL字型に1回ないし2回反射されて制御チップに着弾する。制御チップ破壊後、更に跳ね返り速度が加速され、次の制御チップを破壊する……。

この一連の動きが6連鎖する。要は

「銃弾撃ち」↓「跳弾射撃」&「二重跳弾射撃」↓「加速」↓「連鎖撃ち」の繰り返しである。

暫く銃弾同士がぶつかり合っていたが、それも静かになる。

そして、「ふしゅう……」という音と共にセグウェイは機能停止した。

「(´・ω・´)フウ……ざつとこんなものか……」

「へお疲れ様、風優。大体使い方がわかってきたんじゃない？」

「そうかな……?だといいいのだけでも」

「へもう、持続時間限界だし元に戻って。私は休眠に入るから。」

「はいはい。OK。」

そう言った後、銀髪セミロング・紅い瞳の姿に戻る。

「さて、キンジの方も終わったよね？」

「当然だよ。もう終わったよ。」

「それそうよねwwww私のほうが圧倒的に台数多いし。」

「それでも関係ないだろう?このくらい」

「まあ……ね。キンジの方はどうなのよ。実は結構やばかったり……?」

「このくらいどうってことないよ。エリアを守るためならね。」

「あら、私は対象外なのね……(´・ω・´)」

「相棒として信頼しているのだから許して欲しいな。」

「仕方ない。じゃあ許す。」



「それは良かった。」

何時も見たく私とキンジ（HSS・N）が会話している様子までをアリアは跳び箱（防弾）の中から上半身を出した状態で「（○□○\*）ポーカー」という表情をしていた。

おそらく「今、私の目の前で何が起きたの？」と思っっているであろう。

アリアはキンジと目があつた瞬間、ぎろっ！

睨み目になってモグラ叩きの土竜みたいに跳び箱の中に引っ込んでしまった。

あー……。これはキンジが悪いかな。たぶん。

そう思っていたら、アリアとキンジの痴話喧嘩が始まっていた。

私？私は完全に蚊帳の外ですが。何か？

だから、暇だったらありやしない。

突っ込みどころがあれば突っ込むだけしかないもの。

「お、恩になんか着ないわよ。あんな玩具くらい、あたし1人でも何とか出来た。これは本当よ。本当の本当。」

……ちよいと待とうか、アリア？

1人で33台捌ききるて、フツの人間だと無理だかな？

私だって瑠璃の能力借りた状態じゃないと無理だわ。って状態だし。

つまり、人間辞めなきゃいけないんですけど？

わかってる？そこらへん。

と、ツツコミしている間にもアリアとキンジの喧嘩は続く。

その最中、アリアは度々跳び箱の中に入ってはスカートを直していた。

ああ……。多分スカートのホックが壊れたんだろう。

文にセグウェイの引取り要請するついでにアリアの制服のスカートの替えを手配しておこう。

確かアリアの身長は142cmだったな……。

私が文に連絡終えた後もまだ喧嘩は続いていた。

何時まで続くんだよ。ホントに。

そう思っていたら、キンジはアリアが中学生だと言いやがった。

「……………What? (。∩。≡。∩。)

「あたしは中学生じゃない!!」

アリアは地団駄で木製の体育倉庫の床を破壊していた。……………怖っ。

流石の私でもそこまでやらない。ヒメじゃあるまいし。

「悪かったよ……………。インターンで入ってきた小学生だったんだな。」

……………。( ^ o ^ ) \

私はキンジがもうどうなっただって知らん。

キンジの自業自得だし。

その言葉で当然怒りメーターが振り切れるアリア。

ばぎゅばぎゅん!

ガバメントを再びホルスターから取り出し、発砲するアリア。

……………逃げよう。三十六系逃げるに如かず。逃げるが勝ち。

あれ? 私無関係だけど、何故に追いかけられてるの!?

「アンタは事実を知っていながらも言わなかったから同罪よ!」

ああ、なるほど……………ってなるわけないじゃん!

なんでや! 理不尽すぎる!

「じゃあ、ここは任せたよ。相棒。」

そういつて、先にこの場から退却するキンジ。

「え、ちよ、おま……………」

ふざけんな!

「まずはアンタから片付けてあげるわ! 覚悟お!」

鬼のアリアが迫ってくる。

「瑠璃いいいいいいいい、助けてえええええ!!」

お休み中の神相棒に思いつきり助けを求める私だった。

これが、私・水無瀬風優と遠山キンジと神崎・H・アリアの最悪な出会いだった。

この結末はというと、瑠璃をなんとか目覚めさせて対処した。

御蔭様で私は今直ぐにでも休みたい半端ない疲労感に襲われるのであった。

続  
く  
ん  
だ  
よ

## 第003弾 その後の新学期の朝 ★

なんとかアリアを対処して全力で逃げてきた私。そしてその後の教務科の報告からの始業式出席。

始業式が終わって新しいクラスである2年A組の教室の自分の席で見事に死にかけていた。つまりは超疲労困憊状態である。

私に宿る瑠璃も同様の状態だった。

それもそうだろう。何故なら、持続限界で能力回復の為に休眠していた所を無理矢理叩き起されて再度能力を行使したのだから。それもあって、今はかなりの不機嫌な状態で休眠中である。

私が机で死にかけていると、同じクラスの女子生徒が話しかけてきた。

彼女の名は峰理子。探偵科所属インケスタでランクはA。

高ランクでありながらも探偵科インケスタN0.1のバカ女。

そんな「バカ」と悪名高い彼女が高ランクであるのは情報収集力の高さにある。

情報科所属でもある私でも適わない程だ。

私的に改造した制服（本人曰く、スイート・ロリータと言うらしい）が特徴的だ。

これは私の勘だが、その制服にはなんかパラシュートでも仕込まれてそうな感じはする。

理子のどこがいいのか私にはさっぱり知らないがファンクラブもいるらしい。

私が理子と知り合ったのは、4対4戦カルテットにて同じ班で組んだからである。

あの時は同じく、班を組んだ綾瀬悠季あやせゆうき、三嶋絢香みしまあやかと共に史上最速の時間で勝利し、伝説になったりもした。

それ以降、なんだかねで友人となった。

「なゆなゆ……えっと、大丈夫?」

「理子は私のこれが大丈夫に見えるの?」

私は疲労による不機嫌さマシマシで答える。

「うん。少なくとも理子の目にはそう見えない。一体どうしたの?!」

理子はえらく驚愕した表情を見せ、此方に問いかけてきた。

「結果を端的に言うときっきの事件で限界超えた」

『「さっきの事件」ってグラウンドと体育倉庫で起きた自転車爆破事件の事だよね?」

「そだよ……」

「でも……報告書見る限り、なゆなゆが瑠璃神るりんの能力使ったとしても限界超える事なんて無いとりこりん的には思うんだけど」

「1人で瑠璃の補正もなしに全部で86台のUZIつきセグウェイの相手って無茶言わないでよ」

「だって……なゆなゆってさ、補正抜きでも超偵……『超々能力者』ハイパー・ステルスの部類に入るじゃん」

「確かに私はG20叩き出してるけども、その分持続がもたないって」「じゃあ……どっちにしるるーりんの助け要るのか……。でもさ……」

「今度は何よ……」

「るーりんの補正アリだとG22〜26まで高められるから、余計に限界超えるとか有り得ないと思うんだけど……」

「あー……うん。事件自体は限界超える事はなかったんだけどね……その事後で超えた」

『「事後」って何さ?』

「言いたくもないし、思い出したくもない。取り敢えず、理子。頑張った私を労って」

「あー、ゴクロウサマ。」

「ありがとう。あと、HR始まるまでそっとしてけると助かる。」

「うー、◇Π◇、ラジャー!!」

「静かにしてろって。マジで。新学期早々氷漬けになりたいの?」

「うん。それは勘弁して。絶対に。じゃあ、HR始まる直前に起こすから。」

「あー……うん。お願g……zzz」

「お願い」と言い切る前に私は眠りに着いた。

もうそれほど私も限界だった。

それから暫くして。

「なゆなゆー？起きて。HR始まるよ？」

理子に身体を揺さぶられて起こされる私。

「んあ……。ありがと、理子」

「くふふ。どーいたしました。」

起こされてからしばらく。

担任の高天原ゆとり先生が教室に入ってきて

「うふふ。じゃあまずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」

と話していた。

ん……。？

『去年の3学期に転入してきたカーワイイ子』……。!?

うわ、嫌な予感しかないんですけど……。

多分キンジもそう思ってるわ……。

私の「嫌な予感」は必ずと言つて的中する。

案の定、その生徒はアリアでした。

先程、一悶着あった神崎・H・アリアさんでした。

一番会いたくない奴に会ってしまった……。

「超サイアクだな。(；▽、)」

「ホントにねえ！こんちくせう！」

今すぐ寝たい。もう一回寝たい。ガチで。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

ずりっ

ごんっ

キンジが椅子から転げ落ち、私が机に頭を打ちつける。

もう同時。寸分狂わず。息ピツタシ。

な、ナニイツテンノ……。？

「へ動揺しまくってんじゃんか……。く」

そら、するわ！しないほうが可笑しいでしょ!?

「よ……。良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみた

いどうぞ！先生！オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

うわ、空気読んだのに余計な事だというのは……的な。

なんなんだ。武藤よ。

武藤剛気。車輛科の優等生。

乗り物と名のつくものなら何でも乗りこなせる奴。

私の友人その3である。

武藤の申し出にアツサリ快諾のゆとり先生。

先生、そこは拒否ってくださいよ。

そして、教室は拍手喝采。

………煩い。こっちは疲労Maxなのに。

「キンジ、これ。さっきのベルト。」

アリアはいきなりキンジを呼び捨てにして、さっきキンジが貸したベルトを放り投げた。

キンジがベルトをキャッチする。

「理子分かった！分かつちやっつた！——これ、フラグバツキバキに立ってるよ！」

私の左隣の理子が がたんつ！と席を立った。

そして安定の「りこりんタイム」がスタート致しました。

うわ。マジ関わりたくねえ……。

で、その「りこりんタイム」に便乗するクラス全員。

|| バカ騒ぎ開幕。

新学期早々シンクロナ率高いな！あなた達。

この状況にちよいとイラツと来ている私である。

ゆとり先生も「早くこの状況鎮めてね（ニツコリ）」と言わんばかり

に私に殺気を飛ばしている。………なんでや。

皆、ゆとり先生の濃密な殺気をさっさと察しろ!!!（懇願）

そう思っている矢先だった。

突如として、45ACP弾の奏でる轟音に、クラス中が凍てついた。

無論、何をせずとも発砲されることはほぼ無いに等しいのだから、必ずしも、物事の濫觴には原因があるわけで。

今回のそれは、神崎・H・アリアだった。二丁拳銃のガバメントを、抜きざまに発砲したのである。

なんて苦笑している暇もなく、45ACP弾特有の轟音が耳を劈き、その銃弾が私に向けて飛来してくる。

それを、もののついでに、傍らにあった防弾仕様の下敷きで防いで。そのまま軌道を逸らして、これまた防弾仕様のゴミ箱にホールインワンさせてから、私は『さて、どうしようか——』と考えを巡らせた。というのも、このアリアの一連の行動。私を激昂させるのにはこれ以上ないほどの愚行であるからして……。うん、決めた。そうしよう。

人知れず口の端を歪める私にアリアは興味を示さず、それでも眼中にはあるが、といったかのように訝しげな表情を浮かべてから、頬を紅潮させて、宣言した。

「れ、恋愛だなんて——くっだらなない！」

少なくとも、クラス中の恋愛観を否定するような言動で。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなこと言う奴には——」  
ひと呼吸おいて。

「——風穴空けるわよー！」

……さて、ここらへんでいいかな。

そう胸中で呟いてから、私はアリアの腕を掴む。刹那、アリアの表情が緊迫したモノに変わったことは言うまでもない。

へえ、これだと予見できてたように感じるなあ。してたのかな。

まあ、そんなことはいいや。

「ねえ、アリア」

「………何よ」

「お話……しよっ♪」

『お話、しよっ』……って何よ？ 風優……目！　目が笑ってないわよっ！

「そんなことはいいいからいいから。さっきのお返しも兼ねて、ね」

アリアの必死な抵抗も虚しく、まあ私が免罪符、慈悲、贖罪なんて与えるわけもなくて。問答無用だ。コノヤロー。



胸中で毒を吐いて、ズルズルと強引に引きずりながら、強制連行だ。「ちよつと、アンタたちちつ……！ 助けなさいよっ！」

アリアはクラスメートたちに助けを求めるものの、誰一人として傍観しているだけだった。そんなに面倒事に巻き込まれたくないのか。

しかも合掌してる奴までいるし。どうなってるんだよこのクラス。

「ほら、アリア。行こっ？」

——そうして、水無瀬凧優がアリアを強制連行した数分後。アリアの断末魔に等しい叫びが響き渡ることになるのだが。

それを少なからず耳に入れたクラスメートたちと張本人であるアリアは、水無瀬凧優を怒らせたならマズイのだ、と改めて認識したのだ。  
続くんだよ

## 第004弾 凧優とキンジとアリア ★

まるで怒涛の嵐と形容できる——とはいえ、実際にそうであったのだが——学校が終わり、放課後。

キンジと私はアリア絡みの一件による精神の疲れもあつてか、寮の自室で休んでいた。アリアからの逃亡のために叩き起きた瑠璃は、明日の朝まで休眠中である。何ともご苦労さんだ、と胸中で小さく労った。

・・・といいつつも、実際に休んでいるのはキンジだけである。

私はリビングで、私は探偵科・鑑識科から情報科に回ってきた、今朝の爆弾事件の教務科提出用資料を纏めていた。

そうして詳細を目に通していく。それが中頃まで過ぎた頃だろうか。おもむろに、キンジが口を開いた。

「なあ、凧優……」

「ん？ どうしたの？ キンジ」

「今朝の事件について凧優はどう思ってるんだ？」

『『どう』って言われても……ノーコメントかしらね』

「ノーコメント？ どういう事だ」

キンジは訝しみに、眉を顰める。

「だって犯人の目的・意図が不明だから。何もかもが不明。だからノーコメント。そういうキンジはどう思うのよ？」

「俺は……武偵殺しの模倣犯は爆弾魔かなって思ってる」

「爆弾魔か……」

「ああ。今朝の犯行の手口からしてそう考えるのが妥当だしさ」

「成程ね……」

——ピンポーン。

なんかチャイム鳴ってる気がするが、無視だ無視。まだ宅配業者来る時間じゃないし。

「……？ どうしたんだ？」

「え、あつ……あはは。何でもない。続けて？」

「あ、ああ。……そうなれば」

「そうなれば……?」

「たまたま運悪く俺のチャリに仕掛けられたものと証明できる」

『たまたま』で仕掛けないでしょ。幾らなんでも。爆弾魔だって狙い目絞ってるでしょうよ。それに対象がチャリで、みみっちくない?爆弾魔にしては」

——ピンポン、ピンポン……。

誰か悪戯で連打してる阿呆がいるのだろうか。こんなもん無視だ。

「じゃあ俺個人を狙ったものと言いたいのか? 風優は」

「まあね。なんの恨みで……というか恨みが動機さえも不明だけだね」

——ピポピポピポピポピポピン! ピポピポピンポーン!

インターホンは「太鼓の達人」じゃないんだよ。なんでそんな連打するんだよ。そんなに連打したってハイスコアなんて存在しないのに。

それに呼び鈴が五月蠅いったらありやしない。これじゃ話どころじゃないやん。誰なのよ。一体。こんな事する阿呆は。

(##。D。)イライラを必死に理性で抑えつつ、風優はソファから立ち上がる。そして玄関まで数歩を数えてから、ドアを開けた。

直後、彼女の視界に入ったのは——記憶に真新しい、一人の少女。

「遅い! あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること!」

「無茶言うなって……。ラピユタより短いのは有り得ないし、そして住人が出てくるまで待つの。それフツーだし一般常識」

「なによそれ……って、げえ風優!」

「人を見ていきなり『げえ!』はないんじゃないの、アリア!? 失礼にも限度があるんだけど。それとももう一回OHANASHIする?

私は一向に構わないのだけど」

そう、神崎・H・アリア。朝のホームルームでの問題児であるからして、最終的には風優にシメられたのだが……どうやら、トラウマにはなっているようで。アリアは小さくたじろぐと、

「ごめん、それだけは本当にやめて。えっと……話は変わるんだけど、

トイレどこ?」

「トイレなら右手の2番目の部屋」

「そう、ありがとう。あとキンジ、居るんでしょ? トランクを中に運んできなさい!」

札を手短に言っつて小走りにトイレに入るアリア。かと思えば、リビングにキンジが居ることまで察知したのか、入りざまに叫び捨てた。それを聞いたのか、キンジがリビングから歩いてくる。

「おい、風優。勝手に神崎を家に入れるなよ……」

「ああ……ゴメン。ノリでつい迎え入れちゃったわ。そうそう、キンジもアリアのこと下の名前で呼んだほうが良いわよ」

「ノリで行動するなよ……。ってか、『トランク』って、どれの事だよ……」

「あれの事じゃないの?」

そう言っつて風優は、玄関先に鎮座する明らかかなブランド物のロゴ入りの、小洒落たストライプ柄の車輪付きトランクを指さす。

そのまま手をひらひらと翻しながら、風優は平然と告げた。

「ちよつと、作業も進めなきやだし部屋戻るわ。何かあったら呼んで」

「あ、ああ……」

そう言っつてキンジと別れ、リビングにある資料を取りに行っつて自室に戻る。

えつと……今朝の爆弾事件の報告書上がったら、次は戦姉妹制度とクエスト関連の資料制作だっけか。まさか、戦姉妹制度の生徒側主任——という名の副監督に就任するとは思わなかった。

そして、クエストの受注受け取りとランク毎に分類・開示する作業も頼まれるとは思わなかった。私、この年齢で早くもワーカーホリックになりつつある現状である。

だが、文句を言っつて仕事が減るわけでもなく、寧ろ増えそうなので、ここは頑張るとしよう。

暫く作業に集中して……ようやく一段落したのでデスクで背伸びを一つ。

そして時計を見る。デジタル方式の電波ソーラーの時計の時間は、

16時42分を表示していた。

「もうこんな時間か……」

そう呟き、リビングに向かう。もうそろそろ宅配業者が来る頃だろう。私がリビングに到着すると、アリアは窓周辺を陣取るなり――

「キンジ、風優。あんた達、あたしのドレイになりなさい!」

――私とキンジがアリアの奴隷になれという爆弾発言を行った。

その言葉に思考停止する私（とキンジ）。

……え? は? ドレイ?? ……ありえない。パートナーならまだしも、何故に奴隷なん……。もういいや。考えるのは止めた。考えれば考えるほど鬱になってきそうだ。だから……思考放棄でいいよね。うん。

「ほら! さつさと飲み物くらい出しなさいよ! 無礼なヤツね!」

無礼者はどつちななのよ……。全く。そして客人が偉そうにするんじゃない。イラツと来るんだよ。

「コーヒー! エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ! 砂糖はカンナ! 1分以内!」

更に私のイライラが募るようにアリアの無茶振りである。

「1分以内って無茶言うなって」

私は怒りを通り越して呆れの境地だったので、大きな溜息を吐きつつ、口を開いた。

「何ですよ!」

私の言葉に不満だったのか、アリアが喰ってかかる。

「カンナが今切らしてて宅配便が来ないと無い。あと、豆挽く所からするから1分以上かかる」

「あ、そう。じゃあなるべく早くね」

私のぐう正論にイマイチ納得していなかったようだけど、一応納得して引き下がるアリア。

――ピン、ポーン……。

「宅配便です」

そして、それを見計らったかのように来る宅配便である。

「はい」

デフォな返しをしつつ、リビングから玄関に向かう私。

そして、扉を開ける。そこには19歳くらいだろうか。そんなに私と年齢は離れていない女性配達員が居た。

「こちらにハンコかサインを……」

宅配便のおねーちゃんは受取伝票の記入を私に求めた。

「あ、はい」

受け取り受諾の記入箇所に、玄関に備え付けていた「宅配便受け取り専用」の判子を押す。

「毎度ありがとうございます！」

「ご苦勞様ですー」

荷物を私が受け取り、ベターな挨拶を交わした後、宅配便のおねーちゃんは去っていった。

「じゃあ数分待ってて。アリア」

zucchero di canna  
ズッケロ・デイ・カンナ（キビ糖）の業務用袋が入った段ボール箱を抱え、キッチンに向かう私。

一応、アリアへと了承の意を確認しておく。

「うん」

アリアの了承得たし、早速作るとしよう。アリアは「通常の2倍程度の大量の水で抽出」する『エスプレッソ Lungo』か、「通常の2倍程度の量の豆を使用」する『エスプレッソ Doppio』がご所望だったな。

……よし、今回はドツピオの方になりますか。

まずは豆の準備だ。今回は「アラビカ種6：ロブスタ種4」の配合率な「クイートエスプレッソバー」にしよう。この豆はクレマたっぷりの濃厚でしっかりした味わいが特徴だ。

この種類は「フルシティーロースト」と呼ばれる焙煎が成されている。

「フルシティーロースト」。この焙煎は酸味がなくなり、焦げ臭さも強くなるのが特徴である。「炭火焼珈琲」に使用される豆と同じ程度の焙煎度といえ解るだろうか。

豆が決まったら、次は豆を挽く作業に移る。エスプレッソを淹れるにあたって、この豆を挽く作業が一番重要なのだ。この作業で完成品

のエスプレッソの味が決まるといっても過言ではない。

「グラインダー」呼ばれる機械で豆を挽いていく。今回淹れるのはエスプレッソだから、粒子の大きさが白砂糖程の大きさになる「極細挽き」が良いだろう。

豆を挽き終わったら、粉が新鮮な状態うちに、エスプレッソマシンの「ポルタフィルター」と呼ばれるフィルターに詰める「ドーシング作業」。

詰め終わったら、ホルダーの側面を軽く手の平で叩き、粉を水平に慣らすという「レベリング」作業だ。

慣らしたら、「タンピング」という作業に入る。

「タンパー」と呼ばれる重しでホルダーの上から真っ直ぐに力一杯押す。

タンピングが終わり、ホルダーのへりに付着している余分な粉を綺麗に払う。

次にエスプレッソマシンの抽出ボタンを押して湯通しをしておく。湯通しが終わったらホルダーをマシンに優しくセットする。

優しくセットしないと今までのタンピング作業が水泡に帰す事になるので、注意せねば。

ホルダーの下部にカップをセットし、マシンの抽出ボタンを押す。ボタンを押して4〜5秒位でとろりとした液体が始める。

そして徐々に濃い茶色だったものが薄い茶色になっていく。大体、ボタンを押してから30秒後、抽出が完了し、「エスプレッソ・ドッピオ」の完成だ。

完成したエスプレッソに「Zucchero・Dolcissima」を添えてアリアの下に配膳する。

「ほい。お待たせ。エスプレッソ・ドッピオね。」

アリアは差し出された「エスプレッソ・ドッピオ」を受け取り、口にする。

「ありがと……美味しい。風優は淹れるの上手いわね」

私の淹れた珈琲はアリアに大絶賛だったようだ。

「まあ、毎日コーヒー淹れてるしね。貴族様の口に合って良かったわ」

私もそう言つて、先ほど淹れた珈琲を口にする。

「なあ、風優、何でアリアが貴族だつて解るんだ？」

キンジが珈琲カップ片手に私に尋ねた。

「まあ、以前調べたことあつたし。あと雰囲気」

「ねえ・・・二人共」

私とキンジの会話を遮るようにアリアが発言した。

「どうしたのよ、今度は」

「おなかすいた」

アリアの言葉に私は時計を見る。壁の時計の時刻は17時46分だった。

「あー、もうそんな時間だつて。今から作るわ。夕食」

私は夕食を作るべくキッチンに向かう。

「ねえ・・・」

キッチンに向かう私をアリアが呼び止めた。

「今度は何？」

「風優つてももまん作れる？」

「え、ももまん？そりゃ、作ったことあるし作れるけど……」

「じゃあ、あたしそれ食べたいな。作つて」

「はいはい。じゃあ今日は中華かしらね？」

私は返事をし、キッチンに向かった。先ず、ももまんから作ろう。だって、発酵に1時間くらい要すし。ももまんの材料は薄力粉100g、ドライイースト1g、砂糖10g、水50ml、餡(蓮の実餡)200g(※分量4個分)だっけか。

今回はアリアもいるし、400個くらい作つとけば十分っしょ。

先ずはふるった薄力粉、砂糖、ドライイーストに水を少しずつ加え、生地が滑らかになるまでしっかり捏ねる。

次に400等分にして薄く広げた生地に、400等分にして丸めた餡を乗せて、桃型に包む。この作業が私は結構楽しくて、至福な時だつたりする。

食用色素等(分量外)で薄く色を付けてから霧吹きをして、1時間ほど発酵させる。



発酵させてる間に他の料理を作る。

今日のメニューは麻婆豆腐・海老点心・小籠包・中華ちまき・  
フージャオピン バンバンジー チンジャオロース  
胡椒餅・棒棒？・青椒肉絲・焼餃子・乾燒蝦仁・酸辣湯・杏仁豆腐・  
マンゴープリン  
芒果布丁、それにももまんである。

かなりの品数だが、私にとつてはどうってことない。これより多い満漢全席を一人で作ったことあったからね。ただ……コンロが2つだと捌ききれないので、あの手を使う。

私はキッチンのガスコンロ横にある部屋の扉を開く。その部屋にあつたのはガスコンロ46個。ただそれだけである。

そう。この部屋は「ガスコンロ部屋」である。

この部屋は当初はなかったが、依頼報酬でタダで増設してもらったのだ。

因みに、それと同じく依頼報酬で「燻製部屋」と「石窯」と「冷蔵庫部屋」と「発酵部屋」も増設してもらった。

今回は「発酵部屋」と「ガスコンロ部屋」を駆使して夕食を作ろうと思う。さて、ここからが本番だよ……。

1時間半後、全てが完成し、夕食となった。

ただ……あまりにも作り過ぎてしまった為、とてもじゃないが3人で食べきれぬ気がしない。

なので、理子・白雪・武藤・不知火・文ちゃん・蘭豹・綴・ゆとり先生も呼んだ。

そして、皆で私が作った満漢全席に舌鼓を打ったのであった。

余談だが、アリアは1人でももまんを100個食べていた光景に皆がドン引きしたのは今日ここだけの話である。

続くんだよ。

## 第005弾 凧優とキンジとアリア@Night



「……ていうかな、『ドレイ』ってなんなんだよ。どういう意味だ」  
アサルト  
「強襲科であたしのPTに入りなさい。そこで一緒に武偵活動する  
パーティー  
の」

「……要は『パートナーになれ』ってこと? ……なら、私は別に構わないけど」

「ホント? 引き受けてくれるの?」

「ええ。嘘はつかない。別に強襲科で他のPTに加入する予定はないし」  
パーティー

「ありがと。……で、キンジの方はどうなの?」

「何言ってるんだ。強襲科がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵科に転  
アサルト  
科したんだぞ。インケスタ

それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、辞めるつもりなんだよ。それを、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんてムリだ」

忘れているのか、キンジよ。私も（情報科と兼科の）強襲科所属なんだけど? インフォルマ

まあ、『トチ狂った所』に関しては全否定できないけど。

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね?」

そう言っアリアは7つ目のももまんをはむつと食べて、指についた餡を舐め取った。

しかし、アリアの食べっぷりは見事だ。

こどもも美味しく食べてもらえると作り手の冥利尽きるって物だ。

「キンジのポジションは—そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ」

「私は……?」

「風優は……臨機応変にかしらね。だって未知数すぎるもの」  
「そう……。」

「よくない。そもそもなんで俺なんだ」

フロント……フロントマンとは武偵がPTパーティーを組む際における前衛  
のことで、負傷率が断トツに高い危険なポジションである。

「太陽は何故昇る?月は何故輝く?」

また、いきなり話が飛躍してるな……。

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報  
を集めて推理しなさいよね」

子供みたいななりのアリアあんなただけには言われたくないな。

「へうん。まったくもって同感」

「あら、もう大丈夫なの?」

「へ大方回復してるから無問題」モーマンタイ

「ネタ古……。」

「へわかってるつての。言うなし」

どうやら、アリアの会話手法に気づいたキンジは対話手法を変え  
た。

「会話のキャッチボールが成り立たないのでこちらも要求を単刀直入  
に突きつける」的な感じで。それ故かキンジの話す態度も少し横柄に  
なっていた。

「とにかく帰ってくれ。俺は一人で居たいんだ。帰れよ」

……私はどうしろと?私も出て行けと?

「へ今の場合は風優は対象外だし気にしなくてもいいでしょ」

そっか一安心……。

瑠璃の言葉に安堵する私。マジ焦った……。

「まあ、そのうちね」

「『そのうち』って何時だよ」

「キンジが強襲科アサルトであたしのPTパーティーに入るって言うまで」

「でももう夜だぞ?」

「何が何でも入ってもらいわ。私には時間が無いの。うんと言わない

なら—」

「私には時間が無いの。」……?!

何か引つかかるな……。後で兄様に連絡しておくか。

「へねえ、どうかしたの？ 凧優」

「え!? あ、ううん。何でもない。どうかしたの、瑠璃？」

「へああ。今、私はとてつもなく嫌な予感がするんだが……」

「奇遇ね。私もそんな気がするわ。瑠璃」

「言わねーよ。なら？ どうするつもりだ。やってみろ」

毅然とした態度で断り、煽るキンジ。

「へなあ、凧優。アイツは莫迦か？ とてつもない阿呆か？」

「言うな。思っても黙ってた方が良い」

「アリアは大きな眼でぎろりとキンジを睨み、

「言わないなら、泊まっていくから」

私の中で考えうる最悪な答えをアリアは言い放った。

私は最早溜息しか出なかった。瑠璃も同様である。

キンジは頬が痙攣を起こしたかのよう引きつっていた。

「ちよっ……ちよつと待て！ 何言ってるんだ！ 絶対ダメだ！ 帰れ……

うえっ」

うおい！ 何リバース<sup>吐きかけ</sup>してるの!? 汚いし、掃除も大変だし、するなよ

!?

したらめるかんね!?

「へ必死だね……」

「当たり前だ！」

なんとかりバース<sup>吐</sup>せ<sup>か</sup>ずに済んだ……。

一安心……。

「五月蠅い！ 泊まっていくつたら泊まっていくから！ 長期戦になる事態も想定済みよ！」

m9つ、D( ) ビシツ!!

と、玄関のトランクを指さしつつ、キンジを睨みキレ気味に叫ぶアリア。

やっぱり宿泊セットだったのか。トランク<sup>アレ</sup>。

「やはりきつっきの言葉の意図に答えが……？」  
そう考えていたら、

「出てけ！」

キンジではなく、アリアが何故かその台詞を発していた。

「な、なんで俺が出て行かなきゃいけないんだよ！ここはお前の部屋か！」

「分ならず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！暫く戻ってくるな！」

なんか喧嘩が始まっていた。

もう、勘弁せえよ……。

「へどうにかしないの？ 風優」

「仕方無い……。」

そう言つてアリアの背後に行き、首根っこを掴んで空き部屋にぶん投げる。

ぶんっ！

ぼすっ！

クツションに着地したのを確認し、その部屋の扉を閉める。

「ちよ、いきなり何すんのよ！」

「煩い。自業自得だ。てめーもそこでしばらく頭冷やしてろ。時間になつたらそこから出してやる。いいな？」

「……はい」

私の怒気に気圧され黙るアリア。

「キンジはこれ持って2時間ほど外出してこい。」

そう言つてキンジに（キンジの）財布とケータイを投げ渡す。

「あ、ああ……。」

そう、釈然としない返事を返し、外に出るキンジ。

「……つたく、もう……。」

キンジを見送り、深い溜息をつく私だった。

?????  
続くんだよ

「ねえ風優、もうそろそろ依頼に出る準備しとかないと……」  
休眠を終えて、回復した瑠璃が花梨の姿で実体化し、私に準備を促した。

花梨の方はもう準備完了のようだ。

「あつ、もうそんな時間か……。だったら、行く前に白雪にメール送っておかないと」

私はS研の授業が終わったであろう白雪にメールを送るべく、スマホを取り出す。

今から行く依頼終了後は教務科に提出する仮報告書をゆとり先生の所に持って行って、その後蘭豹と綴先生のおつまみ作り、それが終わったらクエスト掲示板の更新作業、それと同時進行で報告書作成、戦姉妹関係の書類まとめ……。と、書類仕事中心に仕事如山積みである。

「……何気にワーカーホリックだよね。風優つて。まだ学生なのに」

花梨が私の考えを察したのか呆れた表情でそう言った。

「そういうのは言わない方がいいのよ。経験上。ま、胃薬が要らないだけマシだわ」

今のところ、胃薬を服用するレベルまで行っていないので助かっている私である。

「いや……。それが基準なの……。？」

私の論に溜息の花梨。

「重要よ、結構。だつてさ、結衣が居た時なんてさ……」

「待つて、待つて。愚痴なんか聴きたくないから、私。風優は時間ないんでしょ！白雪にメール送るんならさっさと送ったらどうなの？」

「むう……。花梨、なんなのその言い草は……。言われなくてもわかってるわよう……」

私は白雪宛てにメールを作成する。

今みたいに明日の朝食が作る余裕が無い時にヘルプしてくれる

のって、私的に超有り難い。

それを嫌な顔をせずに引き受けてくれる白雪はマジでネ申…

ゞ(。▽。\*)

全くもって『ゆきちちゃん様々』である。

▽白雪、S研の授業終わったの？

私が一文メールを送信。

▽うん。今終わったところ。どうしたの？

すると、瞬時に既読が付いて、直様に白雪からの返信が来る。

▽ちよつと今から依頼あつてさ、明日の分の食事とか頼めないかな  
?>と思つて。

私も直ぐに既読してからの返信を送信。

▽うんいいよ。明日の朝と昼の分でいいよね？

先程の返信到着より早い今回の返信到着である。

文字数的に今回の方が多いのに返信到着が早い……。

謎だ……。

▽そうそう。その2食で大丈夫よ。何時もアリガトね、白雪

私が日頃のお礼も込めての一文を送る。

▽お礼なんていいよ。作つて直接持つていこうかなつて思うんだけ  
ど……

と前回の返信より文字数が多い一文が前回より短い時間で来た。

文字数と返信時間の短縮が比例してるつてΣ(。Д。 )スゲエ!!わ。

▽(。Д。 )ゞ リョーカイ!!

今日はおつまみ作りやらなんやら有るから2時間くらい掛かるか  
も。

それくらいの時間だと大丈夫かな。

少し長い文章を送る。顔文字付きで。

▽わかつたよ。

今から2時間半後位に風優ちゃんとキンちゃんのおウチの方に  
持つてくね。

風優ちゃん、お仕事頑張つてね! (# ?-?) ○

私の送つたメールと同じくらいの文字数のメールが顔文字付きで

先程の返信より短い時間で送られてきた。

顔文字付きでしかもさつきより短い時間で送るとか白雪さん、マジでやりおるわ(；。D)！

「風優ー？遅刻したらシヤレにならないよ？」

私のメールが中々終わらないので花梨が催促した。

「わかってるって、花梨。じゃあ行くか・・・」

私は既読の終わったスマホをしまい、リビングを後にする。

「うん！あ、風優、アリアに一声掛けておいた方がいいんじゃないの？」

リビングを後にする私の横でキッチリ腕をホールドしている花梨が私にアドバイスを送る。

「・・・そうね。そのほうがいいわね」

私は花梨の助言に従い、ぶん投げたアリアに一応声はかけておく事にした。

「アリア、少しは頭は冷えた？」

「・・・うん」

私の問い掛けに一言だけ帰ってくる。

私の機嫌を損なわぬように考えた結果だろう。きつと。おそらく。メイビー。多分。

「そう・・・。今から私は依頼があるから行ってくるから。その間にお風呂でも入っちゃいな」

私は伝言を手短に済ます。

「・・・わかった」

アリアから了承の返事が返ってくる。

「じゃあ行ってくるね」

「・・・いってらっしゃい」  
ぱたんっ

アリアからの「いってらっしゃい」を聞いてから私はドアを閉めた。  
「どうだった？アリアの方は」

花梨が心配そうにアリアの様子を私に尋ねた。

「ま、大方大丈夫でしょ。時間経てば元通りよ」



私は「心配ない」と花梨に答える。

「そっか……」

花梨はどこか安堵したような表情だった。

「いい加減に行きましょ？ 依頼者待たすのは流石にマズイからね」

「そう……だね……」

私の言葉に花梨は頷き、私達は依頼者の下へ急いだ。

私が愛車のカワサキZZR1400（2008年仕様）を走らせること、7分。

この地元で結構有名な建設会社、『旭翔建設』に到着した。

ビル内に入り、受付を済ませて最上階の会議室に行くと、

その会社の社長・旭野將文（26）が上座に着席していた。

私はその対の席に着席する。

「今日も来てくれてありがとうございます」

「いえいえ。依頼ですし」

「依頼とはいえ、此方が助かっているのも事実ですよ」

「そう言ってくれると私も嬉しいですね。で、この資料にあるのが……?」

「はい。此処が今日の対象です」

「成程。確かにこれはお灸を据える必要がありそうですね」

「引き受けてくれますよね?」

「ええ。少しお話ししてきますね☆」

「よろしくお願いします」

依頼者である社長と事前の打ち合わせを終わらせ、会議室を後にする私。

旭野さんには裏の顔がある。

その一面とはこの辺周辺のヤクザを締める元締め。

大半の団体は素直に従うが、その中には偶に彼の手に負えないやんちゃ団体がいるわけで。

その団体の粛清の依頼が私に来る。名指しで。

教務科の方もこの依頼を達成した際の報酬が破格と言う位に良い

ので「断つたら（・x・）コロナ」状態。

その状況に「第9条あるだろ」と野暮なツツコミはしない。  
旭翔建設ビルから徒歩数分。

目的地の「榎島組総合事務所」に私は到着した。

裏口から潜入とかはしない。

もう真正面からの突破。

に決まってるじゃないですか。

「毎度です」

挨拶した私を迎えたのは

「ザッケンナコーラッ！」

「スツゾコーラー！」

「チエラッコーラー！」

「ルルアックアラー！」

「ワドルナツケングラー！」

「ワメツコーラー！」

「ドカマテツパダラー！」

ヤクザスラングを喚く構成員の皆様でした。

「えっと、少し O☆H A☆N A☆S H I しましょうか？」

とびっきりの笑顔で言い放つ。

「もう、構成員の皆様には死なない程度に無事は保証しない。」

1?????時間半後、私はお話（物理）を終わらせて、旭野さんに報告し、次の目的地に向かっていた。

「今回の達成報酬も凄かったね・・・」

依頼が終わり、私と2人なので、実体化した<sup>花</sup>瑠璃が話し掛けて来た。

「確かに。『女子寮新棟の建設（工事費等は旭野さんの会社持ち）とト

ヨタFT86（新車）の進呈』だっけ」

私とその依頼報酬の内容を思い出す。

「相変わらずの破格っぷりだね」

花梨が苦笑気味に言った。

「うん。言うな」

これ以上突っ込むと言わんばかりに私は返した。

「……で、次どこだっけ？」

「蘭豹とゆとり先生のところ」

「あ、そう……」

そう言つて花梨は押し黙つてしまった。

以前、実体化してたら知らぬ間に蘭豹に目をつけられていたからな。

出会う度に戦闘を申し込まれてるから、おそらくは苦手意識があるんだろう。

蘭豹のしつこき的な面で……。

???

ぴんぽーん

蘭豹とゆとり先生が暮らすシェアハウスの呼び鈴を鳴らす。

「はいはい。どちらさまですかー？」

「私です。水無瀬風優です」

「あ、水無瀬さん。いらつしやい」

私を出迎えたのは担任教諭の高天原ゆとり先生だった。

ほんわかして、武偵校の教師には不向きだと思ふ事無かれ。

その実、「血濡れゆとり」<sup>ブラッディ</sup>の異名を持つ元・凄腕傭兵なのだ。

過去に私もガチで闘つた事があるのだが、あれ程の猛者は居なかつたと断言できる。

「おう、来たか。さっさと作れや」

私の存在に気付いた蘭豹が「肴を早よ作れ」と催促する。

「了解です。キッチン借りますね？あ、あとゆとり先生これ……」

「あ、さっきの依頼の仮報告書ね？」

「はい」

「わかりました。これは預かっておきますね」

「おねがいします」

ゆとり先生に先程の依頼が随分早く終了し、時間が余つたのでその時に作った仮報告書を渡す。

その後、私は蘭豹先生の酒のつまみを作り、帰宅した。

そのおつまみは蘭豹とゆとり先生が取り合いになり、喧嘩に発展し、更に全部食われた怒りで乱入した綴で大乱闘が勃発する位に大絶賛だったそうなの。

?????  
続くんだよ。

第007弾 平穏なき夜 Side | Aria & K  
inji & After ★

(第5弾でキレた凧優に部屋へ投げ込まれた直後のおはなし)

Side | Aria | H | Kanzaki

……何故にあんな事しちゃったのかしら。

もう、朝の時点で凧優を怒らせちゃいけないって解っていた筈なのに。

もうあれもこれもバカキンジのせいよ！

あー、考えていたらなんかイライラしてきた。

今すぐにでも風穴を開けてやりたい気分だわ……。

でも、またやりすぎると凧優が怒る……。間違いなく。

そうなれば、あたしのトラウマがまた再燃しそうだし、おとなしくしておこう……。

そう思ったあたしはソファーにあったクッションに顔を埋めた。

それと同時に。

あたしが居る部屋の扉が開いたのは。

一体、誰だろう……。

バカキンジだったら風穴決定。

凧優だったら……。おとなしくしていよう。

扉の向こうにいたのはバカキンジじゃなくて凧優だった。

げえ!? 凧優う……!?

凧優は今、怒っていないみたいだけどへ々に機嫌を損ねて彼女の逆鱗に触れるのはマズイ。

あたしのカンが全力を持ってその警鐘を告げている。

「凧優の機嫌を損ねるな。損ねれば己の命は無い」と。

兎に角、会話の言葉選びは慎重にしないと……。

「アリア、頭は少し冷えた？」

「……うん」

下手に言葉を紡いで余計な事にはなりたくない。  
と、どうか死んでも御免被る。

なので、あたしは簡潔に返事を返すことにする。

「・・・そつか。今から私は依頼があるから行ってくるね。私が帰ってくるその間までにお風呂でも入っちゃいな」

「・・・わかった」

風優はどうやら依頼先に赴く前にあたしの様子を見に来たのだから。

そして、あたしの答えを聞いて、風優は「大丈夫だ」と判断したのだろう。

あたしに「自分が依頼に行く間に入浴を済ませろ」と指示を出した。

あたしはそれを一言で了承する。

それ以上何も言わなかったのは、言ったらこっちの身が保証出来なくなるからだ。

「じゃあ行ってくるね」

「・・・いつてらっしやい」

あたしは風優に見送りの挨拶をする。

その直後、部屋の扉は閉じられた。

ああ・・・よかった。

あたしの胸中はこの感情のみだけだった。

一安心したあたしはソファ横のマットレスに仰向けの大の字の状態で寝転んだ。

普段であれば周囲の目がある故にこういう事は極力控えるようにしている。

しかし、今だけはこういう行為をしたいのだ。

いや・・・させてほしい。

そう思う程、あたしにとつての怒った風優は（一一）。  
ウマーなのだ。

詳細を聞かれても語りたくもない。

語っている時に語り手のあたしも（一一）。  
ト。ウマー再燃  
現実だからだ。

風優が依頼で不在故にあたし一人だけになったこの空間でふと考える。

そういえば、武偵高における依頼受注用の掲示板は「一般」と「名指し」の二つがあったっけ。

東京武偵高校・・・此処では外部からの依頼が多岐に渡って舞い込んでくる。

その依頼は先ず『一般』と『名指し』に区別される。

『一般』とは、東京武偵高校に対する依頼でそのジャンル毎に合った学科に振り分けられる。

そして、その学科の生徒であれば誰でも請け負う事のできる依頼のこと。

対しての『名指し』とは読んで字のごとく。

その依頼を請け負う生徒を依頼主側が指定を行うのだ。

此方側の依頼は『一般』よりも優先度は高くなっている。

その理由は

「武偵憲章第2条 依頼人との契約は絶対に守れ」

と、ある様に外部からの依頼は武偵たる者、絶対に守らねばならない。

いてその依頼を反故にするのはそれに反しているのが理由だ。

例を用いて説明するでしょう。

「名指しで」依頼を行うというのは、その生徒と依頼先の間で契約が発生していることになる。

それを幾ら「一般」を優先にして、その依頼契約を達成したとて、「名指し」の契約を拒否した事実には変わりはないからだ。

風優が今回請け負った依頼はあれのうちの「名指し」の方の依頼なのかしら？

まあ、考えるのも野暮つてもものよね。

依頼の過度な内容の詮索・干渉は非推奨だもの。

今度、風優が依頼に行く時はあたしも同行しようかしら？

そうすればこの目で風優の実力も見ることが出来るわけだし。

それはそれで良いとして。

取り敢えず今は、誰もいないうちにお風呂に入ってこようかしら……。

そう思ったあたしは着替えを手に部屋を出て洗面所に向かった。

Side | Out :

Side | Kinji | Tohyama

何が何だか知らんうちに追い出されてしまった。

反論しようにもあんな風優の前じゃ拒否なんて出来る訳がない。

しかもご丁寧に財布とケータイも渡されてるし。

俺は近所の繁華街をぶらついた後、夜のコンビニで口を尖らせながらマンガ雑誌を立ち読みをして、立ち読みだけでは悪いので1冊買ってから自室に戻った。

泥棒のような手つきで、玄関の扉をソー……ツと開ける。

ここは他人の家ではなく俺の自宅である。

自宅なのに何故こんな事をせねばならないんだ……？

家主が一番肩身が狭いって可笑しいだろう。

お……？

アリアの気配がしない。

リビング・キッチンも見回すが、姿はない。

風優が追い返してくれたのか……？

まあいい。とにかく良かった。俺の思いが通じたようだ。

……そういえば、風優もない。

ああ、思い出した。アイツは今日、名指し依頼があるとか言ってたな。

まだ帰宅していないようだ。

そのうち、帰ってくるだろう。

「(ト、ク、)「ヤレヤレ」と、安堵の息をつきつつ、一応外から帰ってきたので手を洗う為に洗面所に向かった。

ちゃぼん。

洗面所に向かった俺を出迎えたのは、風呂場から聞こえた水音だっ



た。

見れば曇りガラスのドアの向こうでバスルームの電気が灯いている。

うつすらと見えるちびっこい人影は浴槽からよきつと足を出して鼻歌を歌っていらっしやる。

ああ、なんだ。アリアは帰ったのではなく、風呂にいたのか。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・んん？

今、俺は何と言った・・・・・・・・??

風呂・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

———はい!?

———風呂お!?

俺は音が聞こえるくらいに勢いよく洗面所で後ずさった。

そうか。風優はこの事を想定して俺を外に出したのか。

なんていうか・・・・・・・・気配り上手というか、策士というか・・・・・・・・。

おそろおそろ見下ろせば、プラスチック製の洗濯カゴにはアリアの制服がぶち込まれていた。裏返しになったスカートの内側には秘匿用のホルスターがあり、左右の拳銃が露出している。(一種のガンチラか?)

更にこれも裏返った白いブラウスには2本の短い日本刀が覗いていた。(二種の刀チラ?)

人影・・・・・・・・もとい、アリアが湯船から出る音がして、俺が心臓が裏返りそうになる。

・・・・・・・・ありえん。

・・・・・・・・ありえんだろ。この状況は。

んな、ラブコメみたくドキドキできるシチュでもない。

これは・・・・・・・・ヘタな事をすれば死のデス・ゲームだ。

と、軽くではなく完全にパニックった俺の耳に追い打ちをかけてきた

のは———

・・・・・・・・ピン、ポーン・・・・・・・・

慎ましい、ドアチャイムの音。

.....

こ、こんなドアチャイムの鳴らし方をするのは俺の知る限りじゃ一人しかない。

(し、白雪!?)

まさしく、「前門の虎、後門の狼」な状態である。

あまりにもあんまりすぎる展開に、

「う、うをつ.....Σ(。D。111)!!」

俺は飛び出した廊下で足がもつれ、壁に思いつきり体を強打してしまった。

「キ.....キンちゃんどうしたの!?!大丈夫!?!」

ドアの外から聞こえる白雪の声。

い、いかん。今の音を聞かれてしまった。これでもう居留守は使えない。

「あ、ああ。大丈夫」

平静を保っている感じを最大限に装って玄関のドアを開けると.....

緋袴に白子袖——所謂、巫女装束の白雪が、何やら包みを持って立っていた。

「な、なんだよお前。そんな格好で」

バスルームの方をチラ見してエリアの様子を伺いつつも、ぶっきらぼうに対応する。

「あつ.....これ、あのね。私、授業で遅くなっちゃって.....  
凧優ちゃんに頼まれた食事をすぐに作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど.....い、イヤだったら着替えてくるよっ」  
「いや、別にいいからっ」

このままにしておくかと本気で着替えてきかねないムードの白雪を制止しておく。

「授業」、というのは「S研の授業」のことだろう。

それと、この状況はこの家の同居人が作り出したものなのか.....

恨むぞ.....凧優.....

そう思っていたら、白雪が俺に質問をしてきた。

「ねえキンちゃん。今朝出てた周知メールの自転車爆破事件って……あれ、もしかしてキンちゃんのこと……?」

「あ、ああ。俺だよ」

と、早口に言うると白雪は文字通り……リアルに10cmくらい飛び上がった。

「だ、大丈夫なの!? ケガとか無かった!? て、手当させてっ!」

「俺は無事だからっ! 触んなっ」

俺に手当てをしようとする白雪を必死に拒む俺。

白雪が押し寄せている状態なので、何処とは言わないが当たっているのだ。

俺の血流的にもそれは宜しくない。

これでヒスつたりなどすれば間違い無く自殺モノだ。

「は、はい……でも良かったあ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて! 私絶対、犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃない、逮捕するよ!」

「帰ってきて早々、何故に『八つ裂きにしてコンクリートに埋める』っぽい台詞を聞かなくやいけないのかな? 勘弁してよ……白雪」

なんか白雪の台詞の一部に妙な単語があったような気がしたが空耳だろうと思っただが、丁度帰宅した同居人のセリフで聞こえたのは事実だとわかった。

ようやく、帰宅してくれたか……この状況を打破する救世主が。

Side Out:

Side Nayu Minase

「は、はい……でも良かったあ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて! 私絶対、犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃない、逮捕するよ!」

おお、玄関先からとんでもない語句が聞こえてくる……。帰ってきて早々、何故に『八つ裂きにしてコンクリートに埋める』っ

ほい台詞を聞かなきゃいけないのかな？勘弁してよ……白雪」

私は呆れつつも、物騒な発言の主、星伽白雪に突っ込んだ。

「あ、おかえり。凧優ちゃん。今日もご苦労様です」

「うん。白雪。……あ、これがそうなの？」

「うん。はい、これ。頼まれていた食事だよ。ついでに凧優ちゃん用の夜食も入ってるから」

「ありがとうね。本当に助かるよ……」

こういう気配りができる白雪様々だ。

婿になる人は幸せだね。こりゃ。

こんな優良物件そうそういないと私は思う。(愛は重いけど)

「よかった。喜んでもらえて。凧優ちゃんも頑張ってるね。無理はしないだね」

「うん。その所は最大限配慮するわ」

飽くまで「最大限の配慮」。

「やらない」とは言わない……つか言えない。

だって、何時何時に依頼が舞い込むか不明だからだ。表も裏も。

「じゃあ、おやすみ。凧優ちゃん、キンちゃん」

「うん。おやすみ白雪」

「おやすみ、白雪」

玄関の扉が閉まる。

白雪は帰っていった。

これでキンジの一難は去ったであろう。

「じゃ、キンジ、私はこれ片付けてくるから」

そう言っただけで私は白雪からの差し入れの食事を手にキッチンに向かった。

「ああ。わかった。俺は『後門の狼』の処理をしてくる」

そう言っただけで、キンジはバスルームへ駆けていった。

「止めないの……?」

精神体から実体になった花梨が尋ねる。

「止めない。もうどうなるうとも自業自得だし」

私は淡々と介入しない事を告げた。

「まあ、そう……だね。私達が出なくてもいいよね」

それを聞いて何かを察した花梨は私に賛同の意見を述べた。

「ま、そういうこと」

私は花梨の意見を肯定する。

「風優……私疲れたしもう寝る。おやすみ……」

花梨は眠気まなこで私に言う。

「実体で寝るのは良いけど、身体の浄化術式と着替え忘れないですよ？」

私は花梨に注意を促す。

「うん……わかったあ……」

花梨は覚束無い足取りで自身の寝室に向かったのだった。

私は花梨を見送った後、白雪から貰った包みの中身を保存容器に移

し替えて冷蔵庫に入れる。

その作業中にアリアとキンジの悲鳴やら何やらが響いていた。

が、私はそれを知らぬ存ぜぬでスルー。

そんな痴話喧嘩如きのに構っている暇はないのだ。

此方とて色々とする事はあるのだからな。

これが終わったらまずは兄さんに連絡だな。

そう考え、今の作業を終わらすことに集中した。

「あ、もしもし、兄さん？風優だけど？……うん、ちよつとお願いしてもいいかな……？……うん。兄さんに調べて欲しい事があるの……」

私は作業が終わり、自室で兄さん……公安0課第3班所属、水無瀬雄一郎に調査依頼の電話を掛けたのだった。

なお、私が兄さんに電話を掛けたのが4日ぶりで前半は兄さんを宥めるのに時間を要したのは心底どうでもいい余談である。

Side Out:

続くんだよ

第008弾 朝が来ようが変わらぬものもある ★

「バカキンジ！ほら起きる！」

「はにふんだこの！」

「朝ごはん！出しなさいよ！」

「し……る……か！」

「お腹が空くじゃない！」

「空かせこのバカ！」

「バカ——ですって!?!キンジの分際で！」

寮の自室の隣の部屋からアリアとキンジの仲良さそうな喧騒の音が響き、私は目を覚ます。

窓の方を見ると、窓から陽射しが差し込んでいた。

もう朝か……。

えっと、時間は6:30。

えっと、確か作業が終わって寝たのが3:30位だったっけ。

だから……うわ、3時間くらいしか寝てないのか。

道理で頭が働かないし寝不足な感じがするわけだ。

つか、五月蠅いな。

ゴメンさっきの前言撤回。今日覚めたわ。

低血圧設定行方不明なくらいにね。

つか、朝っぱらからそんなに叫ぶなし。

こっちは深夜まで作業があったんだしさあ……。

もう頭にガンガン響いて仕方がない。

もうちよっと、此方に気を使って欲しいものだ。

そうだ。ちよいと文句でも言っよう。うん。

文句を言っようって赦されるだろーし。

そう思った速攻で私はキンジの部屋（アリアも同じ部屋）へ向かった。

「——」。zzz:「——」。zzz「——」

花梨はというと寝不足な私を差し置いて絶賛熟睡中であつた。

なんか不公平な感じの感情を抱いたのは間違いではないであろう。

憂さ晴らししても良いよねえ？ねえ？

ま、そんなことはさておき……キンジの部屋の前に到着した。キンジの部屋からは

「お腹が減った！へったへったへったへったへったあああ!!!」

アリアの大絶叫が聞こえる。

お前はガキの類か？ああ……ゴメン。(身長含め)ガキだったわ(笑)とは言えど。

(…)(…)(…)(…)(…)(…)

「朝っぱらから五月蠅い！近所迷惑でしょうが！」

私はドアを開けてキンジに叫びつつ襲いかかるアリアを注意する。

「何よ？今このバカキンジに文句を言ってるんだから……って、げえ!?!風優!?!」

「だからなんなのその反応。……まあいいや。アリア、朝ご飯なら今から用意するから食べるなら早くダイニングに来なさい」

「あ、うん。わかったわ……」

「それと、キンジも食べるなら早く来てよね。アンタは昨日、自転車破壊されちゃったんだし、バス通でしょ？58分のバスに間に合わなくなるよ?」

「あ、ああ……。わかった」

言う事を言っただけはキンジの部屋を後にしてキッチンに向かう。

ああ、良かった。昨日、白雪に料理作って貰って正解だわ。

あれを温めて、何か汁物作れば朝食は大丈夫だろう。

あとは昼用のお弁当ね。あれも小分けしておいた分を詰めれば大丈夫よね。

そう考えつつも冷蔵庫から汁物……すまし汁の材料を取り出し調理に取り掛かった。

「御馳走様でした」

「はい。お粗末さまでした」

食事を終え、登校準備に入るキンジ達。

私は洗い物をしている。まあ準備は終えているし慌てることはない。

「アリア、登校時間をずらすぞ。お前、先に出ろ」  
「なんで」

「なんでも何も、この部屋から俺とお前が並んで出てってみろ。見つかったら面倒なことになる。ここは一応、男子寮ってことになってんだからな」

あー、そういうええそうばそうだっけ。ま、私が男子寮から出入りする時点で曖昧になってると思うけど……。

「上手いこと言って逃げるつもりね！」

「いやいや、アリア、同じクラスで席が隣同士……。これじゃ逃げようがないじゃない。問題なしだと思うけど」

「あ……。それもそうね」

私はやんわりとアリアの主張を否定する。

それに納得したアリアは引き下がった。

「キンジ、もうそんなこと言ってる場合じゃないと思うけど。……時間を見なさいな」

「……時間？げっ！やべえ！行ってくる！」

キンジは手早くダイニングの椅子に置いてある鞆を手にとって寮を後にした。

「はいはい。いってらっしゃい。……さて私達も行くとしますか……」

「何で行くのよ？まさか、徒歩とか言うんじゃないでしょうね？」

キンジを見送った後、洗い物が終わったので私も登校を始める。

無論、アリアと……。朝食を終えて未だ寝ている花梨もだ。

花梨は……。最悪担げばいいだろう。うん。

「んなわけないじゃない。車で行くわよ。花梨がアレだし」

「ああ……。成程ね。車って……。風優、車持ってたっけ？」

私の答えに未だに熟睡中（2度寝である）な花梨を見て納得のリアア。

しかし、その後最もな質問をする。



「ん？最近つか、昨夜依頼報酬でもらった」

「ただけ気前がいいのよ、その依頼主。・・・で、もう届いてるの？届くの早すぎない？」

「まあ、『超速達で送る』って言ってたしそんなものよ」

「そ、そうなんだ・・・」

私はアキ・・・旭野將文の名は伏せといてサラッと説明した。

その結果、アリアは軽く引いていた。

「さて、行きましょ？」

「ええ」

寮を出て私とアリアはガレージに向かう。

武偵高の寮には車輜科の生徒も居る為、敷地内に専用のガレージが設けられている。

それは車輜科以外の生徒も学校に申請書を出せば使用することができる。

私とアリアはそのガレージに停めてある昨夜の依頼報酬・・・トヨタFT86 GT “Limited” に乗り込む。

花梨は・・・後部座席に放り込んだ。

結構優しくは程遠い扱いだったがそれでも起きる事はなかった。

そんな私達を乗せたトヨタFT86GT “Limited” は東京武偵高校・本校舎前に向けて走り出した。

・・・え？「運転はどっちが？」

勿論、私だよ。まあどっちも運転免許持ってるけどね。

自分の車なのに自分で運転しなきゃどうするのって話よ。

「はい。到着。アリアは先に行つて。私は車輜科のガレージに車停めてくるから」

「わかったわ」

校門の前でアリアを降ろし、車輜科のガレージに車を向かわせる。因みに車輜科のガレージの使用申請は昨晚終わらせて、もう受諾されている。

車輜科のガレージの一面に車を停めて私も本校舎の教室に向かう。

「あふう・・・。あ、（＾o＾）ノへおはよー瓜優」

此処で二度寝でかなりの爆睡していた花梨がようやく目覚めたよ  
うだ。

「おはよう。花梨。随分と遅い起床ね」

「あー・・・すんごく疲れてたからね」

「あ、そう・・・」

これ以上突っこむのもアレなので私はやめておくことにした。  
続くんだよ。

## 第009弾 ウラ取りと条件 ★

武偵校では1時間<sup>午</sup>前から4時間<sup>中</sup>目までは普通の高校と同じく一般科目の授業を行い、5時間<sup>後</sup>目<sup>か</sup>以降は<sup>ら</sup>各々の専門科目に分かれての実習となる。

私みたいに掛け持ちしている生徒は、どの専門科目を受けるかを自分で選択する。また、自分の所属する科以外の専門科目も「自由履修」という形で受けることができる。

私は名指しのクエスト依頼がないかを確認する為にクエスト依頼の掲示板に来ていた。

そこで、その場所では滅多に会わない生徒と遭遇する。

「あら、キンジ。珍しいじゃない。貴方がこんなところにいるなんて」

「まあ、たまにはクエ受けてみようかな・・・と思ってさ」

「ふーん。アリア対策に？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私の発言に何も返してこないキンジ。つてことは凶星なのね……。

まーでも、無駄だと思うけどね。多分……確実にアリアが探偵科<sup>インケスタ</sup>の専門棟近くで待ち伏せしてるし。

何故知ってるかは昼休みにアリアと昼食摂っている時に聞いた。

そしてそこで待つ様に言ったのは私だし（笑）

「ま、理由はどーでもいいけどさ。どんな依頼受けたの？」

「Eランク武偵にお似合いの簡単な依頼だよ」

「つて事は『青海の猫探し』のクエか……」

「ああ……って、何故知ってるんだよ!？」

私がキンジの受注した依頼を当てると、キンジが驚愕していた。

そんなに驚く事……??

「だってそりゃ、この掲示板の管理は<sup>マスターズ</sup>教務科からの依頼で私達がやってるし」

そう。この外部依頼のクエストの掲示板。

更新を行うのは私が所属する<sup>インフォルマ</sup>情報科の仕事なのだ。

「理由になってないじゃねえか」

「管理してるってことはそのクエが、どの科に所属する武偵で、どのランクの武偵に合ったレベルの難易度なのか把握してるでしょ？」

私はキンジの問いにそ対し、そう答えた。

「まさか、ここに<sup>アサルト</sup>出ている依頼の難易度とか全部覚えているのか……？」

キンジがおそろおそろそんなことを聞いてきた。

「流石に全部とはいかないけれど、まあ大体はね……。キンジ、この資料参考にしたら？」

私はそれをやんわりと否定する。まあ……正直9割5分は覚えていたりはある。

そして私は一部のファイルをキンジに渡した。

「……？：なんの資料だ？」

キンジはその資料をサラツと読んでから尋ねた。

『なんの』って……。キンジが探す猫の行動パターンの資料よ」

「そんな資料いつ作ったんだよ」

「さっき」

私は間違った事は言っていない。

これ、先程の掲示板更新中に片手間に序でで作ったものだ。

なんかこんな予想できてたからな。

「……ありがたく受け取っておく」

キンジは私の発言に呆気にと取られていたが、直ぐに復活し、探偵科<sup>インケスタ</sup>の専門棟の出口の方へ駆けていった。

私は「まー頑張れ。キンジ」的な感情で見送る。

さて、クエも特段無いようだし、今日は強襲科<sup>アサルト</sup>で戦闘訓練するか……。

こうして私は強襲科<sup>アサルト</sup>での戦闘訓練に勤しんだ。

その頃、キンジとアリアは喧嘩しつつも上手くやっていたようである。

本当に仲が良いコンビである。

事の顛末を夕食の場で聞いて、それを言ったら、見事にハモって否定された。

全くもって仲が良いコンビだな。 キンジとアリア この二人。

その翌日も特段クエが無かったので情報科インフォルマに顔を出したあと、  
強襲科アサルトでの戦闘訓練に勤しむ。

強襲科アサルトでの戦闘訓練を終え、放課後になった。

その時、スマホに着信が入る。相手は・・・旭野さんか。

「はい、もしもし」

『久しぶりだね、風優ちゃん。今、時間はあるかい？』

「え・・・。まあ、特段クエとか無いんで、大丈夫かと思えますけど」

『そうか・・・。では30分後にいつもの喫茶店に来てくれないか』

「(喫茶店・・・。って事はそっち側の話ね・・・。) 了解です」

『では、待っているよ』

通話は終了した。

「で、何だったの・・・?」

丁度私と合流した花梨が尋ねる。

「さあ?でもあっち側の話だろうね」

私がそう答える。

「ふーん。そっか。じゃあ私はテニス部の方に行くね。帰りは遅くなるから」

「りょーかい。で、晩御飯は?」

「んー・・・と今日は皆でファミレスに行く約束だし要らない」

「解った。じゃあね」

「うん。(・・・ω・・・) ノーバイバイ」

花梨と別れた私は待ち合わせの喫茶店に(車で)向かった。

「よお。意外に早かったな。風優」

喫茶店に到着した私を迎えたのは旭野さんだった。

しかし、いつもと口調とか違う。

何というか態度がでかい。

「アンタから貰った車のお陰よ、アキ」

私の方も敬語とか無しで対応する。

「何時もとは違つて敬語はなしかよ」

「そりやお互い様でしようが」

「まあそりやそーだな。こつち側だと敬語はムズ痒くてたまらん」

「こつちの方が素のくせに」

「それ言うんじゃねーよ。それとも何か不満か？」

「いや。別に。寧ろ今の方で敬語使われる方がぶつちやつけキモいわ」

いきなりの罵倒合戦である。

何事かと思うだろうがこれがデフォルトなのである。

「まーいいわ。そこに座れ」

「はいはい」

アキに言われ、私はアキの対面に座る。

「まず、これが雄の奴に頼まれた資料だ」

「兄さんに……?」

アキが兄さん……水無瀬雄一郎に頼まれたという資料に目を通す。

それはアリアの事についての資料だった。

「……成程ね」

数日前、私とキンジに「PTを組め」と言った時にアリアが言った言葉。

「あたしには時間がないの」

という発言。

これに私は引つ掛かっていた。

だが、アキ経由で私の手元にある兄さんからのアリアに関する資料。

これを見てその言葉の意味を理解することができた。

「で、アキ。なんでコレにイ・ウーの奴等が関わってる訳？」

何故か私が属する組織の名が出てきた。

「知るか。俺にも老害共の考えている事はさっぱりだ」

アキは私の問いに知らないと返す。

アキにも解んないのかぁ……。

「そう。で、この案件に関わっている奴等は判明してるの？」

「ああ。このリストに載っている奴等だな」

私はアキから資料を受け取り、目を通す。

「うえ……。ナニコレ。殆どじゃない」

そこには私が党首を務める研鑽派ダイオ・ノマド以外の奴等の殆どのメンバーがリストアップされていた。

中には何人か私の党派である研鑽派ダイオ・ノマドからも引き抜きもされている。

ブラド……は誰かに操られて署名したよな。それは解る。

だって……。あの私の保護者ともイ・ウー内外で噂されるブラドだよ？

「最近、記憶が途切れ途切れになって、欠如してる事があるんだが……」

と、新学期が始まる直前に説明を受けたからねえ。

おそらくはそれ関係だろう。

「まあ……。対立する奴等が居なくなったからな……」

「私達が居なくなるのを狙ってやがったのか……」

私はアキの言葉に嘆息せざるを得なかった。

実際、私達……研鑽派ダイオ・ノマドがイ・ウーの抑止役を担ってたからなあ。

そのトップが相次いで休学状態。

それは……。無理もない話ではある。

「そう言うな。ま、そのリストに俺達の名前が無いだけマシだがな」

「そうね。お蔭様で行動しやすいけど」

確かにこのリストに私達の名前があったらアリアとは敵対する訳だし。

動きにくいと思ったらありやしないし、ややこしくもなる。

無いなら無いで、武偵である表、イ・ウーメンバーである裏。

この両方がフルに使えるわけだからね。

「やっぱ、お前も動くのか」

私の思惑を察したアキの言葉に

「当然。どう考えてもアリアとキンジ2人だけじゃ無理がある」

私は肯定した。

事実、アリアとキンジ……。あのコンビといえどもこのメンバー相手だと荷が重い。

私が参戦すればそのスムーズさも変わるだろう。

何よりも……。私自身、あの老害共が気に喰わんのだ。

会う度にネチネチ文句しか言いやがらねえわ。

否定の割に碌でもない事しか考えねえし。

私的にさっさと隠居して欲しいもんだ。

それと……。未海姉との決着も付けねえとな。

あのリストに未海姉……。『綾乃未海』の名前があった。

未海姉は私の師で……。そして私が止めなきやいけない相手。

最悪……。殺してでも。

それ程因縁がある相手なのだ。

だから、未海姉の存在がある以上、私が参戦しない選択肢はないのだ。

「そうかい。俺も雄も出来る限りサポートはする」

「ありがとう」

アキが兄さんと共にサポートする事を申し出たので私は礼を言う。

「礼は良い。俺とお前の仲だろ。あと、コレは要るだろ？」

そう言ってアキは私に手甲とワイヤーとカードホルダーを手渡す。

これは、私のイ・ウー活動時の装備ではないか。

「これって……」

「礼は機嬢ジーニヤンの奴に言え。それ保管・メンテしていたのはアイツだからな」

「解った」

装具一式受け取り喫茶店を後にする為、席を立つ。

「死ぬんじやねーぞ。氷天ひてんの魔女」

「そつちもね。鮮烈ディラスタの雷撃」

私は喫茶店を後にして武偵校の寮に戻った。

それから、アリア達と夕食をとり、私は自室に戻る。



さつきアキに貰ったりリストとイ・ウーのメンバー指導リストを照会  
する。

そして自室に戻った私はイ・ウーメンバー専用の通信機を手に取り、  
ダイアル調整。

通信の相手は勿論、ジーニヤン機嬢だ。

だが、最初に出るのが誰なのかは解らないのだ。

あの姉妹は個々の通信機を同じ所に置いている。

彼女達曰く、

「そっちの方が解り易い」

・・・だそうで。

最初からジーニヤン機嬢が出れば問題はない。

だが、誰が最初に出るのは誰か不明。

故に・・・こういう会話で始まるのだ。

『もしもし？誰ネ？』

「あ、その声はバオニヤン炮娘？私。風優よ」

先ず、電話に出た相手を当てる。

ここからスタート。

結構難易度は高いが、それは慣れでなんとかなる。

今回は四姉妹の、次女、バオニヤン炮娘の様だ。

『風優？本当に真的？凄く久しぶりネ！』

私が相手でバオニヤン炮娘は結構喜んでる御様子。

語尾が弾んでいるのが何よりの証拠だ。

「そうね。ほぼ2年ぶりくらいかしらね・・・」

高校に進学後は全然連絡してなかったし。

確かそのくらいだろう。

『もう、連絡寄越さないで超心配したネ。——で、今日はどうした

ネ』

かなりの話したい事があったのだろう。

結構長い時間私はバオニヤン炮娘と話し込んでいた。

そして、バオニヤン炮娘の話に寄れば、ランパン藍幫の幹部、しよかつせいげん諸葛静幻も私をかなり心

配しているらしい。

……修学旅行Ⅱで香港を旅行地に出来たはずだ。

その時に会いに行つてアイツ等を安心させてやろう。

私はそう心の中で誓つた。

「うん。機嬢ジーニヤンにお礼と猛妹メイメイに聞きたいことがあつてさ……」

暫く話した後、私は本題を切り出す。

そして、四姉妹の三女、猛妹メイメイと四女の機嬢ジーニヤンへ取り次ぐ様に炮娘パオニヤン依頼する。

「猛妹メイメイと機嬢ジーニヤン? その二人ならもうすぐ帰つてくるネ。ちよつと待つよろし」

どうやら、二人は外出中らしい。……が、あと少しで帰つてくるようだ。

ちよつと待つて欲しいと炮娘パオニヤンに頼まれる。

「わかつた」

私はそれを了承する。

そしてその間、炮娘パオニヤンと偶然其処に居合わせた四姉妹の長女、狙姉ジュジュと話していた。

当然、狙姉ジュジュにも私は物凄い心配された。

そしてしばらくして、猛妹メイメイと機嬢ジーニヤンが帰つてきたようだ。

通信の相手が私だと知るやいなや、すごく喜び、通信に出た。

☒? 風優モシモシ?」

「あ、機嬢ジーニヤン? ありがとね。私の装備をメンテしてくれて」

私は自分の装備の礼を行った。

『? 介意気にしないで。風優は私のお得意様だし当然ネ』

機嬢ジーニヤンはそう言ってくれるけども。

「ホント、ありがと。これからも装備のメンテとか頼むだろうけどその時は宜しくね?」

有難いものは有難いのだ。

私は再三、機嬢ジーニヤンに御礼を言つた。

『可以OK! いつでも私に任せるネ! ——じゃあ、猛妹メイメイに代わるネ』  
「ええ」

私がシレつと言つた要望にも機嬢ジーニヤンは快く了承してくれた。

その後、機嬢ジーニヤンと世間話をして、次の通信相手、猛妹メイメイに代わる。  
『？ 風優、私に聞きたいことって何アルカ？』  
「あ、うん。このリストにあるやつなんだけどね……」

「これで全部ウラは取れたわ。ありがと。お陰で助かったわ」

『不客气、風優。祝你好？！』  
うん

「？！」

『那，再？！』  
じゃ、またね！

『好了，拜拜！』  
うん。バイバイ！

通信を終えた私は気分転換も兼ねてコーヒーを淹れようとキッチンに向かう。

そして、トイレのあたりでキンジとバツタリ会う。

「あ、おかえり。キンジ、意外に早かったのね」

「な、風優？一体何のことだ？」

大体の事は察するが……

キンジよ。カマかけに引っ掛かり過ぎ。

それに……

「……キンジ、バレバレ。動揺隠せてない」

「う……」

私が指摘すると凶星を突かれた表情を見せるキンジ。

「まあ、安心しなさいな。幸いと言うべきか、アリアにはバレてないし」

「そうか……」

私のフォローに安堵の表情を見せるキンジ。

「ま、もうそろそろ来ると思うけどね」

「え？」

虚を突かれた挙句、絶望も相まってか固まるキンジ。

私の得意技、「上げては落とす」とはこの事だ。

この反応を見てその後で少し誂うのが楽しいのだ。

昔、パトラにこれやったら思いの外良い反応で、仲間全員で大爆笑していた。

アレで未だに思い出し笑いができるのは此処だけの話である。そんな感じで誂っていた直後だった。

カードキーで鍵が開く音がした。

「お帰りアリア」

「お帰り……じゃないわよ。鍵くらい開けときなさいよ」

「いや、泥棒とかに入られたら嫌じゃん」

「そのくらい返り討ちにして逮捕しなさいよ」

「出来るけど、簡単だけど、泥棒に入られた時点で私の信用が落ちる」

「じゃあ、あたしが来るの予測して開けときなさいよ」

「無茶言うなて。ま、どーせ偽造カードキー持ってると思ったし別にいいかなって」

「あのねえ……あたしが持つてなかったらどうしてたのよ」

「んなもん、決まってるでしょ？放置」

「あんたねえ……」

「もう居候の身で文句言わないの」

「むう……」

アリアの論に正論ぶつけてバツキバキに論破する私。

私の正論にぐうの音も出ないアリア。

因みにキンジは私とアリアの会話の間は

「あ、いたんだ……」

的な放置状態である。

その後、私はキツチンに、アリアはリビングに、キンジは洗面所へと移動した。

私はコーヒーを淹れつつもキンジとアリアの会話を聞いていた。

まあ、何と言うか面白いわwwwこの二人。マジでwww

キンジがこの前、アリアにしたという強制猥褻（未遂）で犯罪者扱いされたりだの、

アリアがキンジのHSSの発動条件も知らないのにさ……

「なんでもしてあげるから」

発言とか……。

聞いてて飽きない。

とはいえ、この手の話題はキンジの琴線に……下手せずとも逆鱗には触れるだろう。

その証拠にキンジは無意識のうちにアリアを押しつけていた。

さあ……どうする、キンジ？

「……1回だけだぞ」

「1回だけ……？」

ふうん……。成程ね。

無条件降伏じゃなくて、

「戻ってやるよ——強襲科アサルトに。但し、組んでやるのは1回だけだ。戻ってから最初に起きた事件を、1件だけ、お前と組んで解決してやる。それが条件だ」

キンジは条件をアリアに突きつけた。

「……」

アリアは何も言わなかった。

「だから転科じゃない。自由履修として、強襲科アサルトの授業を取るそれでもいいだろ」

キンジ……条件付き降伏ってワケね。

しかし自由履修とは考えたな。

自由履修……これは武偵校において、生徒が自分が所属する科以外の専門科目の授業を受ける事の出来る制度である。

無論、単位には反映されないが、多様な技術を要求される武偵になる為には理に適っている制度といってもいい。

なので、生徒の殆どは割と流動的にこの制度を利用している。

斯く言う私も自由履修で狙撃科スナイプ、車輛科ロジの授業を取っている。

自由履修の云々はさておいて、

キンジ、さてはHSSという切り札を伏せたままの状態……

通常状態のまままでやってアリアを失望させる魂胆か。

全く、どこまで組みたくないんだよ。コイツは。

そこまで来ると流石の私でも溜息が出るぞ。

「……いいわ。じゃあ、この部屋から出てってあげる」  
キンジの譲歩案にアリアは妥協した。

「あたしにも時間がないし。その1件で、あんたの実力を見極めることにする。勿論、風優もね」

ま、解つてたことだし別に不満はないけど。

「……どんな小さな事件でも1件だぞ」

「OKよ。その代わり、どんな大きな事件でも1件よ」  
「解つた」

「但し、手抜きしたりしたら風穴あけるわよ」

「ああ。約束する。(通常モードの俺の) 全力でやってやるよ」  
「解つたわ。約束する」

ま、私の場合、全力は出さないけどね。

そう。第4段階は使わない。

第2段階位までの全力を……ね。

でも、アリアには少しだけ明日見せてもいいかな。

第3段階の私を……。

続くんだよ

## 第010弾 転校生と本気の戦い ★

キンジとアリアの条件付き契約が成立した翌日。  
私とアリアは2―Aの教室で昼食をとっていた。  
今は昼休みだしね。

さつき、私の弁当狙いで理子の奴が乱入してきた。

私は何事も無く開いてる窓に理子を投げて落としましたよ（笑）

ま、理子アイツはこの位で死ぬ奴ではないから（たぶん）大丈夫でしょ。  
だつてさ……

「りこりん、10点満点っ！」

とか言つて綺麗に着地してたし。

なんつーか極められたバカは超厄介。

まさしくそれが当て嵌まりそうな感じである。

この事実には流石の私も苦笑するしかあるまいて。

「……つてば、ねえ風優つてば……！」

アリアが先程から私に呼びかけていた。

「……（。D。）ハッ！ あ、ごめん、アリア。……で何の話だっけ」

私は現実に戻され会話に戻る。

「もう……。今日、来る編入生のことよ。勿論知ってるわよね？」

「そりゃね。一応調べたけど。結構な手練だよね」

その話題は今日、強襲科アサルトに転入する編入生についてだった。

事前に軽くはだけど調べた。

書類の記録上だけでもかなりの実力を誇る手練だった。

「で、どれくらいの実力だと思う……？」

「ま、今の時点じゃ何とも言えないかしらね」

「そう……なのね」

記録だけだと戦術面の詳細等といった実力は不明だからな。

そういうのは実際に戦うのが把握するのに最適だろう。

「ま、次の時間でそれも判明するだろうけど」

「次の時間……つて専門科目？」

私の言葉に何かを察したアリアが尋ねた。

そう。今は昼休み。

次……午後からはそれぞれの所属科での専門科目である。

「蘭豹が編入生と私で次に時間の戦闘訓練の時に戦えつてさ」

「そうなんだ………。で、風優は本気でやるの？」

「まあ、そのつもり」

アリアの質問に若干言葉を濁しつつも私は肯定した。

「ふうん……。あの時の奴でも本気じゃなかったんだ……」

「そうね。あの時ののは大体70%位だし。本気出さなかったのも理由あるし」

『あの時』というのはチャリジヤックの時のことだろう。

「理由？」

「単純明快。本気でやったら入院確定」

「え……？ それホントなの!？」

「うん。マジ。ノーリスクで強大な力扱えるわけ無いでしょ」

「あ……そうね。じゃあこの後、本気でしても大丈夫なの!？」

「問題ないわ。長時間使うわけじゃないし。ま、これ使えばノーリスクだけど」

そういつて私は3枚のカードを取り出す。

「それって、タロットカード………?」

「ええ。これは能力を使う時の補助道具みたいなものね。能力をカードに流し込むことでカードに書かれた絵が示す効果が発揮できるのよ」

「へえ……」

「早く食べちゃいましょ。時間もアレだし」

「時間……。そうね」

こうして昼休みは過ぎてゆく。

午後の日程が始まり、アサルト強襲科。

自由履修で戻ってきたキンジが皆に（良い意味で）囲まれていた。

私の戦妹である間宮あかりもキンジに憧れの視線を送っていた。

あかりは私とキンジが友人レベルで留まっているのを知っている。故にキンジに敵愾心は無いようだ。



以前にも

「キンジ先輩に矢の投擲を教わったんですけど、凄く参考になったんですよ！ 今度、射撃も教わる事になったんですよ！」

と、嬉しそうに話していたし。

射撃は正直、私よりもキンジの方が教えるのは向いてるだろう。

指導を私一人で行うよりかは、遥かに質は高くなる。

「つーわけで編入生が一人増える。編入生挨拶しろ」

何の事前説明も無しでいきなり話を切り出す蘭豹。

フツーなら戸惑うだろうが、ここは武偵校。

「自分でそんなくらい調べろや」

つまり、そういうことなのである。

「はい。姫神<sup>ひめがみ</sup>結衣<sup>ゆい</sup>といます。宜しくお願ひします」

蘭豹の指示で姫神さんは自己紹介をした。

「じゃあ、誰かと戦って貰おか。水無瀬、お前相手やれ。負けたら承知せえへんで」

蘭豹は予告通り私を指名した。

「了解。姫神さんだっけ？ この戦闘の希望条件とかあったりする？」

指名を受けた私達は闘技場に登壇する。

私はこの闘いに条件を付けるかどうかを尋ねた。

「結衣でいいよ。じゃあ、銃の使用は禁止。刀剣のみの使用で。能力の使用はありで」

姫神さ……結衣は銃の使用を禁止し、それ以外はアリという条件を出した。

「わかったわ」

私はそれを了承する。

「あと、水無瀬さん。本気で来てよね。じゃないと軽く死んじやうから」

おーおー、そんな事言われるとはねえ……

「私の事は風優で良いよ。後悔しても知らないからね？」

結衣に私を名前呼びにする様に求める。

そして、結衣の挑発を挑発で返す。

「私の事を軽く見てるんだな。人間の小娘風情が」

いきなり結衣の口調が変わった。

いや、主人格が変わったと言うべきか。

そして見た目も茶髪・の碧瞳だったのが、翡翠色の髪・紅い眼に変化していた。

「成程。これは私の出番よね、 凧優」

今日は精神体の瑠璃が納得の表情をしていた。

「そうみたいね。 瑠璃」

「(。 凧。 ) ヅ リョーカイ!! 凧優。 任せて!」

「タロットは使わないから」

「早めにケリ付けろって事ね……無茶を言うね」

「それはお互い様……でしょ?」

「そうだったね……。で、どうすんの?」

「何が」

「何が……つて段階だよ」

「ああ……『第4』で」

「《それでもって主人格が私ね……》」

暫くして凧優の見た目が変わる。

先ず、銀色の髪は瑠璃色へと変わる。

そして、長さもロングヘアになり、鬘を彷彿させるヘアスタイルになっっていた。

紅い眼は唐棣色へと変化していた。

「久しぶりだね。 翡翠。 何年ぶりかな」

「……!? その声……瑠璃姉様なのですか?」

「そ。 正真正銘の瑠璃だけど?」

「ええ、知り合い……? 瑠璃」

「私の眷属で昔馴染みって奴よ。 凧優」

「《そうなんだ……》」

「《あれが翡翠の話してたお姉様なの?》」

「ああ。そうだ、結衣。まさかこんな形で再開できるとは思ってもみなかったがな」

「《ふーん、そっかあ……》」

意外な所で再会を果たした瑠璃と翡翠は久々の再会に感傷に浸る。

しかし、それを問屋が卸さなかった。

「おい、さっさと始めろや」

場外からの野次が入ったのだ。

無論、その声の主は決まっている。

蘭豹である。

「……まったく、蘭豹ってば、人が感動の再会だっていうのに」

「ホントに無粋な人間ですね」

「仕方ないでしょ。だって蘭豹だし。まあ始めようか。翡翠」

「そうですね。瑠璃」

会話の直後、フィールドに静寂が訪れる。

そして互いの構えた刀が切り結ぶ音がフィールドに鳴り響く。

「へえ、やるじゃん。翡翠」

「当然です。研鑽はしてますからねっ」

斬りつけ、カウンター返し。そういった行動が続き、2人の攻防は拮抗していた。

が、それは只の人間からすれば次元が違う。

目で追う事も困難な状態なのだ。

故に生徒たちは呆気にとられていた。

流石のアリアも呆気にとられていた。

が、一人ウズウズしている人物がいた。

言うまでもなく、蘭豹である。

「もう、我慢できん。ウチも混ぜろ」

そう言っただけでアリアに持っていたタイマーを強引に投げ渡し斬馬刀を振り上げて上からの奇襲。

「(・皿・) チツやっぱりこうなったか!」

瑠璃は腰のもう一つの刀を抜き、二つの刀を交差させて蘭豹の一撃を防ぐ。

そして遠くへ弾き飛ばした。

が、蘭豹は空中で体勢を変えて吹き飛ばされた衝撃を推進力に変えて斬りかかる。

それを寸前まで引きつけてから跳躍で躲す。

そして蘭豹の頸に蹴りを叩き込んだ。

「やっぱ、やるやんけ。三鳴妹オ!!」

首を鳴らしながら獰猛な笑みを見せ、叫ぶ蘭豹。

「それはどうも。蘭豹先生、気をつけた方が良いでしょう?」

「……どおいう意味や」

「意味は……身を持って知った方がよろしいですよ?」

瑠璃の言葉の直後に能力で生成した焰の剣が襲いかかる。

その技を放ったのは翡翠。

そして狙いは……蘭豹と瑠璃。

「ウチを舐めんじゃねえええ!!」

蘭豹は斬馬刀で焰の剣を斬り捨てようとした。

「……ツちい……アジな真似してくれるやんけえ……」

だが、焰の剣は蘭豹の振りかざした斬馬刀が触れた瞬間に爆発する。

そして、その爆風は蘭豹を軽々と吹き飛ばした。

「厄介な技を……」

それを見た瑠璃は舌打ちをし、そう吐き捨てた。

「どうです……、姉様? この『フラミウム・グラディウム・アトク・ヴェルサティレムまわる焰の剣』の威力は。

さあ……存分にその威力をその身をもって体感してください!」

翡翠の背後に現れた魔法陣から焰の剣が大量に生成され、瑠璃に襲いかかった。

「だったら……。コレで相手奉る。『エンシス・エクス・シヨナーソードエクス・シヨナーソード』!!」

瑠璃は手に持っていた刀を鞘に戻す。

そして瞬時に両手に能力で長刀を生成し、襲いかかる焰の剣を斬りながら突貫する。

瑠璃の刀に触れた焰の剣は蒸発し消滅した。

それは何故か。

理由は『エクスキューションナーソード』の効果にある。

その効果とは、触れたものを強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させる事。

物質によつては効果を受け付けないものも存在する。

気体への相転移は「蒸発」を意味し、効果範囲に強大な破壊をもたらしてあらゆるものが消し飛ぶのだ。

更に、相転移した物質は大量の融解熱、気化熱を吸収することで周囲の温度を大幅に下げて

相転移を回避しても低温に曝すという二段構えの効果もあるのだ。

瑠璃は敢えて焰の剣に触れて爆風を発生させる。

発生した爆風の勢いを利用し、跳躍する瑠璃。

そして上空から翡翠に斬りかかる。

「甘いですよ!!」『影布 七 重 対 物 障 壁』!!」

翡翠は無数の影を変換させた帯状の武器を重ねて相手の物理&魔法攻撃を防ぐ盾を展開する。

瑠璃の攻撃はその障壁に阻まれてしまった。

「だったら……これです……」

瑠璃は展開していた『エクスキューションナーソード』を解除し、

次なる一手を放とうとした。

が、復活の蘭豹に阻まれた。

この好機を逃さない翡翠は次なる一手を繰り出した。

「剣風華爆焰壁!」

炎を纏わせた刀を払う。

放たれた爆焰は瑠璃と蘭豹に襲いかかる。

蘭豹は跳躍で避けようとする。

……が、爆焰の威力が強過ぎるゆえに蘭豹の脚に掠る。

それにより、蘭豹は体勢を崩されて墜ちてしまった。

「終わりなく白き九天!!」

瑠璃は巨大な雷をまとった氷の竜巻を発生させる。

竜巻は、周囲に氷のイバラを伸ばして周囲を凍結させつつも爆焰と

ぶつかり合う。

拮抗した状態が続き、互いに威力が弱っていく。

その状態が暫く続いた後、氷の竜巻と爆焰は相殺され消滅した。

その時、アリアの持っていたタイマーのブザーが鳴る。

時間切れである。

3人は刀剣を鞘に戻し、模擬戦は終了した。

尚、蘭豹がそれを無視して第2R開始……

と、思いきや霧島葵きりしまあおいによって捕えられた事があったのは余談である。

私と結衣は元の姿に戻る。

「お疲れ様、結衣。いい戦いだっただね」

そう言っつて私は結衣に手を差し出す。

「え、っ……っ？」

私が手を差し出した途端、泣き出す結衣。

私は訳がわかんないので戸惑っていた。

それは周りも同様だった。

「取り敢えず、風優（水無瀬）が悪いんじゃない？」

という空気が流れ出す始末である。

「え、えーと、どうしたの、結衣？」

心当たりが皆無な私は結衣に尋ねた。

『『どうしたの？』じゃないよ！ ミナ！ ずっと会いたかったんだからあつ！ 連絡も一切寄越さないしさ!!』

泣きながらそう訴えるは結衣。

「え、あつ………ゴメン。………待って」

「ふえ………？」

「結衣、今私の事『ミナ』って呼ばなかった……？」

なーんか、引つかかるんだけど。

さつきから見覚えあんだよなあ………。

誰だっけなあ………。

「うん、呼んだよ？ だつて、ミナはミナじゃん」

「うん、呼んだよ？ だつて、ミナはミナじゃん」

「……………」

結衣の答えに固まる私。

私の事を「ミナ」って呼ぶのは知り合い……しかもイ・ウーメンバ  
ーで該当者は1名。

イ・ウー研鑽派ダイオ・リノマド・『紅蓮の魔女』姫神結衣

アイツしか居ない。

「もしかして……………『ヒメ』なの……………?」

恐る恐るその該当者の渾名を口にする私。

「うん、そうだよ……………もしかして、全然気づいてなかったの?」

「あ、うん……………ゴメン。他人の空似だと思ってた」

気不味いけど、それを堪えて正直に言った。

「ミナ、酷すぎるう! 号(十一十一)泣この仕打ちはあんまりだ  
よおおおおお!!!」

結衣、ギャン泣きである。

……………私、もしかしくなくとも地雷踏んだ? 特大級の。

「……………だろうな」

何時の間にか実体化し花梨の姿になった瑠璃が呆れた表情を見せ  
ていた。

「あ……………これはしばらく泣き止まねえパターンだわ……………」

翡翠色のロングヘアをサイドテールにした紅い瞳の女子生徒が  
嘆息混じりに呟いた。

「あつ……………翡翠、貴女も実体化出来るんだ……………」

何か気付いた花梨が女子生徒に話しかける。

「はい。この姿の時は『椎名翠しいなみどり』です。『翠』とお呼びください。姉様」

「私のこの姿の時の名前は『三嶋花梨』。フツーに『花梨』と呼ばばい  
いから。あと、敬語も要らないから。色々と誤解されるし」

「わかりませ……………解ったわ。花梨」

花梨と翠の会話は弾んでいた。

花梨、良かったね。友達が出来て。

「でせ……………結衣だっけ。翠、何とかできないの?」

「無理……………かな。あそこまで泣かれると匙投げるレベル」

「そっか……じゃあ風優に頑張ってもらおうしか無いんだ……」

「そうね。それしかなさそう」

「……だってさ。1人で頑張ってるね！ 風優」

「花梨……なんで……私1人なの!？」

「だって、風優の自業自得じゃん。それに勝手に私をボツチ扱いした罰だよ!!」

「え……？ ボツチ……でしょ？」

「違うわい!! 酷いな!? 私だって友達位いるからね!？」

何時の間にか花梨と口論になる私。

「ぐすっ……ひぐっ……あのき……私……何時まで放置なの？」

結衣が自分で泣き止み、言った言葉に私達は押し黙る。

「……あ」

そして私・花梨・翠は何かを思い出したかの様に揃って発言する。

「な、何……?？」

「「お前のこと、すっかり忘れてたわ」」

結衣の質問に3人は同時に衝撃の答えを言い放った。

「ウワアア……。 (。・旦。)。 ——ン！ 何、コ

イツ等!! 超酷いんだけどおおおお!!」

その答えに再び大号泣の結衣。

周囲の……あかりからも私に対する視線は痛かった。

正直、私がギャン泣きしたいくらいな心情である。

それを必死に堪えて私はこの後、30分くらいかけてヒメを慰めた。

そして今までで経験したこと無いくらいにかなり謝り倒したのであった。

続くんだよ。



## 第011弾 最短最速バスジャック解決法（真似はオススメできない）★

翌日、私とキンジと結衣は朝食を摂っていた。

第3男子寮のキンジの部屋で。

結衣は私と同じ部屋を希望した。

その結果、私と同様に女子寮新棟が完成するまで、キンジの部屋に暮らす事となったのであった。

それを知ったキンジは OTL 状態になっていた。もう諦めろ（笑）

「そういえば、キンジって今日からバス通なんですよ？時間大丈夫なの？」

「え、まだ余裕あると思うんだが……」

キンジは自身の腕時計を見て言う。

「え、何言ってるの？もう出ないとフツーに間に合わないと思うんだけど」

私は自分の腕時計を見て言う。

「今の時刻は……？」

キンジが恐る恐る現在時刻を尋ねる。

「7時52分」

「んな、マジかよー！」

私が答えるとキンジは慌てて飛び出していった。

「で、私達は何で行くの？」

「そりゃ、雨だし車でしょ」

「免許持ってんの……？」

「当たり前でしょ」

結衣の発言に呆れる私。

持ってなかったら「車」っていう答え出ないんだけど。

◆◻◆\*:.:. ◆◻\*:.:. \*:.:. ◆

「ミナ、ケータイ鳴ってる」

結衣の指摘で私は通話に出る。

相手はアリアだった。

「もしもし？アリア、どうしたの？」

「風優、今どこ？」

「え、まだ寮だけど？」

「今すぐC装備で女子寮の屋上！いいわね？」

切羽詰まっている様子のアリア。

『C装備』……………強襲科の生徒が所謂、『出入り』に使う装備だ。

「……………事件か」

「ええ」

私の言葉に肯定するアリア。

「わかった。今すぐ向かう」

私が返事を返すと通話は切れた。

「どうしたん？ミナ」

結衣が先程の通話内容を尋ねた。

「事件だつてよ。ヒメ、瞬間移動使えるよね？」

「え、大丈夫だよ。粒子そんなに飛んでないし」

「じゃあ、ちよいとお願い」

「あいあいさー……………で、何処なの？場所は」

「第一女子寮の屋上」

「りょーかい」

私は結衣に事件だと言うことを伝える。

その後、結衣に第一女子寮までの瞬間移動を頼んだ。

まあ、私も瞬間移動は使える。

しかし、何が起こるか不明なので此処は温存しておこう。

私の頼みを了承した結衣は瞬間移動を発動させる。

直後、2人の姿が一瞬にして消えた。

行き先は無論、第一女子寮屋上である。

なお、花梨は爆睡中だったので放置である。

「お待たせ、アリア」

結衣の瞬間移動で女子寮の屋上に到着した私達。

そこには既にアリアと狙撃科スナイプの麒麟児の異名を持つレキがそこにいた。

「早っ！どうやって来たのよ。確かにあたしは『今すぐ』とは言ったけど………」

あまりの私達の到着の早さに驚愕するアリア。

おそらくは瞬間移動自体、初見なのだろう。

この瞬間移動自体、結構燃費が悪い。

数回………3回位の発動で大体の超値はスタミナ切れを起こし、使い物にならなくなる。

故に瞬間移動を使用する超値は世界に片手で数える程しか存在しない。

まあ、私と結衣の場合、結構な頻度で使っている故の慣れなのだろう。

瞬間移動は燃費良く連発も可能だ。

私達の場合、花梨と翠………瑠璃神と翡翠の恩恵が大きいのだが。

「え、私の瞬間移動で」

結衣はアツサリ答えた。

「そ、そう………。まあいいわ」

アリアは何かを察したのか、それ以上の言及はしなかった。

アリアの勘が何かを告げたのだろう。

アリアよ、その判断は正しい。

結衣に言及してたら事件が一向に解決できずに任務失敗だろう。

「で、どんな事件？」

「バスジャックよ。」

私が事件の内容を尋ねるとアリアから「バスジャック」と回答が帰ってきた。

「バスジャックか……。って事はまた武偵殺し絡みなのね」「そうよ」

私の質問に肯定するアリア。

そうか……『武偵殺し』ねえ……また動き出しやがったのか。私の個人的な犯人の目星は大方付いている。

だが、狙いが解らん。

去年の冬のシージャックはカナ姉・・・金一さんだったんだけど。その弟のキンジ・・・という線は考えにくい。

だとすれば・・・アリアか・・・？

アリアとなれば、狙いにする理由が何処かしらあるはずだ。

それを推測しようにも情報が足りない。

確証を得るのに・・・そのウラが取れば問題はない。

そのウラを取るのもってこいの術式がある。

だけど、その術式を対象者に仕込むのに欠点がある。

どうにかして仕込まねばな・・・。

私がそう考えているとバスジャック制圧の人員が増えた。

その人物とは・・・なんと、キンジだった。

どうやら、あの後、ダツシユでバス停に向かったものの、タツチの差で間に合わなかったらしい。

そして、遅刻上等で徒歩で向かおうとした時にアリアから連絡が入ったらしい。

急いで来たものの、メンバーの中では到着が遅かったので、キンジはアリアに怒られていた。

キンジ・・・哀れな男。

それを結衣は不機嫌そうに見ていた。

まさか・・・ねえ？

結衣がキンジに恋慕を抱いていることは・・・多分ないだろう。うん。

・・・。。。

いや、あったわ。

マジこれ、結衣の奴アリアに嫉妬してんじゃねえかよ。

恋慕抱いてんじゃねえか。

・・・あ。どうしよう。

こうなると、問題発生じゃねえか。

あの武装巫女・・・白雪だ。

彼女のことだ。絶対に殴りこみされる・・・。

そうならそうならただ。

寮の敷金の問題になる前に凍らせておくか（マジで）。

「風優……？<sup>ブリーフィング</sup>状況説明するわよ」

「あっ……ゴメン。始めて」

「解ったわ。先ず、今から解決するのはバスジャックよ」

「——バス？」

「乗っ取られたのは武偵高の通学バスよ。風優達のマンションの前に7時58分に停留したハズのヤツ」

キンジはそれを聞いて驚愕の表情だった。

それは無理もない。

何せ、自分が乗るはずだったバスが乗っ取られたんだから。

そして、そのバスに武偵高の生徒がすし詰めに乗っている事も。

幸か不幸か……。

そのバスに武藤も乗ってるんだよねえ……。

見知った気配がいてビツクリなんだが。

「——犯人は、車内に居るのか」

「それはわk「居ないわね。バスに爆弾仕掛けられてるわね」……風優？」

キンジの問いにアリアが答えようとするのに被せる様に断言する私。

「風優、アンタ解るの？」

「見えないけど、大体は見知った気配数名と見知らぬ不穏な物が床下にあるって事は感じるわね。見知らぬ人の気配は感じないわね」

「ミナ……風優が言うんだつたら間違いないね」

「姫神……だっけか。どうしてそんなことが言えるんだ？」

『『結衣』でいいよ。キンジ。風優の気配察知は人外の域に達していて大体的中してるから」

「成程ねえ……やるじゃない、風優。……で風優はどう思ってるわけ？」

「ま……この手口は以前のチャリジャックと同一犯でしょうね。アリアもそう思ってるんでしょ？」

「ええ。ヤツ——武偵殺しは毎回、乗り物に『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪って、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作に使う電波があるの。それが——」

「それが今回キヤッチしたのとキンジのチャリジャケットと同一だった』って訳ね」

「そうよ」

「おい、待て。アリア、凧優。あの時の犯人：『武偵殺し』は逮捕されたハズだぞ」

「それは真犯人じゃないわ。キンジ」

「アリア……？何を言って……」

「あんな狡猾な手を使う奴がアツサリ捕まる訳が無い。あの時捕まったのは替え玉よ」

「『替え玉』って……凧優まで何を言ってるんだよ。どういう事だ」

「キンジ……それは後にして。どうやら御迎えが来たみたいだから」

「結衣……？『御迎え』って何だよ」

「コレだよ」

キンジの言及を止めた結衣が背後を向く。

すると、タイミングよく青色の回転灯を付けた車輻科コのシングルローター・ヘリが女子寮の屋上に降下してきていた。

私達は直様にヘリに乗り込む。

キンジも納得いかない表情だったが、その後を追うようにヘリに乗り込んだ。

ヘリは私たちが乗り込んだのを確認した後、女子寮の屋上から飛び立った。

ヘリでの移動中に今回の事件の状況整理を行う。

インカムに入ってくる通信科コネットからの話によると、武偵高のバスの車種はいすゞ・エルガミオ。

武藤達を7時58分に第三男子寮前で乗せた後、どこの停留場前にも停まらず、暴走を始めたらしい。

その後、車内に居合わせた生徒達からバスジャケットされたとの緊急連絡が入った。

定員オーバーの60人を乗せたバスは学園島を一週した後に青海南橋を渡り、台場に入ったらしい。

警視庁と東京武偵局は動いているものの、到着には時間がかかるらしい。

「どうやら私達が一番乗りのようだ。」

「ねえ、美咲。バスの中にいる武藤に通信できるかしら？」

『えっ……はい。可能です』

「ちよつと繋げてくれるかしら？」

『了解です』

私は状況説明をしてくれた通信科の生徒：中空知美咲にバスジャックされた車内に居る友人の武藤剛気に通信を繋ぐように依頼する。

私の依頼に美咲は応じ、剛気と通信が繋がる。

「剛気……ちよつと良いかしら？」

『その声……まさか風優か!?!』

「ええ。その通りよ。アンタ、バスの中に居るんでしょ？生徒達に指示をお願いします」

『指示って……何をだよ』

「簡単な事よ。人が4人活動できるスペースを空けるだけよ」

『窓側とか指定は無いよな?』

「ええ。何処でも良いわ」

『解った。今すぐ対処するぜ』

「頼むわ」

私は剛気との通信を終了するとアリアとキンジ、結衣、レキに指示を行う。

「アリア、キンジ。高所からのダイブは問題ないわよね？」

「それは……問題ないけど、何をする気なの、風優」

「俺も問題ないが……何をする気なんだ。風優」

「何って……最速でバスの中に入るのであるよ。……結衣」

「りよーかい。私は準備できてるよ」

「レキ、貴女はへりに残ってバックアップをお願いします」

「解りました」

アリアとキンジが疑問を口にし、結衣とレキは私の指示に了承した。

アリアとキンジには悪いが、説明している時間はない。

「風優・・・私がキンジを連れて行けば良いの？」

「ええ。私がアリアを連れて行くから。結衣・・・バスの座標リンク大丈夫よね？」

「うん。問題ないよ、風優。行こっか」

「ええ。そうね」

私はアリアを、結衣はキンジをお姫様抱っこで抱えて、開け放たれたヘリのドアの前に立つ。

「ちよつと、何をする気なの、二人共!?!」

「そうだ。一体何をする気なんだよ!?!」

アリアとキンジはワケが解らず、騒いでいた。

「悪いけど、説明している時間は無いから実行させて貰うわ」

「あと、二人共あんまり喋らないでね。舌噛むし。それに手を離すと死んじゃうから」

「えっ・・・」

「行くよ。結衣」

「OK。風優」

アリアとキンジの返事を待たずに私と結衣はヘリから飛び降りた。

勿論、パラシュートは・・・無い。

あつても邪魔だからな。

落下する途中で私と結衣は瞬間移動を発動させた。

ヘリからでも出来なくてもないが、屋外の方が座標がブレないのだ。

私と結衣の姿が光に包まれて消えた。

「はい。到着つと」

私と結衣はハイジャックされたバスの車内に転移した。

予め剛気に指示しておいた空白のペースにアリアとキンジを降ろした。



「まさか・・・こんな突入方法とは思ってもなかった・・・」  
「流星のアタシでも同感だわ・・・」

キンジとアリアはまさかの常識を超えた突入方法にげんなりしていた。

これが「普通の思考」というやつなのだろうか。

「え、だってこれが最短最速の突入方法じゃない」

私はきよとんとした表情で言う。

うんうん。と賛同するヒメ。

「・・・」

キンジとアリアは限度を超えたセオリーの行方不明さに無言だった。

「さて・・・と。始めるか」

私は床に手を当て詳細状況の把握を開始する。

「な、何やってるの、風優!？」

アリアは私の行動に異を唱えたが、結衣がそれを制す。

「大丈夫。ミナは接触感應能力使っているだけだから」

「サイコメトリー接触感應能力?」

「そ、触れたものの情報を読み取ることができるの」

「まず、爆弾は車体の下にある。カジンスキーβ型のプラスチック爆弾で炸薬容積は3500cc?ってところね」

私がこのバスに仕掛けられた爆弾の情報を読み取る。

／( ^ o ^ )＼ナンテコツタイ。こんな・・・バスどころか鉄道

車両が吹っ飛ぶ威力じゃないの。

「ねえ、結衣、アタシを爆弾の近くに転移して。解除を試みてみるわ」

アリアが結衣に提案する。

「わかった。無茶しないでよ」

結衣は了承し、アリアを爆弾の近く(バスの真下)に転移させた。

結衣の口から発せられる言葉として違和感があったのは多分気のせいだ。

その直後だった。

ドンツ!と私達の乗ったバスに衝撃が襲った。

先程までバスの後ろを走っていたオープンカーに追突された。その衝撃に転んでしまう私達。

「アリア……!?大丈夫!?!」

『……………』

応答が……無い。

私は瞬間移動でアリアをバスの中に転移させた。

アリアは先程の一件で額に切り傷が出来て、出血し、意識を失っていた。

なので、私は能力を使ってアリアの治療を行う。

今の状態だと完璧に治癒するのは難しい。

まあ……痕は残るだろうが、大丈夫なはずだ。

「……………?!」

アリアの治療中のその時、私は何か……嫌な予感がした。

「……………?どうしたの、凧優」

私の行動を不審に思った結衣が尋ねる。

「結衣……障壁を今すぐにこのバスの周囲に展開。そして……総員、伏せろお!!」

私は怒鳴るように指示を飛ばす。

ウシブラエ・セブテンクレクス・バリエース・アンティイコルポラリス  
「影布 七 重 対物 障 壁 !!!」

私の指示で結衣が影で作られた障壁がバスの周囲に展開された直後、オープンカー……ルノー・スポール・スパイダーに装着されたUZIが火を吹いた。

無数の銃弾は大半が障壁に防がれるも、障壁を逃れた銃弾によってバスの窓ガラスは粉碎された。

その直後、バスが妙な揺れ方をする。

運転席を見ると、運転手がハンドルにもたれかかるように倒れていた。

銃弾は運悪く、バスの運転手の肩に被弾していた。

運転の為に身体を下げられなかったのか……。

運転手のいないバスは左車線に大きくはみ出して避けた対向車がガードレールにぶつかって火花を散らす。

それに輪をかけて減速を始めている。

マズイぞ……これは……。

「有明コロシアムの 角を 右折 しやがれ DEATH」

更に輪をかけてきつきの衝撃で転んだ女子生徒の携帯からボカロの合成音声聞こえる。

語尾のイントネーションが『DEATH』に聞こえたのは当てつけか……？

私はキンジと男子生徒にバスの運転手を座席に寝かせるように指示する。

「結衣、能力で傷の治癒……できるよね？」

「う、うん……。出来るけど……」

「じゃあ、運転手さんの治癒頼むわ。あと、障壁の維持も」

「りよ……了解」

「剛気、運転変わって。アイツの指示通りの道で走ると減速させないで。絶対」

「い、いいけどよ！オレ、こないだ改造車がバレて、あと1点しか違反できないんだぞ！」

「それ、自業自得でしょうが！んなこと言ってる場合じゃないでしょ」「うぐっ」

「それと、これ……装備しておいて」

私は自分の装備していたC装備を脱いで剛気に投げ渡し、防弾制服姿になった。

「お、おい！何で脱ぐんだよ!?!」

「いいの、キンジ。こっちの方が動き易いし。キンジ、アリアと結衣のサポート宜しく」

「あ、ああ……」

私は瞬間移動を使い、バスに追走しているルノーの運転席に移した。

ルノーの運転席に移した私は先ず、遠隔操作の制御チップの位置を探る。

そして、最近練習中の電気系統の能力で制御チップの上書きを行

う。

上書きが終了し、ルノーが私の制御下に置かれた。

取り敢えず、通常の手動運転にセットして私はルノーを運転する。その時だ。ルノーの横に・・・ベスパがいた。

通常では有り得ないほどのスピードなので改造モノだろう。

更に運転手が居ないので、自動で遠隔操作されているのだろう。

そして・・・ベスパにセットされたUZIが・・・火を吹いた。

私はルノーを運転し、銃弾の雨を回避する。

しかし、このまま回避するだけじゃ埒があかない。

なので、私はルノーを『自動操縦』に切り替える。

何気にこのルノーに搭載されたAIチップは高性能だった。

故に『最適なコース』で回避しつつ、走行できるっぽい。

どうやら、ベスパに搭載された物よりも、こっちが高性能らしい。

カンペキにベスパから放たれる銃弾の雨を被弾ゼロで回避していた。

私は運転席の上に立ち、6ウニカとトーラス ジャツジ M513

ジャツジマグナムをホルスターから取り出して、UZIとベスパの

制御チップを狙って、発砲。

迫り来る銃弾を銃撃<sup>ピリヤード</sup>ちで弾き、HITさせていく。

HITしたベスパは制御権が消滅し、転倒して壁にぶつかって爆裂

霧散。

次々とベスパを爆裂させていく私。

しかし、それも順調にはいかなかった。

なんと、第2波でガトリング砲付きのドローンが襲撃してきたではないか。

ギリギリで回避するルノー。

しかし、隙がないのと・・・射程が・・・足りない。

このままではジリ貧だ。

そう思った時だ。

『風優、大丈夫なの!?!』

通信が入った相手は・・・アリアだ。

「アリア!? アンタの方こそ大丈夫なの!？」

『あたしは大丈夫よ。今から風優の援護に入るわ!』

アリアからの提案……。

これはまたとないタイミングだ。

「解った。じゃあ、今から私と交換でルノーに乗ってベスパを撃墜して頂戴」

『解ったわ……って、運転しながら!? 火力負けするわよ!』

「運転は自動運転だし、問題ないわ」

『解ったわ。……で、風優はどうするの?』

「私? 私は……バスの上に乗ってドローンの撃墜をするわ」

『ドローン!? 何でそんな物が!』

「さあ? 大方、私を始末するためでしょ?」

『そう……』

「ああ……あとC装備は脱いだほうが良いわね」

『何ですよ!』

「だって……動きにくいじゃないアレ」

『まあ……アドバイスとして受け取っておくわ』

「よし……10秒後に交換するわよ?」

『解ったわ。風優、ベスパの狙いどころは?』

「取り付けのUZIと外付けのでかい制御チップ」

『ふうん……了解よ』

通信が切れる。

私は瞬間移動を発動させ、アリアをルノーの運転席に、そして自身をバスの屋根に転移させる。

バスの屋根上で足元に能力を発動させる。

こうすることで、落下は防げるだろう。

ヤクラテイオ・グランデニス  
「氷 槍 弾 雨!!」

私は能力によって周囲に展開させた大量の氷片の槍を一気に降らせて攻撃する。

サキタ・マギカ  
魔法の矢よりも威力は強力なのでこちらを選択した。

この技には上から下へしか降らして攻撃することしかできないと

いう欠点が存在する。

だが、今回は展開する始点をドローンの上に設定している。  
なお、自動追尾も可能なのである。

つまりは……だ。

そう……回避される事なくドローンを粉碎する事が出来るのだ。

私は迫り来るドローンの群れを片っ端から粒子へと変えていく。

バスはレインボーブリッジに差し掛かっていた。

さて……頃合か。

そろそろ終幕の時間だ。

「レキ……聞こえる？」

『問題ありません』

「バスの下の爆弾の停止スイッチを捕捉できるかしら？」

『可能です』

「そう。だったら合図したらスイッチを狙撃して、爆弾を停止させて」

『解りました。凧優さん、カウントお願いします』

「了解……。five count。5、4、3、2、1……0」

『——私は一発の銃弾——』

レキの声に続いて爆弾に狙撃。

停止スイッチが作動し、爆弾が停止する。

それと同時に私は爆弾を瞬間移動を使い、海上に転移させる。

ニウイス・カリスス  
「氷 爆!!」

私は空気中に氷を瞬時に発生させ、凍気と爆風で攻撃する技を使い、爆弾を破壊した。

海上で綺麗な？花火が打ち上がった。

「よし、これで……」

『一件落着っ！』

それを確認し、通信で歓喜する私と結衣。

その後、バスは停止し、バスジャックは無事解決となった。

その後、事後処理が行われる流れとなり、結衣は一足先に武偵高へ戻った。

ま……無理もない。運転手の治療にかなりの能力を消費したから

疲れたのだろう。

「な、何とかなかったわね……。風優と結衣がいて正解だったわ」

「あ、ああ……。そう……。だな」

アリアと今回、殆ど出番なしのキンジは二人安堵の表情で顔を見合わせていた。

「あ、そうだ……。アイツにメール送ったところ」

私はバイト先に頼まれていた事がある人物に頼むべく、メールを送ったのだった。

Side Out……

Side ???

「(。∩。≡。∩。)??な……。何なんだよ!!これは————っつっつ!!」

あたしは一人、思いつきり絶叫していた。

バスジャックを解決されるのは想定内だ。

寧ろ……。予定通りといっても良いだろう。

しかしだ。

想定外なことが起きた。

キンジが……。遠山キンジがこのバスジャックで殆ど何もして

いないのだ。

アリアと組ませてそこそこの活躍をさせるはずだったのに。

それすら出来ていないのだ。

これではパートナーどころではない。

アリアが、悲劇のヒロイン。

キンジが、主人公……。

そうなるはずだったのに。

このままではモブキャラ一直線ルート確定だ。

そうであっては困る。

なんとしてでもキンジには主人公になって貰わねば。

こうなってしまうてはあたしがその気にさせるしかあるまい。

どんな手段を使っても……。

とは・・・いえだ。

それには障害がある。

風優・・・水無瀬風優の存在だ。

彼奴の事を調べたものの、最低限のことしか出てこなかった。

それに、情報も理路整然としていた。不自然なくらいに。

詳しく調べようともし全然情報が出てこない。

何なんだよ、彼奴は。

それにあの異常な強さ・・・只者じゃない。

あのレベルとならば・・・裏においても相当な実力者なはずだ。

まさか・・・ね。

ふと、そんな思考が頭をよぎる。

あたしの所属する組織、『イ・ウー』

そこには穏健派と過激派、第3勢力が有ったが、今は穏健派と過激

派の2分割となっている。

穏健派は『研鑽派』、過激派は『主戦派』と呼ばれる。

『主戦派』《イグナティス》の党首の名は綾野未海。

そして、『研鑽派』の党首の名は・・・水無瀬風優。

彼女は『氷天の魔女』の二つ名を持つ氷系の能力者だ。

その実力は凄まじく、イ・ウー内でのNo.2の片割れと謂われて  
いる。

最初はあたしは同姓同名の他人かと思っていた。

だが、前回と今回の無双劇を見てそうは思えなくなっていた。

まさか・・・同一人物なのか・・・？

だとしたら、あたしはとんでもない人物を敵に回した事になる。

確実に風優は介入してくる。

そして既にあたしの事も目星は付けているだろう。

そうなれば・・・確実にあたしと対峙する事になる。

そうになったら・・・間違い無く勝ち目は・・・無い。

ああ・・・もう。あの時、ジャンヌ達に啖呵切ったのは間違いだっ  
た。

負ければ・・・嘲笑されるだろう。



あのクソ爺共から。

それだけは・・・真つ平御免だ。  
だから・・・全力で抗ってやる。

そう強く決意するあたしだった。

その時だ。あたしのケータイにメールが着信される。

相手は・・・付き合いの深い武偵高の友人だった。

なんでも彼女のバイト先の人手が足りないらしく、ヘルプを頼みた  
いらしい。

まあ・・・気晴らしになるし、ちようどいいだろう。

このまま考えていても気が滅入るし。

そう思ったあたしは友人に「バイトのヘルプOK」と返信するの  
だった。

S i d e | O u t :

続くんだよ。

## 第012弾 バイト中でも、有事の場合は参加する。



主に私とヒメが無双して死傷者1で解決したバスジャックから数日経った日の土曜日。東京武偵高校第3男子寮、キンジの部屋で私達は夕食後の一時を過ごしていた。

キンジとヒメはリビングでバラエティ番組を見ていた。

その最中で結衣はキンジにスキあらば抱きついたりする等の猛アプローチをしてそれをキンジが必死に抵抗する………こーいうパターンが頻繁に起きて——現在進行形で起きている。

キンジと結衣のイチャコラをダイニングでこの前の一連の事件の資料に目を通してしているアリアと、同じく、情報科で舞い込んでくる依頼を片付ける私は「またか……」という視線で2人を見る。

最初の方はちよつとしたイザコザがあったりしたが、なんつーか……何度も見せられたら慣れた。それはアリアも同様である。

キンジは「助ける……！」という視線でこつちを幾度なく見てくるがそれは全無視。

何故なら結衣はああ見えて邪魔者とかには容赦が無い。その地域が消滅するくらいに。

昔、それが実際に起こって建物とその周辺数キロが消滅し更地に成り果て、私が会計監査担当に怒られて賠償請求させられた。

それからというものは胃薬のお世話になりっぱなしになって軽いトラウマになっている。

だから、頑張れ、キンジ。自力で何とかしてね。健闘を祈るわ。私は関わりたくないの。

「ねえ、風優、話があるんだけど………」

アリアに話を振られた私は

「あー、はいはい。じゃあ、私の部屋に移動しましょう？ そっちのほう  
が安全だし」

「………わかったわ」

PCを折り畳み、それを持ってアリアと共に自室に移動した。

この時、認識障害の術式を発動しておく。こんなところを盗撮盗聴されては困るからだ。

「で、話って何？　もしかしなくともその資料のことでしょう？」

「ええ。なんにも武偵殺しに繋がる情報がないじゃない。アンタも含めて使えない奴らね」

私が予想していた通りだった。

アリアは資料の内容に相当ご立腹のご様子。

「ま、そう言いなさんなって。武偵殺しは狡猾な奴だし、表だけの手段で掴めるワケがないじゃない」

『表だけ』……………？　ってどういう意味よ」

私の発言の語句に引つ掛かりを覚えたアリアは質問した。

「まんまの意味だって。この資料は教務科マスターズにも提出するからね。これ以上踏み込んだものは晒すべきじゃない」

「じゃあ、それを風優は掴んでいるの……………？」

「当然。これよ」

そういって、机に置かれたファイルをアリアに渡す。

渡された資料に目を通すアリア。そして表情はというと、驚愕だった。ま、そら当然か。

「……………これって……………アンタ、これをどうやって……………!？」

「言ったでしょ。『裏の手段』だって」

「一体、どういう伝手を……………？」

武偵殺しの核心に踏み込んだ記載が記されている資料を閲覧したアリアは私に資料の情報ソース元を尋ねた。

「……………。まあいいか。アリアに話しても」

「……………何か隠してるの？」

私の含みのある発言にアリアは即座に反応した。

「ねえ、アリア。貴女の母親に罪を被せた元凶であるイ・ウーのメンバーって把握してる？」

「え、いきなり……………？　まあ、大体は把握してるわ」

いきなり振られた事ではあったが即座に答えるアリア。

「その中にタロットカードが由来の二つ名を持つメンバーがいなかった？」

「確かに居たわね。『魔術師』、『愚者』、『隠者』。この3人よね」

アリアは私の問いに自身の記憶の引き出しを手繰り寄せて答える。

「そう。で、そのうちの『魔術師』が私」

「ほ、本当なの……!?!」

「本当よ。嘘じゃないわ」

私のアツサリと告白に対し、アリアは驚愕で目を見開いて言葉を失っていた。

「そうだったの………。じゃあ………」

「ああ、それは無い。だから安心して」

アリアは自らの心に芽生えた猜疑を口にしたが、私はアリアを諭す様に真っ向から否定した。

「私とアリア達が対立すること無いから。アリアの母親の一件に全員が関わっているワケじゃないもの」

「そうなの……?」

「ええ。少なくとも私含めた前述の3人は関わっていないわ。ま、その代替として新人が駆り出されてるけど」

「そう……。良かったわ」

私はサラッと重要事項を暴露しつつ、アリアを安心させる。

仮に私が敵に回ったとしたらデメリットしかない。それこそ、教授の思惑を崩しかねない。

そんな事になれば『研究』等容易く崩壊する。

だから、私はあの時の宣言通りに行動することになっている。

飽くまで私はサポートでその為であればどんな手段でも厭わない。ベストなのはその中でアリアと特にキンジが成長する事だ。

キンジについては私と同じ二つ名持つてる奴みたくはなって欲しくないが。

「風優、ちよつと良い?」

「な、何……?」

アリアの言葉で思考から現実に戻る私。

「念の為に聞くけど、後の2人は一体誰なの? アンタ、知ってるんじゃないよ?」

「二人は同居人よ。そして、もう一人も名前聞けば思い出すんじゃないかしら?」

アリアの問いに私は少しはぐらかせたかのような答え方をした。

「焦らさないで」

「急かさないでつてば。『The Hermit 隠者』がヒメ……姫神結衣、『The Fool 愚者』がアキ……旭野將文」

アリアの剣幕に観念した様に私は答えた。

「あの二人が………。それであんなに強いんだ」

「なんか納得がいく点でもあった?」

「まあ、そんなところね」

私の言葉に肯定したアリアは結衣はともかくアキと面識があるらしい。

「もう切り上げたほうが良さそうね。アリアも明日朝早いんでしょ?」

「あ、そうね。おやすみ、風優」

「うん。おやすみ、アリア」

話しているうちに時間が経過していたらしく、アリアは先程渡した資料を手に私の部屋から退出した。

その直後、メールが入った。……えっと、なにになに?

「明日の人員が不足。誰でもいいから連れてきて。ただしむのーな奴だったら許さん」

あー、店長か。また人手足りなくなったのかい。なんでこうも人手不足ばかりなんよ!! もう1ヶ月連チャンだよ!! つくづく凄い所でバイトしてるな私。

で、店長、誰でも良いのかそうじゃないのかどっちだよ!? あーもーわかりにくいなもー。

誰 誘 お う か な

あ。

理子で良いんじゃない？ アイツ、こーいうの喜びそうだし。それに色々都合も良いからねえ。

よし、そうと決まれば善は急げっ！ 理子にメールだっ！ 私は即座に理子へ明日のバイトに誘うためのメールを送った。

結果は……………一発すんなりあっさり了承だった。嬉しい反面、なんか拍子抜けな感じもした。……………気のせいかな。

翌日、アリアは母親との面会に出掛け、キンジは「ヒマだから」といつてどこかへ。

ま、あの二人は結局一緒になりそうだ。なんだかんだで。

だってあの二人なんだかんだで相性が良さ——「なんか言った？ 風優う？」

「何、人の思考に割り込んで来てるのよ、結衣。それに怖い」  
「……………なんか知らないけど危険な感じしたし」

「気のせいだよ」

「……………だと良いんだけど」

私のあしらいに不満マシマシな結衣。

なんでこんな時だけ勘が鋭いんだよ。普段はバカなのに。

「もう……………ほらさっさと行く。遅れるでしょ？」

「うえ!? もうこんな時間!? 翠ー！ へるぷーみー！」

「くだらない戯言言っていないでさっさと走りなさい」

「(；； 皿、)」

私の指摘に相棒である翠に助力を求め、拒否られて絶望の OTL の後、駆け出していった結衣だった。

なんだ今の茶番。

「言わないほうが身の為なんじゃない？ 風優」

「そうね、色々な意味でそうよね。花梨。久しぶりよね」

「前々回も出てたからね!？」

「新キャラ登場で印象薄いでしょ？」

「酷っ!? まだ私はまえがきにしか出番ないキャラに負けないからっ！」

「誰に言ってるんよ。そしてメメタアだし」

「え、葵ちゃんだけど?」

そんな茶番も余処に私はバイト先に向かい、花梨は部活に向かった。

バイト先「喫茶・Orsa maggiore」。  
Orsa maggioreとはイタリア語で「北斗七星」を意味するらしい。

「……誰に説明してるのさ、なゆなゆ」

「さあ?」

「知らないの!? 誰が説明しろと言ったの?」

「多分、葵?」

「そこであおちーが出てくる不思議」

合流直後にそんなやり取りもあつたりしたりした後、私と理子は朝からフル回転。

驚いた事に理子は結構適応力が高く即座に店長に気に入られ、なんと正式にバイト雇用されることとなった。

あの店長から気に入られるとは凄いな、理子。

だってあの店長、桐ヶ谷瑞穂からよ? あの元イ・ウー所属（正確には休学扱いである。要は私と同じ扱い）で「鬼の会計監査」と恐れられた瑞穂さんからよ?

こんな事、滅多に無いよ? いや、マジで。

まあ、その代わり当の本人……理子は真っ白に燃え尽きていた。

(当然)

顔も「やり遂げたぜ……」的な表情だった。無茶しやがって……。

燃え尽きている理子に私はちよつとした仕込みをする事にした。

いやまさかこうも上手く行くとは思わなかった。これで上手く

いってくれる事を祈るわ……………。色々な意味でね

おっと、兄さんからのメール……………。やつぱりか。

「店長、ちよつと兄からメールがあつたんで出てきますね」

「ふうん……………。それって急ぎなの？」

「ええ、まあ」

「そう…………。じゃあこつち来て」

「…………？ はい」

私が店長に中抜けする事を申し出ると、店長は自分の下に来る様に私に言った。

私が店長の側に行くと、店長は私の眉間にそつと指を置いた。

「liberazione<sup>解放</sup>」

その直後、私の姿が変わつた。第4段階の姿に。でも、主人格は私のみまだ。初めてだな。コレ。

「それは私の力で解放した姿よ。第3段階つてところね。負担も第2段階と同じくらいだし大丈夫だと思うわ」

「ありがとうございます。瑞穂さん」

「お礼は良いのよ。それよりもパートナー助けて来なさい。今日はこのまま直帰でいいから」

「はい。ではいつてきます」

その言葉を残し十八番である瞬間移動でエリアが向かった新宿警察署に向かった。

「兄さん、お待たせ」

「いや、大丈夫だ。それより風優、君の体の負担は大丈夫なのか!？」

「もう、大丈夫よ。これくらい」

「そうか…………ならいいんだ」

到着して直後に心配された。

「ここでシスコン発動すんのかよ…………ヤメロヨ。」

私は軽くあしらい、兄さんは私の言葉で引き下がった。

「で、兄さん状況は」

「言つて、悪い。おそらくだがこの面会は強制的に終了させられるだろうな」



兄さんは溜息混じりに答えた。

「兄さんの名でなんとかできないの？」

「不可能ではないが……それやると目つけられて俺が後々動きにくくなる」

「そっか……」

私の提案を兄さんは苦虫を潰した表情で答え、それを聞いた私は不満顔で答えた。

「だが、抵抗くらいはできるだろ」

提案した兄さんの顔は悪どい顔をしていた。

「抵抗？」

「そうだ。風優がちよつと脅せばいいんだよ」

兄さんがトンデモ無いことを言い出した。

兄さんって公安所属なのによくもまあそういう事を思いつくもんだ。

「うわ、いいの？ 兄さんとは同業みたいな人達なんですよ？」

「構わん。大体アイツ等は元々気に入らなかつたしな」

「そう。なら遠慮なくやらせてもらおうわ」

「ああ」

私の言葉に否定する事もなくG○サインを出す兄さん。

それを聞いた私は扉を開けて面会部屋内に入る。

「アリア………！」

「時間だ！」

興奮するアリアを宥めようとアクリル板に身を乗り出すアリアの母親・神崎かなえさん。

それを管理官が羽交い締めするような形で引っ張り戻し、「あつ」とかなえさんが小さく喘ぐ。

「やめろッ！ ママに乱暴するな！」

アリアはまるで小さな猛獣のように犬歯をむいて、その赤紫色カメリアの目を激昂させてアクリル板に飛びかかった。

だが、アクリル板はその透明さとは裏腹に厚く、固い。当然、少しも歪んだ形跡もなく、アリアを受け付けなかった。

かなえさんはアリアを心配そうな目で見ながら、管理官2人がかりで引き摺られるようにして運ばれて——行かせるわけがないでしょ？ この私がそんなの許すと思ってるのか？

巫山戯んな☆……ちよつとだけ、ちよつとだけ殺気も込めておくか。

「あの、その手を離してくれませんか？（ニツコリ）」

「なんだ、君は。どこから入ってきた？ さっさと退出しなさい」

私の存在に気付いた管理官は私に退出を促した。

「やーなのですよ？ なんで命令されなきゃいけないんですか」

「貴様、おちよくっているのか?!」

管理官の言葉にイラツときた私は殺気を強めた。

「誰が？ 私がか？ 戯言を。何故に格下の雑魚の命令を聞かなきゃいけないのかしら？」

「か、格下だと……?!?」

私の煽りに簡単に激昂する管理官達。おーおー、単純だねえ……。メツチャやりやすいわあ。

「そ、格下。過去に私・水無瀬風優にボッコボコにされた人ですからね」

「水無瀬……………」

「……………」

「……………」

私の苗字を反芻する<sup>雑魚共</sup>管理官達。

「げえ!? 水無瀬風優う!? あの、公安0課・水無瀬祐一郎の妹の!?」

「そう。やっと思い出してくれたかな？ かな？」

「超思い出しました!! 生意気言ってるマジですいませんでしたっ!」

管理官共はその場で土下座した。

「貴方達、ここから即座に失せてくれる？ もう視界に入れたくないし」

「仰せのままに!!」

管理官共は逃げ出すように失せていった。

「……………」

「アリア・キンジ・かなえさんは（。ㇿ。）ポカーンって感じだった。」

そして面会室に管理官と入れ違いに兄さんが入ってきた。

「兄さん、こうなるのわかって私焚きつけたでしょ？ この策士」

「いや？ 結果オーライって感じだが？」

私の指摘にすつとぼける兄さん。

「嘘。私にはこれも想定内に思ってるようにしか思えないけれど？」

「まあ、好きに思えばいいさ」

「じゃあ、そーいうことにしとくわ」

掴みどころない兄さんの答えに釈然としない私は無理矢理に納得した。

「あ、あの先程は助けてくださいってありがとうございます……………」

「はじめまして…………いや、お久しぶり。と言うべきでしょうか、神崎かなえさん」

「え？ もしかして、祐くん？ 久しぶりね」

兄さんに気づいたかなえさんは少し嬉しそうだった。

「え!?! この人知ってるの!?! ママ」

「ええ。この人の母親と幼馴染なのよ。舞花は元気にしてるかしら？」

「はい。御陰様で。今も世界中飛び回ってますよ」

兄さんは母さんの事を答える。

「そう。じゃあそっちは風優ちゃん？ 久しぶりね。5年ぶりかしら？」

「はい。お久しぶりです。かなえさん」

私の事に気づいたかなえさんと挨拶を交わす。

「挨拶はこれくらいにしておいて、少しお話を伺っても宜しいでしょうか？」

「はい」

かなえさんが兄さんの申し出に了承し、兄さんは幾つか質問を出し

た。

それにかねえさんは答えていく。

途中、納得の行かない所があったアリアは兄さんに詰め寄るが、それを私が阻止。

それからしばらくして、兄さんとかねえさんの面会は終了した。

かねえさんは兄さんが元の場所に送るそうだ。かねえさんは席を立った後、振り返って

「キンジさん、凧優ちゃん、娘を……アリアのこと宜しくお願いしますね?」

「はい」

「了解です」

そう私達が返すとかねえさんと兄さんは面会室の奥のクリーム色の扉の向こう側へ消えていった。

「ねえ、帰ろ? アリア、キンジ」

「うん……」

「ああ」

面会室に残された私達は帰ることにした。

新宿警察署を後にして、3人で並んで歩く。

「キンジ、ちよつと先に帰っててくれない?」

「? なんでだ?」

私の提案に怪訝な顔をするキンジ。

「いや、ヒメがもうそろそろ帰ってくるし。ヒメ対策」

「なっ……。人を厄介払いに使うなよ」

「え、部屋が消滅してもいいならこのままでも良いけれど」

「今すぐ帰る」

私の言葉を聞いて青ざめたキンジはダッシュで寮に帰宅した。

「さて……アリア、なんか私に話したい事があるんじゃないの?」

「えっ……。わかるの?」

私の言葉に虚を突かれたアリア。

「まあ……。大体ね」

「そっか……。凧優、ありがとね。ママを助けてくれて」

「別に。感謝されることじゃない。アレは私もムカついたから」  
「それでも良いの」

アリアはそう言って私の方に寄りかかる。

「そっか……」

「ねえ、凧優」

「ん？ どうしたの？」

「絶対、ママを助けよ………ね？」

「ええ。元からそのつもりよ」

アリアの言葉に強く肯定する。

その後、私達はゆっくり帰途に着いた。

余談だが、ヒメ対策の為に全速力で帰宅したキンジは、ギリギリ間に合ったそうなの。

そして、帰宅したヒメにめいいっぱい抱きつかれたそうなの。当然、私達が帰る頃にはげんなりしていた。

続くんだよ。

## 第013弾 魔術師の対峙 ★

Side | Nayu

アリアの母親・かなえさんとの面会から数日が経ち、私はアキと中間報告ついでに通信をしていた。

「……これが今のところ判明してる事ね」

「そうか。風優の予想は的中してたな」

私が報告を終えて、アキの言葉。

確かにその通りだと私も思う。

「リストにもあつて習得技術も一致してたしね」

「でも確実な証拠が無かつたんだろ？」

「まあね。だから前一緒にバイトした時に仕込んだ」

「よく瑞穂のやつに見つからなかつたな」

私の報告にアキは驚愕していた。

瑞穂さんはアキにとつても（――）。  
（――）トラウマーな人物なのだ。

故にこの反応は当然なのである。

「多分黙認でしょ。把握していたみたいだし」

「マジかよ」

瑞穂さんのやり手に戦慄のアキ。

「確証は言うまでもないわ。……でアキはどうなの？」

「サポートだけに限られるだろうな」

「そう……。ちゃんとサポートしてよね」

「んな事、百も承知だったの。しなかったら瑞穂に殺されるわ」

「あー、確かにそうかも」

アキの言葉に納得する私。

確かに粗相したら瑞穂さんに殺される。私も確実に。

「お前はお前でヒメの奴にも気をつけてろよ」

「ああ……結衣ね。アイツもサポート要員にするし問題ないわ」

「だといいんだがな。ほら遠山がいたら強引にも行きそうなんだが」

アキの懸念もごく尤もだ。

間違いなくダダこねる結衣が容易と想像できてしまう。

「まあ……それも有り得るわね。だから瑞穂さんにちよいと頼んだ」

「何を……?!」

アキが私の方策を尋ねた。

「イ・ウー内での同系統能力者の指導の依頼を」

「そら、アイツも断れんわな。瑞穂の頼みを断ったらどうなるかは想像つくだろうしな」

アキは納得といった感じだった。

「でしよ？ 下手に暴走されても困るでしよ？ 唯でさえ不安定なのに」

「まあ……な。暴走時の抑制が厄介だからな。アイツの場合」

アキの言う事は最もだった。

結衣の能力は私の扱う能力形態と酷似している。

だが、適性の違いなのかは不明だがかなりピーキーな代物なのだ。

一度バランスが崩れてしまえばいとも簡単に暴走してしまう。

実際に3年前に暴走を起こしてしまい、メンバー総動員でなんとか抑えたのだ。

その時に施したパトラの封印によって事無きを得ている。

封印が解かれたらあの時以上の惨劇は目に見えている。

「だからアイツをメインで出すわけにはいかない。だからサポート要員」

「それが最善策だな。それで俺が抑制に回れば良いんだな？」

「そうね。察しがよくて助かるわ」

こういう時のアキは頼りなる。

故に幾度なく組むのだろうけど。

「……で、突入方法はどうするんだ？」

「真正面から突っ込むけど……」

アキにそう告げると

「マジか……絶対に妨害されるだろ、それ」

「尤もな指摘を受ける。」

そんなの解っている。ここ数日明らかに私は誰かに監視されてる

しな。

そいつらを誘き出す為の敢えてでもあるからだ。

「解ってるよ。だから予備プランも考えてあるわ。……つつても、これはどっちかって言ったら『潜入』にちかいかもね」

「詳細を教えろ」

「わかった。じゃあー」

私とアキは作戦の詳細を詰めていった。

それから数日が経った今日はアリアがロンドンへ帰国する日。

この日が作戦の決行日でもある。

アリアは今日こそは来るかと思っただが、来なかった。

アリアもアリアでのごたごたがあったっぽいけど、それを私が知る由もない。

そのパートナーであるキンジ。

全ての事実を知ったキンジは「心、此処に在ラズ」的な状態だった。

ま、無理もないか。知ってしまったからな。アリアのこと。

だが、それは私が介入した所で解決できるもんじやない。

これはキンジ自身が解決することだし……ね。

ちゃんと、仕事しろよ？ パートナーなんだから。

そう思ってたなら、キンジは理子からの呼び出しを喰らったようだ。

おそらくは……か。

もう推測でもなく断定できるわ。傍聴でな。

私は単身、愛車を走らせていた。目的地は無論、羽田空港である。

「いや、私も居るんだけど……」

助手席に座る花梨は不服な顔をしていた。

「どうしたのよ？」

「しらばっくれられないで！ サラッと私をハブらないでくださいませか  
ねえ？」

「あー。メンゴメンゴ」

「心が籠ってないっ!!」

そんな他愛の無い会話を交わしていたその時だった。

何者かによる狙撃をFT86の前輪に受ける。



着弾と同時に派手な爆発音と衝撃が発生し、車体を軽く浮かび上がらせる。

「コレは……炸裂弾グレネードの改造モンか……。」

お蔭様で前輪タイヤが吹き飛んで運転不能と来やがった。

「いたた……なんなの、もう。風優、大丈夫？」

「つう……大丈夫、エアバッグ起動したから。ああもう、やってくれるよね遠山潤。干渉は消極的で最小限、って言ってた癖に」

花梨に安否を聞かれ、私は大丈夫、と答えてこの狙撃犯に悪態をついた。

「それは『緋色の研究』の継承者である神崎・H・アリアに対してであつて、あなた達は範疇外です、つと」

「……ご丁寧に、刺客まで用意してるってわけ」

爆風で歪んだドアをこじ開けて脱出した私は、信号機から飛び降りてきた、白髪碧眼の女性を睨み付ける。予想内といえばそうだけど、ウザつたい事この上ない。

「初めまして、水無瀬風優さんと瑠璃神様。……ああ、研鑽派の『魔術師』殿と呼ぶべきでしょうか？」

「……今の私は武偵よ、その名前では呼ばないで欲しいね。それで、あなたは誰？ 『魔術師』の名前を知ってるってことは、イ・ウーの人間でしようけど」

「はい、ボクはイ・ウー主戦派の一人、西儀さいぎ一天音あまねです。水無瀬さんが休学後に入ったので、知らないのも無理はないかと」

「随分簡単にばらすんだね」

瑠璃神となった花梨が目を細めつつ、宿主の私と同じように臨戦態勢となる。

「潤さんから、正体を明かしても別に構わないと言われてますので」

「……やっぱりあいつが関わってるか。じゃあさっきの狙撃もそうだよ、ね！」

喋りながら、私は腕を振るう。

「魔法の射手・連弾・氷の17矢」

手から出現したのは、17本の氷の矢。鋭利な先端は右上——この

状況の元凶である遠山潤がいる屋上に向けて、真っ直ぐ飛んでいく。  
『おーやや、バレてたか。こわいこわい』

軽口を叩きつつ、遠山潤はHK417を掃射。フルオートで放たれた17の弾丸は、迫りくる氷の矢を狙い違うことなく打ち砕く。

盗聴していた私は想定内に事が進み、不敵に笑う。

『ぎーんねん、あたらな——』

リロードしながら喋っていた時、先程砕いた氷が飛んできて、潤の周囲を漂っていた。

ニウイス・カース  
「氷 爆」

魔術式を宣言し、私は笑いつつも視線を潤の方へ向けた。

『……矢はブラフ、本命はこの氷の微粒子ってわけか』

やるねえ。そのつぶやきは、冷気を纏った爆発音にかき消された。

天音と名乗った女性を見つつ、私はビルの屋上——潤がいるだろう場所で爆発が起こるのを確認した。長距離攻撃だから上手くいくか正直不安だったが、あの様子なら問題ないだろう。

「どう、瑠璃？」

「……うん、気配は消えた。詳細は分からないけど、しばらくは動けないはずだよ」

「そっか、それは重畳。さて、西儀さんだっけ？ 狙撃手は潰したんだし、大人しく降伏してくれたら痛い目見なくて済むけど？」

「……ふふっ」

私の警告に対し、天音は着ている和服の袖口に手を当て、含み笑いを漏らす。

「……何笑ってるのさ」

「いえ、大したことでは。一人倒したくらいで有利を確信しているのが、おかしくておかしくて……」

クスクス、と余裕ぶった笑い声をあげる彼女に、私は眉を寄せる。不愉快だが明らかな挑発だし、誘いに乗ってやる気はない。

「へえ、まだ私達に勝てる気での？」

「さあ？ それはどうでしょうね。ただ——」

天音が口元を抑えるのとは反対の手を広げると、真横に『穴』のよ

うなものが出現し、中から身の丈以上の長さを持つ、大鎌が這い出てきた。

「潤さんに『お願い』された以上、ボクに断る権利はありませんし、断る気もありませんから」

大鎌を両手で抱えるように握る彼女の目は本気で、退く気はないようだ。

「……なにあなた、潤に脅されでもしてるの?」

「(瑠璃、一度戻って。あと、第一形態開放準備)」

「へおつけー、あと十秒で準備は整うよ!」

会話で時間を稼ぎつつ、瑠璃との融合準備を進めていく。天音は気付いていないのか、形のいい眉を僅かにしかめ、

「脅す? 潤さんはそんな非効率的なこととはしませんよ。……これは地獄のような状況から救ってくれたあの人への恩返しであり、ボクの意志です。ええ、もし潤さんが命じるなら、この命だろうと喜んで捧げましょう。例え万人が、いえ、潤さんが命の尊さを訴えようと——ボクにとつて、彼の『お願い』は何よりも優先され、幸福なことなんですから」

何の迷いもなく言い切る姿は、狂信者のそれに近いものを感じさせる。

……自分の意志だとしても、遠山潤は人を狂わせてるね。

私は推測が確証に変わった。

「そう。じゃあそのお願いとやらは——達成できないな!」

瑠璃との『心結び』が終わった私は、叫びながら小太刀二刀を構え、突進する。

それに反応して、天音も構えを取るが——その動きは、瑠璃と心結びを行った私に比べ、明らかに遅い。

(もらっ——)

「!?!」

あと一歩というところで、強化された聴覚が左側からの音を感知する。

「ちいっ!」

私は舌打ち混じりに咄嗟に持ち替えた拳銃、マテバオートリボルバーを片手撃ちし、飛んできた7.62mm弾にぶつけて弾く。

「へど、どういうこと!?」

「(瑠璃、状況説明!)」

狼狽した様子の瑠璃を落ち着かせるため、敢えて強めの口調で説明を促すが、

「足を止めるのは、悪手ですね」

「くっ、このー!」

銃撃の間に迫ってきた天音が、上段から鎌を振るってきたので、残った小太刀によって受け流す。

思ったとおり、格闘戦では私の方が遥かに上だが、

「ああもう、鬱陶しい!」

確実に当たる一撃を振るおうとしたその瞬間、今度は真正面、天音の後ろから飛来した弾丸に妨害される。

「へん憂、あいつの気配がそこら中からする! 1、2……9!?! ちょうど私達を囲んでる形!」

「(はあ!? 何あいつ、分身でも出来るわけ!?! 何でもありか!?!)」

「さて、もう隠れる必要はなくなりました。遠慮なくいきますか」

その声と同時に気配が浮かび上がった。

おそらくは気配遮断をやめ、再びHK417を構えたのだろう。

別方向からの分身が、私が放った銃弾を再び叩き落とす。

……あの野郎のこの戦法、ストレス溜まるって中々の評判だったわけ。

「さてさて、本物の俺はどこでしょーか?」

笑いながら、再度HK417から鉛玉が吐き出された。

「何人目で当てられるかな?」

とか思ってるんだろうな。バカジュンの奴は。

上等だ、その誘い乗ってやんよ!!

「この、くたばれ!」

銃弾の方向から位置を割り出し、逃げられないよう氷爆で吹き飛ば

す。これで四人目、確実に潤の分身を減らしているけど――

「はっ！――ぐっ……！」

「また一步届かず、ですね。疲れてきたのでは？」

「言って、ろー！」

天音の一撃を避け、攻撃――しようとしたところで、またも後方からの妨害射撃。集中も途切れてしまい、魔術は霧散してしまう。

「くそ、本当にうざったい……！」

攻撃が命中する瞬間、魔力を集中させて放とうとした瞬間。確実に妨害の狙撃が入り、こちらの手を潰してくる。

ここまで戦っていると、相手の目的も見えてきた。これは私を倒すというより……

「へ風優、ペース落として！このままじゃ保たないよ!？」

「(分かって――ああもう!)」

大鎌による横風の一撃を避けてすぐ、追撃の銃弾。瑠璃に言われたばかりだが、足に超能力を回して大きく跳躍し、距離を取る。ほぼ密着状態からでも正確に私だけを狙って技量は凄まじく、性質が悪い。(ジャンヌの奴、どこが一流には程遠いだ!)

内心でイ・ウーの同期兼弟子を罵倒しつつ、間合いを空けて呼吸を整える。今のところ状況は互角かやや有利だが、消耗を強いられる以上逆転は時間の問題だ。

「は、あ……」

妨害のための狙撃によるストレス、心結びによる消耗、そして――

「――っ!？」

『音』が効いてきましたね」

天音が使っている大鎌から聞こえる、甲高い風のような音の不快感。これが、私の動きを鈍らせる。先程考えたけど、こいつらの狙いは消耗を強いること。だからこそ、短期決戦で決めたいのだが、

「この、ちまちまうざったい……！」

何度目か分からなくなるくらい受けた狙撃での妨害。変わらず続く嫌らしい手口に、思わず苛立ちの声を上げつつ拳銃を構え――

「そうかい。じゃあ一気に決めようか」

その声は、突如後ろから聞こえた。天音から距離を離していた私は、思わず振り返ってしまう。

「へ!? 嘘、気配は減ってない……最初から隠れて……!?!」  
瑠璃が感知したとおり、三步ほど後ろで笑いながらUSPの銃口を向けている潤は、狙撃をしていたどれとも違うものだ。

背後を取られるという致命的な状況――

(……ん?)

だったが、ふと、彼の動きに違和感を抱く。

「じゃあさよな――ふげらっ!?!」

「はっ」

「へへ?」

「――え?」

故に私は回避でなく、振り向く勢いのまま小太刀を振るい――柄がにつくきアンチクショウの鼻っ柱にクリーンヒットした。

心結びで通常より速度の乗った一撃をまともに喰らい、潤は受け身も取れず吹っ飛び、電柱に激突する。潰れたカエルみたいになつたぞ、ナニコレ。ワケわかんないんですけど。

「……潤さん、何やってるんです?」

天音が明らかに演技ではない呆れた様子ながら駆け寄る姿を、私は心結びで昂った動悸を鎮めつつ、推測を口にする。

「……もしかしてあの分身、自分のスペックを割くものだった?」

そう予測を立てる。幾らい・ウー最弱を自称してるからって、さっきの動きは並の武偵かそれ以下の動きだったし。

「へええ……バカなの?」

「(私もそう思う)」

さつきまで焦っていた瑠璃も、間抜けな急展開に困惑している。何この空気。

あの野郎、さてはシリアスブレイカーだったっけ。いや、間違いないわ。

「おおお、鼻骨完全に折れてやがる……」

「……とりあえずティッシュを。潤さん、見せられる顔じゃないです

よ」

「いやそれじゃ治らんから。とりあえず止血用には欲しいけど」

ゴキーン、とやたら痛々しい音を立てて折れ曲がった鼻の位置を自分で元に戻す潤。戻した勢いで余計溢れてきたけど、鼻血。

「うわあ……」

「引くなよ」

「いや引くでしょ。今最高にカッコ悪いけど、あんた」

「格好つけて死ぬくらいなら、多少の恥は許容すべき」

「今のおんたの状態だと、説得力が凄いわね」

女子に介抱されながら鼻血拭つてるとか、間抜けにもほどがある。完全に鼻声だし。

「これ程の有言実行を見た事があるうか。」

遠山潤、ある意味で未恐ろしい奴である。

「へ……あ、風優。周りの分身が消えたよ。多分、治療のために魔力足りないから、戻したんじゃないかな」

「(……自分から有利な状況捨ててない?)」

「へだねえ……バカかな?」

「(頭のいいバカってやつだと思う)」

もう戦う雰囲気じゃなくなり、瑠璃とそんな雑談を交わしていると、やつぱり聴き取れるのか潤はジト目を向けてくる。いや事実でしよ、というか人の会話(心中)を覗くんじゃない。プライバシーの侵害で訴えてやるかな?

「とりあえず、器物損害と傷害罪諸々で逮捕するから、大人しく連行された方が身のためだよ? あと車は弁償してもらうから。慰謝料とか諸々マシマシで」

「弁償の方がガチボイスな件」

「潤さんのせいで不利になりましたけど……どうします? ボクじゃなくて、潤さんのせいで」

「二度言わんでいいわい、知ってるから。目的達成したし、逃亡一択で——え、ちよつと天音さん、何故俺はお米様抱っこされてるんです?」

「潤さんに合わせて逃げるより、魔術込みならこっちの方が速いので」

「事実だけと言われたくなかったなあ」

女子に担がれる男子という、大変間拔けな構図にため息を吐きつつも、抵抗する様子はない潤。コイツにプライドはないのだろうか。

まあ、当然だけどき、

「逃がすと思ってる？ 氷ヤクラーテイオー槍——」

「逃がして欲しいねえ」

足止めをしようとした矢先、抱えられた状態の潤がUSPを向ける。引鉄に掛けた指の動きは分身が消えたためか、先程の比ではない……でも、同時なら問題ない。

グランデニス  
「弾 雨！」

発砲と同時、詠唱を終えると先程の氷の矢より一回り以上も大きい、槍と言えるサイズの氷塊が、二人に向けて猛然と迫る。

進路上の9mmパラベラム弾と氷の槍が対峙し、衝突——した次の瞬間、銃弾から暴力的な光が放たれ、視界を潰してくる。

「うっ!？」

「へうわ、まぶし!？」

反射で目を閉じながら、自分の失敗に齒噛みする。武偵弾は最初に使われていたというのに……!

「それでは、次回の公演をお楽しみに——」

ふざけた言葉の後、銃声。音は一発だったが、空気から感じられる銃弾の数は六発。キンジが言っていた、十八番の速クイックドロウ射か。

視界を潰されながらも小太刀で全弾叩き落としたため無傷だが、逃げるだけの時間は与えてしまった。

「(瑠璃、追うよ——)」

「へううー、まぶしい、まぶしいよお……!？」

「……」

ダメだこりゃ。目を抑えてうずくまってる姿が容易に想像できる瑠璃のセリフに溜息を吐き、心結びを解除する。

「へうー、ようやく普通に見えるようになってきた……風優は大丈夫?」



「平気、咄嗟に庇ったから。追跡は……無理か」

感じられる二つの気配は、随分遠ざかっていた。瞬間移動なら追いつけるかもしれないが、減っている魔力をさらに消耗してしまうし、待ち伏せされているかもしれない以上、リスクは避けるべきだろう。「逃げられちゃったね……それにしても遠山潤、本当にふざけたやつ！」

「でも、少し厄介だ。次は最初から潰す気でいかないと」

瑠璃が憤っている中、私は顎に手を当て先程の戦闘を振り返る。

今回のように消耗を強いられる戦いを避けるには、やはり短期決戦が一番だろう。ダメージは大したことないが、心結びの消耗が思ったより激しく、全力の戦闘は一日は無理だろう。瑠璃も既に眠たそうな気配を感じるし。次からはタロット要るな、こりゃ。

『武偵殺し』の一件、予定変更しないのかな。予備プランの正面からじゃなくて、変装して先に侵入しておいて……

「……つと。ようやく来たか」

遠くから響く、サイレンの音。あれだけ銃声どころか爆発音も響いていたのに、随分な重役出勤である。

「へー、それは……結界、じゃない、かなあ……」

「結界？……ああなるほど、さつき感じてた違和感はそれか。瑠璃、何か痕跡とか……瑠璃？」

「へー……すう……」

……もう寝てるし。相変わらずと寝るのがお早い事だ。

脳内で響く寝息に、私も疲労が蓄積しているのを感じてしまうため眠った瑠璃を羨ましく感じてしまう。

だが、文句も言っていられない。とりあえず警察との面倒な接触を避けるため、私もここから立ち去ろうと――

「……あ」

するも、前輪が吹き飛ばされ、焦げた状態で放置されているFT86を思い出した。

直撃部分は基盤が歪んでいてすぐ直せる状態じゃないし、置いていこうにもナンバープレートがあるから、特定は容易いだろう。

「……遠山潤。ぜつつつたいに捕まえて弁償させてやる」

とりあえず捕まえたらOHANASHI直行だ。停車するパトカーから余計時間を喰わされることが決定した私の姿は、出てきた警官が怯える程度には不機嫌だったという。

続くんだよ。

## 第014弾 舞台に集い始める武偵たち ★

Side | Nayu

「琴ちゃん、そろそろ時間よ?」

「あ、はい。今行きます」

先輩(同僚というべき?)のCAさんに呼ばれて私は彼女のあとに続く。

はい。今私は「綾瀬 琴里」という偽名を使いCAしています。

え、なんでかって?

そんなの、潜入するからに決まってる。

変装は叩き起した瑠璃の力を借りている。なので、よっぽどのことがない限り、大丈夫だろう。油断はできないけれども。

今頃はもうアリアは空港で搭乗手続きを始める頃だろう。

想定内だけど想定外の消耗はしたがさて、ここから始まるぞ。

待ってるや、武偵殺しさん。ちゃんと教育してやるからねえ?

先程の八つ当たりも入っていた私は不敵に笑みを浮かべていた。

…:Side | Out:…

Side | Kinji

俺は今、理子からメールが来たので指定された場所へ向かっていった。

何時もだったら結衣の奴の嫉妬も怖いのもあるが、そもそもこういう誘いはNGだしスルーするところだが、今回は特殊だ。

理子は先週の<sup>俺が</sup><sup>本当に</sup><sup>空気が</sup>無双した<sup>本</sup>バスジャック事件に関連した情報を引き続き調べていて、今日の<sup>インクスタ</sup>探偵科の授業をフケていた。

それに今日はアリアだけじゃなく、<sup>インクスタ</sup>風優に結衣も学校を休んでいた。その事も気になるしな。

まあ、何と言うか、『虫の報せ』ってやつだ。

モノレールで学園島から台場に向かい、指定された店、「クラブ・エステラ」に少し迷いつつも到着した。

どうやら此処は高級なカラオケ店のようだ。

店の駐車場には悪趣味な極ショッキング彩。ピンクの改造ベスパが停めてある。あの一度見たら二度と忘れられないやつは理子のだったな。

「この子は一見、50ccなんだけど、時速はなんと、150km出せちゃうんだよ！」と自慢していたしな。

そんな車検スレスレの魔改造を施したのは武藤である。いくら金を積まれたからってホント、仕事選べよ。

時刻は早いもので夕方の6時。

何時もよりやけに鮮明な夕焼けは鮮血のようで、紺色の千切れ雲が異様に速く流れていた。

これは東京に迫る台風の影響なのだろうか。何時もより、風が、強い。

クラブに入った俺の目に飛び込んできたのはバーラウンジで会社帰りのOLやデート中の若者が芸術品のようなケーキをつづいていく光景。

よく見れば、その中に武偵校の女子もちらほら混じっている。流行ってるんだなこの店。

「キイークーん！」

奥から小走りにやってきた理子は何時ものロリータ制服を着ていた。

……いや、なんか今日のは一段となんか……スゴい。

本人に言わせると勝負服だそうだ。ま、心底どうでもいいが。

この後、理子のペースに完全に乗せられる俺。

笑う理子の上目遣いは妙に艶かしく思えた。それに俺は舌打ちしたくなる。

……やっぱり来るんじゃないやなかった。もう、何なんだ、コイツは。

そしてまた理子のペースに乗せられる俺。

それを見て二重三重に良からぬ噂のフラグを建てる女子生徒共。……聞こえてるからな？ 誤解すんな。

個室に押し込まれ、甘ったるいミルクティーを飲んだ理子に核心を突かれ、ぶつきらぼうに返す俺。

そんな俺に理子はモンブランにフォークを刺してニイツと笑う。

これは本気の顔だな。どんな要求してくるかわからんぞ……。

「はいキーくん、あーんして」

切り分けたモンブランのフォークを俺に突き出してくる。

「するかバカ」

そんな恥ずかしいシチュをやってられるか。

「——『武偵殺し』——」

なにかのカードの切り札を切るようにそう告げてきた理子に——

「俺は目を見開いて理子の方を見た。」

「——何か……解ったのか」

「(へ0へ\*) あくん ってしてくれたら教えてあげるけど? さあ、

かもんっ!」

……何が「かもんっ!」だ。こつちは——「はやくしてくれないと教えてあげないよお? キーくん?」

……遮って来るのかよ。仕方ない。死ぬほど恥ずかしいが、背に腹は変えられない。俺は理子にモンブランを一口貰うと「さあ(お前の知ることを) 教えろ!」と目で凄んだ。

「くふ。あのね、警視庁の捜査資料にあっただけだね……過去に『武偵殺し』に殺られた人って、バイクジャックとカージャックの2人だけじゃなくって、他にもいるんだって」

「……どういことだ」

『『可能性事件』っていうのがあるんだけどね。簡単に言っちゃえば表向きは『事故』って事になってるけど実はそうじゃないってやつ。具体的に言くと『武偵殺し』の仕業で、隠蔽工作で解んなくなってる……って感じかな」

「へえ……そんなものもあるのか」

「……で、ここからが本題。その資料の中に見つけちゃったんだ。」

『多分そうじゃないかなあ……?』っていう人の名前」

理子は手持ちのポシエットから取り出した四つ折のコピー用紙をまるで手品を見せるが如くゆっくりと広げて俺に見せてくる。

「——!」

俺はその紙に書かれていたことを見た瞬間、背筋が……いや、全身

を駆け巡る血液ですらその場で凍るような感覚に見舞われた。

『2008年 12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一

武偵 (19)』

そして、理子の発する言葉が聞こえなくなるほど、意識が遠のいていく。

武偵殺シ、キサマハ ナゼ、 兄サンヲ。

ナゼ、 兄サンヲ、 ソシテ ナゼ 俺ヲ……………狙ツタ——

!!

「いい」

熱を含んだ感じの理子の言葉に、(。D。)ハッ！ と気を取り戻す俺。

俺と目が逢う瞬間、理子はスツと目を細め、まるでなにかの快感を得た表情で俺に上半身を寄せてくる。

「J e t , a i m e . c r o q u e r .」と呟き、狭い個室の中で獣宛らの動きを見せ、いきなり……………しがみついてきた。

結衣の奴がいなくてよかった……………。アイツが居たら、ここは更地になりかねない。いや、確実になるだろう。いや、ホントに良か……………いや、良くない。

な、なんなんだ、この状況!? もう突然過ぎて訳が解らないんだが!! 何故に俺は理子に押し倒されているんだ!?

「——理子!？」

「キンジってば、ほんつとーにラブに鈍感すぎ。まるで、ワザとそうなるよーにしか思えない。ねえ……………解ってる? これ、もうイベントシーンの真っ最中なんだよ? だからさ、ゲームみたいなことしても、いいんだよ……………? 大丈夫。この部屋の出来事は誰にもバレないから。白雪はS研の合宿だし、アリアはもうイギリスに帰っちゃうからね。今夜7時のチャーター便で行くって言ってたし、もう今頃は羽田かなあ……………? それに風優も結衣も依頼が入ってて終日こつちこないみたいだし。だから……………理子と、イイコトしょ……………?」

突然の誘惑と、意外な出来事で……………。俺は自分が気づいたときにはヒステリアモードに……………なって、しまっていた。

」  
その刹那、たった今、理子から聞いた話と、過去の事件が、すべて宛てがわれたかのように一本の「道」として繋がっていく。

そして、その道の行く先……このルートのエンディングは………  
取り返しのつかない、ある種のバッドエンド。

—ヤバい。

ヤバいぞ。

今すぐ動かねば………！

「ゴメンな——！」

ヒステリアモードの俺は、理子の目の前に手を滑り込ませ、  
ぱちんっ！

指を弾いて鳴らした。

「みゆうっ！」

そう、理子が瞬きした刹那—

「お子様は、そろそろ家でおネンネの時間だろうか？」

「あんっ!？」

その小さな体を抱え上げ、  
くるっ。

俺は体を入れ替えて、理子を長椅子に横たわらせる。

そして、立ち上がり、前髪を掻き上げつつ、部屋を飛び出し、羽田  
へ大急ぎで向かった。

ヒステリアモードの……頭で——

……Side | Out……

続くんだよ？

第015弾 天上の舞台で舞うは…… ★

Side Kotori (Nayu)

「あ、センパイ、いいですか？」

「ちよ……、いま潜入中なんだから、『綾瀬さん』とか『琴里ちゃん』とかにしてよ。亜璃珠」

離陸直後のANA600便で潜入中の私に話しかけて来たのはイ・ウー研鑽派現役生、神楽坂亜璃珠かぐらざかありすだった。

完全に私のことをイ・ウー在籍時と同じノリで話してたので、私の身バレ防止の為、注意する。

「いやいや、別に違和感はないですからいいじゃないですか」

「そういうもんかね」

「そういうもんですよ」

妙な説得力があったので納得してしまう私である。

「で、何か報告があったんじゃないの？」

「あ……そうでした。えっと、予定通りなのかは知らないですけど、遠山キンジが搭乗したようです」

「そう。アイツがいないと困ったことになるかもだし良かったわ」

「あと、やつぱり乗り込んでました。アイツも」

「そつちも想定内ね。じやなきや折角の潜入も不発になっちゃうし良かったわ」

「ま、不発でも良いじゃないですか。私的には」

『私的には』っておま………」

私は亜璃珠の私情ダダ漏れっぷりにドン引きしていた。

絶対にコイツは私のCA姿の記録を夾竹桃モモに売りつける気だ。

そうとなれば次の夏コミの題材が私になつてしまう。それだけは絶対に阻止せねば。

そう考えていると亜璃珠は次の報告を始めていた。

「あと、懸念材料だった遠山潤との存在は確認できませんでした」

「そつか。遠山潤とは居なかったのね」

「はい。私の気配察知にも引っかけられませんでしたし」



「それなら确实ね。良かった、良かった」

亜璃珠の言葉に安心の私である。

私も気配察知の精度は高い方だが、亜璃珠の気配察知の精度は優に超える。

亜璃珠の気配察知はSDAランク世界1位の人物と同等である。

ちなみにそのSDAランク世界ならびにアジア1位の人物は  
高天原ゆとりである。

あの人の強さは語るまでも無いだろう。

「マジで良かったですよ。遠山潤あの畜生が乗ってなくて」

「マジそれな。私、遠山潤畜生外道乗ってたら9条破り确实だったわ」

「はい。私も遠山潤こん畜生居たらヌツ殺してますねwwww」

黒い会話が盛り上がる私達である。

亜璃珠はイ・ウーに入学した時から潤の被害者であり、この反応は当然だ。

対する私は以前からも主戦派イグナテイスと研鑽派ダイオで所属は違えど、理子絡みで度々胃薬案件なのはまだ堪えられた。

しかし、さっきの一件で仏の顔は行方不明になったのでこの評価なのである。

このまま、遠山潤抹殺黒い会話で盛り上がるのも良いのだが時間がない為、私達は報告確認に戻る事にする。

「ちゃんと配布してあるわよね？　転移陣のカード」

「はい。それはもうバッチリと」

「なら良し。これで死傷者を最小限までに抑えられるわね」

「ですね♪　……あつ、もうそろそろ位置に着く時間ですよ」

「あ、もうそんな時間なんだ……。わかったわ」

CAとして潜入している私は自分の持ち場に向かう事にする。

さて……と。気引き締めて行かなくちゃな。

「へ当然でしょ。油断して早々に戦線離脱とか、勘弁被るからね？　凧

優」

「わかってる」

最後に瑠璃相棒と精神会話を交わし、私は持ち場に向かった。

Side Out……

Side Kinji

あれから、全力で羽田に向かった俺は、急いでアリアが乗っているロンドン・ヒースロー空港行きANA600便の搭乗口に向かった。受ける刺激の種類にも寄るが、ヒステリア・モードは長くても数十分しか保たない。

なので、空港第二ビルに到着した際には通常モードの俺へと戻っていた。……だからといって、歩を止めるわけには行かない。

俺の推理が正しければ、アリアはもうすぐ会ってしまおう。武偵殺しと。

空港のチェックインを武帝徽章で通り抜け、金属探知器もスルーしてゲートへ飛び込む。

アリア、そんなにイギリスに帰りたければ勝手に帰ってればいい。

だが、もう、『武偵殺し』とは戦ってはいけない。

アイツは俺より桁違いに強かった兄さんを斃したのだ。だから戦えばお前は怪我だけじゃ済まされない。殺される。確実に死んでしまうんだ。お前は！

ボーディングブリッジを突っ切り、ハッチを閉じつつある600便に俺は飛び込んだ。

その直後、俺の背後のハッチが閉ざされる。

「武偵だ！ 今すぐ離陸を中止しろ！」

「お、お客様!? い、一体、ど、どういう——」

「悪いが、説明しているヒマなんか無い！ 今すぐこの飛行機を止めるんだ！」

CAはかなりビビった顔で頷き、2階へと駆けていった。

CAがその場から立ち去った後、俺はその場で両膝を落としてしまった。

強襲科を辞めてから時間が経って体力が落ちている状態での今回の全力疾走。

正直言ってもう殆ど体力は残っていない。その証拠に息が切れて

いる。

おまけに「もう一步も動けない」そんな感じがする。

だが、これで離陸は中止出来たはずだ。ひとあ——（ぐらりつ）  
………は!?

今、機体が揺れた!? って事は動き出してるってことか……!

どうしてー

「あ、あのおお……」

さっきのCAが戻ってきたようだ。

そしてCAから結果を聞く。

その結果は………正直最悪だった。CAの話によれば、

『この飛行機の現在のフェーズは管制官からの命令からしか受け付けられない』

………とのこと。

窓の外を睨めば飛行機は既に滑走路に入っていた。

今、無理矢理でも止めようとするものなら、確実に他の飛行機との衝突事故が起こってしまう。

こうなってしまうては仕方が無い。作戦を切り換えるしかない。

『後手に回ったのなら、後手なりの戦いをするまでの話』

こういう時に風優がいたら、絶対そう言うだろう。

このような場面では風優はもの凄く頼りになる存在だ。故に

「なんで、こんな時に限っていないんだよ……」

と思ってしまう。

だが、居ないものは仕方が無い。取り敢えずはアリアと合流せねば。

仕方がないのでさっきのCAを落ち着かせて、アリアのところ案内してしまおうとしたら、別のCAが通りかかったのでそのCAに案内して貰う。

さっきのCAは放置になるらしい。

そう俺を案内してくれたCA……名前は“綾瀬”というみたいだ。

綾瀬さんに案内して貰い、まずはアリアと合流できた。ひとまず安心だ。

「キ、キンジ!？」

まさか俺が自分の個室に入ってくるとは思わなかったのだろう。その証拠と言わんばかりに紅い瞳をまん丸に見開いた後、案の定というか、お約束というか、俺に詰め寄ってきたアリア。

「なんで……なんであんたがこんなところについてきちやっただのよ!？」

「なんというか………カンだ」

「なにそれ。バツカみたい」

「いや、風優が居たら絶対そう言うだろ」

「ああ言いそう。その風優の姿見当たらないんだけど?」

「俺も知らん。『依頼が入ってる』としか聞いていない」

「そう。結衣も同じような理由ね。居たら此処に居るはずだし」

「ああ、まあな。……てかなんでわかるんだよ」

「だって、アンタが行動起こせばもれなくセットで結衣も付いてくるじゃない」

「アイツはポテトかなにかか? まあ、それは否定せんが」

そんな感じで話しているうちに機内放送が流れ、直後、機体が少し揺れる。

それはいいが、さつきから大きく雷の音が鳴り響く度にアリアは強がってキツチリ怖がっていた。

それを見た俺はこんな時に不謹慎だが笑いがこみ上げてきてしまった。

しかし妙だ。なぜにこんな雷雲の近くを飛んでいるんだ……?

普通だったら有り得ないぞ? こんなもの。

よっぼど機長の運転が下手なのか、それとも運が悪いのか。

そして、さらにさつきより大きい雷鳴が鳴り響く。

「キ、キンジい~~~~~」

さつきからベッドの中に潜り込んでいたアリアだが、遂に限界が来たらしく、毛布の中から涙声で席に座る俺の制服の袖を掴んでいた。

流石にこれは笑えない。なので苦笑いしつつもアリアの恐怖を紛らわす目的でテレビをつける事にする。

「お主、この桜吹雪、見覚えが無えとは言わせねえぜ！」

お、丁度「遠山の金さん」やってるな。

その主人公・遠山景元金四郎は俺の家のご先祖様であつたりする。兄さん曰く、彼もまた、ヒステリアモードのDNAを持っていて……要は露出狂のケがあるようで、もろ肌を脱ぐことで体力・知力を高めることが出来たらしい。

そんなことはさておー（おい、子孫よ、先祖をもつと敬わー）……？ 誰だ、今の。ご先祖様本人が降臨なさったか？（↑注：概ね当たつてる）

まあ、無視だ、無視。

こんな時に邪魔すんじゃねえよ。非常時だけど。

あんなアリアでも（↑失礼）こんな時だけは平凡な女子高校生なんだ。そして、今の俺は平凡な男子高校生。

だから……

「アリア……」

「キ、キンジ………う？」

こうやって、震える手に手を添えてやって。

普通のクラスメート……友達として。

震えを和らげてやることぐらいはできる。

アリアの指が、何秒かの躊躇いを見せてから俺の手を握り返そうとしたとき………

パアン、パパパパパパアン（・ㇿ・）チツこの腐れリア充共がっ

……！）

音が、響いた。

この音は雷鳴でも何でもない。

俺達が聴き慣れた音。

銃声。

まるでこの空気を物理的にぶち壊すかのように。

それは概ね、この甘くなりかけた空気をぶち壊すかのように。

あと、なんか聞こえたからな。俺は『リア充』なんかじゃない。

大切なことだから言っておく。

そんなことはさておき、個室を出て狭い通路に出ると、

「な、なんなお……?」

「(・o・) ヤダ」

「シニタクナイ」

「懺悔する?」

「南無三」

「もうどうにでもなっちゃえい!」

「もう知らなくもなくもなくもない」

「なんなの? 危機感欠如してんの?」

「もうどっちなんだよ!」

「餅つけや」

「いや、餅付いてどうすんの!? 落ち着けや!」

乗客・C Aが騒いでいた。

発言がギャグっぽく聞こえるが危機的状況であり、漫才とかの類ではない。

あと、ツツコミ勢の意見には賛同する。

その直後、騒いでた奴らの懐のカードが淡く光り、

ひゅぱんっ

そんな音と共に光に包まれて騒いでいた奴らの姿が消えた。

ん……? これ、どっかで見たことが最近あるような……?

そう考えていたら、銃声のした機体前方……コックピットの扉が開け放たれていた。

「……………」

そこにいたのは、先程、放置されて頼りにならなかつた間抜けC A。

そして、そいつが引き摺っているのは機長と副機長。

その二人は全く動いていない。

刹那、その二人の懐も淡く光り出す。

ひゅぱんっ!

再びそんな音と共に光に包まれ、二人の姿が消えた。

「……………!?!」

何かやった犯人であろうC Aが目をまん丸に見開いて驚愕してい

た。

「……？ これはあいつがやったわけじゃないのか……？」

「じゃあ、いったいだれが……？」

「そう考えかけていたが、俺は慌てて拳銃を抜く。」

「動くな！」

「Attention Please.なのでやがりますのです」

「CAは胸元からピンを抜いた缶を放り投げる。」

「………つ!? まさか、ガス缶!? ……ヤバイつ!!!」

俺はアリアを押し込むようにして個室の扉を閉めた。

その瞬間、ぐらりと機体が揺れ、ばちんと機内の照明が消えた。

刹那の暗闇の後、赤い非常灯が点った。

「アリア。あのふざけた喋り方………あいつが『武偵殺し』だったんだ。やっぱり出やがった」

「『やっぱり』……？ アンタ、『武偵殺し』が出るのわかったの!？」

「ああ。さつき解ったんだよ。武偵殺しの奴はバイクジャック、カージャックで事件を始め、そしてシージャックである武偵を仕留めた。そしてそれは直接対決だった」

「………どうして」

「そのシージャックだけお前が知らなかったからだ。電波を傍受してなかったんだろ」

「う、うん」

「『武偵殺し』は電波を出さなかった。いや、出す必要がなかったんだ。何故なら、奴自身が直接乗っついて、船を遠隔操作する必要がなかったからな」

あの兄さんが逃げ遅れるなんて有り得ないしな。

「ところが、バイク・カー・シーと大きくなっていった乗り物がここで一旦小さくなる。そう、俺のチャリジャックだ。そしてその次がバスジャック」

「………まさか………」

「ああ。その通りだ、アリア。コイツは初めからメッセージだったんだよ。お前は最初からあいつの手のひらの上で踊っていたに過ぎな

かったんだ。ヤツはお前の母親・かなえさんに罪を被せ、お前に宣戦  
布告をした。そして、兄さーいや、シージャックで殺られた武偵と同  
じ3件目でお前と直接対決しようとしている。そう、今のこの状況、  
ハイジャックでな」

俺の推理を聞いたアリアはその悔しさにぎりいつと歯を食縛る。

そこで、ベルトの着用サインがワケのわからない音と共に点滅を始  
める。

「和文モールズ……………」

アリアが呟き、俺はその解読を試みる。

オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハ イツカイ ノ バー ニ イルヨ

ワナ ナンカ ジャナイ ホント ダヨ

ホント ノ ホント ダツテ バ

ソコ デ チョクセツ ヤロ ウヨ

モシ コナ カツタ ラ

ドウ ナツテ モ シラ ナイ ヨ

「……………必死に誘ってやがる」

「なんか罨臭いけど上等！ 風穴あけてやるわ」

えらく必死に呼びかけていたのが引つかかるが、俺達は1階のバー  
に行く事にした。

俺達は慎重に1階に降りていき、バーのカウンターを見ると、そこ  
には、フリルだらけの改造制服を着ていた。

その制服は東京武偵高校のものであり、そして、さつき理子が着て  
いたやつだ。

「今回も、キレイに引つかかってくれやがりましたねえ？」

べりっ。そう言いながら、CAは顔の薄いマスク状の特殊メイクを  
自ら剥いだその中から出てきたのは……………

「——理子おっ!」

「Bon soir」

手に持っていた青いカクテルを飲み、ウインクしてきたのは、や  
っぱり理子だった。



「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこうな確率で遺伝するんだよね。武偵高にも、お前達みたいな遺伝系の天才がわんさかいる。でも、お前の一族は特別だよな。なあ、オルメス？」

「……！ アンタ、それを一体どこで……！ そしてアンタは一体何者?！」

「理子・峰・リュパン・4世。……それが理子の真名……本当の名前」

「リュパン……あのフランスの大怪盗のか……!?!」

「そ。でも、家の人間はこのお母様が名付けてくれた『理子』っていうギザ可愛い名前で呼んでくれなかった。皆、呼び方が可笑しいんだよ」

「可らしい………?」

「4世。4世。4世さまあー。だって。全くどいつもこいつも、使用人共まで理子の事そう呼んでたよ。酷いっいたらありやしない」

「それがどうしたってのよ。『4世』の何が悪いってのよ」

「『何が』って……。巫山戯んな！ 悪いに決まってるだろおが!! アタシは数字か!? アタシはタダのDNAかよ!? アタシは理子だ!! アタシは数字じゃない!! ……ったく、どいつもこいつもよお！」

理子が誰に言ってるかは不明だが、怒りをぶちまけ、そして本命はオルメス4世であるアリアだと言った。

「100年前、曾お爺様同士の対決は引き分けだった。つまり、アタシがオルメス4世であるお前を斃せば、曾お爺様を超えたって証明ができる。キンジ、ちゃんとお前も今回こそは役割果たせよ?」

「『役割』……だと……!?!」

「ああ。オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。初代オルメスにも優秀なパートナーがいた。だから、条件合わせる為に、お前をアリアとくつつけてやったんだよ」

「俺と、アリアを………お前が………?」

「そつ。まあ、風優の奴が乗ってくるとは予想してなかったけどね。キンジのチャリに爆弾を仕掛けてわっかかりやすうーい電波を出してあげたの」

「あたしが『武偵殺しの電波を追ってる』って気付いていたのね!?!」

「そりやあ、一発で気付くよお。あんだけ通信科コネットに出入りしてればさあ。でも、キンジの方があんまり乗り気じゃなかったからさあ、バスジャックで協力させてあげたんだあ」

「バスジャックも……………!?!」

「キンジいー。武偵たるもの、どんな理由があつたつて、人に腕時計預けちやダメだぞ? 狂った時間見てたらバスにも遅刻しちゃうからさあー」

「……………。何もかも、お前の計画どおりだったつてわけかよ……………」  
「んーん。そんな訳無いじゃん。主に風優のせいなんだけど。予想外のオンパレードだよ。一体、誰が、あんな方法で、しかも最速の10分で、バスジャック解決するなんて予想すると思うか?! フツーはしないでしょ! もう、なんなの!?! あの無双っぷり。せつせと事前から仕掛けてたのを一瞬で無にされたんだよ!?! そして、何より、キンジ、お前が活躍するはずが一切何もしてないじゃんかよお! 終始、何もしてないじゃんか! てめーはモブじゃねえの! 主役なんだよ! おk?」

「……………んな、こと言われてもなあ……………」

確かにあの時は、風優と結衣の奴が無双してて俺の出番一切なかったけども。そんなこと言われる覚えはない。

「それにキンジが理子がやったお兄さんの名前を出すまで動かなかつたのも意外だった」

「……………兄さんを、お前が、お前が……………!?!」

兄さんの名前を出された今の俺は頭に血が上ってきており、冷静ではいられなくなっている。

「くふ。ほら、アリアあ。パートナーさんが激おこだよお? 激おこプリン丸だよお? 一緒に闘ってあげなよお!」

「それにキンジ、イイコト教えてあげる。あのね、双子のユーくんは……………今ね、理子の、恋人なの」

「あの難攻不落という文字が服着ている外道に遂に春が来たのは心底どうでも良いわ。勝手にくたばってろって感じだし」

「……………キンジ、何その評価」

理子の一言で急に冷静になった俺だった。何故ここで潤の名前を出すんだ。明らかにミスだろ、理子。

「あー……、うん。アリア、それについては理子も結構妥当な評価だと思うよ。この場面でこの発言は明らかにミスったね。コレ」

「待ちなさいよ、そのキンジの双子の遠山潤？ とか言う奴はどんな奴なのよ!?!」

「数多の恋愛フラグ全てをクツソ笑いながらバツキバキにへし折ってくれるアンチクショー」

「女心を笑顔で蹂躪していく事については神級の天才」

「どう聴いても、ロクデナシにしか思えないんだけど!?! 何かあたしもそいつをフルボッコにしても良いかしら?」

「どうぞ、ご自由に思うがままに存分に死ぬ半々々々々々々々々々歩手前までフルボッコになさってください。寧ろ、超助かる」

アリアの言葉に敵であるハズの理子とまさかの意見が同調した瞬間だった。

ああ……ここにもあの野郎遠山潤の事について同じ思いの奴が居たのか。

その時だ。「あつ、それとね……」と理子が思い出したように言葉を紡いだ。

「あなたのお兄さんとも今は恋人なの」

「兄さんの事についてはいい加減にしろおつ!」

再び、兄さんの名前を出された今の俺は頭に血が上ってきており、冷静ではいられなくなってくる。

「キンジ! 理子はあたし達を挑発してるわ! 落ち着きなさい!」

「これが、落ち着いていられるかよ!」

「……だよねえ。でもさ、まずは落ち着いたら? じゃなきゃ、勝てる戦いも勝てないぞ?」

「「え……!?! だ、誰?!」」

突如現れたCA。確か、先程俺をアリアのいる個室まで案内してくれた綾瀬とかいう人。

何故、こんなところに………?!

しかも、あの現れ方、まさか瞬間移動か………?

「……………てめえ、一体何者だ!？」

「あらあら。私が誰って……………気づいてなかったのかしら? 理子」

そう言って、顔を手で撫でる動作をする綾瀬さん。すると、彼女を覆っていた光の粒子が霧散していく。

その粒子を纏っていたのは、東京武偵高校の制服を身に纏った同級生・水無瀬凧優だった。

容姿は、前のチャリジャックの時とは違う。どっちかといえば、結衣との模擬戦の時の姿の方に近い。

「な、凧優……………? アンタいつからここに……………!？」

「ん? えっと、アリアが搭乗手続きしてこの飛行機に乗り込む前から……………かな?」

アリアの言葉に悪戯っぽく答える凧優。

「え、でも、凧優、アンタ確か……………」

「あんなの、でっち上げに決まってるでしょ? さて……………」

アリアの問いにアツサリと答え、凧優は理子の方に視線を向けた。改めまして、Buona giornata。峰・理子・リュパン・4世サマ。イ・ウーNo. 2 魔術師・水無瀬凧優でございます」

「な……………凧優、テメエが『魔術師』だと……………!？」

凧優の言葉に驚愕の理子だったが、何か知っているのか……………?

それと、まさか凧優もイ・ウーのメンバーだとは思わなかった。

「そうよ。まあ、もう一つ肩書きもあるけどね。さて……………キンジ」

「な、なんだよ……………?」

突然話を振られた俺は戸惑いつつも答える。

「お前が今戦ったってハッキリ言っただけでまといだ。だから、ちよいと頭冷やしてきな」

「な、何を言っ……………」

俺は凧優の言っている事が理解できなかった。

「まんまの意味だ。こっちは私が引き受ける。だからどこかで頭冷やして来い」

「凧優……………」

「大丈夫だって。アリア。こんな若輩者に私負けないし。だから……………」

ね?」

「……わかったわ。死ぬんじゃないわよ」

「わかってるって」

「ホラ、キンジ、行くわよ!」

「え、ちよ………おい………!」

俺はアリアに引き摺られ、バーを後にした。

Side Out……

Side Nayu

キンジはアリアに引き摺られ、何処かに消える。おそらくはさつき  
の個室だろう。ちやうど真上だし。

「おい、風優、てめー、このアタシを舐めてんのか?」

そう考える間もなく理子の怒号が飛んでくる。

「あら、そんな事無いんだけど。でも負けないし」

「上等。泣きつ面かかせてやんよ」

「やれるもんならやってみな………!」

その直後、私と理子は武器を携えぶつかりあった。

続くんだよ。

## 第016弾 戦闘だつて大切な学びの場 ★

私の6ウニカと理子のワルサーP99、お互いの銃から発砲された銃弾はぶつかりあつて相殺される。

私の6ウニカに使う銃弾は、454Casual、対する理子のワルサーP99に使う銃弾は9x19mmパラベラム弾。単純な銃弾威力で言えば私の方が上だけど……今の相殺された事を見るに確実にアレだよな、アキの十八番、『神速』。

身体に雷を流し込んで目で追えない程の戦闘を行う技術……クソ厄介と言うしかない。それを理子が使えるとか聞いてないんだけどっ！

目で追えない現状、気配で対応してる状態だ。気が抜けない。相殺されてる事に驚きみたいだけどき、これはどうカナ？」

攻撃の対応に焦る私を嘲笑う理子は意表を突くような箇所を狙つたのだろう。

私の足元に向かって発砲。

「せええいっ」

ワルサーの発砲と同時にホルダーから抜いたブーツナイフで叩き斬る。

綺麗に斬られた9x19mmパラベラム弾は足元に散らばる。

「ふうん。やつぱり斬つたんだ」

「あらま。驚かないんだ」

「まあ、なゆなゆだしね。そうすると思つた」

「あらら。想定内だったんだ。驚くかと思つたのに」

余裕綽々といった表情の理子に予想が外れた私は虚を突かれた風に返した。

「んー？ だつてなゆなゆだし」

「そのりくつはおかしい」

理子の言葉に突っ込んだ私は悪くない。

え、なんなの？ 『私||人外』つて数式が成り立ってんだとしたら限りなく不本意なんだけど。

「おかしくないよ？　だから、こういうふうな仕込でも有効打になるかなってっ」

その言葉の直後、先程斬られた銃弾が発光し、眩い光と共に爆発を起す。

「けほっ……。なるほど炸裂弾だったってわけか」

「そ。ご名答ー。でもそんなに効果はなかったけどね」

「そうでもない。結構煙たかったし。あとウザい」

「そっちの方向で効いてるんだ。流石、ゆいゆいとゆーくん」

「アイツ等ア!!　確かにあーいうの開発しそうだけでも!!」

「アイツ等は後でメたる……。絶対だよ、こん畜生。」

「オイ、理子」

私はドスの効いた声で理子を呼び止める。

「え、何？　……。なゆなゆ」

理子は私の少し漏れ出す殺気にビビりつつも応答。

「後でアイツ等めるから手伝え」

「え、良いけどさ……。今は敵同士だよな？　今言う必要ないよね？」

私の発した要望に理子、困惑のご様子。(当然)

「知ってる。逃げた後だと理子に言う機会無いでしょうが!!」

「え、そんな理由なの!?!　もうなんなの、なゆなゆ」

私の理由を聞いて困惑な理子だった。当然といえば当然である。

「知らん」

私はきっぱり断言した。

「自分のことなの!?!　理子、直で逃げたいんだけどっ!!」

理子は更に困惑度合いが上昇した。私的になぜ逃げる必要があるのかは知らんけど。

「逃すわけ無いでしょう?」

「もう、なゆなゆの相手疲れるしやだよお。。。(ノ口、)。。」

私の言葉にツツコミ疲れて涙目のご様子な理子は何かを投げた。

「どうしてこうなっているんだろうね?　(↑※　自覚なし)」

「ぬったりしていつてね!」×たくさん

爆弾——チャリジャックの時に出了「ぬったり爆弾」。

携帯版故に大きさが小さく、数が大量だ。

「……………ガチで超うぜえよ!!。(。口。)ウゼエエ」

爆弾に対し私が真っ先に思った感情はそれだった。

だって、全部の爆弾が

「ぬったりしていつてね!」

って言っただもん。

あの合成音声ゆっくりボイスを何重奏も聞かされてみてよ。イラツとくるわ!

しかもなんか時折理子本人の声やら何故かアリアの声やらも聴こえてくる。

なんなの。このお遊び感満載爆弾。

確かに最強だ。精神疲労的にねえ!正しくSAN値直葬だわ。

「どお……? 理子特製の『にいにい爆弾』の威力は」

「おい。なにそのネーミング。新潟に怨みでもあんのか」

「どうして新潟が出てくるのさ。お兄ちゃんが爆発するけど」

私の発言に新潟が無関係だと断言する理子。

こういう思考出るのって、誰か鉄道ファンでも居たのかしら?

割と作者がそうなんだけど。(事実)

そんなことはどうでもいいんだよ

「そつちの兄にかよ」

「うん」

「明るい笑顔ですこと」

理子の笑顔に引いた私である。理子って怨み持つほどの兄貴分い

たっけ……

あ。居たわ。本人泣くだろうなあ。敢えて言わんけども。

ご本人の名誉もあるし。うん。

「まあね。……………ねえ、なゆなゆ」

「ん? なにか?」

「シリアスどこいった」

「真顔でいうことか。あー、アレだよ。休憩中。今はシリアルの時間です」

「なにそれ」



「(。△。)シラネ」

知らないっいたら知らないんだよ。

ずっと戦闘してたらアリアの出番無のまま終わるでしょ！

「そういう問題!? あと、キーくん忘れられてるんだけど!」

理子は愕然としていた。もつと高尚な理由でもあるとでも？

無いでしょ。キンジについてはナチュラルに忘れてた。

「だから、休憩だ。休憩。ここはバーなんだしなんか飲む?」

「原作主人公の扱いがマジ酷い件。そしてマジで休憩に入っちゃつ

たよ。なゆこの人なゆ。もうなんなの」

私の自由度にワケワカメな理子でした。

「私に聞くなよ。何も飲まないの?」

「いや、アンタ自身のことじゃん。……あ、とりまシンデレラで」

私の言葉に突っ込むもキチンと注文する理子。

「かしこまり。私もそれにするかな」

バーにあった物を（無断）拝借して私はカクテルを作り始める。

え……? 『未成年だし、お酒はダメ』?

解ってるって。だから、ノンアルコールのカクテルにしてるやん。

シンデレラってのはオレンジジュースとレモンジュースとパイ

ジュースを1:1:1の配合で作るカクテルのこと。……分量はそれ

ぞれ40mlってところ。

未成年でもカクテル呑んでる雰囲気味わえるからいいよね。コ

レ。

「ほい、完成」

「ありがと」

出来上がったので給仕。グラスを滑らすことはしないよ? した

らグラス粉碎しちゃうし。

「なんか、聞きたいこと、あるでしょ?」

「うわ、鋭い。じゃあ、単刀直入に聞くけど、なゆなゆの目的は?」

カクテルを口にしつつも本気で斬り込む理子。

「んと、『理子の実力を測ってからのあわよくば指導』・O☆SHI☆

O☆KI☆かな」

「……………後半のなんなの!?!」

私の言葉に啞然となる理子である。

一体どうしたって言うんだ。

「え? 知りたい?」

「そりやそーだよ! 解答によつては今すぐここから逃げたいんだけどもー!」

理子は結構焦っていた。まあ、無理もない。

「あー、安心して。執行するの私じゃないし」

「いや、安心できないよ!?! 他人の依頼なの!?!」

私のフォローに更に焦る理子。私フォローしたはずよね?

「まあ……………そんなところ……………かなあ?」

「ええ!?! ナニソレコワイ」

瑞穂さんのアレは……………依頼というより、命令だった気がする。

「ああ、安心して。正社員レベルでバイト雇用されるだけだし」

「なんだ……………。そつかあ……………。安心した」

私の言葉に安堵する理子だった。

「へ……………理子に真実を教えなくていいの? 凧優」

「まあ、なんだ。知らぬが仏つてもものよ。瑠璃」

瑠璃はジト目で私に問い掛けるが、私は面白そうなので黙っておくような返答。

「なゆなゆうー、なんか、言ったあ?」

「別に?」

無駄に理子は勘付いたので敢えてすつとぼける私である。

「きのせいかな……………」

「うん。そう。気のせいよ」

理子は勘違いだと認知したので、ダメ押しで肯定しておくことにした。変に勘付かれて逃亡されたとなれば、また追いかけて捕まえるの超メンドイから。

「そういうえば、なんで、なゆなゆは私が此処にいるってわかったのさ」

「え? そりやあ、盗聴してたし」

「はあ!?! 盗聴う!?!?」

驚いた理子は自分の体をまさぐり始めていた。

まあ、なんだ。キンジが見てたらこれだけでヒスっていただろうね、確実に。

だって理子はスタイル良いもん。アリアより。

これをアリアの前で言うものなら戦争勃発やね。ボッコボコにしてやるけど。

「安心して。盗聴器なんて仕掛けてないし」

「え……？ どゆこと？」

私の言葉にイミフな理子である。頭に『？』が乱立しているし。

「理子はさ、霧の標印アンネベルン・マルケって知ってるよね？」

「うん。確か、それってカツエの使うマーキング術式だったよね」

カツエ——『厄水の魔女』こと、『カツエII グラッセ』の名前が出てくるあたり、術式はやっぱり知ってたか。同僚だしね。

「そ。アレの改良版を使ったの」

私は球体状の霧を具現化させた。

口から発動していないところも改良点である。

「これを対象者に触れさせると位置情報だけじゃなくて盗聴とかもできると」

「つまり、あれの上位互換版ってところなんだ」

「そうよ。でも弱点があつてね」

「弱点？」

理子が首を傾げたので、私は先程具現化した物を理子に向かって投げつける。

「Σ(。D。;) ちょ……」

理子は自分に向かって来る事に驚いていたけれども、霧の球は理子に届く事無くその数m手前で落ちて、そのまま霧散した。

「……………」

この期待外れ感に理子は無言だった。

「球状にした時、すごい射程短いのよね」

私がこの改良版の弱点を苦笑い気味に言う。

「ああ……確かに致命的だね………接近しないと仕込めないとか」

「理子も苦笑いで返す。」

「じゃあ、尚更どうやって仕込んだのさ」

「そんなの、服を捲って直接——「セクハラあああああつ！」」

私の発言を遮って理子は大絶叫だった。

服を捲って直接とかというセクハラ発言を聞いたら当然の反応といえは当然の反応である。

「いや、女同士だし気にしなくても……………」

私はきよとんとした表情で返す。

百合いがあるし別に良いジャマイカ。

「いや、気にするからね!? なにしてんの!? アンタ!？」

「ああ、安心して。理子<sup>お前</sup>が意識ないときにやったから」

理子のツツコミを私は笑いながら受け流した。

「それは安心……………できるかつ! そんな時なんて無かつたでしょ!？」

「いや、あつたじゃん。先週くらいに」

「先週……………? (。ム)ハッ! まさか、あの時に!？」

理子は私の指摘で何か——先週の『精神と身体両方瀕死状態になった地獄のバイトヘルプ』を思い出したらしい。

「そのとーりっ。理子<sup>お前</sup>がバイト後、燃え尽きた時に仕込ませていただきました(。ム。ム)」

「ああ……………そう……………」

私がドヤ顔で披露し理子はゲンナリしていた。

「うん♪」

「そうなの……………じゃあ……………」

「あああ? どうするのお……………?」

「殺すっ」

「やってみなっ!」

私の告白に理子は怒って私に発砲。

私は煽りながらもそれを跳んで回避する。

「へねえ……………なにやってんの? バカなの? 死ぬの? <」

「え……………? ただ真実を述べただけですが? バカとはひどいし、死

ぬ気はサラサラないよ」

「へ何処かだよ。最早どっちが悪役か解んなくなってるんだけど!?」

「そんなのフツーにわかるでしょ? 理子の方じゃん」

ハハ。ナニファイツテイルノヤラ。

私は<sup>相棒</sup>瑠璃のツツコミにきよとんとした表情で答えた。

「わかるかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! セクハラしたテメーが悪いわアアアアアアアアアアア!!」

その後、理子と上の個室の床をぶち抜いて天井から登場したアリアからの総ツツコミを受けた。

「……………なにやってんだよ。 凧優……………」

同じく上から登場し、呆れ顔のキンジ。良かった。頭冷えてんね。

これで勝率は上がるだろう。

「仕方ないじゃない。必要悪よ。必要悪」

「だとしても、それは無いわよ。 凧優」

「次は多分は気をつけるって」

「『多分』かよ……………」

私の（華麗なる）スルーを否定するアリアの言葉を更に（華麗に）スルーする私に呆れるキンジ。

「さて、アリア、キンジ……………来るよ」

私はアリア達に警告を出した直後に理子のP99による砲撃を懐から取り出したマテバとトーラスジャツジで瞬時に相殺させて防ぐ。

「凧優、ここからはあたしにやらせて」

「わかった。でも、危なくなったら交代だからね」

「ありがと」

凧優と選手交代したアリアは、理子の持つ銃、ワルサーP99が1丁のみと判断し、

自分の持つガバメントの弾数が8発×二挺 || 16発とワルサーP99の弾数が16発×一挺で互角と判断し動く。

「アリア。二挺拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ?」

理子はワルサーP99をもう一挺スカートから取り出した。

「……………」

既に射撃体勢に入ったアリアは止まるわけにはいかず、至近距離から撃ち始める。

アリアと理子の撃ち合いはせめぎあっており、格闘も混じりつつの撃ち合いになっていた。

「はっ！」

自分のガバメントが弾切れを起こした刹那、アリアはその両脇で理子の両腕を抱えた。

「キンジ、風優！」

アリアの要請にキンジは兄の形見のバタフライ・ナイフを開き、私小太刀を抜いて理子に接近する。

「動くな！」

「動かないで」

こんな明らかに劣勢な局面で理子は余裕綽々な表情で言葉を紡ぎだした。

「双剣双銃………奇遇だね、アリア」

「理子とアリアは家系、キュートな姿、色んな所が似ている。それに、二つ名も」

「？」

理子の言葉にアリアは困惑とした表情だ。

「あたしも同じ名前を持つてるのよ。『双剣双銃の理子』。でもね、アリア」

何か嫌な予感を感じ取ったキンジの足が止まり、私は理子に更に接近する。

「なんだろう………」

『アレを発動させては絶対にダメだ』

そんな気がする。

当たっても欲しくない私の嫌な予感は的中していた。

何かの予備動作だろうか、理子の髪が生き物の様に動いている。

「オイオイ、まさかのアレの応用!! 厄介極まりないじゃんか。」

「アリアの双剣双銃は本物じゃない。お前はまだ知らない。この力のことを！」

理子の蠢く髪は背後に隠してあったナイフを抜き、私達に襲いかかる。

「アリアは驚きつつも1撃目を避ける。」

「うあつー！」

「うぐつー！」

……が、反対のテールに隠し持っていたナイフによる2撃目を避けきれず、アリアは側頭部を、私は右頬を深く斬られ2人仲良く私がアリアを受け止める形で吹っ飛ばされる。

その拍子でなのか、仕込まれたモノによるのか、身体が麻痺してやるよ……。

「あは……あはは………曾お爺さま。108年という歲月はこうも子孫に差を作っちゃうもんなのですね。勝負にすらならない。コイツ、パートナードころか自分の力（・）すら使いこなせてない！勝てる！勝てるよ！理子は今日、理子になれる！あはは、あはははははっ！」

理子は私達を圧倒する實力を見せた事で勝利を確信したのか高笑い状態だった。

「瑠璃………。」

「既に治癒力全開にしてる。万全にはまだ時間かかるけど。」

「どんぐらいで動ける程度になる……？」

「へまあ、余裕見積もって50秒つてとこかな。」

「解った。キンジ！」

私は荒い呼吸を整え自分の身体が快癒する時間を瑠璃に確認し、それを基に組み立てた策を講じるために理子以外で唯一無事なキンジへ指示を飛ばした。

「な、なんだ……？」

「アリアを連れて離脱しろ！アリアにラッツオなりの処置をしとけ」

「風優、お前は どうするんだ!？」

「私は理子の相手しとくさ。アイツにはお返しする案件が出来ちゃったし」

「お前が『時間稼ぎをする』だって?! いくら風優でもそんな身体状態でやるのは無茶だ!!」

キンジは困惑し、私に止めるように諭す。

「私の身体は動ければ問題ないわ。『無茶』だなんてやってみなきやわかんないでしょ。何よりもこの状況を打破するにはアリアの力が絶対に必要なの。だから、アリアを回復させる為に! 早く!」

「解った!」

私の言葉に頷いたキンジがアリアを抱えたのを確認し、私は瞬間移動でキンジを上に乗せ飛ばす。

「それで、風優はこの狭い中でどこに飛ばしたのかなあ?」

「さあ? どこでしょうねえ?」

まるで雑魚を相手するかのような態度の理子に（本当は結構ギリギリな状態だけど）余裕綽々な表情で返答する私。

「ふうん。ま、どこでもいいや。じゃあ、風優で遊ぼうかな。間違って殺しちゃうかもだけど」

「上辺を身につけた位で天狗になっている奴が何を言っているのかしら?」

「……………なんだと?」

私の言葉に反応した理子は低くドスの効いた声を発した。

「アンタのそれ、タダの劣化パクリじゃない」

「あたしのコレが『劣化パクリ』だと!」

「そうよ。今からその能力の真髓ってモノを見せてあげる」

私の指摘に激昂する理子を他所に自身の後頭部にあるバレッタを外し、纏められていた髪を解いた。

Sette Lancie  
『七 叉 槍』

そのキーワードがトリガーとなって私の髪が理子と同じく蠢き、髪の毛先に七つの刃が形成される。

「なっ……………それは……………」

私の発動した術式に見覚えがある理子は驚愕の表情を見せていた。

「イ・ウーに所属している理子はコレのこと、勿論知ってるわよね?」  
「当たり前だ。どうしてお前が!? それを使えるのはあたしが知る限



り『氷天の魔女』しか居ないはずだ！」

態々解説ありがとう。それにしたって結びついていないのかな？

まあ何れはバレるんだし此処で明かしても良いよね。

そう思った私は改めて名乗ることにした。

「研鑽ダイオ・ノマド派筆頭、『氷天の魔女』水無瀬凧優」

「凧優が……『氷天の魔女』……だと……!?!」

突然の幹部級が登場した事によって驚きを隠せない理子。

「さて、お手合せ願おうか？ 『武偵殺し』さん？」

私は理子を獰猛な笑みで煽った。

続くんだよ



なんとか残る能力で理子の髪を切り刻もうと斬りかかったが、それは届かなかった。

ナイフを足元に刺され、体勢を崩してしまふ。

その一瞬の際にナイフで背中を刺され、地面に叩きつけられる。

「なあんだ。魔術師つつても大したことないじゃん」

「はん……………どうだかな」

「え……………?」

「顕現……………《女帝》」

なんとか、タロットを発動させる。

もう色々スツカラカンド。

あ、ヤバ……………意識が遠のいてく……………。

私の意識は闇に吞まれていった。

Side Out……………

Side nothing

「顕現……………《女帝》」

既に限界な風優は1枚のタロットカードに自身の残っている精神力チカラを注ぎ込んでそのカード……………《女帝》のカードを顕現させた。その直後、精神力チカラを使い果たした風優は倒れてしまった。

それから、何も現れるものでもなく、フィールド自体にこれといった変化は見受けられない。

「不発……………?じゃあ、今度こそバイバイっ!」

理子はトドメと言わんばかりにナイフを風優に突き刺す。

だが、それは通らなかつた。

がきいいんっ!

何故なら、理子のナイフはなにか硬いものに遮られ、折れたからだ。

「一体、何が……………!?!」

理子は困惑し、焦った声をあげる。

ウンダンス・バリエース・アクアリウス  
「水流 障 壁」

突如顕現した水流の壁が理子の攻撃から風優を守っていた。

「!」つたく、相変わらず風優はペース配分が下手なんだから。いつつ

も『ペース配分には気をつけて』って言ってるのに」

「何回も私が顕現してる訳にも行かないんだよ？そこんどこ分かってるのかな・・・風優」

そして倒れている風優にその女性は説教をぶちかましていた。

「お前は一体何者・・・!!?」

理子は女性に問い掛ける。

「あ、私のこと?」

「ああ、そうだ。というか、この場合だとお前しか居ないだろうが」

「（・3・）アルエー？会った事無かつたつけ?」

「当たり前だろうが。少なくともあたしはお前のことを知らない」

「あ。そうだった。この状態では初対面だっけ。じゃあ、自己紹介し

とくか。私は瑠璃。色金・・・瑠璃色金に宿る神だよ」

「はあ!?!お前が!?!」

「なあーんか信じてないっぽく聞こえるんだけど!?!」

「当たり前だろうが！誰がそんな事言われて『ふうん、そうなんだ』つ

てアツサリ信じるんだよ！第一、実体化なんて出来るわけが・・・」

「それができちゃうんだよね。さつき風優がやった事でね」

「風優が・・・まさか、さつきのタロットカードか!?!」

「そ。せーかい。さつき風優が使ったカード《女帝》の効果で実体化し

たつてワケよ」

「へえ・・・じゃあ、瑠璃がアタシと闘うんだ」

「え？何言ってるの?」

「え」

瑠璃の答えに固まる理子。どうやら理解が追いついてないようだ。

「お前こそ何言ってるんだ？お前は風優を守るために具現化したん

じゃないのか!?!」

「え、違うけど。私はペース配分も出来ていない風優を回収しに来た

だけ。戦わないって」

「ふうん・・・でも、そういう訳にもいかないんだよね。だから」

『だから、アナタもここで始末する』ってか。・・・舐めんな。人

間の小娘風情が」

どごんっ

「……………っ!!!」

瑠璃の一撃によって思い切り壁に叩きつけられる理子。

「ま、死なない程度には手加減してやったんだから。感謝しなさいよね」

「だ、誰がお前なんか……………」

何とか壁から這い出た理子は瑠璃に反論する。

「そんな状態でまだ言うか。ま、いいや。理子ちゃん、あとでラッツオ打って安静に休憩しといたほうが良いよ。じゃあね」

風優を抱えて瑠璃は何処かに消えた。

瑠璃が消えた後、理子はその場へへたりこんでいた。それもそのはず。理子自身も限界も限界だからだ。この時点で平然と立っていられたらもうそれは人間辞めているレベルである。

理子は自身の懐から武偵手帳を取り出し、そのペンホルダーに手を突っ込み、『Razzz』と書かれた小型の注射器を取り出した。

Razzzとは、アドレナリンとモルヒネを組み合わせて凝縮したよ  
うな……………要は気付け薬・鎮痛剤の効果を兼ね備えた復活薬である。

そして、それを自身の胸に突き刺す。

まあ、その光景は男には見せてはマズいだろう。イロイロな意味で。(意味深)

突き刺した後は、瑠璃の助言通りにゆっくりと息を整えて、安静に休憩する事にする。

この薬は復活薬と同時に興奮剤でもある。薬が効きやすい体質の人は下手すれば正気を失うことだってある。

それで、正気を失って特攻してお陀仏……………なんてことも実際にあるくらいである。

なのだから、今の理子の選択は正しい選択と言える。

「はあ……………マジでこんなの想定外だよ。全く。なんなのさ……………ホント」

そうボヤク理子だった。

Side Out……………

## 第018弾 その頃のキンジと、役者は揃う

Side | Kinji

・・・まずい！

ラッツオでアリアを復活させた俺がまず第一に思ったのはそれだ。クスリが効きやすい体質なのか、ラッツオの効果がバツチリと出ており、アリアは正気を失っているようだ。

このまま、戦闘に出させたらさっきの二の舞になってしまう。

自分と理子の、戦力の優劣判断が出来ていないのがいい証拠だ。

「待て！アリア！マトモにやったって理子には勝てないぞ！」

「そんなの関係無い！は、な、せえええ!!! あんたなんか、何処かに隠れて片隅で震えていればいいのよ！」

「し、静かにするんだ、アリア！これじゃあ、『俺とお前が同じ部屋に居て、チームワークゼロだ』って事が理子にバレる！」

「そんなの構わない！あたしはどうせ『独唱曲』なんだから！理子は一人で片付ける！そもそもアンタはあたしの事なんて助けに来なくても良かったのに！」

「あんたはあたしのが嫌いなんでしょ!? アンタは言った！青海に行つて猫を探しに行く前に！あたしはちゃんと覚えてるもんっ！」

紅い瞳を興奮に潤ませているアリア。

どうやら簡単には落ち着いてはくれないようだ。

ああ、どうすれば、黙ってくれるのか。

アニメ声で叫ぶこの口を塞がねばならない。

だが、この両手を離せばアリアは俺を撃つて部屋を出ていってしまうだろう。

これを打開する方法は・・・無くはない。

アリアの弱点を突く最後の手段がある。

だが、それをした暁には俺は確実にヒステリアモードに、なつてしまっただろう。

辛い思い出のある、そして、兄さんを破滅に追い込んだヒステリアモード。

これになった俺を誰にも見せたくはない。特に女には。そして、絶対に自分からはなりたくないヒステリアモード。だが、こんな場面でそんな些細なことは言ってられない。背に腹はかえられないのだ。

「あたしは覚えてる！あたしにアンタは言った！『大キライだ』って！あたしはあの時はフツの顔してたけど——あたしはアンタのこと、『パートナー候補』だと思ってたのに！『大キライだ』って言われて——あの時は、本当は、胸が、ずきんって——」

ああ、許せ、アリア。これは風優の言葉を借りるなら「必要悪」ってやつだ。

「だからもういいの！アタシのことがキライならそれでいいの！アタシのことk——」

喚くアリアの口を俺は塞いだ。——自分の口で。

「っ!!!」

赤紫色の瞳を飛び出させん程に驚くアリア。

恋愛沙汰がニガテナこのチビ武偵は俺の決死のキスに、思った通り、完全に固まってくれた。

まあ、黙る以上の効果もあつたりしているが。

そして、これは諸刃の剣で。

小さくて、柔らかくて、桜の花弁のようで、俺のより幾分か熱いアリアの唇が火種となって。

こっちの……俺の全身へと火焰が循環して、駆け巡っていくのがわかる。

どくんっ！

体の中心がムクムクと強張って、ズキズキ疼くような感覚。灼けた熱いそこから堪えきれずパトスが迸るような気がする。

……凄い。こんな猛烈なヒステリアモード……生まれて初めて、だ……!!

俺はアリアから口を離し、息を継いだ。

お互いが硬直していたせいもあるだろうが、長いキスだった。

「アリア……許してくれ。この状況を打開するにはこうするしか、

なかった」

「……か……か、かぎ、あにや……」

「エリアがその場でへたりこむ。」

「バ、バ、バカキンジ……！あ、あんた、こ、こんな時に……こんな非常時に……なんてこと、すんのお……！あたし、あたし、あたし、ふあ、ふあ……ファーストキス、だったのに……！」

また騒ぎ出すかと心配していたが、どうやら杞憂だったようだ。

喉の奥から出る言葉は涙声で、脱力しきっており、掠れている。

「安心していい。俺もだよ」

「ばかあ……！せ、責任……！」

「ああ、どんな責任でも取ってあげるさ。……でも、先にお仕事の時間だ。」

「……！キンジ、あんた、また……」

「武偵憲章1条。『仲間を信じ、仲間を助けよ』。俺は、エリアを信じる。だからエリアも俺を信じてオトリにしてくれ。いいか。二人で協力して『武偵殺し』を、逮捕するぞ」

「やほー。ただいまりこりんが降臨しました。ここからはバッドエンドのお時間ですよー。くふふっ。くふふふっ」

理子はどこからか用意したのであろう鍵で、スイートルームのドアを開けてきた。

「あー、もう！なんで、こんなに計画が狂うかな!? 予め用意していたカードキーは破壊されちゃうしきー！」

「……は!? てつきり俺はカードキーで開錠したのかと思ったが、違ったようだ。」

「じゃあ、どうやって理子は開けたんだ……??」

「いくら、ヒステリアモードの俺だとしてもこればかりは理解不能だぞ……」

「まったく、風優ってば余計なことを。『自分の髪の毛を制御する能力の波導を同調させて開錠』なんてメンドイ事する羽目になったじゃん……なんだそれ。初耳だ。」

「しかも、これを発案したのが風優だし。それを作った事に喜べばい



いのやら、無駄な口スを喰らわせられた事を怨めば良いのか、フクザツなんだよ……」

発案者風優おまえかよ。理子の気持ちも解らんでもない。

「解る？この気持ち……」

「ああ、まあね……。俺も風優と結衣に似たような思いさせられてるしな」

「そっか。そうだよ。共感者がいるのは理子嬉しいな……だけど」

『「だけど……」なんだい？仔栗リス鼠ちゃん」

「へえ……その表情かお」

「……何か心当たりでもあるのかい？」

「くふふ。まあね。てか、アリアと何かしたんだ？しっかし良く出来るよね。こんな状況下で」

「……で、だけどあの色々な箇所リが小さい奴アは？まさかお陀仏死になつたとか？」

「さあな？武偵なんだから自分で推理してみたらどうだい？」

「ああんっ！……そういうキンジつてば、ス・テ・キっ！ドッキドキが止まらないよ。ヤバイかも。勢い余って殺しちゃうかもしれない」

「最初からそのつもりで来るといい。そうしなきゃ、お前が殺される」  
「最っつっ高！！愛してるよ、キンジ。さあ、私に見せてみてよ！その、オルメスのパートナーの力をつ！」

ワルサーP99の引き金を引こうとした理子に。

俺はベッド脇に隠しておいた酸素ボンベ（非常時専用）を盾にする様に掲げた。

何かを察し、そして悟った理子が一瞬、ほんの僅かに止まる。

だが、今の俺にとっては十分だ。

俺はそのボンベを投げつけながら、理子に飛びかかろうとする。零距离になってしまえば、その体格の差で圧倒する事ができる。キンっ！

掌の中で音を立て、隠しておいたバタフライ・ナイフを展開させる。

「——っ！」

理子が眉を寄せた。

その瞬間だった。

ぐらり。

「うッ!?」

エアポケットに落ち込んだのであろう飛行機は突然大きく傾いた。再び訪れたこの悪運だけはヒステリアモードの俺でも予想ができなかった。

足元が大きくブレて姿勢を崩した俺の目に映ったのは、傾いた部屋の中でワルサーをこちらの額に向けて笑う理子。

そして、その銃口から鉛玉が発射され、こちらに飛んでくるのが視えた。

前後上下左右……どの方向への回避は不可能。ならば、こうすればいい。

ギイイイイイインツツツ!!!

俺はバタフライナイフで銃弾を斬った。

自身でも今自分が行った事に驚愕だ。まさか上手く出来るとは。弾丸<sup>チヨッ</sup>斬<sup>ブ</sup>り。成功する確率は五分五分だと思っただがな。

そう思うと今回のヒステリアモードは凄まじい。

左右の壁に真つ二つに切断された縦断の突き刺さる音が聞こえた。「へえ……キンジもそれ、出来たんだ……。理子、驚いちやった」

何処か、感動を含んだ驚きに理子が目を見開いた。

その瞬間を見逃さず、俺はアリアから借りた黒いガバメントを理子に向けていた。

「動くな!」

「アリアを撃つよ!」

自分の体勢からこちらに銃を向けるのは間に合わない判断した理子。

シャワールーム（にいるであろうアリア）にワルサーを向ける。

その時だった。

がたんっ!

天井の荷物棚に潜んでいたアリアは転げ出てきざまに白銀のガバ

メントで理子の左右のワルサーを精密に撃ち落とす。

更にアリアは空中で拳銃を手放し背中から日本刀を2本同時に抜刀し、振り返った理子のナイフを持っていた左右のツインテールを切断する。

切断された理子の茶色いくせつ毛を結ったテールはナイフごと床に落ちる。

理子は両手を自分の側頭部にあて、(俺達の前で)初めて焦ったような声を上げた。

アリアは納刀後、流れる様な動作で拳銃を拾い上げる。

「峰・理子・リュパン・4世」

「殺人未遂の現行犯で逮捕するわー!」

俺とアリアが同時に黒と白銀のガバメントを理子に向ける。

すると、理子は満面の笑顔を見せて俺とアリアを交互に見る。

「そっかあ……。ベッドもシャワールームもブラフで本命はキャビネットの中かあ……。ダブルブラフなんてよっほど二人の息が合っていないと出来ない事なんだけどねえ……。」

「不本意だがそれなりの期間一緒に生活していたからな。合わせなくとも嫌でも合うさ」

「2人共、誇りに思っていないよ。相手が勝手に自滅してったとはいえ、あの風優を戦闘不能に追い込んだ理子をここまで追い詰めたんだから」

「……あ」

「え、ど、どうしたの……?アリアんにキーくん……。いきなり声なんかあげたりして」

「風優アイツの事すっかり忘れてた(わ)」

「ええ……。今頃!?多分だけどそれ聞いたらなゆなゆ、泣くと思うけど!」

「いや……。」

「それは無いわよ。理子」

「え?なんでそんなこと言えんのさ」

「だって風優だし」

「いや、そのりくつはおかしいからね!？」

アリアと俺の言葉にツツこんだのは理子と……戦闘不能になった(ハズの)(ピンピンしている) 風優だった。

Side | Out…

Side | Nayu

「いや、そのりくつはおかしいからね!？」

何故に復活早々、こんなツツコミせねばならんだ。この夫婦がっ!!

え?どうやって復活したかって?そりやあ……まあ……瑠璃の御蔭ですよ。

「え!?!なゆなゆ!?!いつの間に!?!気配なんて感じなかったんだけど!？」

「そんなもん、自然に気配消すなんて朝飯前だし。あ、ついさつき」

「マジで規格外だよお……なゆなゆ」

ええ……そんなに規格外かな私。(↑自覚なし)

「二十分なくらいに規格外だから!!」

総ツツコミが入る。酷っ!

私が若干凹んでいるとアリアが

「追い詰めるも何も、もうチェックメイトよ!」

話の筋を強引に戻した。

「ぶわあーか」

憎々しげに言った理子は髪を全体的に蠢かしている。

あー、ま、させないけどね☆

ひゅん

私は手に装着していた籠手のワイヤーを理子の髪に向かって投擲する。

「え」

理子はいきなり飛んできたワイヤーに驚く。

「あぶなっ!!!」

そして紙一重で回避する。

「(・皿・) チツ……外したか」

「いや、何すんの!?!危ないじゃん!!」

「殺さないから安心しろ。その髪にあるコントローラー目当てだし」

「コントローラーだと……?」

「どういう事なの、風優」

「理子は髪の中のコントローラーでこの飛行機を遠隔操作してた……ただそれだけよ」

その後、機体が大きく傾く。急降下している。

姿勢を崩したエリアは壁にぶつかり、キンジも踏ん張るので精一杯のようだ。

私はピンピンしている。そんなもん足に能力を発動させておけばなんとかなるし。

「ふふっ、ごーめーとー。なのでここからりりりんは逃げます。ばいばいきーんっ」

理子は脱兎のごとく逃げ出した。

私とキンジは廊下を走り、階段を降り、理子の後を追った。

理子はバーの片隅で窓に背中をつけるようにして立っていた。

「狭い飛行機の中、何処へ行こうってんだい、仔栗鼠ちゃん?」

「くふっ。キンジ、あとついでに風優。それ以上近づかないほうがいいよー?」

理子が白い歯をニイつと見せる。

この瞬間、「私はついにかよ!」と突っ込みたかったが、場違い感が半端ないので必死に堪えた。

私では偉い。(↑完膚無きまでの自画自賛)

『ご存知の通り、『武偵殺し』は爆弾使いですから」

「うん。知ってる」

「だから、『ご存知の通り』って前置きしてるでしょ?!」

「いや、定石なのかと」

「なんの!?!」

「お決まりと言うか……」

「だから、なんのお決まりなんなのさ!?!」

「それは……」

「それは・・・??」

「やっぱ、言えないわ」

「何そのオチ!?!」

「・・・で、何時になったら爆薬炸裂させて逃げるわけ? 理子」

「誰のせいだと思ってるの!?!」

「え・・・・・・・・・・キンジ?」

「間違いなく風優のせいだから!!」

「あ、そーなの。ま、いいわ。てな訳でさっさと逃げてくんない? 進まないし」

「あー、もー。調子狂うなあ・・・・・・・・。じゃあね。二人共。キンジあたりをイ・ウーにタンDEMさせようかと思ったけど、(精神的に) 疲れだし今回はやめとく。また今度にするね」

そう言っつて理子は爆薬を炸裂させてポツカリと空いた穴から落ちていった。

そして、制服を変形させたパラシュートで滑降していった。

あ、やっぱり前の予想は当たってたか。

ちやんと予め飛行機の高度も下げてるし。学習の効果出てるね。やるじゃん。

つと、今はそんな場合じゃない。

だつて、同時にキンジも落ちそうになっていたから。

コレはマズイわ。・・・よつと。

ひゅんっ

キンジの身体にワイヤーを巻きつけて引き揚げる。

「大丈夫? キンジ」

「ああ、すまない。助かった、風優」

「キンジ、アンタはアリアと合流してくれる?」

「どうしてだい、風優」

「なんかき、引っかかるんだよね。私のカンが。何か起きそうな気がする」

「・・・・・・・・なるほど。確かに風優のカンはほぼほぼ的中するしな・・・・・・・・。わかったよ」

「ありがとう」

「・・・で、凧優はどうするんだい？」

「私はとりま理子と合流する。その方が成功確率も上がるし」  
「理由はあえて聞かないでおくよ」

「そうしてくれると助かる」

キンジと別れた私は先程、理子が落ちた穴から飛び降りる。

パラシュートとかは勿論・・・無い。

でも問題はないんだよ。フラグとかじゃなく。

「呑気に語ってないでさっさとやる！」

「解ってるってば」

足元に能力を発動させてと・・・。

これで、浮遊できちやうんだよね。地面を歩くイメージを持ってい  
れば大丈夫。

さて・・・理子はどこかなつと。

・・・あ、いたわ。

「理子、さつきぶり」

「・・・!? 凧優なんでここに!？」

「いや、少しばかりマズイ事になってな」

「・・・何それ」

「結果だけ言うと理子、アンタ、始末対象になってるぞ」

「!?・・・マジ?」

「マジ。さつきアキに連絡取ったら無人戦闘機とミサイルが飛んでき  
てるって」

「なんで!？」

「多分、老害共が私達を始末したかったんだろ? 反逆者と任務失敗者  
を」

「ねえ、凧優、少し聞いてもいい？」

「ん? 推測でいいなら、どうぞ」

「上の連中老害共にとって私はどんな扱いだったのかな？」

「体の良い捨て駒だろーな。成功すれば結果オーライくらいの」

「・・・凧優自身はどう思ってるの? 本音で」

「気の合う友達でパートナー。それじゃダメ？」

「……良いよ。すごく嬉しい。こんな私でもそう言ってくれるんだ」  
『「こんな』とか言わないの。さて、理子良い？』」

「何、なゆなゆ」

「今の私達には3つ選択肢があるの」

『「3つの選択肢」……？』

「① このまま無抵抗で死ぬ ② 迎撃して生き残る ③ とにかく逃げる」

「何ソレ。聞くまでもないじゃん。勿論、②に決まってるじゃん」

「そっか。安心した」

「協力してくれるよね？」

「当然」

「じゃあ、行くよ。しくらないでよ、魔術師さん？」

「上等よ。そっちこそしくるなよ。武偵殺しさん」

私と理子は老害共の思惑を叩きのめすべく、共闘することになった。

続くんだよ。



第019弾 返り☆討ちと、ついでにダイナミック着陸？

「で、なゆなゆどうする？この数を二人で裁くのはそーとー無理ゲーだよ」

「ま、だよねえ。でも4人いれば大丈夫でしょ」

「え？他にも援護する人居るの？」

「元々サポート要員だった約2名」

「サポート要員いたんだ……。そりやそうか」

「実力もあるし難無くいけるでしょ」

「そ、そうなんだ……。」

「さて、来るよ理子。パラシユートは邪魔になるし、しまっといてね」  
「待って、理子どう空中戦闘しろと!？」

「足裏に能力発動させる。地面を歩くイメージをしながらするとやりやすい」

「足裏、地面……。」

理子は私の言われた通りに能力を発動させる。

「おお……。凄い、空中歩行出来ちゃったよ」

「これ、初歩の初歩だからね。出来て当たり前」

「ええ……。なゆなゆの初歩の定義知りたい」

「この一連の騒動終わったらな。理子、さっきのアレできる？」

「え、あ、うん……。出来るけど？」

理子は髪の毛を蠢かせ始めた。

「そしたら、そのまま髪の毛を武器に変形させるイメージでやってみて」

「え、武器に……。？」

「いいから」

「あ、うん……。解った」

理子は髪の毛を武器に変形させるイメージを練る。

すると、理子の髪は七叉の槍に変化していた。

「はい、これで七 又 槍の完成」

「うわ、あつさり出来るもんなんだ、これ」

「いや、理子の飲み込みが早いだけ。つか、理子が使っていたアレができれば完全会得なんてスグだし」

「そ、そうだったんだ・・・」

「だけど、これ結構能力消費大きいから、長時間使えないのを留意して  
いて」

「おっけー。なゆなゆ」

「じゃあ・・・行きますか。殲☆滅の時間すたーと」

その刹那だった。

ミサイルと無人戦闘機が2人に襲いかかる。

「理子、無人戦闘機の方頼むわ。確実に抉ればワンバンで撃破できる  
から」

「おっけー」

理子は無人戦闘機の制御装置を七 又 槍で確実に抉って次々と  
撃墜させていく。

「くふ。もう1つオマケだよ。実はこれも使えちゃうんだよねツ」

「魔法の射手・連弾・雷の17矢」

光速で飛来する雷の矢が次々と更に戦闘機を撃ち落としていく。

「へえ・・・やるじゃん、理子。私も負けてられないな・・・」

「魔法の射手・連弾・氷の17矢」

氷の矢が負けじと次々とミサイルを撃ち落としていく。ミサイル  
が氷の矢を避けるが、氷の矢には追尾機能も備わっており、確実に  
撃墜させていく。

「ねえ・・・なゆなゆ、これ数多くない!？」

理子の言うとおりで・・・数が多すぎる。なにこのオーバーキル  
は。

「そうね・・・このままだとジリ貧確実よね。相手は無人だし、  
多分それが狙いかもね」

2人で突破なんて限度にも程がある。

まだなの・・・。

あの2人……、アキとヒメはまだ来ないの……!?

「ヴィシユ・タル リ・シユタル・ヴァンゲイト」

「ラスト・テイル マイ・マジックスキル マギステル」

「……やっとなの。で、私も合わせろって事ね。」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック」

「ト・シユンボライオン・テイアーコネット・モイ・バシレク・ウーラニオーノーン「二契約に従い我に従え」」

「ホ・テユラネ・フロゴス高殿の王」

「ヘー・クリユスタリネー・バシレイア炎の霸王」

「エビゲネーテートー・アイタルース氷の女王」

「ケラウネ・ホス・テイテーナス・フテイレイン・ヘカトンタキス・カイ来れ 巨神を滅ぼす 燃ゆる立つ 雷霆 百重千重と

重なりて走れよ稲妻」

「エビゲネーテートー・フロクス・カタルセオース・フロギネー・ロンファイア・レウサン・トリン・ピュール・カイ・テイオン来れ 浄化の炎燃え盛る大剣ほとばしれよソドムを焼きし

火と硫黄罪ありし者を死の塵に」

「ノリス・エビゲネーテートー・ガレレーネー・バシレイア・トリン・バゲトウ・キリオン・エトリン疾く来たれ 静謐なる 千年氷原王国」

「キトリブル・アストラペー千年の雷」

「ウーラニア・フロゴース燃える天空」

「アントス・バゲトウ・キリオン・エトリン千年氷華」

広範囲に及ぶ雷・炎・氷の一撃が戦闘機・ミサイルを次々と殲滅させていく。

「つたく、遅いよ、二人共」

「それでも、最速で来たんだがな……」

「そうだよ、邪魔者が多かつたんだから仕方ないじゃない」

「遅れた分しつかり仕事してよね」

「ハイハイ。キビシーねえ、魔術師サマは」

「解ってるってば、ミナ」

「……って、軽口叩いてないで、へるぷみーなんだけどお!!!」

「ヤクラー・テイオ・グラン・デニスゴメン、理子。氷槍弾雨!!」

周囲に展開させた大量の氷片の槍が一気に降り注ぐ。

しかし、降り注ぐのみの攻撃なので横からの攻撃は続いている。

「アキ!!」

「ウエニアント・スピリトウス・アエリアーレス・フルグリエンテース来れ 雷精風の精!! 雷を纏いて吹きすさべ

アウストリーナ ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ  
南洋の嵐 雷の暴風!!!

強力な旋風と稲妻を発生し、残りを消し飛ばした。

「・・・これで半分かよ。この状態で続けるのも無理があるぞ・・・」  
アキの言い分はもつともだ。このままでは全員お陀仏だ。

手っ取り早くケリつけねば・・・。

「アキ、ヒメ、あの術式出来る!?!」

「アレか・・・。確かにそれの方が手っ取り早いな」

「超短期決戦・・・だね」

「ヒメの場合そうなるな・・・」

「・・・でも、迷ってる暇無いよね」

「だな」

「解放・固定、千・年・氷・華」

「解放・固定、千・の・雷」

「解放・固定、奈落の業火」

「二掌 握」

「術式兵装・氷の女王」

「術式兵装・雷 天 大 壮」

「術式兵装・炎 煉 我」

高威力の魔法を3人は展開させた後、それを相手に使わず自身に向けて発動させる。

3人の姿はさつきとは打って変わって外装された姿となっていた。  
その姿には神々しさも感じられる。

その時だった。

ドウンガアン

何かミサイルとは思えない違う音が鳴り響いた。

ミサイルが3発、クリーンヒットした。

アリアとキンジが乗る飛行機に。

「!!??」

いきなりの事に驚愕する私達。

飛行機はどんどん高度が下がっている。

キンジとアリアが操縦しているだろうが、多分燃料漏れを起こして

いる。

このままだと墜落も有り得る。

私達がサポートに回れば、それも回避できる。

が、ミサイルと無人戦闘機、それに空飛ぶ駆動鎧（どこから来たんだ）が行く手を阻んでいた。

一体どうすれば……。

「なゆなゆ、ゆいゆい、キーくとアリアんの所に行つて。こっちは理子とアツキーで制圧するから」

「え、り、理子……？」

「待て、術式兵装してないお前だとマズイ事になるぞ？」

「大丈夫だよ、アツキー。だって、理子、それできるし」

「二ええ!?!」

今、理子は何と言つた？ 術式兵装が出来るの……!?!

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

「契約に従い 我に従え 高殿の王 来れ

鬼神を滅ぼす 燃ゆる立つ 雷霆 遠隔補助

魔法陣展開 第一から第十 目標捕捉 範囲固定

域内精霊 圧力臨界まで 加圧 3.2.2.臨界圧

拘束解除 全雷 精神力解放

百重千重と重なりて走れよ稲妻」

理子は詠唱で千の雷を発動させる。

「解放・固定、千の雷」

「術式兵装・雷天・大壮」

そしてアキと同じ「術式兵装・雷天」

大壮」を発動させた。

「これで、大丈夫でしょ？だから、行つてきなよ」

「ミナ……」

「理子、アキここは頼む。ヒメ、行くよ」

「おっけー」

「応よ」

「◇◇◇、了解！」

私とヒメはキンジとアリアが乗る飛行機に転移した。

Side Riko

「行ったか……」

「そだね、アッキー」

「しかし、お前がそれ使えたとは意外だったぜ」

「そうかな？お母様だし、娘に教えてたつて不思議じゃないでしょ？」

「あー確かに。師匠だったら有り得るわな」

「くふっ、そうでしょ。さて、アッキー」

「何だ？理子」

「いっちょよ、暴れちゃう？」

「だな。楽しい楽しい殲☆滅の」

「始まりだ!!!」

私達の殲☆滅が幕を開けた。

ノーミスでクリアしてやんよ!!

Side Out…

Side Nayu

さてと、このままだと墜落……良くて撃墜だろう。

てか、いつの間にも自衛隊の戦闘機いるのよ。

しかもANA600便を撃墜する気マンマンっぽいし。

「どうする？…ミナ」

「無論、撃墜」

「だよねーwwww」

「じゃあ、私が。」

ニウイス・カースス  
「氷 爆」

氷が瞬時に発生し、凍気と爆風による攻撃で戦闘機は消し飛んだ。

パイロットは無傷でパラシュートでどこかへ飛んでいった。

其奴等がどこに行行ったかなんて知った事か。

「やるうー、ミナ」

「時間無いしさっさとやるか」

「あ、そだね」

その時、通信が入った。

『風優、今何処に居る・・・？』

「キンジか・・・。今、飛行機の上だけど」

『飛行機の上・・・？』

「そ。今、キンジとアリアが操縦してる飛行機のね。序でにヒメも一緒よ」

『ヒメも居るのか・・・。それよりも大変なんだ』

「もう知ってる。羽田は封鎖済みだから空き地島に着陸するんでしょ」

『ああ』

「とにかく飛ばすことだけ考えて。機体の安定操作は私たちでアシストするから」

『解った』

『と、いうわけで武藤、当機はこれより着陸準備に入る』

『待て、待て、キンジ、「空き地島」は雨で濡れてる！2，050じや停止できねえぞ！』

「大丈夫よ、剛毅。そこは私は何とかする」

『その声・・・まさか、結衣か？』

「ん。そうだよ。序でに風優も居るけど」

「オイコラ、私をさり気無く序で扱いすんな！さっきの仕返しか？」

『風優もそこに居るのかよ！ああ、もう！勝手にしやがれ！しくじったら轢いてやるからな！』

「・・・だつてさ、ミナ」

「そうね、ヒメ」

「上等だよ、やってやんよ!!!」

新宿のビル街を掠める様にANA600便は大きく右旋回する。

東京ドーム、東京駅を飛び越え、雨の銀座の街を横切っていく。

もうそろそろ東京湾が見えてくるはずだ・・・。

だが・・・。

「暗いね。想像以上に・・・」

「やっぱりか・・・」

『・・・・・・・・・・』

どうやら操縦席のキンジも同じ結論みたいだ。

『キンジ、大丈夫よ。アンタになら出来る。ううん、出来なくちゃいけないのよ。武偵を辞めたいのなら、武偵のまままで死んだ時点でそこで負けよ。それに、アタシだって・・・・・・・・ママをまだ助けてない!!』

アリアの言葉の途中で、それはまるで、魔法のように・・・・・・・・。『アタシたちはまだ死ねないのよ！こんなところで死んでるわけにはいかないわ！そうでしょ、 風優、結衣』

「確かに、その通りよね」

「そうね。こんなところで死んでたら私達の二つ名が廃るとは思わなくて？・魔術師サン？」

「ハツ・・・・・・・・そうよね。んじやまあ、いっちよ起こしてみますか、大逆転ハッピーエンドってやつをねえ。着いてこれるよね、隠者サン？」

「誰に言ってるの。とーぜんでしょ。キンジにアリアも出来るよね？」

『『当然だ(よ)!!』』

その直後だった。

真っ暗だった空き地島に光が灯っていく。

『キンジ、 風優、 結衣！ 見えてるか、 バカ共!!』

「『武藤（剛毅）!?!』」

『お前等が死ぬと、白ゆ・・・・・・・・いや、泣く人がいるからよオ！オレ、車輛科で一番デカイモーターボートをパクっちまったんだぞ！<sup>アムド</sup>装備科の懐中電灯も、みんなが無許可で持ち出してきたんだ！全員分の反省文、後でお前等が書け！』

その言葉の後、キンジと武藤の電話回線に3者間通信、4者間通信・・・・・・・・と、割り込んでくる回線があった。

その声は、あのバスジャックで私たちが助けた生徒達だった。

皆、学園島から空き地島に渡り、誘導灯を作ってくれているのね・・・・・・・・。

『風優ちゃん、聞こえる?』



「白雪!? 貴女も其処に居るの!?!」

『うん。そうだよ。皆の事は私が守るから……。だから、風優ちやんは思い切りやって!』

「大丈夫よ。飛行機も中のキンジとアリアは私が守るから」  
皆……ありがとう。

私は空き地島の中央上空に向かう。

本当ならば、この範囲は150Ft……およそ45m四方が限界なのだが、今なら……出来そうだ。

たかが2050mだ。やってやんよ!

ANA600便が雨の人工浮島に強行着陸し、逆噴射がかかる。

そして、地上走行用のステアリングホイールで機体が大きくカーブした。

なうっ……!!

ト・シユンボライオン・ディア・コネット・モイ・ヘー・ クリユスタリネー・バシレイア・エビゲネー・トロー  
「契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、

とこしえのやみえいえんのひょうが!!」

空き地島一帯が氷に包まれる。

雨の滑走路、2050では止まらない。だから私が作る。

それが止まれるヤツを。

さて、もう一つ仕込まねば。

ウエニアント・スピリトウス・グラキア・レス・エクステンダントウル・アーエーリ・トウンドラム・エト・グラキエーム・ロキー・  
「来れ、氷、精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と

ノクテイス・アルバエ・クリユスタリザティオー・テルストリス  
氷河を……凍る大地!!!」

ANA600便の進路上に巨大な氷柱が顕現する。

ガスンンンンンンンンンンツ!!!

翼に氷柱をぶち当て、引っ掛けて、600便はグルリとその機体を回すように滑らせながら……止まった。

良かった……全部上手く行って。

そう安堵した直後、無理し過ぎたのか、私の意識は次第に闇の中に消えていった。

Side | Out…

Side | Mizuhō & ???

「畜生がつ……何が『簡単な始末』だ。未海の奴……この

俺を騙しやがって！今度会ったらタダじゃおかねえ！」

俺は自衛隊に潜入させた部下から失敗の報を聞き、憤慨した。

八つ当たりも良いところだがあの女狐に恨み節の一つや二つ言っても問題はないだろう。

「ちよつと、お話いいかしら？船橋優弥くん」

「あん？誰だ、こんな時に。今、俺は虫の居所が悪いんだ」

「あら、奇遇ね。私もなのよね。だから、消えてね？」

「フン。なら、やれるもんな……」

「スベライオン・ミクロン・バリユ・メラん」  
「小さく黒く重い渦」

「なっ……。この技。まさか、お前は——」

黒い球体を柳のようにくつつき、そこから球体が渦のようになつて炸裂する。

そして、優弥の存在自体が消滅した。

「……やっぱり未海、貴女なのね。一体どこまで堕ちれば気が済むのよ……」

「待つてなさいよ。未海。絶対に貴女を全部へし折つてでも止めてあげるから」

Side Out…

続くんだよ。

## 第020弾 ことの終わりは何故か病院で

私が目を覚ましたら、その眼前には見知らない……いや、見覚えのある天井が広がっていた。

ここは、武偵病院の個室……?えっと、たしか私は……

「……貴女は能力チカラの使いすぎで倒れてここに運ばれてきたんですよ」

「あ、ブラド」

「今はその名で呼ぶんじゃないねえ。この姿の時は『小夜鳴先生さよなき』と呼べ、バカ風優」

「むう……『バカ』とは何よ、『バカ』って。ヒメと一緒にしないで」

「いや、テメーも隠者姫神と五十歩百歩だからな!?毎回毎回懲りずにぶっ倒れやがって」

「……」

「待てや。目を逸らすんじゃないよ!」

「だって、このくらい大丈夫でしょ。と思っただし」

「だーかーらー、その過信やメろって。お前が運ばれてくる度に俺の休日が減るんだよ!」

「まーいいじゃない。休日もヒマなんだし」

「んなわけあるか!こちとら一族内の仕事もあるんだからな!俺を過労死させる気か!」

「竜悴公姫ドラキユリアだし死なないじゃん、アンタは」

「確かに魔臓同時消滅しない限りは死なないけどよ……もういい。あんまり他人を心配させるんじゃないやねえぞ」

「え……?どゆこと?」

「こういう事だっ!」

ブラド  
小夜鳴が個室のドアを開けると、扉の前にいたであろう  
パーティナー(入院中)戦妹（あかりの）付き添い  
理子・アリア・あかり・ライカ・志乃・麒麟が雪崩込んできた。

「みんな、何してんの……?」

「『何してんの……?』じゃないよ、なゆなゆ!もお、超心配したんだからあつ!」

「そうよ!駆けつけてみれば、そこに倒れてるし。心配にもなるわよ」

！」

「そうですよ！あんまり心配させないでください！なゆおねーちゃん」

「（あかりちゃんに『おねーちゃん』でなんてうらやまけしからん……）↑※嫉妬<sup>jealous</sup>」

「……志乃もぶれねーな。てか、論点ずれてるだろ……」

「まあまあ、お姉様。佐々木様は平常運転だし良いじゃないですか（むぎゅ）↑※抱きついた

「お、おい……。こんなところで抱きつくなよ／／／」↑※その割にはなんか嬉しそう？

皆は私の事が心配で見舞いに来てくれたらしい。

……ホント、バカだな、私。

こんなに心配してくれる人が居るのに、無茶して突っ走るなんてさ……。

「あーっ！なゆなゆが反省してるー!!めずらしー!!」

「なーにー言ってるのかなあー？理子ちゃん？（グリグリ）」

「え、ちよ、イタイイタイ！理子も怪我人なんですけど！アリアん、へるぶー」

「イヤよ。完全な自業自得じゃないの」

「ええ……」

「……ったく、てめーら安静にしてろって。じゃねえと入院期間伸ばすぞ？」（脅迫）

「「ハイ……」」

「貴女達も面会時間が終了しますし、一度お帰りになられてはどうですか？」（ニッコリ）

「「は、ハイ……!!!お邪魔しましたっ!!!」」

小夜鳴（ブラド）によって、アリア・理子は自分の病室に戻り、あかり達は帰っていった。

皆が退室したのを見計らって、急にマジトーンになる小夜鳴。

「ふう……やっど話せるか」

「何をなの、無限罪」

「瑞穂からの報告だ、魔術師」

「……詳細」

「このハイジャックの裏の始末劇の黒幕を始末したそうだ」

「そう……誰だったの、そいつ」

「『船橋優弥』っていうガキだ」

「『船橋』……。ああ、あの新人クンか。また大胆なことを」

「で、そいつの裏に大元がいるんだとよ」

「『大元』……。誰よ」

「『橘 未海』。聞いたことあるだろ？」

「……。なんで未海姉が!？」

「俺にも詳細は知らんが、あのガキが言ってたらしい。『未海の奴……。この俺を騙しやがって!今度会ったらタダじゃおかねえ!』とな」

「未海姉の狙いはなんなのよ……一体」

「さあな。俺にもよく解らん。だが、今後も仕掛けてくることは確かだ」

「そうね……。警戒に越したことはないわね」

「だな。瑞穂もそう言ってたな……。そうだ、瑞穂から伝言だとよ」

「『伝言』……。?』」

「『愛弟子の動向には気をつけろ』だとよ」

「なんで、そこでジャンヌが出てくるわけ?」

「さあな。恐らく理子と同じ感じだろ?」

「……。解った、留意しとく」

「……。つと、こんな時間か。そろそろ戻るわ」

「うん。ありがとう」

「気にすんな。俺とお前の仲だろ?」

「……。そうね」

「安静にしてろよ?」

「解ってるって。ブラドも理子と和解頑張れよ?」

「解ってるよ……。じゃあな」

ばたん

扉が閉まり、ブラド小夜鳴は私の部屋から退室した。

それから、3日後、アリアと理子は退院した。

アリアはロンドン武偵局に連れ戻されそうになったが、キンジの行動によって無くなった。

そして正式にパートナーになるらしい。まあ、キンジは納得行っていないみたいだったけど。

ヒメはヒメで、それを受け入れて諦め……る事はなく、アリアと喧嘩になつてゐることもあるようだ。

キンジが見舞いに来てた時に愚痴つてたわwww  
ドン（。ㇿ。）マイ、キンジ（笑）

理子の方はブラドとの過去の誤解が解け、和解できたようだ。

だが、私の方は完治が遅れ、まだ退院できていない。

まだ、安静にしてなきゃいけないらしい。

あーあ、情けな。

そう思いつつ嘆息し、スマホをチェックする。  
すると

未読メール 98件

留守録 18件

となっていた……。

その数の多さにドン引きする私。

だが、いつまでも現実逃避してる訳にもいかないので、宛先確認。  
そして、その事実には驚愕の私だった。

「<（；▽；）…うわぁ…>」

瑠璃もドン引きの様子。

それもその筈。メール49件、留守録全部……、  
白雪から来てるんだもん！

ナニコレコワイ。

しかも開くと内容同じものばかりだし。

「風優ちゃん、キンちゃんが女の子と同棲してハーレム状態になつて

るってホント？」

.....。

.....。

.....。

なんなんのよ.....ガチで。

これ、平穩無いよねえ!?

どうすりやいいのよお!!!!

これから待ち受ける波乱に落胆を隠せない私であった。

第1章 La bambinada I, ARIA... Fin  
To Be Continued!!!

おまけ 理子とブラド

コンコン

「はい、どうぞー」

理子は病室のドアをノックされたので、ノックした人物の入室を許可する。

「気分はどうですか？峰さん」

「え、うん。良好です.....小夜鳴先生」

病室に入ってきたのは理子の主治医で救護科の非常勤講師、小夜鳴徹先生だった。

お決まりのように容態を聞かれたので、理子は「特に問題ない」と答える。

「そうですか……。能力使用後の後遺症も無いようですし、早くて3日後位には退院出来るでしょう」

「ありがとうございます」

「主治医として当然ですよ。峰さん、今、お時間大丈夫ですか？少し話したいことがあります」

「え……。は、はい大丈夫です」

……。？なんだろう、小夜鳴先生が理子に話したい事って。

……。まさか、愛の告白!?

そんな、生徒と教師が恋に落ちるなんて……。

禁断過ぎるシチュジャン……!!

「何妄想に浸ってたんだ、早よ戻って来い、4世」

「!?!? ブラド!?なんでテメエがここに……!」

現実に戻された。

そして怨敵が居た。

「中々に上等の殺気だな。成程、鍛錬は積んでるってわけか」

「……。また、檻の中へ連れ戻しに来たのか!?失敗して無様に負けたあたしを」

「はあ?何言ってるんだ、お前。そんなつもりはサラサラ無いが」

「折角、あたしは自由を得たんだ、だからお前に束縛される覚えは無い!」

「ちったあ、聞けよ。ヒトの話を。だから、お前をどうこうする気は無えよ」

「え……。そんな、嘘言ったってあたしは信じない!」

「だーかーら、親友の娘を嗜虐するとかどんだけ腐ってたんだ、俺は。そこまでしねーって」

「でも、現にお前はあたしを閉じ込めて監禁してんじゃねえか!!!」

「……。仕方なかったんだよ。あの時の一族の状況下ではな……」



「どういう・・・事!？」

「あの当時、親友の娘だったお前を俺はアイツ等以上に愛情注いで育てようと思った。そう、本当の娘のようにな。そして、それは妻も、娘のヒルダも了承した」

「だがな、あの当時、いたんだよ。一族の中にそれを快く思わない奴等がな。其奴等によって、俺達家族に賛同してた奴等は殺された。そして、妻を操って人質に獲りやがった」

「そして・・・言ったんだ。『こいつの命が惜しけりやリュパン家の娘を檻に閉じ込めろ』とな。同胞を殺され、愛する妻を人質に獲られた俺は精神が潰れてたんだ。それで・・・」

「で、あたしを檻に閉じ込めたのか・・・」

「ああ。すまなかつた。今謝つても許されねえって事は解っている！だが、あの時はああするしかなかったんだ！それだけは解つてくれ！」

「・・・・・・・・顔を上げて、ブラド・・・・・・・・ううん。お義父さま」

「え・・・・・・・・お前、今、何と・・・・・・・・」

「・・・・・・・・やっぱり、そうだったんだ。だって、あの時、よく考えれば不自然だなんて思ったもん」

「あたしが逃げ出した時、やけに下僕の狼たちの動きが不自然だったんだよ。まるで、私を追いかけられるんじゃないやなくて逃げるのを手助けしてるみたいだったし」

「それに、なゆなゆが合流した時もなゆなゆ、内部まで知り過ぎてたもの。これって、一族の誰かが教えない限り、なゆなゆって言ったって無理があるじゃん」

「・・・・・・・・・・!気づいて・・・・・・・・たのか!？」

「変かかって薄々思ってたけど、お義父さまの話聞いて解つたの」

「そうか・・・・・・・・。流石、探偵科のAランクだけあるな。そうだ、預かり物を返す」

「『預かり物』・・・・・・・・?」

お義父さまが持っていたのは十字架ロザリオのペンダントだった。

昔、お母様が理子にくれた物に酷似している。

「え．．．、これって．．．．．」

「それは、お前の母親が生前、最後にお前に贈ったプレゼントの本物だ」

『『本物』．．．!?じゃあ、これはレプリカなの!』」

「ああ。まあ、色金が入ってることに間違いはないんだがな」

「このロザリオは、生前お前の母親からの依頼で瑠璃色金を埋め込んでいるんだ」

「瑠璃色金．．．それって．．．．．」

なゆなゆの相棒の瑠璃神の．．．?

「ああ。一度、首に掛けてみる」

「え、う、うん．．．．．」

私はお義父さまから、十字架ロザリオを受け取り、首に付ける。

すると、その瞬間、暖かい光に包まれる感じがした。

「どうだ．．．?」

「うん、なんか体力が戻つてるとい感じはあるかな．．．」

「そうか、なら大丈夫だ。上手く適応出来てるんだろう」

「そっか。ありがと。お義父さま」

「む．．．れ、礼には及ばねえよ。俺は親友の依頼を果たしたただけだかなー!」

「ふふっ．．．．ツンデレ乙」

「なっ．．．親を誂うんじゃねえ!」

「わーお義父さまが怒ったー!」

「にやろー。そうだ、理子。ゲームしないか?」

「ゲーム．．．?」

「ああ。お前のそれを使いこなした全力が見たいんでな。一段落したら、お前の仲間たちも一緒に参加のお宝奪取ゲーム」

「．．．?」

「俺の屋敷に忍び込んで宝物を奪うだけさ。簡単だろ?」

「ふーん。なるほどねえ．．．?怪盗の血が騒ぐよ、お義父さま」

「だろ?乗るか?」

「乗った」

気づけば、臨戦態勢だったあたしはいつの間にかお義父さまと笑い合っていた。

なんか・・・久々に家族と触れ合っている感じがするよ。

家族と過ごす日々ってこんな感じなのかな？お父様、お母様。

END

## AA編①

### 第021弾 もうひとつのはじまりは戦姉妹試験勝負

もう、あんな思いはしたくない。

だから、あたしは強くなって皆を護れるような武偵になるんだ。

その為に、まずはSランク武偵の神崎・H・アリア先輩と戦姉妹になるんだ。

あたしは妹・ののかの（必死の）援護もあつて、今日はわりかし余裕を持って登校できていた。

「おはよ。あかり」

校門をくぐり、暫く歩いていると1人の先輩に声をかけられた。

「あつ……風優おねー……風優先輩おはようございます」

水無瀬風優先輩。あたしと同じ強襲科と情報科の掛け持ちで、ランクはA。

強襲科内での実力も高く、アリア先輩と並ぶ実力者だ。

そして、昔馴染みでもあつたりする。

風優おねーちゃんは昔、私達の里に修行に来てて、そこで仲良くなった。

「もう……別に気にしなくてもいいのに」

「そうはいかないですよ……」

「そっか」

あたしと風優先輩は暫く2人で校舎まで会話しながら歩いていた。

その途中で一角がざわついていて

「なんか騒がしいね……」

「そうね。何かあつたのかしら」

あたし達もその一角の中に入っていく。

「車輛科の女の子がやられてる!」

「たしか、アイツ等中国の窃盗団グループだったっけ。

『トイレ貸せと言っただけ正据?出借?所』とか『人権無視するな不要当成人?无』とか喚いてるわね……

ちよつと行つてくる」

そう言つて、荷物をあたしに預けた風優先輩は

「在那里之前做!!」

「・・・おい、あれ・・・」

「風優!水無瀬風優だ・・・!」

周りの生徒達もざわつき始める。

「なんだ、このガキは  
「什么?、?个小家?」

男の1人が風優先輩に近づいた瞬間、

風優先輩は顎に綺麗な掌底を決めていた。

男は仰け反る。その隙を逃さず、風優先輩は四方投げで男を沈め、

男の一人が地面とご対面。

「?个小家?!!!」

殴りかかつてくる男達の死角になる箇所を狙つてワンパンで沈め、二人が地面とご対面。

腕をふりかざすように攻撃してくる男の一撃を難なく躲し、横っ腹に蹴りをぶち込んで沈める。

そして突つ込んでくる大柄な男も突進を受け流して、相手が失速したところの上からのサマーソルト。

勢いよく地面とご対面しキスを交わした男はそのまま失神した。

そして、屍(死んでないけど)の丘が出来ていた。

「全<sup>全</sup>然<sup>往</sup>死<sup>生</sup>亡<sup>際</sup>?候<sup>の</sup>坏<sup>悪</sup>的人<sup>い</sup>?...」

えげつない制圧劇を見せた風優先輩は流暢な中国語でいう中・・・

「風優!」

アリア先輩が騒ぎを聞きつけたのか、こちらに駆け寄ってきた。

「つたく、遅いわよ、アリア。こいつらの後処理頼むわ」

「後処理つて・・・また派手にやったわね」

「私の平穩邪魔するアイツ等が悪い。さてと・・・あかり、行きましょ?」

「は、はい・・・!」

この時、あたしの心は確実に揺れ動いていた。

1年A組の教室内ではさっきの話題で持ちきりだった。

朝のHRが始まるまでは皆が先程の過剰過ぎる風優先輩を口々に語っていた。

あたしはそれを鼻高々に聞きながら、戦姉妹申請用紙をシャープペンでせっせと書いていた。

その用紙の「申請希望者」の欄に「水無瀬風優」と風優先輩の名前を書くだけなのに、なんだか嬉しくなってしまう。そんな気持ちでニコニコしていると……

バツ

その用紙を横から取られ、更に後ろから抱えられて強引に席から立たされてしまった。

「わっ!!」

こんなイタズラするのは一人しかいない。

さっきまであたしの左隣でZファンタジー<sup>ガ</sup>を読んでいた火野ライカだ。

あたしと同じ強襲科<sup>アサルト</sup>の所属でランクはB。身長は確か165cmだった気がする。

それにスタイルも羨ましい位に……

「何か失礼なこと考えてないか?……それより、あかりーお前、風優先輩と戦姉妹契約したいのか?」

「何も考えてないよ!……って、な、なにすんだー!このチカン!!」  
そう反論したあたしは悪くない。

だって……ライカつてばイヤらしい目であたしのムネ揉んでくるし。

そして、あたしが届かない位置に用紙を持ち上げてるのが更にムカつく……

「戦姉妹……?」

「あの二人組特訓制度の……ですか?」

そう尋ねてきたのはあたしの右隣の席に座っていた佐々木志乃ちゃんだ。

志乃ちゃんは探偵科<sup>インケスタ</sup>の所属で艶光りの黒髪をもつ正に大和撫子っ

てタイプだ。

「そんなに褒められると照れちゃいます……」

志乃ちゃんは顔を紅くして恥ずかしがっていた。

「え……?」

あたしだけじゃなくライカもハモった。

声に出してなかったのになぜに伝わったんだろう?

志乃ちゃんは……超偵じゃなかったよね?

ライカの方を見ると「確か……そのはずだ」と言わんばかりに頷いていた。

「ハッ……今のは忘れてください／＼」

「うん（おう）、わかった……」

「で、話を戻すけど志乃の言うとおりだよ。一人の先輩の下で直接指導を受けつつ1年間過ごすやつ」

「あかり、お前、先輩のランク知ってんのか?ランクはAだが、Sランク上位相当だぞ?戦姉妹<sup>アマミカ</sup>を志望した奴60人連続不採用で『もつと骨のあるやつ居ないの?』って言って言ったんだって。お前みたいなEランク武偵選んでもらえる訳無いだろ……」

「分不相応っていうのですよ、そういうの」

ぐぬぬ……ライカはともかく、志乃ちゃんまで……

「かえせ……!!!」

ライカ……またあたしが拗ねてるのをカワイイと思って弄って来てるう……

ホントに迷惑な趣味なんだけどお!

そして志乃ちゃん、なんでそんな羨ましそうな……何かを愛でるような表情でこっちを見てるの!?

「よし、アタシ自ら逮捕術の特訓をつけてやるよ!」

ぐいつ、どん

ライカはあたしを机に軽く押し倒してきた。

机に伏せられてて身動きが……出来ない……

だけど、今なら……アレが出来る。

チャンスは……一瞬!

「ツッ！」

………とびうがち 鳶穿！

パツ

ぎゅるるんっ！

あたしはライカの拘束からぐり抜け、手には取り返した申請用紙を握っていた。

「………？！」

「あ………れ？」

そして、困惑しているライカに  
べく

と、舌を出して思いつきりバカにした。

バララツ　バララツ　バララツ

その日の午後、あたしは強襲科棟の地下一階にある屋内射撃訓練場インドアファイアリングレンジで中距離射撃訓練の授業に出席していた。

(バカライカ！)

指抜きグローブFを装着し、人型のターゲットを睨みながら

(申請するのは自由だもん！)

今朝のライカへの不満をぶちまけるように、マイクロUZIをフルオート連射で撃ちまくる。

直後、

「コラッ！」

ごちんっ！ (ゴッ！に近い)

「いたっ!!」

あたしの脳天に拳骨が落ちてきた。

その主は強襲科も主任教諭の蘭豹先生だった。

「集中しろや！9m弾キュウパの反動ぐらいで手えブレさすな!!」

香港マフィアの首領ドの娘で、タンクトップにジーンズ、背には刀を背負ったワイルドで厳しい女教師は

「全っ然当たってないやないか！」

眉尻を上げつつ、先程あたしが撃っていたターゲットを指差す。



そのターゲットの黒い人型的の内側には1発も命中しておらず、全ての外ブチの端っこに命中していた。

あまりの凄惨な結果に「ガビーン！」という効果音まで聞こえてきそうさ。

「あちゃあ……」

あたしはそうとしか返せなかった……。

その後、暫く続けたが、

score 6/700

144名中144位

rank E

ぶつちぎりの最下位を獲得するという結果で終わった。

その日の夕方5時。

あたしはライカと志乃ちゃんと一緒に東京武偵高の校舎を後にしていた。

あたしは先程の射撃訓練の結果が書かれたプリントを見てしゅん……としていた。

「強襲科……辞めた方が良いんじゃないですか？」

横から志乃ちゃんが少し言いくそうにそんな事を言ってくる。

「辞めない。風優先輩と同じ強襲科で、戦姉妹契約したいんだもん」

「なんなら近接戦技、アタシが教えてやろうか？」

ライカはそう言って「BANG♥」と言いながら食べかけのアメリカンドッグの先端を銃みたいにあたしの胸に押し付けてきた。

「ライカはバカでエッチだからヤダ」

また変なところを触られると思ったあたしは不機嫌混じりで八つ当たりするようにソツポを向いた。

あたしの態度にヒドくシヨックを受けたライカは

「バカはそつちだぜ！風優先輩は強襲科のトップランカー、お前はビリ！組むどころか、口聞けるチャンスすらねーんだよっ！」

完全にあたしの敵に回り、そう捲し立てた。

「そうですよ、あかりさん。人には適性や、身の程というものがあるのですよ」

志乃ちゃんにも論すように止められたあたしは再び射撃訓練の結果が書かれたプリントに目を落とし、

理想と現実の高い壁の差にうちのめされていた。

(風優おねーちゃん……)

風優先輩の事を思う。

するとなんだか余計に不安さが増し、あたしはプリントを強く握り締めていた。

—風優おねーちゃんのように、強くなりたい……!

でも、そのチャンスすら、ダメなあたしには与えられないの……?

ぽろ……ぽろ……

あたしの目から涙が溢れてくる。

ついに泣き出してしまったあたしを後ろから気配も無しに誰かがそっと撫でていた。

「それは違うんじゃないかな?」

「え……?」

あたしは何が起こったか解らず、後ろを振り向く。

するとそこには風優先輩が居た。

「……!?!」

あたしだけじゃなく、ライカ、志乃ちゃんまでもが突然のことに驚いていた。

その証拠にあたしたち全員、驚きのあまり声を失っていた。

そして、ライカに至ってはアメリカンドッグの芯棒をポロリと落としてしまっていた。

「そうよね?アリア」

「ええ。あたしは機会チャンスは誰にでも平等に与えられるべきだと思ってるわ。風優もそう思うでしょ?」

「うん。ま、結果は努力次第で人それぞれで平等じゃないけどね」

そしてそこにはアリア先輩もいた。

「さて……3人とも、武偵は『常在戦場』。もし、私が敵だったらそこで命終わっていたよ?」

少し笑みを浮かべた風優先輩は女神さまみたいだった。与えるだけじゃない色んな意味での。

そして、一陣の風が吹き抜け、桜吹雪が舞ったと同時にあたしに風優先輩は告げた。

「問宮あかり……私と戦姉妹を賭けて勝負……しよ?」  
「……はい!」

私は色々な感情が混じっていたけれど、取り敢えず笑顔であたしは返事を返した。

「さて、アマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負のルールを説明する……その前に、ライカちゃんだっけ。何か言いたいことがあるんじゃないの?アリアに」  
「え……?」

「あたしに……?」  
風優先輩に当てられたライカだけじゃなく、アリア先輩も困惑していた。

「誰も責めないし、言っちゃったら?」

「は、ハイ……。アリア先輩!」

「……何?」

「アタシと戦姉妹組んでください!」

「……」。解ったわ、じゃあ今からアマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負……エンブレム始めるわよ。ルール説明は不要よね?」

「ハイ!」

「ライカ……」

「なんだよ、あかり」

「頑張つて合格してね!」

「ああ!そっちもちゃんと合格しろよ?」

「うん!」

あたしとライカはハイタッチを交わした。  
直後、ライカとアリア先輩のアマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負・エンブレムが始まった。

「さて、改めて私達も始めようか。アマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負」  
「はい!」

「私の試験はとっても簡単。あかりはそこで戦闘する構えを取って」  
「え．．．わかりました」

私は風優先輩に言われて強襲科の格闘訓練をする際に行う構えを取る。

「じゃあ．．．行くよ」

風優先輩がそう言った直後、物凄い殺気があたしに飛んできた。  
凄い殺気．．．。

このままでは圧倒されそうだ。今にも尻餅ついて逃げ出したい。  
そう思うくらいだ。

でも．．．．．こんなところで諦めてなんかいられない。

あたしは絶対に風優先輩と戦姉妹になる．．．！！

だから．．．絶対に乗り越えてやる．．．！！

「へえ．．．。やっぱ、やるじゃん。あかり。骨のあるやつにやつと出会えた」

え．．．．．？風優先輩．．．．今、笑った．．．．？

．．．．つ！や、ヤバつ！来るつ！

あたしは風優先輩の攻撃を防御しようとする。

だが、一瞬遅れてしまい、少し当たってしまった。

あちやあ．．．．完全に勢いを殺すことできなかったか．．．。

「．．．．お見事だよ。あかり」

「え．．．．？」

「ホントは手を出すつもりなかったんだけど、あんまりにも気分が高揚しちゃって手が出っちゃってたわ」

「え．．．．じゃあ」

「うん。合格。これから宜しくね？あかり」

「は．．．はい！こちらこそよろしく願います、風優先輩！」

「あかりさん、大丈夫ですか？」

「うわ!? ちよ、志乃ちゃん!？」

あたしは志乃ちゃんに思いつきり抱きしめられて後ろに倒れてしまった。

「怪我とかはありませんでしたか!？」

「え、うん・・・大丈夫なんだけど・・・」

ちよつと早くどいてくれると助かる・・・かな？

「ほら、志乃ちゃん早くどいてあかりを保健室に連れて行くなら連れて行ったら？」

「は、はい・・・！さあ、あかりさん、保健室に行きましょう！なんなら私がお姫様抱っこしていきますから！」

「ええ・・・!? 良いよ、別に！ひ、一人で歩けるからっ！」

恥ずかしい事されそうになったので、断っておいた。

「あかり、詳細は明日以降にするから今日はゆつくりと休んでおいてね」

「はい！今日はありがとうございましたっ！」

あたしは風優先先輩と別れ、保健室で治療を受け、その後帰宅した。

帰宅後、ライカから電話があつて、ライカもアマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負に合格したと報告を受けた。

あたしもアマミカチャンスマッチ戦姉妹試験勝負に合格したとライカに報告し、互いに喜び合った。

こうして、あたしは風優先先輩と、ライカはアリア先輩と無事にアマミカ戦姉妹になることが出来たのであった。

続くよ！

## 第022弾 裏で策を練る人を標的は知る由もない

戦姉妹結成の翌日、風優先輩と合流したあたしは、風優先輩の提案で自分専用の武器を揃える為に風優先輩が鼻屑ハナクサにしている外部の武器商人？さんの所に行った。

その人の名前は機嬢ジーニャンと言うらしい。

名前からも想像できるが、中国人で藍幫ランバンという組織に所属しているらしい。

外見は・・・驚いたことにアリア先輩にそっくり。

眼鏡外して、髪をピンクに染めて武偵高の制服着たら見分けつかないんじゃないかな。

更に、機嬢ジーニャンさんは姉が3人いるらしい。

名前が狙姉ジュジュ、炮娘パオニャン、猛妹メイメイだったつけ。

風優先輩曰く、「姉3人も機嬢ジーニャンと顔は一緒」とのこと。

あたしはそれを聞いたとき、見分けられる自信は無いな・・・と感じた。

その後、あたしは間宮の技の一つである「鷹捲たかまくり」を使用時に壊れない小太刀と長刀を貰った。

なんでも風優先輩があたし専用にと依頼してくれていたらしい。

その後、「投擲武器がある方がいいでしょ」と言う事で金属製の矢を多数貰った。

これで不意討ちの迎撃とかもできそう・・・。

ダーツの練習もしたいたほうがいいかな・・・？

装備がある程度揃えた後はCQC・・・組手の練習だった。

まず、風優先輩の戦法でもある「隙を視認化する」ことを学ぶ。

これが難しく、少しでも焦ったりすると見えなくなったりした。

だから、常に冷静に保たなければならぬのだが・・・。

結果を言うと・・・ダメだった。

少しでもフエイントが入って焦ると隙の視認化が出来なくなつて、

手痛い一撃を貰う・・・その循環だった。

風優先輩は「これを1回で出来た人は居ないから気にしなくてもいい

い」と言ってくれたがやはり凹む。

次がダメでも早いうちに習得しなければ……！そう誓った。

そして、その帰りに風優先輩の部屋のカードキーを貰った。

風優先輩は女子寮ではなく男子寮に住んでいた。

なんでも、教師が酔った勢いで喧嘩して住む予定だった寮が大破したらしい。

それで、修理するよりも安価な取り壊しをした結果、寮住まいの女子生徒が溢れた。

風優先輩もその一人で空き部屋探したら丁度男子寮に大部屋を一人で使っている人が居たので、そこに転がり込んだようだ。

その時、「なんとも武偵高らしい理由……」と思ったあたしが確かにいた。

そしてその日は風優先輩の所で泊まった。

(何故か同居人の遠山キンジ先輩は嫌そうな顔していた。なんで!?)

次の日の朝……。

あたしが起きるとダイニングには遠山キンジ先輩と星伽白雪先輩がいた。

風優先輩は「用事がある」と言って先に出たようだ。

あたしは白雪先輩お手製の朝ごはんを食べた。

その味は……物凄く美味しかった。

キンジ先輩が先に出て、あたしは白雪先輩と一緒に登校した。

えっと、今日の放課後は風優先輩のインフォルマ情報科の仕事のお手伝いだったつけ。

Side | Out……

Side | Shinno

あれは今から丁度半年前の話だ。

私は学校帰りにお台場のフジテレビの前を一人で歩いていた。

すると、ESTELLエステルAの移動販売車でリーフパイを買い食いしている同級生たちを見つけた。

「はしたない……」

私はそう思った。

だが、それを声に出さずに、心の中に留めておいて見下すように通り過ぎようとした。

「あ！『勝ち組』だ」

買い食いをしていた同級生の会話が耳に入る。

「また一人ぼっちでやんの」

「美人がお高く止まってるわwww」

それを聞いてカバンの取っ手を握る力が強くなる。

……いいもん。

私は……ずっと……一人でも……いいもん……

心がどんどん沈んでいく。

そんな時だった。

屋台からリーフパイの匂いだろうか。

いい匂いが漂ってくる。

なんていい香り……

あまりのいい香りにリーフパイが食べたくなってきた。

でも……買い食いなんて……

「食べたい」という欲望と「買い食いは……」という抑制が葛藤する。

「あ」

「いらつしやいませー。リーフパイですか？」

「えっ？」

「お客様、ラッキーですよ！最後の1葉です！」

「えっ……?!わ、私はただ見ていただけで……」

「ポイントカードはお持ちですか？」

「ポイント……カード……?」

「ゴールドカードなら……」

「あ……ウチは現金支払いのみで、クレジットカードはダメなんです……」

「間に合った！」

誰だろう……。



見たところ同級生みたいだけど……。

「リーフパイください！」

「間に合っていないですーこのお客様で最後です……」

「ええ!? また売り切れ!？」

リーフパイを買おうとしてたみたいだ……。

売り切れの事実にかなり凹んでいるみたい……。

「い……いえ! 私は美味しそうだから見てただけですから……。  
どうぞ」

「えっ……いいの? ありがとう——!!」

これが私と(愛しの)あかりちゃんの出会いだった。

そして時は流れて4月。

私はとあるモノを持って教室に向かっていた。

そして教室のドアを開ける。

あ、いたいた。

あそこにいるのは愛しの……。

「あかりさん、エステラ限定のシュガーパイが手に入りー」

「ホントにスゴイよね! 風優先輩って!」

私の言葉を遮るようにあかりちゃんの言葉が耳に入り、歩んでいた足を止める。

「風優……先輩……?」

「あつ志乃ちゃん♥」

「今朝第2グラウンドで爆弾事件ボム・ケースあつてきたまま現場の近くにいるさー」

「風優先輩がね、武偵殺しのセグウェイを1人で殆ど片付けたんだって!」

確か、60台くらいいたとか聞いてたけれど、それを一人で……!  
!?

「えっ……と……人間ですよね、風優先輩」

そんな疑問が出た私は普通だろう。

「何言ってるの? 当たり前じゃん。まあ、『超偵でもある』とも言ってたけどね!……本当に風優先輩カッコイイ!」

あれ……なんだろう……。

「良かったですね。じゃあもう帰りましょう一緒にこれを食べながら」

「おおっ！リーフパイ!!」

ライカさん、今はあなたをお呼びではないですよ。アリア先輩の所に行ってくれると助かるのですが？

「あっ今日はダメなの」

なんで……？

「インフォルマ 風優先輩の情報科のお仕事のお手伝いがあるの。しかも部屋で二人きりで！」

……ふたり……きりで？

「それに今、あたしお菓子（間食）NGなんだー」

え……？

「先輩と一緒に<sup>ウエイト</sup>おフロ入った後で体重コントロール命じられて、それで風優先輩に食事作ってもらってるんだ」

おフロ……、食事作ってもらってる……!?

「あ、もうこんな時間。あたし、先に帰るね。ライカ、志乃ちゃん、じゃねー」

う……そ……

よろっ……

一瞬で意識が遠のく。

「おっと」

ライカさんはリーフパイを受け止める。

「アイツ今朝から風優さんの話ばっか。よっぽど好きなんだな——」

ドウシテ……

「んあ、<sup>はへ</sup>帰んのか？」

「……は、はい……。気分が……。ちよつと……」

ドタドタッ

私は不機嫌さいっぱい帰宅する。

「お帰りなさいませ、志乃様」

「志乃様ご機嫌が優れないようですが……」

「うるさいっ！」

メイドを八つ当たり気味に対応し、  
ばたんっ!!!

部屋の扉を乱暴に閉める。

「何よっ！ 風優先輩、風優先輩って!!」

ガンッ!!

ピアノ用の椅子を蹴飛ばす。

「あかりちゃん！ はー！」

がす、がす、がすっ!!!

ソファアーに蹴りを何度か入れて

「私のお友達!!」

ばっ

手に持っているウサギのヌイグルミを振り上げ……

「なのにつ!!!」

ぱあんっっ!

思い切り叩きつける。

ふーっ、ふーっ

肩から息をする。と同時に……

このままじゃ、風優にあかりちゃんを取られちゃう……!!

この思考が浮かんでくる。

ふう………

息を整える。

お、落ち着くのよ、志乃。

先ずは………

おろ……おろ………。

私は目の前の箱を求めてそこに………。

この、「あかりちゃんボックス」で………

荒い息遣いで箱の蓋を開ける。

あかりちゃん成分を……… 摂取!!

はああ~~~~

ああ、あかりちゃん……

箱の中身の「あかりちゃん人形」を取り出す。

「ああ、あかりちゃん!!」

ずっと友達よね!

あかりちゃん人形をギューツと抱きしめる。

どさっ

そしてそのままベッドにdive!

ばっ

布団にくるまって……

あかりちゃん……

「いっぺん友達になったんだから、ずっと友達だよ」

あかりちゃん……!!

脳裏に浮かんでくる色んなあかりちゃん。

「うんうん。そうよね」

「リーフパイ美味しいよね」

「私のパイもどうぞっ!なんちゃって。あつ……あかりちゃん……」

暫く妄想に浸っていた。

「……」

少し経ってから現実に戻る。

がばっ

起き上がって布団から脱出。

「などと現実逃避している場合じゃありませんっ!」

私はデスクに座って

さっ

メガネをかける。

ばちばち

「武偵高うらサイト」等で情報を集める。

水無瀬風優……強襲科と情報科掛け持ちのAランク武偵。

ランクはAとなっている。だがSランクに匹敵する強さを持っている。

完全記憶能力持ち。そして一度見たものは本家に劣らないクオリ

ティーで再現することが可能。

また、氷系の超偵でもある。Gは不明だが、かなりの高レベルが予想される。

この他、水、雷系の能力も使用することができる。

入学前はその完全記憶能力と再現能力を活かすために、様々な流派を次々と渡り歩く。

今では殆どの流派の技を使えるのではないかと噂されている。

・・・強い！

なんだこのチート級。

この文を見る限り私たちの流派巖も会得していると見てよさそうね・・・。

これを直接抹殺するのには無理そうだわ・・・！

ぐぬぬ・・・

不機嫌さが増す。

ばちばちばちばちばちばち

キーボードのタイプ音が木霊する。

それから私は色々な方法を探すのだった。

コンコン

「志乃様、お食事をお持ちしました」

食事・・・今はそんな場合じゃない。

「そこに置いておきなさいー！」

「・・・」

返事を返して、作業に没頭。

そして、夕方から夜になって。

更に夜から朝になって。

「こっ・・・これだわ・・・！」  
バツ

「これならあかりちゃんを取り戻せる!!」

やっと見つけた・・・。

うふ・・・

ふふふ……  
ふらっ

ずる……  
ずるるるる……

笑みと同時に崩れていく私だった。

何気に徹夜である。

Side | Out…

Side | Akari

「大体一段落付いたし休憩しましよ？はい、珈琲」

「あつ……ありがとうございます！」

あたしは資料をきちんとファイルの戻し、メガネを外してから風優先輩から珈琲を受け取る。

「（\*、口、；）…美味しいですう……」

「そりゃあ、良かった。あ、そうだ。あかり、『3日内解消規則』スリーデイズ・キャンセルって

知ってる？」

「……??？」

「簡単に言うとな、『戦姉妹契約から72時間以内に戦妹が私闘に負けたら再契約できない』ってやつね」

「え……ってことは」

「そうね。契約したのが昨日の20時だったし、明日の20時までになるね。だから、その間は油断しないでね」

「あ、はい……」

「その武器は小型化して身につけたほうがいいかも」

「そうですね……わかりました」

「さて……と……もうそろそろ作業再開と行きましようか？」

「はい……！」

あたしは休憩を終えて、メガネをかけ直して作業に戻った。

続くんだよ。

## 第023弾 私闘（ケンカ）する程仲が良い。

あたしが風優先輩と戦姉妹アミカになってから三日目の放課後。

今日は風優先輩が「名指しで任務が入っている」ので、戦闘訓練はお休みだ。

風優先輩は「あまり詰め込んでやっても良い成果は得られない。だから、ときに休息も必要だかね？」と言っていたけれど、あたしは投擲武器の自主練習をする予定だ。

さて・・・先ずは練習場所を見つけなくちゃ。

そう思っていると、志乃ちゃんとバツタリ会った。

「あかりさん、お疲れ様です」

「あ、志乃ちゃん。お疲れー。今帰りなの？」

「ええ。どうですか？一緒に帰りませんか？」

「うんー」

自主練はまた今度でいいか・・・。

こうしてあたしは志乃ちゃんとおしゃべりしながら帰途についた。その際にあたしが風優先輩の話をすると思いと漆黒のオーラが志乃ちゃんから滲み出ていたのは気のせいだと思いたい。

途中のビデオショップでキンジ先輩と出会った。

何か周りを気にしながら移動してるのは気のせいだろうか。

「・・・・・・・・あかりさん・・・・・・・・」

「あつ・・・・・・・・ごめん。何、志乃ちゃん」

「私の家に来ませんか？お夕飯を御馳走しますよっ」

「え？いいの！行く行くくくくくく」

こうしてあたしは志乃ちゃんの家にお呼ばれされることとなった。志乃ちゃんの家に行くのって初めてだからすごく楽しみ。♡。♡。

♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。

そしてしばらく歩いて志乃ちゃんの家に着した。

まず思ったのが

「す、スゴい・・・・・・・・」

これに尽きた。

だって、志乃ちゃんのお家を見た時、お城なんじゃないかなと思っ  
たもん。

これには何故かは解んないけどテンションが上がる。

それはもう・・・飛び跳ねたいくらいに。

その際に志乃ちゃんはケータイで何を撮っていたんだろ・・・??

もしかしたらあたしは知らないほうがいいのかもしれない。

志乃ちゃんの案内でエントランスに入るとメイドさんがお迎えし  
てくれた。

わあ・・・本物のメイドさんがいる・・・。

志乃ちゃんの家ってすごい・・・。

「あつ、あかりさん」

「どうしたの?」

「家の中では邪魔でしょうから・・・銃をお預かりします」

「うん」

あ、そうだよね。流石に他人の家の敷地内で銃を乱射するのは拙い  
もんね。

「お預かり致します」

「はい。お願いします」

あたしはメイドさんに銃をガンホルダーごと渡した。

その時だった。あたしは何故か「誰かが何かを企んでいる」そんな  
感じがした。

「・・・?あかりさん、どうかしましたか?」

「え、あ・・・ううん。なんでもない」

「そうですか・・・では参りましょう」

「うん」

気のせい・・・だったのかなあ?でも、警戒はしておいた方が良  
いかな。

食堂に案内されて周囲を見渡す。

右の棚には高そうなティーセットが、そして左には高そうなステ  
ンドグラスが鎮座していた。



なんだかよく解んないけれどスゴい…………。(語彙力の不足)  
そして、その後は御夕飯を御馳走になった。  
すつごく「おいしー。♥。。。。。♥。。。。。♥。」かっ  
たのは言うまでもない。

「夜に歩かせちゃってすみません。でも、食後に少し歩きたかったか  
ら」

「ううん、いいよ。あたしもそう思ったところだから。でも、お散歩  
できるくらいの庭があるのはスゴイよね…………」  
「そう言ってもらえると嬉しいです」

サアアアア…………

今は4月…………といえど夜は少し寒い。

もうそろそろ中に戻らないと風邪を引いてしまうかもしれない。

「あーちよつと寒くなってきたね…………。志乃ちゃん、戻ろっか」

あたしは庭園から家の中へ通じるドアのノブに手をかける。

カチャ…………

「あれ…………？」

鍵がかかっている…………？

「志乃ちゃん、この扉の鍵が掛かっちゃってるんだけど…………」

「志乃ちゃん、何…………やってるの？」

あれって確か、『レモンバーム』だったよね…………。なんでそれ  
を手にしてるの…………？

「あかりさん、『3日内解消規約』——ご存知ですか？」

「戦姉妹契約から72時間以内に戦妹が私闘で負けると、契約自体が  
解消になるってやつだよね…………？」

「ええ。その通りです」

「承認されてから3日間。つまり、あと15分かあ…………」

「はい。ひとつお聞きします、あかりちゃん、防刃制服緩んでないよ  
ね…………？」

「志乃ちゃん…………？」

「あかりちゃん、凧優と別れて」

「志乃ちゃん、どういう事・・・？意味が全然解らないんだけど」

「戦姉妹契約<sup>アミカ</sup>を強制的に解消させるには72時間以内に私闘でハツキリと敗北させなきゃいけない・・・そういう校則なの!!」

ダツ

志乃ちゃんが刀を振りかぶって斬りかかってくる。

キイイイイインツ!

あたしはそれを携帯していた小太刀で受け止める。

キイン、キイン、キイン、キインツ

志乃ちゃんとあたしの鏢迫り合いが続く。

一瞬でも気を抜いたらやられる・・・。

ピッ

「!!」

今ので防刃ネクタイの留め具が斬れたようだ。

完全には防御できなくて掠ってたか・・・。

「ごめんね。防刃制服を着てても・・・骨は折れちゃうかも・・・でも・・・安心して?付きつきりで看病してあげるから♥」

ぞくぞくぞくう!

悪寒がさつきからずつと止まらないよ!

えつと・・・全然安心できないからね・・・!?

それと・・・し、志乃ちゃんがなんか変だよ・・・(泣)

志乃ちゃんの怖さに慄いていると・・・

ガウワウウウウウウ

放し飼いにされていたであろう番犬(ドーベルマン)が襲いかかってきた。

「キャッ!!」

いきなり出てくるもんだからかなりビビったんだけど・・・。

そして、なんで追いかけてくるの!?

あーもう!なんとかしてあのワンちゃんを足止めしないと・・・。

そう思っていたら、ナイフホルダーの横に格納している武器の存在を思い出した。

あ・・・これって・・・。

あたしはナイフホルダー横のホルダーから金属製の矢を2本取り出す。

そして……

ひゅんっ

ワンちゃんに向けて投擲する。

「キヤウンツ!!」

どうっ……

ワンちゃん達はその場に倒れた。

……今、あたしは金属製の矢をワンちゃんの脊椎と胸椎の中間の上のあたりに掠めさせて瞬間的に圧迫させ、動けなくした。

これで、ワンちゃん達は脊髄神経が麻痺して首から下が動かない状態だろう……。

これは以前の訓練時に風優先輩から聞いた話だったんだけど、この状況下においては最善だったかも。

ぶっつけ本番だったけれど、上手く行って良かった……。

「中々の判断力だね……。それに一つ一つの動きも素早いわ。まるでツバメみたい」

「でも私はツバメでも斬れるよ」

……!!

拙い、あの技は……危ない!!

距離を取って回避を……!!

そう思ったあたしだったけど、出来なかった。

何故なら、あたしの後ろは煉瓦の壁だったからだ。

「!!」

来る……!!

〃燕返し!!〃

シュバツ!!

鞘なしの状態から放たれる高速の居合があたしに迫って来る。

ガガガガガガガガガガガ

「うわっ!!」

なんとか小太刀で受け止めるがあまりの強さに後退してしまう。



「あかりちゃん、刀身は掴まないほうがいいよ。指、ボトボトって全部落ちちゃうから」

どうしても……やる……の？

「志乃ちゃん、どうして……?!?友達同士なのに!」

「……友達だから」

「え……?」

「友達だから……後には退けないの!」

あたしは斬撃を予測し、間一髪で回避する。

バシヤアアン

回避した斬撃によって背後の噴水から流れ落ちる水が斬られる。

「それで、躲したつもり!?」

バツ

!!

外燈の柱で助走……!上から……来る……!

「甘い!!」

志乃ちゃんは外燈の柱で助走を付けて上空から斬りかかってくる。

回避も……小太刀で受け止める事も……出来ない。

じゃあ……どうすれば……。

そうだ……小刀でダメなら大刀で受け止めればいい。

あたしは左のホルダーに格納してある物を素早く展開させる。

……間に合って!!!

きいいいいんっ

あたしは斬撃が迫り来る前に志乃ちゃんの物干し竿と同じ長さの大刀で受け止めた。

まさに間一髪だった……。少しでも遅れてたらヤバかった……。

「ねえ、あかりちゃん……」

「何……?志乃ちゃん」

「よく、アレを防御出来たね」

「前に刀の訓練でやったからね……」

「じゃあ……あかりちゃんもできるんですね……『燕返し』」

「できる……けど」

「では、お互いにぶつけてみませんか？」

「お互いに……？」

「はい。私だってこれ以上お友達であるあかりちゃんを傷つけたくありませんし」

「……いいよ、志乃ちゃん」

その一瞬だけ、静寂な刻が訪れる。

「燕返し」

お互いの燕返しがあぶつかり合う。

威力は互角で拮抗している。

そして、あたしと志乃ちゃんは二人共同タイミングで両サイドの池に吹っ飛ばされた。

「ねえ……志乃ちゃん」

「なんででしょう？あかりちゃん」

「この場合って……どうなるのかな……？」

『引き分け』で良いんじゃないでしょうか」

「そっか……」

「ごめんなさい、あかりちゃん。あなたをこんな目に遭わせちゃって」

「いいよ。別に。寧ろ謝るのはあたしの方かも」

よいしょつと……

あたしは池から出て志乃ちゃんを救出する。

「え……？」

「あたしこそなんか無神経だったみたいでゴメンね」

「じゃあ……私の事……嫌ったり……しない？」

「大丈夫。あたしは志乃ちゃんのこと、嫌ったりしないから」

「ほ、本当に？嫌いにならない？」

「うん」

「じゃあ、好きですか？私の事、好きですか？」

「う、うん……」

「あかりちゃん！私も大好き！」

むぎゅっ

志乃ちゃんは私に抱きついてきた。

その拍子にあたしはバランスを崩し……  
どぼんっ

志乃ちゃんと仲良く池に（再度）落ちた。

「あかりちゃん、好き好き、好きなのよ〜〜〜」

「?!ちよつと、志乃ちゃん?!ちよつと、近い。近すぎるから……  
!」

少しでいいから離れてくれると助かるんだけど!

そして、メイドさん。

「良かったです……お嬢様」ってハンカチ片手で観察してないで、この状況何とかしてくださいませんか?

「お願いだから!」

翌日の朝、あたしはライカとともに教室の掃除をしていた。

ライカは昨日の夜遅かったのか知らないけど、とても眠そうだ。

取り敢えず3日<sup>スリーデイズ・キャンセル</sup>内解消規約はクリアしたけれど、志乃ちゃん……

大丈夫かな……?

「おはようございます」

「し、志乃ちゃん昨日は……」

「あかりさん、あの後私調べたんですけど……『アミカ・グループ』をご存知ですか?」

「?」  
ナニソレ……?初耳だ。

「戦<sup>いもつと</sup>妹同士がグループを作る制度なんです。それぞれの戦<sup>あね</sup>姉からの指示を受けて協力して訓練するんです!だから、私もある先輩に戦<sup>ア</sup>姉妹<sup>ミカ</sup>申請をしたんです!」

へえ……そーなんだ。申請したのって白雪先輩なのかな……?

なんとなくだけど志乃ちゃんとピッタリな感じするし。

「あかりさん、二人で『アミカ・グループ』になりましようね!!」

「う、うん」

「だって私たち、相思相愛ですもんね!!」

「し・・・志乃ちゃん!?!」

朝の教室で何言ってるの!?

「お前ら・・・間違っただけは起こすなよ?..」

ライカは呆れながらそう呟いた。

解ってるよ・・・それは。

そして・・・志乃ちゃん?

お願いだから・・・少しでもいいから離れて!?

抱きつくのは良いんだけど、その・・・首。首が締まって苦しいん

だけど!?

誰かたーすーけーてーえー!!!

続くよ!



第024弾 自分の实力を知るには先ずは自分の身体から

近年、増加傾向にある凶悪犯罪に対抗すべく新設された資格、  
Detective Armed  
武装探偵。

それを略して一般的には「武偵」と呼ばれる。

東京・お台場、レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島に設立された東京武偵高校はその武偵を育成する（ちよつと）荒っぽい学校である。

4月のある日の東京武偵高校の更衣室であたしとライカと志乃ちゃんは身体測定を受けるべく、体操服に着替えていた。．．．．（下着姿で）おしゃべりしながら。

「あ、そーだ！志乃ちゃん！無事に戦姉妹契約出来たんだね！」

「はい。♥（このあかりちゃんの可愛すぎて尊い下着姿．．．．バツチリ収める隠しカメラ買わなきゃ．．．！）」

あたしの言葉に志乃ちゃんが応じる。

その時の表情がうっとりしていたのはあたしの気のせいだと思いたい。．．．マジで。

あと、何か凄く嫌な予感がするのも気のせいだと思いたい。

「うわあ．．．今日は先輩の引率で身体検査とか嫌な予感しかなないぜ．．．．」

ライカはスカートを脱ぎつつ、更衣室のドアの前でファイル片手に待っている緑色の髪に銀色の瞳をした先輩を見ながら言った。

確か、あの先輩は「霧島葵きりしまあおい」という名前で情報科・強襲科・救護科の3つの学科を

掛け持ちしててランクは風優先輩と同じA。それに加えて水を操る超偵だったっけ。

風優先輩が「昔からの幼馴染みたいな感じ」と言っていた。

で、そのあたしの戦姉あねである風優先輩は他の同級生達の身体測定の

引率があるそうだ。

ライカに聞いたところ、ライカの戦姉<sup>あね</sup>であるアリア先輩も同じく他のグループの引率があるそうだ。

「あかりさん、可愛いですっ。♥。♥。♥。♥。♥。♥。♥。♥。♥。♥。」

いきなり志乃ちゃんが後から抱きついてきた。

全くもって抱きつかれる意味が解らないんだけど!? なんなの!?

「何やってんだよ……お前ら」

ライカはあたしと志乃ちゃんを見て呆れて溜息をついていた。

そして、その時溜息をついていたのはライカだけではなく、あたし達の着替えを待っていた葵先輩もだった。

「貴女達……早く着替えなよ? 武偵憲章第5条、『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし。』よ? じゃないと瞬間移動で無理矢理連れてくからね?」

「はいはい」

「今行きますー!」

どたばた、わたわた

急いで着替えるあたし達。

瞬間移動なんて使われたらたまったもんじゃない。

面前で醜態<sup>下着姿</sup>晒すことになっちゃうからね。

それに葵先輩も風優先輩と同じで言ったことは実際にやりそうだから、更に怖い。

着替えを終えたあたし達は葵先輩と共に最初の測定場所に向かう。

「身体測定は適切な武装や戦闘法に直結する大事な行事なの。そのレポートも教務科に提出するから真面目にやってね?」

「はい!!」

移動中に葵先輩から身体測定の趣旨を聞き、それを了承する様に元気よく返事を返すあたし達。

着いたのは救護科の保健室だった。

「さて……ここでは身長と体重の測定をするからね」

そう言つて葵先輩はあたし達を1度見てそのまま保健室に常設さ

れてるライフル棚に行き、選定に入っていた。

あれ・・・？身長計で測らないの・・・？？

暫くして葵先輩が戻ってきた。

「おまたせ。3人ともこの銃を持って」

「「あつ・・・はい」」

「えつと・・・佐々木志乃、155cm。ギリギリM4かな・・・」

「そして・・・火野ライカ、165cm。FALでも引き摺らずに持てそう」

「最後に間宮あかり、139cm。だったら、G11かな・・・」

あたしに渡されたのは旧西ドイツで開発されたヘツケラー&コツホ社のG11。

武偵高でも滅多にお目にかかれない珍銃である。

スペックは良いんだけど・・・あんまりにも次世代過ぎて実用性に乏しく、更に故障・暴発も多くて今では存在自体が希少・・・ミイラ化した銃。

一言で言ってしまうば「スベった銃」である。

「こんなヘンな銃やだ——!!」

あたしは大声で叫んだ。

なんか納得いかないよ！何このカッコ悪い銃!!!

そして、ライカ！「お似合いくく」と言って笑ってないでよ！

むくくく納得いかない！

「志乃ちゃん！身長計で測って!!」

「はいはい・・・」

その後、身長計で測りなおしたが葵先輩の目測は寸分狂わず的中していた。

その後の体重測定も身長測定と同じで葵先輩の目測が寸分狂わず的中していた。

身長測定と体重測定を終えたあたし達は狙撃科の射撃レーンに移動する。

そこで行われるのは視力測定である。

射撃レーンの一番奥に立つ葵先輩の右隣には視力検査で使われる

ランドルト環がある。

「さつ、構えて」

葵先輩の指示であたし達は立射姿勢スタンディングでA I アークテイクウオー  
フエア狙撃銃を構える。

「えつと・・・右?」

あたしは葵先輩が指し示したランドルト環の向きを答える。

「ええ。正解。じゃあ、これは?」

葵先輩はその下のランドルト環を指し示す。

「えつと・・・右斜め上?」

「OK。」

あたしはギリギリで答える。

「じゃあ、これは?」

その右隣のランドルト環を

「下」

「じゃあ、これは?」

「左斜め上」

「OK。良いよ」

ライカはあたしが答えられなかったランドルト環の向きを次々と  
答えていく。

「えつと・・・じゃあこれは・・・」

葵先輩の言葉が途中で止まった。

何故なら・・・

「(あかりちゃんのその口を開けちゃうクセ・・・かわいい、可愛い、  
カワイイ(\*´、`\*))」

志乃ちゃんが全く視力測定に後半参加してなかったからだ。

なんで、あたしの方を見てるのかな?

「・・・志乃ちゃん、集中して。『真面目にやりなさい』と言った  
はずよ?」

ひゆん

こおん

「痛っ・・・!」

志乃ちゃんが葵先輩の放った水の弾丸が額にクリーンヒットし、その場で踞る。

志乃ちゃん・・・自業自得だよ。それは・・・。

次にあたし達が行ったのは通信科での聴力テスト。

「聴力テスト、スタート」

ザザザツ　　ザザザ　　ザザザ

葵先輩の開始の合図と共に雑音が聴こえてくる。

「足音・・・5人？」

あたしとライカはその雑音の中から聴こえた足音の数を答える。

「聴音弁別、OK。その足音のシチュ答えられたら答えて」

葵先輩のOKサインと共に新たな指示が飛んでくる。

えつと・・・

「4人ダツシユで挟み撃ち仕掛け、1人は上空からの奇襲・・・？」

こう・・・かな・・・？

「perfect。やるじゃない、あかり。流星は風優の戦姉妹だけあるね」

えへへ・・・褒められちゃった・・・。

通信科を後にしたあたし達は諜報科に向かう。

諜報科ではタイムシヨックとかでよくある奴（名前は知らない）に乗せられてぐるんぐるん回される。

あたしは割とこういうのは平気だったりする。

「なんだ・・・あかりも平気だったんだな」

「うん・・・。なんだかんだで慣れてるからね・・・そつちも余裕

そうだね、ライカ」

「あはは・・・まあな」

回されながらもフツに会話ができる余裕っぷりである。

「2人ともー、あと5分ね」

「はい、わかりましたー」

「ラジャー！」

葵先輩の指示が飛ぶ。その横で・・・

志乃ちゃんは屍になっていた。(勿論死んでない)  
大丈夫なの・・・かな・・・?

「うう・・・まだグルグルします・・・」

志乃ちゃんは先程のダメージが大きかったらしく、未だダメージが  
抜けきってない様だ。

「大丈夫・・・?」

「はい・・・なんとか(やった!私、今、あかりちゃんに心配され  
てる・・・!)」

あたしの言葉に苦しそうに答える志乃ちゃん。

でも、なんか嬉しそうなのは気のせいなのだろうか。

「なんだよ・・・なっさけねえなwwww」

笑いながら軽口を叩くライカ。

本当にさっきのは余裕だったみたいだ。

「次ので最後だからね?」

葵先輩がそう言っであたし達が到着したのは・・・

「あれ、ここって・・・」

強襲科の別館だった。

室内での強襲戦闘を想定した授業で使われる建物である。

「最後のはなんつスカ?」

ライカが尋ねる。

「(o^o)♪今から行うのは武偵高名物、マッスル・リベンジャー運動神経測定ね。ま、恒

例行事みたいなものかな」

そう答えた葵先輩に案内されたのはモックアップ訓練室だった。

部屋には可愛らしい家具等が並んでいる。

「女の子のお部屋みたいな・・・モックアップ訓練室ですね」

志乃ちゃんが部屋の内装を見た感想を述べる。

「そ。ここでの検査は—」

がちやんっ

!!

鍵をかけられた!?

「引率をさせられた2年のストレス解消も兼ねてるんだってさ」  
え……

「ス……ストレス解消!？」

それって……葵先輩があたし達に「このメス豚が!!」とかって罵ったりするの……!？」

なんかそれはそれでワクワクするようないような……

あ、ヤバ……鼻血が……

すばーんっ

「何故ソツチの思考に繋がるわけ!?違うわ!!」

葵先輩に思いきりハリセンでツッコまれた。

てか、先輩。ハリセンどこから取り出したんですか。

「……室内を想定した格闘戦。レポートもちゃんと付けるからね？」

あと、ちよつと今回は銃禁止ルールで行こうかな」

ちやき……

葵先輩は小太刀を両手に構える。

「フツーは一人ずつなんだけど、3対1で良いから」

「甘く……見てくれるぜ!」

ナイフを構えたライカの言葉に小太刀を抜いたあたしと小刀を抜いた志乃ちゃんは葵先輩へ一斉に飛びかかる。

だが、それは……

きいん きいん きいん

的確に武器だけを弾き落とされたために攻撃は届かなかった。

それに戸惑うあたし達に隙ができる。

その隙を逃さない葵先輩はあたし達のダメージが一番入りやすい箇所到的確に一撃を入れてくる。

葵先輩のこの的確さ……『隙の視認化』が出来てる……!!

これは……風優先輩と同等で手強い……!

弾き飛ばされたナイフを逆手で拾いなおしたライカは葵先輩の後ろを取る。

「あかり、志乃、今だ!上下!!」

ライカの言葉にあたしは隙の視認をしつつ、上から攻める。

同時に志乃ちゃんが葵先輩の足元を狙って攻撃する。

「へえ．．．やるじゃん」

ゴツ

そう言った葵先輩は肘底をライカの鼻に喰らわし、拘束を解く。

ライカはいきなりの攻撃に怯んでしまう。

そして、右手に持っていた小太刀を一瞬上に投げ、更に抜いた小太刀をライカの右横に投げ、ライカを逃げられなくする。

そして、左手の小太刀と先程上に投げ、右手に寸分狂わず落ちてきた小太刀をあたしと志乃ちゃんの喉元に突きつける。

そのタイミングだった．．．。

キーン コーン カーン コーン

終了を告げるチャイムが鳴り響いたのであった。

強襲科、女子浴場（プール併設）  
??????

「はあ．．．手も足も出ませんでしたね」

「もうなんだよ．．．ありやチートだぜ」

「悪いレポート書かれちゃったんだろいなあ．．．」

「それでもないみたいよ、あかり。ね？葵」

「あ．．．風優先輩！」

風優先輩も引率が終わったのだろうか。

「そうね。うーんとB+って所かな」

「あんた達もなかなかやるわね。葵にそこまで言わせるなんて」

「あ、アリア先輩！先輩も引率終わっただんですか？」

「まあね．．．。葵と風優はさつき偶然出会っただけけど」

「で、葵、あかり達に本気出したって本当なの？」

「うん。本当。あんまりにも3人の連携できてたし、個々の戦闘もイイ線行ってたからね」

「だってさ。葵が珍しく褒めてるからこれからもいいチームで居る事。OK？」

風優先輩の言葉に歓喜するあたし達。



「はい!!」

あたしは大きな声と満面の笑顔でそう返した。

その時だった。

「ひゃうんっ!!!」

そんな声と共に葵先輩は崩れ落ちた。

な、何が起こったの!?

「くふふっ……相変わらずソコ触られるの弱いんだね……あおちーは」

2年の先輩……えつと、探偵科の峰理子先輩が後から葵先輩の腰辺りを触ったのだろうか。

何か手をわきわきさせてるし……。

「……………」

一体何が起きたのか解んなくて啞然とするあたし達。

「りい~~~~こお~~~~お~~~~(怒)」

復活した葵先輩は目に涙を溜めてかなりのご立腹だった。

「ちよ……それ待つて!!すとつぷ、あおちー!!喰らったら理子、洒落になんないから!!」

「うっさい!!このド変態が!!水精大瀑布!!」  
マグナ・カタラクタ

頭上から水流が現れ、理子先輩に向かって全落下。

結構な水流に押しつぶされてるけど……大丈夫かな、理子先輩。

「あちゃあ……またですの、理子お姉様……」

小柄であたしよりスタイルのいい女子生徒が呆れながら此方を見ていた。

「あ、麒麟ちゃん。久しぶり。珍しいね、ここで会うなんて」

「そうですわね。今日はなんかいい出会いがありそうな気がしまし  
て」

「あー……女の勘つてやつね」

「はい……。でもまさかお仕事が増えるとは思いませんでした」

「あら?アンタ、見ない顔ね。風優の知り合い?」

「ええ……って言っても理子経由なんだけどね。自己紹介したら、  
どうかな?麒麟ちゃん」

「そうですね。私、CVR所属の島麒麟と申しますの。よろしくお願ひ致しますわ、神崎様」

「ええ。宜しくね、麒麟」

その女子生徒に風優先輩が話し掛け、アリア先輩もその話の輪に加わって話は弾んでいた。

あの女子生徒・・・麒麟ちゃん、風優先輩と知り合いなんだ・・・

暫くして、理子先輩を襲っていた水流が止んだ。

そこには・・・屍になっている理子先輩の姿があった。

死んで・・・ない・・・よね？

そうだと思いたい。

そんな猛攻があったのに浴槽は驚異の無傷だった。

？  
こういうことが日常茶飯事だから対策が施されているのかな・・・

あ・・・そうだ・・・。

「あのお・・・風優先輩・・・？」

「どうしたの？あかり」

「理子先輩・・・その、大丈夫なんですか・・・？」

「暫くしたら何事もなかった様に復活するから問題ないから（わ（よ））。だから放置で十分」

と、まさかの回答が帰ってきた。

しかも先輩方がハモって答えるなんてどんだけなんですか。

なんか・・・考えるだけ負けな気がしてきた・・・。

ふと・・・今のメンバーを見渡す。

・・・  
・・・  
・・・。

「世の中って不公平だなあ・・・」

あたしはそう眩かすにはいられなかった。

「確かにそうね。これはあんまりにも不公平よね」

「あ、アリア先輩」

「あかり・・・奇遇ね。あたしも同じこと考えてたわ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
がしっ

無言であたしとアリア先輩は握手を交わしていた。

理由が聞かないで欲しい。察しても黙ってて欲しい。

その後、麒麟ちゃんが気絶した理子先輩（無傷だった・・・）を引き摺って退出し、お開きとなった。

この時、あたし達はここで会った麒麟ちゃんとはこれから長い付き合いになる事は知る由もなかった。

続くよ！

第025弾 サイカイとデアイはイガイなバメンで起ころるもの。 I

身体測定が終了した数日後の午後。

東京武偵高校、強襲科訓練場では強襲科所属生徒と強襲科自由履修生徒による訓練が行われていた。

訓練といえど、ここは武偵を養成する場所。

基本的に教師が一から十まで指導することはあまりない。

なので、生徒本人が自分で考えて訓練を行う。

自身の身体をトレーニングで強化する者、自身の技を繰り返して反復練習を行う者、

また、ペアを組むなりして組手によるCQCを高める訓練をする者……等様々だ。

あたし、間宮あかりも戦姉<sup>あね</sup>である水無瀬風優先輩と組手の訓練をしていた。

「とーうー！」

あたしは風優先輩の隙を視認で見極めつつ、一撃をいれる。ぱしっ

「あっ……」

あたしの一撃は風優先輩に受け止められる。

決まったと思っていたので、思わず動揺の声が漏れる。

その僅かな瞬間でも動作が止まれば大きな隙ができる。

ごっつ！

逆にあたしの隙だらけな場所に風優先輩の一撃が決まる。

「きゃうー！」

あたしはそこそこ強く床に叩きつけられる。

「ほーら、また隙だらけ。動揺した時に動き止まってるし、それと隙をちゃんと見極める！」

風優先輩のアドバイスが飛ぶ。

「いったあ~~~~。は、はいい……」

床に叩きつけられた痛みにも悶えつつも、風優先輩に返事を返す。

後から聞いた話だが、この時探偵科の授業を抜け出した志乃ちゃんが編入生で風優先輩の友人の姫神結衣先輩によって不審者扱いで取り抑えられ、探偵科の主任教諭である高天原ゆとり先生によって連れ戻されたらしい。

志乃ちゃん……………何をやってるの……………？

閑話休題……………。

「おお……………」

「すげー」

男子生徒達の歓声が聞こえてきた。

風優先輩がそれに気づく。

「男女やるなあ……………」

その歓声にあたしは顔を上げる。

そこでは『男女』と渾名された親友・ライカが自分より大きい体格の男子生徒にアキレス腱固めをしていた。

ライカにアキレス腱固めを極められた男子生徒はギブアップの意思を示す床タップをしていた。

「また男女の勝ちかあ……………」

男子生徒の声とともにブーイング（男子生徒の一部）、歓声（男女共に）が起こる。

「ライカ、スゴい!!」

あたしはガバツと起き上がって笑顔になる。

その様子を見ていた風優先輩は

「あかりってば、タフさだけは私と同等……………いや、それ以上なのね……………」

と呆れ+感心の表情であたしを見ていた。

凹んでいいのか喜んでいいのか……………解んないよ……………。

Side | Out :

Side | Raika

訓練終了後、アタシはポカ리를飲みつつ、強襲科の訓練棟を後にする。

さっきの歓声にあった「男女」って発言。

普通だったら、極論言う「女」として見られてない訳だし傷付くよな……。

でも、アタシ自身『男女』である事実は変えられない訳だしどうでも良いけどさ……。

アタシが歩いていると2年の先輩とすれ違った。

確か……この前、お風呂で会った探偵科の峰理子先輩だったっけ……。

なんて言うのだろうか。理子先輩から「女の子らしいオーラ」が溢れ出ている気がする。

アタシとは対極の存在だろう。

でも……憧れるよな……。ああいう女子っぽい女子には……。その時だった。

「あつ、ライカ」

突然、声をかけられた。

声の主はあかりだった。

志乃と仲良くベンチでポッキーを食べていたようだ。

……志乃が傷だらけなのは何故なんだ……。

まさか、さっきあった不審者騒動（小規模）に関連してんのか……？

「あかり！志乃！なんだ、こんな所で……」

「あたし達、日曜に二人で『ラクーン台場』に行くんだけど、ライカも来る？」

そう言っつてラクーン台場の案内パンフレットを見せるあかり。

「あれって遊園地だろ？ガキじゃないんだからさっ……」

アタシはパンフレットに印刷されたラクーン台場の公式アイドルユニットの写真が目止まる。

「……」

「来なくてよし!!」という志乃の怨念（文字通りで間違っていない）が両手のポッキーから発せられているが……

「まあ、行ってやってもいいか」

アタシはそんなの気にせずにあかりの誘いを了承した。  
怨念が届かなかった志乃は手に持ったポツキーと共に折れてい  
た……。

そしてポツキーはそのまま地面に落下していた。  
勿体無い……。

「このタダ券で3人まで入場できるって！」

そう言っつてチケットを見せるあかり。

「あ、あかり。ちよつと良い？」

上から水無瀬風優先輩の声が聞こえた。

「あつ!! 風優先輩! いつからそこに!」

あかりは嬉しそうに風優先輩に声をかける。

「休日ですに出るからって気を抜かないで、武偵としての自覚……

『常在戦場』この言葉の意味を胸に持っててね？」

「はいー」

あかりは元気よく返事を返す。

「あかりさん……日曜の待ち合わせ時間ですけど……」

志乃はその会話を打ち切る気満々だった。

だって、視線が明らかに敵対のと同じだったもんな(苦笑)

「ん? うん」

何も知らないあかりは志乃の提案に応じる。

こういう対応がある意味正解かもな……。

「ライカ、あんたのA<sup>アサルトライフル</sup> Rが銃検査登録制度<sup>銃検</sup>度の解ってるけれど、

何時までも『整備中』じゃ通らないわよ」

アリア先輩の有難いお言葉が突き刺さる。

事実なだけに更に突き刺さる。

「はぁーい」

アタシは若干間伸びた感じで返事を返した。

「じゃ、あかりさん行きましょう」

ぐいぐいあかりを引っ張る志乃だった。

そんなに独占しなくてもいいだろーに……。

「風優先輩、また明日~~~~~!!!」

当のあかりはそんなの気にせず、に風優先輩に手を振って返して  
た。

それからアタシ達はお開きとなった。

Side | Out :

Side | Nay u

あかり達と会話をし、別れた私には心配な事が残っていた。

一応、釘は刺しておいたけれども。

でも、何処か浮ついている……言い方は悪いけれど「武偵とし  
ての自覚が足りていない」

そんな感じがするのよね……。

横に居たアリアも同じ事を思っていたようだ。

「ねえ、風優、あんた今度の日曜予定空いてる？」

アリアが私の予定を尋ねてきた。

「んー？バイトが入ってるかな。理子と一緒に」

「そう……。もしもの為にラクーン台場に行つて欲しかったのだ  
けど……」

私の答えに自分の提案が拒否られたと思ったアリアは少し寂しそ  
うだった。

でも……誰も「行けない」なんて言っていないけどね。

「あーそれくらいなら大丈夫よ」

私は了承の返事をアリアに返す。

「え……？でも、今度の日曜日は理子とバイトだって……」

アリアは頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

「うん。バイトだよ。場所が『ラクーン台場』でね。だからバイトの合  
間になつちやうなだけで、良いよね？」

「……それなら問題ないわよ。お願いね」

「りよーかい。一応だけど理子にも話通しておくわ」

「ええ。お願い。あと一人居ればいいのだけれども……」

アリアがそう言った時だった。

「狙撃科の麒麟児」の異名を持つレキが丁度通りかかった。

「あ、レキ。突然なんだけど、今度の日曜空いてる？」



私はレキに今度の日曜の予定がフリーか尋ねた。

「はい。特に予定がありませんが」

レキから「予定はない」と無機質な回答が返ってくる。

「じゃあ、私達と行動共にして欲しいの」

私はレキにお願いの内容を伝える。

「それは依頼という形でしようか」

と、いう質問がレキから帰ってきた。

「うーん……そうなるかな」

と、私は返した。

「では、風優さんに依頼報酬を求めます」

と、レキが発言した。

依頼報酬……それも私に……??

なんだろう……?

「何?」

「風優さんは料理が上手だと聞いています。ですので、私に風優さんの手料理を振舞ってください」

え……そっち???

「はい。それも満漢全席のフルコースでお願いします」

しかも私の思考読んで付加条件付けてきたよ。

そして確証される事知ってか親指立ててるし……。

これ、断れないよね?どう考えたって。

レキ……アンタ、策士か!?

「それくらいなら……まあ……良いけど」

私はそれを了承する答えを返す。

「ありがとうございます……。風優」

「……」

御礼を言ったレキが私の事を呼び捨てで呼んだ。

それにその時一瞬だけ見えたレキの笑顔が私の脳内から離れなかった……。

Side Out…

日曜日、ラクーン台場で私、島麒麟はクレープ片手に

「キリンは寂しいと死んじゃいますの」

とボヤかすには居られない心情でした。

膝上のジヨナサンも賛同しているような気がしますわ……………。

「まさか……………戦姉妹契約が終わったからお別れなんて……………」

校則は残酷ですの」

そう言つて戦姉<sup>あね</sup>の理子お姉様と以前撮影したプリクラを見ました。

それを見ると余計に……………。

「折角、理子様の好みの女性になったのですのにー!」

もう、ハンカチを噛んでそう叫ばすにはいられませんでした。

周囲には誰も居ないのでクレープを振り回したって迷惑はかからないでしょう。(多分)

その時、どこからか歌が聞こえてきました。

確か、あれは、この公式アイドルユニットでしたわね……………。

その歌を聴いてるうちに歌詞のフレーズが反芻します……………。

次第にさつきまで沈んでいた心がどんどん回復していききました。

そうですね!恋心は揺れるものですね!

だったら……………次は……………次の戦姉<sup>アミカ</sup>(白馬の)王子様タイプが

いいですわ……………!!!

次の希望が見え、テンションが上がってきました。その時でした。

「ねえ、君イ、デートしない?」

声が男性の愛くるしい兎の着ぐるみ(ギャップ強すぎて似合わなさすぎますわ……………)に声をかけられました。

「あ……………」

この時、機嫌が悪くなった私は普段では絶対言わないような返しをしました。

そしてそっぽを向いて

「アッチ(・▽・)イケ!!シツシツ!!ですの!!お生憎、私、男性には興味がありませんの」

クレープで牽制しつつ追い返そうとします。

「来いッ！」

ぐいっ

右手を強引に掴まれ、手に持っていたクレープはべしゃつと音を立てて地面に落下します。

バシッ

それと同時に鋭い表情で私は掴まれた反対の手でバカなウサギの右脇に掌底を撃ち込みます。

「相手を間違えましたわね。私、こう見えて武偵ですわよ！」

ま、バカウサギは目を回してますし、聴こえてないのでしょけど。「だからだよ。来い」

背後から私にナイフが突きつけられます。

黒ネコ「……もう一人……居たんですの……」。

しかも……頬ですか……。これは……

「うひい！お顔は止めてえー！ですのー！」

CVRの商売道具であるお顔に傷なんて論外ですわ!!!

「乗れ」

黒ネコ（宅急便じゃありません）は私をスタッフ用のカートの荷台に押し込もうとします。

誘拐「……！これはガチでマズそうですわ！」

そう判断した私はスカートの内側のガンホルダーからレミントン・モデル95・ダブルデリンジャーを抜き、

銃口を誘拐犯に向けて、威嚇しようと試みます。

ですが、黒ネコ（宅急便（ry）は全く銃に怯んではいませんでした。

「甘えんだよ、小娘」とでも言っただけでそんな感じですよ。

その時でした。

ガッ

私は後方から、首の付け根を何かで殴られました。

おそらく復活したバカ兎がああステッキを使ったのでしょ。

「うッ……！」

手痛い一撃を喰らった私は倒れ込んでしまいました。

「バカが。防弾装備もなしに武偵を攫うかよ」

倒れ込んだ私を受け止めた黒ネコ（宅急便）は笑いながらそう言いました。

そして、周りに目撃者がいないことを確かめた後、私をカートのトランクに閉じ込めました。

トランクが閉まったのを見計らって目を覚ました私はラインストーンでデコったピンクの携帯を取り出し、急いで救援要請を送るのでした。

Side | Out…

Side | Akari

「うひゃあああああああああああああ!!!」

あたしは今、絶叫の最中にいた。

!!!

「なにこれえー!」

そしてそう叫ばずにはいられなかった。

もう半端ないよ、この「ターザン・ブランコ」という名前の小さな足場に立って大きく揺らされる遊具の怖さと言ったら!

安全の為にワイヤーと身体を固定するベルトが付いているものの、怖さはそんなに変わらない。

あたしの中では怖さが大半を占めていて、風でふわふわ舞う制服のスカートに気にかけてる余裕なんてない。

だからって……志乃ちゃん、「ああ……神様に感謝、感激、雨あられ!!」とか言って一眼レフデジタルカメラで激写は止めて!

荒い息がこっちまで聞こえてるんですけど!てか、絶対に下心全開だよね!?

「ああ幸せ……」とか言つて鼻血ダバダバじやん!!

そして、ライカ!お願いだから友人の愚行を止めて!

チュロス片手にアイドルステージ観てないでさあ!

色々な意味で疲れたあたしと絶賛満喫中のライカ・志乃ちゃんの3

人で今度は観覧車に乗る事にした。

先日の風優先輩の警告もあつたので防弾制服着用・武器携帯をして  
いるあたし達である。

だけど、色々なアトラクションの楽しさに「常在戦場」の心構えは  
薄れていた。

観覧車に乗ったあたし達は観覧車から見える絶景に心を奪われて  
いた。

尤も、あたしは先程のターザン・ロープのダメージが抜けきつてお  
らず、げんなりしていた。

あたしの横に座る志乃ちゃんはカメラであたしを撮る気マンマン  
だった。

志乃ちゃん……今度度を越したことやったら、金属矢でカメ  
ラ破壊するからね？

丁度、観覧車が頂辺に到達した頃だった。

あたし達3人の携帯にメール着信が入る。

これって……

「武偵高の周知メール？」

あたし達はそのメール内容を確認し一瞬で凍りつく。

そのメールには

Area：江東区青海5丁目1, 2

Case：Code：F3B-02-EAW

特殊研究科

インターン（中3）の

島麒麟より発信有り（13：55）

と書かれていた。

え……島麒麟ってこの前、お風呂で会った麒麟ちゃんの事!?

まさか……事件に巻き込まれてたなんて……

どうしてこんな事に。

あたしは動揺が隠せなかった。

「……り、あかり、落ち着け」

……（。ん）ハッ!

ライカの言葉で現実に戻る。

「いいから、まずは落ち着け。それから状況を整理しよう」

「う、うん……」

「先ず……現場はここ、ラクーン台場だ」

「ケースF3Bは誘拐・監禁されたって事で……このO2って何だっけ」

「『原則として2年以上が動け』です。あかりさん」

「そして……EAW……『犯人は防弾装備』か。間違い無くプロだろうな」

「近隣の生徒の現場到着は……?」

「えっと、書き込みによると『早くて15分はかかる』そうです」

「そして……島の所属科、特殊捜査研究科CRは色仕掛けハニトラの専門科だ。出来たとしても騙し討ちくらいだろうな……」

「取り敢えず、観覧車が下まで降りてからだね」

「そう……だな」

「そうですね……」

暫くして、観覧車が一周し、発着場に到着した。

あたし達は急いで観覧車から降りて打合せを行う。

「どうする、動くか？」

ライカの問いに

「でも私たち、まだ高1になったばかりですし……」

志乃ちゃんはどちらかといえば、否定的な答えを返す。

風優先輩……。

あたしは……あたし達はどうすればいいの？

否、先輩なら……なんて言うんだろう。

そうか。

そうだよね。

行動せずに後悔するより、行動してから後悔の方が良いよね。

それに、後輩を助けるのは先輩の役目だもん。

「二人共……行こう。今、麒麟ちゃんを助けられるのは——あた

し達しかいない！」

「ああ。解った！」

「あかりさん……解かりました。私もお供します」

あたし達は麒麟ちゃんを助けるべく行動を開始した。

Side Out…

Side Nayu

「まさか……起きて欲しくない事が起きるなんて」

バイト中に入った周知メールを見て、私はこの状況になった事に頭を抱えていた。

「ま、確かにこれは想定外だったよね……」

理子も苦笑いで返す。

「こんな時の備えは不発で終わって欲しかったんだけど、仕方ないか……」

「で、どうするの、なゆなゆ。理子達も動くの？」

「まあね……。身バレしないようにしないでくださいね」

「なんで？」

「あかり達も動いてるだろうし、私達はあくまでサポート」

「成程ね……。ねえ、なゆなゆ。理子思っただけどき」

「何？」

「もうこのままで行けばいいんじゃないかな。絶対身バレしないでしょ」

そう言つて理子は自信を指さす。

この会話で察する人もいるだろうが、現在の私達の格好は武偵高の制服ではない。

バイト中だったので、着ぐるみ姿（防弾・防刃仕様）なのである。因みに理子がトラ、私がパンダである。

「あ、それもそうか……。じゃあこのまま行こう」

「そだね」

私（パンダ）と理子（トラ）も行動を開始したのであった。

S i d e | O u t :  
後編へ続くんだよ。



## 第026弾 サイカイとデアイはイガイなバメンで起こるもの。Ⅱ

Side | Kirin

ラクーン台場にあるラクーングランドホテル。

そのホテルの7階、703号室に拉致られた私は現在……

「まだあるんだろう~~~~つ、銃~~~~」

髪を掴まれ、手首に超偵用の手錠を嵌められています。

そして、私の銃が私の頭に突きつけられています。

「どうか、いい加減髪を掴むのやめてくださいまし！」

「おい、バカ大和。人質だからって女の子に乱暴するんじゃないよ」

銀髪の男性が制止します。

「いいじゃねえかよ。別に」

「うるせえ……。さっさと終わらせろ」

「へいへい……」

銀髪の方……悠斗に説教され大和は私の方に戻ります。

「銃なんかもうありませんわ！ほら！」

べろん

私はその証拠にとガンホルダーを大和に見せます。

すると……太腿が一緒に見える訳で。

「うっ……」

耐性がないのか、大和はかなり動揺している御様子。

では……もう一撃加えてみますか……

「なんなら、直接スカートの中お探しになります？」

照れて視線をずらした大和。

これでガン見してたら「ド変態」の称号を与えていますわ。間違い無く。

「大和、その縫いぐるみだ。明らかに重心がおかしい」

私が持っていたキリンの縫いぐるみ、シヨナサンの方を悠斗は指摘します。

ギクウ……まさか気付かれた!?

「なるほど」

バツ

「ああつ、ジョナサン!!!」

私の制止も聞かず、大和は私からジョナサンをひったくります。

「ジョナサンに触らないで!!」

私は大和に子供っぽく泣きながら訴えますが、それに聞く耳を持たずにジョナサンの首を左手で握ってあちこちを確認しています。

「ジョナサンを返して——!!」

私は大和にジョナサンを返して貰うべく、大和の方へ駆け寄ります。

ドン

その拍子に部屋にあるビール缶（空き缶）と大量の（悠斗が吸った煙草の）吸殻が入った灰皿、メモスタンドが載ったテーブルに私の腿が当たります。

「みきやつー!」

バタン

そしてそのまま私は転んでしまい、テーブルに載っていた物が床に散乱します。

ジューーーーーー

そんな転んでしまった私を助けることなく、大和はジョナサンのお腹のチャックを開け、アメリカ・コルト社が初の、44マグナムとして発売されたMKⅤシリーズの一つであるコルト・アナコンダを取り出します。

銃を使用した時の反動が大きく、私が到底扱えないシロモノですが、対物破壊や対人への威嚇用に持っていたものでした。

「ヒヤッハー!!!もう一丁手に入ったぜえ!!!」

大和は今更時代遅れな世紀末な声を上げて大喜びでした。

そして、コルト・アナコンダを悠斗に渡します。

「武偵のガキを攫えば人質と武器が手に入って一石二鳥になる」

「攫う時の防弾着ぐるみといい、マジで天才だな、悠斗!!」

「こんなの至ってフツ―だ。大和みたいなバカじゃなければな」

「なっ……俺のどこかバカだというんだよ！」

「すぐムキになる……そういうところだ」

「(・皿・) チツ」

「露骨な舌うちすんじやねえよ、バカ大和」

「な……なんだとお！」

大和が悠斗の言葉にブチギレました。

そして取っ組み合いのケンカが勃発します。

私をそっちのけにして。

バカなのでしょうか……あの二人。

私がこの隙を突いて逃げることを想定してないのでしょう

か……。

だーん

直後、銃声が響きます。

「逃げようなんて馬鹿な真似はしない事だな……」

悠斗は私から奪ったコルト・アナコンダを発砲したようです。

この人……抜け目がないですわ……!!

「びええええええええええええええええええええええん!!!」

私は大声で嘘泣きを開始します。

「うっせーなあ……」

そう言つて大和は耳を指で塞いでそっぽを向きました。

嘘泣きと同時進行で私は足で先程倒した時に散乱したメモ帳と

ボールペンを自分のお尻の近くへ手繰り寄せます。

そして、私は私から奪った携帯で脅迫を行う悠斗の会話に聞き耳を

立てます。

「なあ……ラクーンさんも凄惨な事件が起きたら集客に響くだろ

?……このまま何もしないで集客が下がる損害に比べたら、身代金

ぐらい安いモンだと思っぜ……?」

私は悠斗と大和の二人が脅迫を行つてこちらに関心が向いて

いないうちに先ほど手繰り寄せたメモ帳とボールペンをスカートの中

中に隠します。

Side | Out :

Side | Akari

あたしはラクーン台場の建物周辺を探す。だけど……  
(手掛かりが全く無い……一体どうしたらいいの……!?)  
手掛かりという手掛かりが全く無く、ただ右往左往だけで時間だけが経過していく。

ライカが駐車場の方を探し、志乃ちゃんが来場客に聞き込みを行うが、全く有力な情報は出て来なかった。

Side | Out :

Side | Kirin

脅迫を終えた悠斗と大和はビーフジャーキーを肴に酒を呑んでいました。

大和はビール、悠斗はウイスキーを呑んでいます。

私は手錠をされたまま悠斗にウイスキーをお酌しています。  
浮かない顔している私に悠斗はグラス片手に声をかけます。

「金さえ受け取ったら無事に帰してやるから、そんな顔するなよ」

「今にきつとカツコイイ王子様が助けに来るですの!」

悠斗の言葉に私は(σ、凸、)アツカンベーをしてそう返します。

「でも……王子様ごめんなさい」  
くるっ

私は半回転してそのまま人魚姫座り。

「なー、悠斗、なんか始まったぞ (はむはむ)」

「ああ……そうだな」

大和はビーフジャーキーを啜えつつ、悠斗はグラス片手にそれを見ていた。

私のターンはまだ続きます。

「麒麟は特殊捜査研究科のー女性専門要員、それもタチ向けですの……」

この一連の演技は空想の王子様とのやり取りというシチュでやつ

ていますわ。

それをみていた悠斗と大和はというと……  
「なんか……コイツを攫って来たのは失敗だった気がするな……」

「そうだな……。おかしな娘を攫っちゃったな……」  
あまりの私のマイペースさにドン引きでした。

ですが、周りがどう言おうが続くものは続きます。

「はう！ 囚われの麒麟姫に更なる悲劇が……」

「今度はなんだよ……」

大和が少し戸惑いつつも尋ねてきます。

「お、おトイレに行きたいですの……！」

私はそう答えます。

「行かせてやれ。携帯はここだしな」

「解ったよ……」

悠斗は大和に私を部屋のトイレに連れて行きます。

そして扉を閉めた直後、

「さっさと済ませろ」

そう言つて大和は扉の前で番をするようだ。

私は先程手に入れたメモ帳とペンを取り出します。

次に扉の前にいる大和に怪しまれないように水を流します。

こうすれば、音消しで水を流したと思うでしょうからね。

そしてトイレの壁に掲示してある避難経路図を見て逃走方法を考えます。

えっと……プールがここで、プールがここだから……  
この逃走方法でいいはずですわ……。

そしてその逃走方法をメモ帳に書いていきます。

この時、万が一の事を考えて武偵の短ショートサイファー暗号で書いていきます。

『703NFターザン戻りでダイブ』

それを沢山書いてその用紙を紙飛行機の形に折ります。

そしてこれを飛ばせば……

そう思った時でした。

「まだかよ？何やってんだよ」

と、イラついたような大和の催促が入ります。

なので、私は

「生理中ですのー！」

と返します。

私の返答に大和は押し黙った御様子。

やはり女性に対する耐性が無い相手にはこの手の返答は有効ですわね……。

Side Out…

Side Akari

どこなノ……麒麟ちゃん！

ラクーングランドホテル周辺を探すあたしは一向に手掛かりすら見つからず、次第に焦りが出てくる。

その時だった。

コツンツ

「あ痛っ！」

後頭部に何処からか飛んできた紙飛行機が当たった。

「何これ……」

そしてあたしは紙飛行機の翼の部分に書いてあるのを発見する。

『703NFターザン戻りでダイブ』

これは……武偵の短シヨトサイフアー暗号だ……。

『NF』って確か『Need Friendl要y』だったハズ……！

あたしは上を見上げ、紙飛行機の出処を捜す。

紙飛行機は……下から数えて7番目の窓から……つまりは7階。

ってことは……今、麒麟ちゃんは……

ラクーングランドホテル703号室にいる!!!

麒麟ちゃんの居場所が判明したあたしは電話で志乃ちゃんとライカに連絡する。

「志乃ちゃん！ライカ！集まって！」

『はい！了解しました！今行きます！』

『ホテルロビーで作戦会議な！』

連絡後、あたしは志乃ちゃんとライカと合流し、ホテルのロビーで作戦会議を行う。

『「ターザン」は強襲科でロープワークを示す暗号<sup>サイファー</sup>だけど……』『戻りでダイブ』ってなんだろう……』

あたしは首を傾げつつ、そう言って紙飛行機をライカに渡す。

だが、ライカもその全文の意味は解らなかった。

時間を掛ければ、その文の意味も判明するだろうが、今は麒麟ちゃんの命が懸かっている。

「とにかく、今は行動しましょう。この場合、窓からとドアからで挟み撃ちするのがセオリーです」

志乃ちゃんの言葉にあたしとライカは頷く。

「そうだな……。じゃ、アタシがロープで窓の上から行く。あかり達はドアから」

あたしはマイクロUZIの弾倉を装着し、それを了承の意として示す。

ライカはケースに入っているアサルトライフル<sup>MAGPUL MASADA</sup>を組み立て、肩に担いで

「703号室で会おうぜ！」

と宣言する。

「了解！」

あたしと志乃ちゃんは了承の返事を返し、あたし達は行動を開始した。

Side | Out:

Side | Raika

エレベーターと作業員用の非常階段を駆使して屋上に到着したアタシは辺りを見回し、ワイヤーフックを掛けそうな場所を探す。

だが、屋上の形はドーム型。つまりは丸くてツルツルしている。

「ここじゃフックがかけられない……。こここのすぐ下に703

号室があるっていうのに……」

その時、アタシの目に非常階段のポールが目に入る。

「あのポール……!」

そして思い浮かぶのは先程、あかりが遊んでいた「ターザン・ロープ」のアトラクション。

二つのファクターピースが一つに重なる。

そうか……!だから、『戻りでダイブ』か……!!

全く、突飛な事を考えやがって!

その思いつきに賭けてやるよ!待ってるよ、島麒麟!!

Side | Out :

Side | Akari

703号室の扉前に到着したあたしは志乃ちゃんと突入のタイミングを小声で合わせる。

「行くよ、志乃ちゃん」

「はい。あかりさん、私がついてます」

まず、志乃ちゃんがドアにそっと近づく。

そしてサーベルを持つ右手を後ろに大きく引く。

スウ

ひと呼吸おく。

狙うはドアに備え付けのオートロック。

「はあっ」

ズガッ

燕返しに応用技である燕貫きで鍵を破壊する。

バン!!

あたしがすかさず体当たりでドアをこじ開け、突入する。

「!?!」

「!!」

誘拐犯の二人組と麒麟ちゃんがそれに気付く。

「武器を捨てて!!」

あたしはマイクロUZIを構えて誘拐犯にそう告げる。



つるっ

「わっ」

あたしは足元に散らばっていたスリッパに足を滑らせ……  
ボタンツ

派手に転んでしまった。

「あ、あかりちゃん!?大丈夫ですか!!」

志乃ちゃんがあたしを心配して駆け寄る。

「う……武器を……捨て……」

あたしが起き上がって言い直したその時には……

「捨てるのはそっちだ」

優劣が完全に逆転していた。

「なんでそこで転ぶのですの——!?!」

それを見ていた麒麟ちゃんは絶望に染まった顔をしていた。

Side | Out:

Side | Raika

ドーム状のホテルの屋上。そこに設置されたポールに掛けた空挺ワイヤーをアタシは横へ横へと伸ばしていく。

そして、位置と角度を目視で何度も何度も確認する。

「(あそこが、703……。そしてプールはあの辺……。よしっ!)」

そして、一つ深呼吸をしてアサルトライフルを腰だめに構え、屋上からその身を投げ出す。

Side | Out:

Side | Akari

「ハハッ……。まさか人質と武器が増えるとは思ってもみなかったぜ……。なあ、悠斗」

「ああ。だが油断はするなよ、大和」

黒髪の方の誘拐犯……。大和はあたしの銃を奪ってその銃口をこちらに向けている。

こうなってしまうては身動きができない……。  
銀髪の方……悠斗の左腕で首を締められるようにして捕まっ  
ている麒麟ちゃんも観念した様子だ。

その時だった。

ババババババババババババババババババババババババ  
ババツバババ

屋上からワイヤーで降下したライカのアサルトライフルが火を吹  
いた。

アサルトライフルでの銃撃の嵐は部屋の窓ガラスを木っ端微塵に  
破壊する。

「!?!」

いきなりの出来事に吃驚する一同。

その中で麒麟はライカの存在に気づく……。

「(あの御方……分かってくれた!!)」

ライカはそのまま右方向へフェードアウトする。

「な……なんだ?!?今は……」

大和は戸惑っていたが……

「バカが!そっちには誰も居ねえよっ!」

悠斗は此方の作戦が失敗したと思っっているようだ。

その中で麒麟ちゃんは希望が見えた顔をしていた。

「がう!ですの!」

ガブツ

麒麟ちゃんが悠斗の左腕に思い切り噛み付いた。

「うわっ!」

あまりの痛さに悠斗は麒麟ちゃんの拘束を緩めてしまう。

「てんめえ……!と、生まれ……!」

即座に抜け出した麒麟ちゃんは悠斗の怒声もスルーして、可憐な笑  
顔で

「♪恋心は振り子みたいに」

「揺れて揺れてー♪」

ベッドをジャンプ台代わりにして

「3」

「2」

「1」

カウントダウンの後、

「きやはーんっ☆」

ふわっ

あろう事か麒麟ちゃんは銃撃によって消滅した窓から自ら飛び降りた。

まさかの行動に悠斗や大和だけじゃなく、あたしと志乃ちゃんも驚愕する。

その直後、梃子の原理で戻ってきたライカが麒麟ちゃんをキャッチした。

まさか……麒麟ちゃんは最初からこれを狙ってたの!?!  
だとしたら………凄いい発想力!

ライカは右手で麒麟ちゃんを抱えたまま、左手に手にしたダガーナイフでワイヤーを切断し、プール方面に飛び降りる。

「クソッ!」

悠斗はコルトアナコンダの標準をライカの方へ向ける。

「ライカ——!!」

あたしの声にライカが自分に標準が向けられている事に気づく。

しかし、空中で無防備な状態である。

「だめ——!」

あたしはそれを阻止すべく悠斗の方へ駆け寄る。

「動くんじゃないえ!」

大和はあたしに掴みかかろうとする。

「あかりさん! 危ない!!」

それに気づいた志乃ちゃんが叫ぶ。

だけど、あたしは歩みを止めない。そして構えて

鳶穿—!!

大和の持っている銃を奪い取る。

風優先輩……。

その時、風優先輩の忠告が脳裏に蘇る。

「休日です町に出るからって気を抜かないで、武偵としての自覚……『常在戦場』この言葉の意味を胸に持っててね？」

あたしたち、武偵としての自覚が足りませんでした。

反省しました。だから……

だから……助けて……!

「やめて——!!」

あたしの叫びと共にコルトアナコンダから銃撃が放たれる。

放たれた銃弾はライカ達に向かって飛んでいく。

ライカは麒麟ちゃんを守るように抱き抱える。

その直後、別方向から飛んできた銃弾に銃弾は弾かれ、ライカ達には当たらなかった。

そしてそのまま、ライカ達はプールへと落下した。

「てめえら!動くな!」

大和はあたしたちを静止させようとします。

「その前にてめえが動くんじゃねえよ!!」

そんな声と共に何処からか現れた風優先輩が大和にドロップキックを炸裂させる。

「がはっ……」

威力の強いドロップキックを喰らった大和はKOしていた。

「てめえ……一体何者だ!!!」

悠斗は声を荒げる。

「私?このラクーン台場でバイト中だった武偵よ。逢坂悠斗さん、あなたを未成年者略取及び誘拐罪ならびに身の代金目的略取等の罪で逮捕するわ。無駄な抵抗は止めなさい」

風優先輩は鋭い眼差しで悠斗を睨みつけ、そう告げる。

「逮捕できるもんなら……やってみろよ!!!」

悠斗は風優先輩に向かって発砲する。

風優先輩はそれに動じもせず、腰から刀身が朱鷺色の刀を抜き、構える。

そして、銃弾を全て刀で弾いていた。しかも一発も回避して避ける

こともなく。

「な……んだとお!？」

目の前で起きた事に悠斗は驚きを隠せてなかった。あたしは以前見た事があったので、特に驚かなかつたが、志乃ちゃんはこの初見だったらしく、悠斗同様、驚愕していた。

「さて……まだやるの?」

風優先輩は微笑みながらそう言った。

なんだろう……風優先輩、遊んでる気がするなあ……。

気のせいだと思うけど。

「解った、降伏……するわけねえだろ!」

悠斗は銃をダガーナイフに持ち替えて風優先輩の懐を狙って襲う。

風優先輩の武器は長身の刀。

故に懐に入る接近戦には弱い。

そう悠斗は判断したのだろう。

だが、その攻撃は風優先輩には届いてなかった。

フリーゲランス  
エクサルマティオー  
「氷結・武装解除」

何故なら……風優先輩の放った技によってナイフは木っ端微塵になつていたからだ。

確か……あの技は以前聞いたことがある。

フリーゲランス  
エクサルマティオー  
氷結・武装解除

「相手の武装破壊に使用する技で相手に凍傷を負わせることなく、身に付けている物を凍らせて砕く事が出来て、更に対象を武器にする事も可能で、かなり汎用性の高い技」

だったっけ。

今回は服は破壊しなかったようだ。

男の裸なんて誰得だつて話だからね。

ちやきつ

風優先輩は悠斗の喉元に刀を突き付ける。

「さて……もうそろそろ降参してくれない?」

とびつきりの笑顔（しかし、物凄い濃密な殺気を込めている）でそう告げる。

その殺気に気圧されたのか、悠斗はあっさり降参した。

まあ……フツ―はあんな殺気に耐えられる奴はいないと思う。耐えられるのは相当耐性が無いといけない。

その証拠に志乃ちゃんも気圧されてるもん。

これは……介助案件かな……？

あ、そうだ……！ライカ達は……！！

あたしは慌ててライカ達が落ちたプールの方を見る。

ライカ……！！

「プハツ!!」

「ライカ!!」

良かった……無事だったんだ……。

ライカが無事であたしは安堵する。

ライカは麒麟ちゃんを抱えたまま浮かび上がってきて此方にピースサインを送っている。

良かった……ホントに良かった……。

あれから、通報を受け、駆けつけた警察に悠斗と大和の身柄を引き渡す。

その後、志乃ちゃんの介助をして元に戻るまで暫く時間が空いた。

風優先輩も誰かと通信で話しているようだった。

聞き耳を立てると相手はアリア先輩と理子先輩のようだ。

どうやら、風優先輩はアリア先輩達にも協力を仰いでたようだ。

風優先輩の通信が終わり、あたしは風優先輩と話す時間ができた。

「あ……あの、風優先輩」

「ん?どうしたの、あかり?」

「今日は……助けてくれて有難うございましたっ!」

「……別に感謝される事はしてないって。私が此処に居たのも偶々だし」

「え……でも……」

「私はただ、武偵憲章第1条を守っただけ。それに今回の手柄はあかり達……だからね」

「は、はい……」

「だって、私が来たの、終盤の方だったし」

「でも、そんな事ないです！助かったのは変わりないです！」

「ま……、強いて言うなら今回みたいなポカミス一つで大きく状況は覆されるって覚えておいたほうがいいかな？」

「え……」

ま、まさか見られてた……の!?

「見てなくても、なんとなくで解るって」

「……」

あまりの規格外な風優先輩の答えにあたしは絶句してしまった。

「もうそろそろ文が来る頃だし行こうか、あかり」

「は、はい……!」

あたしは志乃ちゃんを担ぐ風優先輩の後に続いたのであった。

?????これは、事件が終わった日の夜に開催された食事会で聞いた話なの

だが、

あれから、麒麟ちゃんはライカの事を王子様認定して偉く気に入ったそうだ。

そして麒麟ちゃんはなんと、ライカに「戦姉妹申請を行う」と宣言したらしい。

道理で……食事会の時、麒麟ちゃんがライカにベツタリだった訳だ。

なんか……ライカも大変になっちゃったなあ……。

そう同情に近い感情をライカに抱くあたしであった。

続くよ！

第027弾 凧優登場 I F ルート 【着ぐるみ無双】

悠斗はコルトアナコンダの標準をライカの方へ向ける。

「ライカ——!!」

あたしの声にライカが自分に標準が向けられている事に気づく。しかし、空中で無防備な状態である。

「だめ——」

あたしはそれを阻止すべく悠斗の方へ駆け寄る。

「動くんじゃない！」

大和はあたしに掴みかかろうとする。

「あかりさん！危ない!!」

それに気づいた志乃ちゃんが叫ぶ。

だけど、あたしは歩みを止めない。そして構えて

鳶穿ー!!

大和の持っている銃を奪い取る。

凧優先輩……。

その時、凧優先輩の忠告が脳裏に蘇る。

「休日で町に出るからって気を抜かないで、武偵としての自覚……」

『常在戦場』この言葉の意味を胸に持っていてね？」

あたしたち、武偵としての自覚が足りませんでした。

反省しました。だから……

だから……助けて……!

「やめて——!!」

あたしの叫びと共にコルトアナコンダから銃撃が放たれる。

放たれた銃弾はライカ達に向かって飛んでいく。

ライカは麒麟ちゃんを守るように抱き抱える。

その直後、別方向から飛んできた銃弾に銃弾は弾かれ、ライカ達には当たらなかった。

そしてそのまま、ライカ達はプールへと落下した。

「てめえら！動くな！」

大和はあたしたちを静止させようとしています。



←※ ここよりIFルート【着ぐるみ無双】開始です。←

その時だった。

「ふもっふー☆」

「ゴファッ」

そんな可愛い掛け声とともに現れたパンダ（着ぐるみ）がえげつない威力の蹴りを大和にぶちかました。

モロに喰らった大和は壁際まで飛ばされ、気絶した。

この状態だとKOといっても差し支え無いだろう。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

あたし達は啞然となってしまふ。

一体何がどうなってるの!?

全くもって意味不明なんだけど!!

そして何なの、このパンダ!

無駄にハイスペックなんだけど!?

これ、パンダなの!?

「てめえ……何者だ!?!」

悠斗が声を荒らげ、パンダの素性を聞く。

「ふもふもふもふもふもふもふもふもっふー☆」

パンダから返って来た回答は意味不明でした。

「日本語でおk」とガチで言いたいくらいだよ!

「いや、何言ってるのかサッパリ解んねえよ!!!」

悠斗はガチギレでツツこむ。

「ふも……」

パンダは溜息をつくど何処からか札を取り出した。

その札には何か文字が書いてある。

『武偵よ。大人しく降伏しなさい』

どうやら、このパンダは武偵らしい。

こんなパンダ、一度見たら忘れられない気がする。

その自信は確かにある。

「ハア？てめえが武偵だど!?冗談も休み休みにしとけよ」

悠斗はこのパンダが武偵だという事実が信じられないようだ。

まあ……あたしも信じる自信はないかな。

パンダはまた新しい札を取り出す。

『疑うんなら、試してみるか?』

どうやら挑発してる様だ。

可動域の少ない手でそれも思い切り。

「舐めやがって……このクソパンダ」

悠斗はコルトアナコンダの標準をパンダに定め、発砲する。

パンダはそれに動じることなく、刀を抜く。

刀身が美しい朱鷺色をしている。

「そんな刀で何ができる」

悠斗は小馬鹿にするように嘲笑った。

ぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱん!!!

カキン!!

パンダは手に持った刀で銃弾を全て弾く・斬るなどして捌いた。

「……何……だと……」

悠斗は某マンガ作品の名言(迷言)を呟いていた。

それを言うくらい動揺してるのだろう。

あたしはそれよりもさつき、パンダが持っていた刀が気になるんだ

よな……。

あの刀と同じ特徴の……刀身が朱鷺色をした長刀をわりと最近この目で見た。

そう……あたしの戦姉あね……水無瀬凧優先輩が持つ刀、色金定女イロカネサダメ。

それと特徴がほぼ一致するんだよね……。

気のせいかな……。

「なっ……お前、何者だ!」

またもや有り得ない光景を目の当たりにした悠斗はパンダに自らの正体を明かすよう求めた。

ぱんだはまたもや何処からか札を取り出す。

札には

『ただの通りすがりの武偵さ。強いて言うなら超偵だけどね』  
と書かれていた。

さつきからこのパンダ、札で会話してるよ……。

札で会話とか某マンガ作品のあのキャラみたいだ……。

そう思ってしまうあたしがいた。

「なっ……『超偵』だ?!?だったら、分が悪い……解ったよ、降参する……訳ねえだろーが」

悠斗は降伏すると見せかけて、ダガーナイフでパンダを斬り付けようとする。

あのパンダの武器は長刀、なので懐の攻撃には対応できないであろう。

則ち、相手の懐に入れるこちらが有利だ。

悠斗はそう考えているだろう。

確かにその考えも一理ある。

まあ、それは攻撃が届いていれば……の話なのだが。

悠斗がパンダに行った攻撃は届いていなかった。

何故なら、悠斗の持っていたダガーナイフがパンダの懐に届く前に破壊されていたからだ。

「……何……だと……」

まさかの出来事に驚愕する悠斗。

パンダは（表情は変わらないが）不敵に笑っていた。

そう、あのパンダは氷系能力の技の一つを使った。

その技の名は『氷結・武装解除』  
フリーゲランス エクサルメティオー

そしてこの技の効果は、相手の武装破壊に使用する技であり、相手に凍傷を負わせることなく、身に付けている物を凍らせて砕くことができる。

また、対象を武器にする事も可能で、かなり汎用性の高い技である。現在の悠斗はナイフだけが破壊されており、衣服は破壊されていない

い。

この技は威力を高めれば、衣服も容易く破壊する事ができる。しかし、今回はそれを行っていない。

と、いうことは「男の裸なんて誰得……」という思考に基づく考慮だろう。

パンダは刀を悠斗の喉元に突きつけ、札を持って迫る。

『さて……もうそろそろ降参してくれない?』

札にはそう書かれていた。

そしてパンダの愛くるしい笑顔の裏から凄まじい殺気が放たれていた。

それはもう、「死にたくなきゃ、とつとと降参しろよ?」と言わんばかりに。

その殺気に気圧された悠斗はがっくりと膝をつき、両手を上げて降伏した。

????

悠斗と大和の警察への引渡しを終了させ、あたし達はこの窮地を救ってくれたパンダに御礼を言おうとした。

だが、もう既にパンダの姿はそこになかった。

正体も告げずに去ってしまったようだ。

でも、あたしには解る。

あのパンダの正体は……風優先輩だ。

だって、あんな着ぐるみを着て人間離れした動きを出来る人ってそうそう居ないだろうし。

「(ありがとうございます、風優先輩……)」

あたしは心の中で風優先輩にお礼を言うのだった。

Side | Out:

Side | Nay u

私は703号室での制圧を終えて、スタッフ用の更衣室に移動していた。

暫くして、トラの着ぐるみも入ってくる。

「そつちも終わったんだ、お疲れ、なゆなゆ」

トラは手を振って此方を労う。

「そつちこそ、お疲れ、理子。軍団員の相手させちやつて悪いね」

私はトラ・・・もとい、理子にお礼を言う。

「良いって、良いって。りんりんが狙われてるって聞いたら放って置けるわけないじゃん」

そう言つて理子は頭の被り物をカポッと取つた。

「そつか、でもありがと。理子」

そして、改めて御礼を言う私。

「じゃあ、その御礼で理子になゆなゆの手料理を食べさせて欲しいな・・・」

「え」

理子の要望に呆気に取られる私。

「だって、レキュに手料理振舞うつて約束したんでしょ？ だったら理子も御相伴に預かってもいいじゃん！」

理子はその要望の真意を晒す。

「え、それでいいの・・・？」

私の質問に

「良いの！ だってなゆなゆの料理ちよー美味しいし！ のーぷろぶれむ。だよ！」

と理子は返す。

「解つたよ。それでいいなら喜んで」

私は特に問題は無かったのでそれを了承する。

「うわーい!!!マジありがと、なゆなゆ！」

理子は私の了承に物凄く喜んでいた。

そんだけ喜んで貰えるところちとしても嬉しくなるね。

私はそう思つて更衣室の壁にある時計で現在時刻を確認する。

「なゆなゆ、休憩時間つてあとどん位だっけ？」

理子が尋ねてきた。

「えつと・・・あと30分位なはずよ。さつき、瑞穂さんからそう連絡来てたし」

「そつか・・・。じゃあ、バイトも頑張らないとね」

「そうね」

私達は着ぐるみを脱いで次のシフト用の制服に着替えた。

15分後、休憩を終えた私と理子はウエイターの格好に着替え、更衣室を後にする。

そして次のバイト場所である展望レストランに向かったのだった。

S i d e | O u t …

F i n

## 第028弾 救われの姫は王子の心を救う I

麒麟ちゃんの救出劇から数日が経ったある日の朝。

東京武偵高校の1―Aの教室であたしは志乃ちゃんと一緒に今日の授業の課題をしていた。

ガラツ

教室のドアが開き、ライカが入ってくる。

この時、ライカが普通に入ってくれば、何の違和感も無かつただろう。

しかし……

「ライカ、何やってんの?」

あたしはそうライカに質問をせざるにはいられなかつた。

何故ならライカは麒麟ちゃんを背中におぶった状態で教室に入ってきたからだ。

「こないだからずっと島が引つ付いて離れないんだ」

え……?マジで!?

幾ら何でも、『ずっと』なんて……そんな事は……

「おねーさまー。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。」

あつた。

「有り得ない」とか思っただけどあつたよ。

ライカはげんなりしてて麒麟ちゃんはものすごく嬉しそう……  
すごく対局だ……

「ふんふんふん!お姉様、いいニオイ。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。」

麒麟ちゃんがライカの髪の毛のニオイを嗅いでいた。

それに気付いたライカはギョツとしていた。

え?!二人共、もうそこまで進んでんの!?

なんかもうあたし、フリーズしそうなんだけども!!

横では志乃ちゃんが「朝から良い物を拝見……」と思つて羨ましそうにライカ達を見ていた。

言つとくけど、志乃ちゃん、それやったら怒るかんね!?

「だあ——!!変態か、お前は!」

あ、ライカがキレた。

まあ、うん。イキナリそれされたらそうなるね。うん。

ライカの叫びに麒麟ちゃんは

「はいですよ!」

なんと肯定しちゃったよ。

そこは否定してほしかったよ!

「いいかげんにしろ!!」

ライカの肘鉄エルボーが麒麟ちゃんのボディに突き刺さる。

「うっ……」

ずるっ……

どさっ

麒麟ちゃんはライカから離れ、きゆうーと目を回して倒れてしまった。

「麒麟さん!」

「大変!」

あたしと志乃ちゃんは課題を一時中断し、麒麟ちゃんの下に駆け寄る。

「大丈夫!」

あたしが呼びかける。

しかし、返事がない。

命に別状はなさそうなので屍になってはいないようだ。

「インターン中学生相手にやり過ぎですよ、ライカさん」

志乃ちゃんがライカを窘める。

「……お、おい」

流星に良心が傷んだのか、ライカは麒麟ちゃんに歩み寄る。

ばちっ

ささっ

その瞬間を見計らったかのように目を覚ました麒麟ちゃんは素早い身のこなしで

「おお、悪い子ぶった黒のレース!!カッコイイですよ!」





「あのライカを手玉に取るなんてある意味ですごい子だよ。・・・面倒見てあげればいいのに」

風優先輩も育成に一枚噛んでるって言うし、相当な実力なんだと思うけどな・・・。

「ですよね。1年で戦姉アミカになれたら立派ですし。確か、去年の首席もそうだったと聞いてますよ」

去年の主席・・・キンジ先輩の事か。確か戦妹アミカは諜報科レザドの風魔陽菜だっけ。

そして、あたしはふと先程のライカが見せた心配そうな表情を思い出す。

「・・・？どうかしたんですか、あかりちゃん」

「んーとね、ライカも麒麟ちゃんの事本気で嫌って無い様な感じがするんだよね・・・。嫌ってたら心配そうな表情なんてしないでしょ」  
そうあたしが言った直後だった。

「お姉様、ここにいらで戦妹にー!!」

「くんなー!」

渡り廊下で逃げるライカとそれを追う麒麟ちゃんが居るのに気づいた。

その次の瞬間、

「どうえりや——!!」

あろう事かライカは麒麟ちゃんを渡り廊下の外に投げた(ジョナサンも一緒に)。

「ちよっ・・・おま・・・!」

あたしは急いで麒麟ちゃんを助けるべく跳んだ。

そして麒麟ちゃんを受け止め、麒麟ちゃんに衝撃が伝わらない様に優しく着地する。

「着地する時の衝撃を調節しながらすればいい」って風優先輩、言っただっけ。

「だ・・・大丈夫!？」

あたしは麒麟ちゃんに呼び掛ける。

志乃ちゃんはジョナサンを頭で受け止めて、地面に伏していた。

麒麟ちゃんはぴよんとあたしから降りる。どうやら無事だったよ  
うだ。

「・・・ライカお姉様、お星様のように遠い存在・・・!!」

麒麟ちゃんの芝居掛かった発言にぶいっとそっぽを向くライカ。

あたしはそれをぽかーんとした表情で眺めていた。

「それでも戦妹になりたい・・・。この私の想い・・・!!」

目をキラキラさせながらの麒麟ちゃんの独白。

「ん・・・?」

この時あたしはふと思う。

まさか・・・麒麟ちゃん、投げられることも、下にあたし達が  
居る事も想定済だったの!?

麒麟ちゃん、恐ろしい子・・・!!

「いたたた・・・」

さつきまで地面に伏せていた志乃ちゃんがようやく復活する。

その頭にはずつと麒麟ちゃんの持つていたぬいぐるみ・・・ジヨナ  
サンが鎮座している、

「なんで、ぬいぐるみなのにこんなに重いんです・・・?」

そう言いながらジヨナサンを退ける志乃ちゃんもケガはないよう  
だ。

横目でそれを確認し、あたしはホツと安堵した。

そんなあたしに・・・

「間宮様っ!!」

麒麟ちゃんはギュツと抱きついてきた。

まだ続いてたんだ・・・。

「!!」

えっと、志乃ちゃん? 何故にジヨナサンの首絞めてるの!?! それに顔  
! 表情怖いよ!!

あたしにはジヨナサンが

「ちよっ・・・おま・・・首、首を・・・締めんなて!!! 何すんね  
ん!!! ギブギブ・・・」

と言っつていそうな気がした。関西弁なのはあくまで作者の想像だ

葵先輩

けど。

「間宮様ならお分かりいただけますよね!？」

あたしの手を両手で取った麒麟ちゃんはこちらに向かってウルウルと上目遣いで顔を近づけてきた。

「は、はい?。」

真心を込めて訴えかける麒麟ちゃんに戸惑ってしまうあたし。

そこにジヨナサンの首を絞めたまま志乃ちゃん（修羅）が突撃してくる。

「あかりちゃんから離れてー!!!」

麒麟ちゃんをあたしから引つpegす。

「間宮様ーっ!!」

麒麟ちゃんの方も離れようとせず、志乃ちゃんとの攻防が始まっていた。

当事者であろうあたしはもう何が何やらわからない状態だった。

時間は流れ、放課後。

アサルト強襲科の格闘訓練場（通称・黒い体育館）の中でライカは相変わらず男子相手に無双だった。

一人目、豪快に払い腰を決めて勝利。

二人目、足技である小内刈りを仕掛けられるが、それをすかしてからの一本背負いに繋げる技を披露。

そして、一本背負いでトドメ。で勝利。

傍らにはライカに敗北し、床に伏す男子生徒の山。

「うむ、お見事」

担当教諭の蘭豹先生からも称賛されていた。

その様子をあたしは休憩する素振りで体育館の片隅から見学していた。

見学という体を取っていても集中出来ていなかった。

その理由は……麒麟ちゃんの事だ。

麒麟ちゃんの頭脳明晰な所を見込んではいらんだけども、もう一つ、妙に共感してしまう所がある。

(あたしも風優先輩にああだったから、気持ち分かるんだよなあ……)

ライカの戦妹アミカになりたくて必死に追い縋る麒麟ちゃん。

その姿、そのイメージが風優先輩の戦妹になる前の自身の姿と重なる。

そこでとあることに気付く。

(……麒麟ちゃんはまさか、それを知った上であたしに協力を求めてきたのかな……?)

それが真実だとすれば、麒麟ちゃんはとんでもないくらいの策士だ。

あたしより年下といえど、学べる箇所は多くあるかもしれない。(できるだけ、力を貸してあげよう)

そう思ったあたしは制服の襟に取り付けた隠しマイクに口を近づけて小声で囁く。

「麒麟ちゃん、聞こえる？ライカは何時も通りだよ」

その連絡先は、ここから離れた場所に居る麒麟ちゃんだ。

現在もその場所から双眼鏡を使って此方を観察しているだろう。

「次、間宮。準備せえや」

蘭豹先生からお呼びがかかった。

「ゴメン。お呼びがかかったし、一旦切るね」

「はい。頑張ってください。間宮様」

麒麟ちゃんに一言入れて通信を切る。

さて……。麒麟ちゃんの激励もあつたし、頑張らないとね。

あたしは指抜きグローブFを手に装着し、闘技スペースに向かう。

その道中でライカとすれ違う。

「あかり、何時も通りで頑張れよ！」

「うん。了解だよ、ライカ」

軽く言葉を交わす。

相手は……。クラスが違う男子生徒か……。

あたしが相手だと知った男子生徒は勝ち誇った顔をしていた。

どうやら、あたしが相手に楽勝に勝てると思っっているのだろう。

周りの男子生徒の盛り上がりようから見学の見学男子生徒もそう思っているみたいだ。

(……) フウー……

一つ深呼吸をして構える。

「始めっ！」

蘭豹先生の開始の合図と共に男子生徒が攻撃を仕掛ける。

あたしはそれを右手でいなす。

男子生徒は追撃を加える。

あたしはそれを必要最小限の動きで回避する。

ここで必要以上の動きをすると、その次の攻撃に影響が出かねない。

それは風優先輩に徹底的に叩き込まれた事だ。

「(あ……何時もより上手くやれてる)」

あたしはそう思った。

それもその筈である。

あかりが組手の練習をしている相手は大体がRランク同等のAランク風優・Sランク相当のAランク葵・Sランクアリア・Aランク相当のBランクライカ。

強襲科の女子生徒の中では上位の実力に匹敵する人達である。

更に最近は理子の薦めでパオニヤン炮娘、メイメイ猛妹から、中国拳法も習っている。

そんな彼女達と組手の練習をしているあかりも当然地力は入学時とは比べ物にならない程成長していた。

そう。少なくとも同学年の男子生徒に遅れは取らないほどに。

次第に男子生徒は苛立ちが募っていた。

その証拠に攻撃が一撃毎に大振りになっている。

これにより男子生徒に大きな隙が生じることとなる。

訪れた好機を逃す程あたしもバカではない。

男子生徒の攻撃の力も利用してあたしは男子生徒の隙だらけに

なった弱所……脇腹に一撃を入れる。

あたしの一撃を喰らった男子生徒はその場で崩れ落ちた。

「そこまで！」

蘭豹先生の合図で試合はあたしの勝利で終了する。

周囲から歓声が起こる。(主に女子生徒)

男子生徒はザワついていた。

それはそうだろう。だって、これ、男子生徒に披露したの初だし。

「次の挑戦者は居らんのか？」

蘭豹先生は次のあたしの対戦者を募っていた。

ここから、10人の男子生徒と連続で闘う事にあたしはなった。

一々戦況の詳細を述べると長くなるので、結果だけ言っておこう。

二人目、最初の一撃のカウンターで腹パンを決めて勝利。

三人目、一撃で沈められないように奇襲をかけられるも、それを逆手に取ってねじ伏せて勝利。

四人目、相手の攻撃を紙一重で回避しつつ、懐に潜り込んで掌底を放ち、相手に脳震盪を起こさせ、勝利。

五人目、相手と同じ速度で交叉し、足払いからの鳩尾に肘鉄エルボーを叩き込んで勝利。

六人目、七人目は二人纏めてだった。二人の挟み撃ち攻撃に不意を突かれるも、難なく躲し二人の頭を「ごつつんこ☆」させて再起不能にして勝利。

八人目、相手の打撃をカウンターするも、さらにカウンターで返されるも、その裏をかって背負い投げを決めて勝利。

九人目、こちらが先制でハイキックを行なうが、相手に躲され、相手が間合いを開こうとしたところを追撃して、ドロップキックをかまし、体勢を崩したところにタイキックを顔面に入れ、相手のリタイアにより勝利。

十人目、試しに殺気を出したら想像以上に怯んだので、隙だらけになった背後にサマーソルト決めて勝利。

十一人目、もう一度殺気を出したら、今度は相手が戦意喪失で降参して不戦勝(?)。

こうしてライカと同等の男子生徒の屍いもつと(死んでない)の山が出来ていた。

終了後、「間宮、流石はあの水無瀬の戦妹いもつとだけあるやん」と蘭豹先生からの称賛を貰った。

そして、男子生徒は啞然となり、女子生徒は大歓声だった。  
こうして、1年の全員参加の模擬戦闘訓練は幕を閉じた。  
その次に2・3年生の部が行われた。

結果は・・・風優先輩、アリア先輩、結衣先輩、葵先輩の無双  
劇場だった。

3年の先輩も参加していたにも関わらずに・・・だ。

その中でも特に凄かったのは風優先輩VS結衣先輩の戦いだった。  
もう、能力使用アリのルールだったのでそれはもう体育館が  
破壊されるんじゃないか・・・って程に。

そこに審判をしていた筈の蘭豹先生がアリア先輩にタイマーを投  
げ渡し、まさかの参戦。

3人の鬪いは拮抗して続いた。  
見学の生徒達は啞然だった。それはあまりにも人間離れしていた  
鬪いだったからだ。

その戦いもアリア先輩の持っているタイマーが鳴り、終了・・・  
はしなかった。

なんと、勝手に「延長戦」が始まってしまったのだ。

これは・・・もう誰にも止められない・・・そう思った。  
「・・・稲交尾籠いなつるびのかたま」

しかし、葵先輩が放った技によって、3人は捕縛される。  
こうして延長戦の幕は閉じたのだった。

この時、あたし達全員は改めて葵先輩のチートさに戦慄したのだっ  
た。

訓練終了後、あたしとライカは会話しながら教室に戻る。

「さっきのちよろいやつらばっかりだったな」

「ライカが強い。あたしはそんな事無かったし」

「いやあ・・・あかりも相当強いだろ。アイツ等呆気にとられてたし」

「そういえばそうだったね」

その時、ふと思う。

「(ライカの間・・・上手く見つかるといいけど・・・)」



念の為にマイクは再びONにしてある。

やっぱり依頼された以上、麒麟ちゃん力にもなってあげなきや……ね。

「……?あかり、どうしたんだ?考え事か?」

あたしが上の空になっていたのを不審に思ったライカが尋ねてくる。

「……え!?あ、ううん。何でもないよ」

あたしは必死になってそれを否定する。

「……??そ、そうか」

それを聞いたライカは引き下がる。

その時、教室から男子の会話が聞こえてくる。

「ライカあ?あんな男女は最下位だっ」

「ま、顔『だけは』美人だけど、中身は男なんじゃねwww」

「背も170近くありそうだしな。可愛くねえだろwww」

「それじゃあ、お前は間宮とかが良いのか?」

「間宮ねえ……。あいつは逆に背低すぎだろ」

「だよなあwww絶対に小学生に間違われてそうだよなあwww  
w」

「一緒にいたらこつちがロリコン扱いされそうだよなあwww」

「じゃあ、最下位はどうする?」

「うーん。間宮は身長さえ見なきや、大丈夫だろ」

「あのチートさは見なかったことにしよう。それがいい」

「だな……。あれは意外すぎて思考が追いつかねえからな」

「んじゃあ、『可愛さランキング』の最下位はライカで決まりな」

「「さんせー」」

滅茶苦茶サイテーな会話だった。

「……フン」

それを聞いていたライカは鼻を鳴らしお手洗いに入っていた。

どうやら取り合う気すら起きないらしい。

「ホントにこのバカ男子たち……!!」

あたしは嫌悪感Maxで殴りこみたい気持ちを抑え、ライカの後を

追う。

しかし、今の会話で収穫もあった。  
なるほど、なるほど。

あたしの低身長でそういう切り抜け方もあったのか。  
それはそれは便利だ。

男子からしてみれば不名誉だろう。

だが、それがいい。

今度、気に食わない男子が居たら実行しますかね……………。  
黒い策を練りつつも、女子トイレに入る。

「……………?」

あれ……………??ライカが居ない……………。

あ、個室が閉まっている所がある……………。

ここに……………いるの……………かな??

「ライカ」

あたしが声をかける。

「あ、先行ってていいぞー、あかり」

と、ライカから返事があった。

声もサバサバしてるし、大丈夫……………なのかな??

「ナニコレ、ありえねーwwww」

「でしょーwwww」

トイレに楽しく会話をしながら他の女子が入って来たので

「……………先に行ってるね」

ライカを心配しつつもあたしはその場を離れようとした。

その時だった。

……………くすん……………ひつく……………ひつく……………ぐす  
ん……………

え……………?今のは……………。

あたしはライカの居る個室から聞こえた音に足を止める。

もしかして……………ライカ……………泣いて……………る……………?

あんなに強くて、カッコよくて。強襲科のエリート女子とも呼ばれるライカが。

一人の女の子として傷ついて。

あんなに小さくて惨めなところに逃げ込んで。

泣いて……いる。

生まれつき背が高く、力が強くて、カッコイイ顔つきをしている。

そのせいで自分が女の子らしくない事に。

どんなに馬鹿にされたって、絶対……可愛らしくは……なれない……と、いう事に。

麒麟ちゃんの依頼でライカの事を調べていたあたしも

「(あたしもちゃんと解ってなかったな……)」

友達のもりで居たのに、そういう所が全く理解できていなかった事を反省するあたしだった。

そして、その一部始終はあたしのマイクの会話を特殊捜査研究科<sup>C</sup>で聞いていた麒麟ちゃんにも届いていた。

その翌日、麒麟ちゃんに呼び出されたあたしは武偵高の防弾制服姿で麒麟ちゃんと共にライカのマンション前にいた。

「麒麟ちゃん……なんであたしまでライカの見張りに……」

今日は休日。ここまで駆り出されるのには少し疑問である。

なので、その疑問を麒麟ちゃんにぶつけてみる。

「まあ……休日だしいいじゃないですの」

と、麒麟ちゃんから返答。

えっと、それって答えになってるの……かなあ???

あたしは疑問が深まっていた。

「あー出てきましたわ」

麒麟ちゃんの言葉に様子を伺う。

すると、私服姿のライカがマンションの玄関から出てきた。

サングラスを掛けているということは他人に知られたくないのかな……??

「(あんな格好して……ライカ、何処に行くんだろ……?)」

「(とにかく尾行ですわよ!)」

小声で会話を交わし、あたし達はライカの尾行を開始した。

まず、ゆりかもめ臨海線台場駅から新橋方面行に乗り、終点の新橋駅まで行く。

そして、新橋駅で今度は山手線内回り(東京方面行き)に乗り換え。偶然にもあたし達はライカと同じ車両に乗ったのだが、どうやらライカは気づいていないらしい。

ここは「尾行が上手く行っていることを喜ばばいい」のか「ライカの注意力が余り無い事に呆れば良い」のかフクザツな心境である。列車は有楽町、東京、神田と停車していき、次の停車駅である秋葉原に到着した。

到着と同時に

「秋葉原、秋葉原です。総武線、京浜東北線、つくばエクスプレス、地下鉄日比谷線はお乗り換えです。お降りの方は傘などのお忘れ物にご注意ください」

と、アナウンスが流れる。

どうやらライカはここで降りるようだ。

あたし達もライカの後を追って秋葉原で下車する。

そして、至る所にある看板等に隠れながらライカを尾行する。

その際、

「こんな所になんで………?」

あたしはそう呟く。

ライカは何故に変装までして秋葉原に来ているのだろう。

その答えについては

「まさか……お姉様……!!」

どうやら、麒麟ちゃんには心当たりがあるようだった。

(後半に) 続くよ!

## 第029弾 救われた姫は王子の心を救う II

Side Raika

武偵高のあるお台場からゆりかもめと山手線を乗り継いだアタシは秋葉原のラジオ会館に来ていた。

この6階に入っている店舗が今日の目的地だ。

アタシはその店舗に入る際に周囲を見渡す。

何故なら、アタシの今のこの瞬間を他の武偵高生には目撃されたくはないからだ。

目撃された日には絶対になにか言われるに違いない。

それだけは絶対に避けねば。

よし……此処に武偵高の生徒は居ないな……

「あらあら。こんにちは」

「うわあっ!!」

背後から店員さんに声を掛けられ、被っていた帽子が飛び上がるほどビツクリしてしまった。

「あ、こ……こんにちは……」

アタシはサングラス（変装用）を外し、店員さんに挨拶をする。

「そうそう。丁度、夕菜さん作の新しい子達をお迎えしたところなんですよ」

それを聞いたアタシは表情がばあ……と、明るくなる。

夕菜さんはアタシが常連で訪れるこの店の専属ディーラーである。

アタシの好みにストライクであるから、新作が出る度にチエツクしている。

「あ、あの……！触っても良いですか！」

アタシの申し出に

「どうぞ。ライカさんはとても優しく扱ってくださいるから」

店員さんは快諾してくれた。

アタシは新しい子達を手にとって抱きしめる。

ああ……可愛い。

そして癒される。

人間は、誰しも……自分がないものに憧れるんだよなあ……  
そう思うアタシは店員さんと話が弾んでいた。

Side | Out…

Side | Akari

あたしと麒麟ちゃんはライカの居る所から（ある程度）離れたフィギュアのショーケースの影からライカを監視していた。その様子をフィギュアを買いに来ていたヲタ系男性に不審に思われる視線を貰ったが気にしてはいけない。

「い……意外過ぎるストレス発散方法だね……」

あたしが抱いた感想はそれだった。何時ものライカからはまるで想像できない……。

でも、問題はないんじゃないかな。

「いいえ」

麒麟ちゃんがあたしの考えを否定する。

「あれは『少女返り』——。それもかなりの重症ですわ!!」

え……? 『少女返り』ナニソレ……。

初耳なんだけど。

「しょ……少女返り??」

あたしは疑問を麒麟ちゃんにぶつける。

「はい。武偵高では女子でも男勝りな行動が求められますの。しかし、それは不自然な事なので必然的にストレスが溜まるのです。そこでそのストレスを解消し、心のバランスを取るため、自分がないものを求め、ああいう少女趣味に走るツ！」

麒麟ちゃんは最後の部分をかかなり強調し、力説した。

それに気圧され気味のあたしは

「そ……そういうもの……??」

と返すのが精一杯だった。

そして同時にライカの気持ちも解らなくもない。

だって、ライカすごく幸せそうなんだもん。

その隣で何かを決意した麒麟ちゃんが行動を開始した。

ライカのいる場所に向かって歩き出す。

「ちよっ．．．．．Σ（。D。；）ちよつと、麒麟ちゃん！」

あたしは麒麟ちゃんを止めようとしたが、まるで聞いちやいない御様子だった。

その頃のライカはというと、もう人形に対して身も心も完全なる虜となっていた。

表情も緩みきっており、それはもう「自分の所有する銃を売却して人形を買ってしまったるか」と思う位である。

そして、人形を持って円舞するライカ。

そしてその眼前に居たのはライカの持っている人形の容姿に瓜二つの麒麟ちゃん。

そして、その瞬間にライカの幻想はぶち壊され、一気に現実に引き戻された。

その瞬間のライカは絶望の表情だった。

「うおあえ!?!（（。D。；））」

最早、日本語とは思えない悲鳴を上げて人形をぶん投げてしまった。

「痛っ!!」

ボタンツ

勢いよく宙を舞うお人形。

店主さんはかなりの驚愕やら絶望やら混ざった表情で人形を心配した。

「き．．．．．麒麟ツ!?!」

ライカが動揺しまくりに麒麟ちゃんを指さす。

あたしは宙を舞う人形を間一髪のところまで受け止める。

風優先輩もこういうお人形のデリケートさについて数日前に語っていたっけ。

「ひゃあ．．．．．無事にキャッチできてよかったあ．．．．．」

ホントにアブナイ所だったあ．．．．．

「あかりもツ．．．．．!?!」

あたしもライカに指をさされる。

「ななななななななな、なんでお前らが◎?△◆★♁※卍?」

顔真つ赤十涙目であたし達の事を指さして「あたし達が何故此処に居るのか」を聞いたかったのだろう。

だが、動揺しすぎて特に後半は日本語にすらなっていないかった。

「あーいやーそのおー!」

あたしは必死にライカのフォローに動く。

「良いと思うよーこういうのってーライカ、可愛いよ、ライカ!!大丈夫だよ。この子も凄く可愛いし!」

あたしの必死のフォローが功をなしたのか、

「あかり……………」

ライカの動揺が収まる。

これで事情説明はし易いだろう。

「あのね、あたし、麒麟ちゃんに頼まれて……………」

「間宮様に罪はございませんのよ」

あたしの言葉に麒麟ちゃんが続く。

「武偵が監視に気付かないのは自分の落ち度としか言い様がありませんわ!」

麒麟ちゃんという言葉にライカが反応し、不穏な空気が流れる。

「てめえ……………」

「お……………おか……………岡谷……………お客様……………」

ライカがゆらりと立ち上がる。

その殺気に気圧されて店員さんがΣ(・ω・;——ってなってるし。

もう、その証拠に「岡谷」とかいう誰なのか不明な人物まで出てきてるし。

「私は初めからライカお姉様が心に秘めたその欲求には感付いてましたのよ。要するに……………」

「私に対する態度はツンデレのツン」

「……………言いふらしたら殺す」

「秘匿しますわ。その代わり……………アマिकाチャンスマッチ戦姉妹試験勝負——して下さいますわよね?」



「……そうきやがったか」

「——見たところ、お姉様は防弾制服ではいらつしやない御様子。ですので、徒手格闘では如何でしょう?」

え……!?!徒手格闘!?!それって、ライカの得意分野なのに……。どうして、麒麟ちゃん……!!

インター「中坊がナメやがって……」

「屋上だ。来い。あかり、悪いけど立ち会ってくれ」  
「……う、うん」

あたしの肯定の後に屋上に向かうライカの手首を掴み、誰かが止めた。

「誰だ、離せよ!」

ライカは不機嫌そうに自身の手首を掴んだ人物の方を向く。

「私よ。言われなくなつたて離すから。少しは待ちなさいな」

その人物は……

「二」風優先輩（お姉様）!?!?」

につこりと微笑んでいたあたしの戦姉である風優先輩だった。

「どうして……風優先輩がここに!?!」

「ん……?副業が終わってただの通りがかりだけど」

「止めないでください。これは大切な勝負なんです」

「そうですわ。止めないでくださいまし、風優お姉様」

ライカと麒麟ちゃんの訴えに溜息をつく風優先輩。

「誰が勝負自体反対してるなんて言つたっけ?私はただこのビルの屋上でやる事を阻止したいだけ。だって、迷惑かかるじゃん」

「じゃあ、何処でやれというんです!?!」

「少しは落ち着きなさいってば。場所については私が用意するから」  
そう言つて、風優先輩は一枚のカードを取り出す。

あれは……タロット……かな……?

アデラット the fool「来れ!愚者」

風優先輩の言葉にタロットカードが光る。

ヴェン

と、言う効果音とともに壁に黒い穴が現れる。

「ぎ、入った、入った」

そう言つて風優先輩は穴の中に入っていく。

それにあたし達も続く。

穴の内側は白亜の空間だった。

何も無いのが逆に不気味だ。

「ここは『愚者のセカイ』。ここなら誰にも迷惑は掛からないわ。それともう一つ……」

「……」

風優先輩の言葉の意味が解らず、頭に「？」を複数浮かべるあたし達。

「ライカの服装を戦いやすくしないとね」

ひゅぱんっ！

「へ……？……えっ?!?!」

ライカは最初の方は状況が呑み込めなかったが、状況を理解した途端、困惑していた。

それもその筈である。何故ならライカの服装がいつの間にか防弾制服に変わっていたからだ。

「風優先輩……今のは……??」

「ん？ああ……あれは、瞬間移動テレポーションの応用よ。さあ、これで準備は整つた。あかり、開始のコールを」

「は……はい。時間無制限。武偵柔術ルール適用で投極打、全部アリ。銃並びにナイフ以外の道具使用はアリ。ギブアップするか背中が地面についた時点で負けだよ。それでは、始めっ!!」

「アタシが勝つたら二度と近付くな」

「今日戦うことは既に予想済みでしたのよ」

二人が構える。

「中国武術か」

「はい。前の戦姉から防御を教わり、風優お姉様に攻撃を教えて貰い、更なる昇華、並びに完全会得を協力してもらいましたわ」

風優先輩が噛んでただけあつて、構えは立派………なんだけど、あんまりにも体格差が有りすぎる………!!

「大丈夫よ、あかり。麒麟は、その事も想定済みで挑んでる。何か策もあるみたい……だしね」

「成程……。ところで風優先輩」

「ん……?どうしたの?」

「さつきから観戦しながら何作ってるんですか?」

あたしの指摘通り、風優先輩は何かを作っていた。

「ん?ああ……これ?……今は内緒かな。あの二人……特にライカを驚かせたいし」

「なんですか……それ」

「まあ、いいじゃないのよ。ほら、戦況進むよ」

風優先輩の指摘にあたしはライカと麒麟ちゃんの戦いに視線を戻す。

「……いいんだぜ、銃とナイフ以外なら何使ってもよオ!!」

ライカは駆け込み、下半身にバネのような捻りを効かせてバツ!

右足で中段廻し蹴りを放つ。

ガツ

それを麒麟ちゃんは左の片膝を上げて受け止める。

その時だった。

ひらっ……。

麒麟ちゃんの脚を上げた動作と、ライカの中段廻し蹴りの風圧が同時に作用したことによって、麒麟ちゃんの短いスカートが跳ね上がった。

「(うっ……)」

その瞬間をバツチシと目撃したライカは思いつきりたじろいだ。

だって、麒麟ちゃんのスカートの中が見えちやいそうだったもん。

仮にあたしが同じ状況だったとしてもたじろいでただろうね。

……隣に居る風優先輩は動じそうもないけど。

「……あかり、私のことで何か言った?」

「うえ!?……いいえ、何も言ってませんけど」

「……ならいいのだけど」

あたしの思っていた事が風優先輩に伝わった!?  
無駄に鋭い。

本当に無駄に。

ま、これがバレたらO☆S I☆O☆K I確定だろうが。

だから言わない。「言わぬが仏」「知らぬが仏」である。

(注：実は風優は全て察しています。ただ敢えて言わないだけ)

動揺を隠せないライカを見て、麒麟ちゃんはくすりと笑う。

それも「このことも全てお見通しですよ!」とでも言いたげな流し目で。

「これ、私なりの備えをしてきましたの。それに、好きなんでしょう? こういうの」

ひらひらしたフリルだらけのミニスカートを自ら摘み上げて見せる。

これ以上の描写は主に男子が大歓喜でヤバイ事になるので割愛する事にする。

更に砂糖を存分に塗したシュークリームみたいな『すういーと・うゝおいす』でライカの本心を見抜いた上で追撃を加えるかの如く、誘う。

これにはライカも急速湯沸かし器のように顔が真っ赤に染まる。ついでにあたしも「ひゃー」と声を上げて顔真っ赤つかだ。

この場で唯一平常だったのは、当事者である麒麟ちゃん。そして風優先輩である。

風優先輩はマジで何時もどおりの顔で作業しながら観戦していた。

内心では動揺しててポーカーフェイスを貫いているかはあたしには不明だけれども。

ライカは動揺しつつ、

「す……すきっ……すきっ……すきっ」

とことばを紡ぐ。

『すきっ……麒麟には聞こえませんでしたわ。さあ、何ですか? お・姉・様?』

ライカを煽るように質問する麒麟ちゃん。

「隙だらけだ、お前は——!!」

テンパリ十分で一本背負いに入るライカ。

しかし、動揺しまくっていた為に、

「(体重移動<sup>冊</sup>)が甘い・・・!!ライカ、慌てすぎだよ!!」

傍から見ていたあたしでも瞬時にわかるくらいに、不完全なものだった。

「いきなさいー！ジョナサン3号」

麒麟ちゃんは持っていたぬいぐるみ・ジョナサン3号（どんだけ持つてるの!?!）を地面に向かって投げる。

投げられたジョナサン3号はごとりと少なくともぬいぐるみが成す音ではない音を奏でて地面に着地した。

「(あのぬいぐるみ鉄か何か入ってる・・・)」

「(鈍器か!?)」

あたしもそしてライカもジョナサンの方に意識が行く。

その瞬間に麒麟ちゃんはライカの掴みから脱出し、スカートをふわりと翻して掴まれた腕を支点にして空中で一回転。

ライカの肩の上で前転を切るかのようなアクロバティックな動き。

「!!」

そしてライカの眼前で空中でどんぐり返り。

その後、実は踏み台が入っていたジョナサン3号の頭に片足で着地する。

そしてそのままくるとターン。

「麒麟は背高のっぽですの。お姉様。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。♡。」

そう言った麒麟ちゃんは視線の高さがライカと同じ高さになる。

そして二人の距離はおよそ30cm。

この距離は麒麟ちゃんにとって十分すぎる距離だった。

麒麟ちゃんとライカは唇と唇を重ねた。

この瞬間のみ静寂が場を包んだ。

そして、麒麟ちゃんはライカに足技を掛ける。

そして足技を掛けられたライカは無抵抗でそのまま麒麟ちゃんと

共に倒れていく。

「え？」

その様子を見ていたあたしは違和感を覚えた。

何時も通りだったら、こんな感じじゃないのに……。

バタンツ

「んぐ。」

この音と共にライカは現実に戻された。

「あ……終わったね。あかり、判定とコール」

何時の間にか完成し、包装を終えた風優先輩があたしにコールを求めた。

「えと、えーと……背中に地面がついたので一本。よって、勝者は島麒麟」

こうして状況を理解し、戸惑うライカを他所に勝負は麒麟ちゃんの勝利で終了した。

それから、あたし達は風優先輩の別邸で夕食をご馳走になった。

なんでも、ライカと麒麟ちゃんの戦姉妹結成のお祝いらしい。

それよりも、あたしは風優先輩の別邸に心を奪われていた。

風優先輩がこの様な別邸持ってたのなんて初めて知ったし。

それに志乃ちゃんの家に引けを取らない位に豪華。

風優先輩って実はお嬢様……???

「違うわよ。それは」

後ろから銀髪で碧眼の女性に声を掛けられた。

「わっ……。えと、貴女は……??」

「ああ……ごめん。自己紹介がまだだったわね。私の名前はリーナ・ツペシユって言うの。気軽にリーナって呼んでね」

女性は自己紹介をする。

リーナさんは結構……というかかなりの美人さんだ。どこことは言わないがスタイルもいいし。

「リーナさんは風優先輩とどういう関係なんですか？」

「んーと、仕事仲間かしらね？元々、そういう縁で知り合ったし」  
『仕事仲間』……。依頼とかそういう類のものかな？

「ま、そんな感じかしらね。しっかし……。」

「……？どうしたんですか？リーナさん」

「いいえ。なんだかあの子達、いいコンビになるなあ……って思ったのよ」

リーナさんはライカと麒麟ちゃんの方を見て微笑んでいて、羨望の眼差しを送っていた。

「かもですね……。ううん。きつとなりますよ」

「ふふっ……。羨ましい。私も旦那と……。娘とこんな感じになれたら良いんだけど」

「リーナさん、娘さんが居るんですか？」

「ええ。風優と同級生のね」

「……。」

あたしはリーナさんの言葉に絶句した。

まさか、そこまで年齢行ってるなんて。

てつきりあたしとそんなに変わらないと思ってた。

どうしたらそうも若さを保てるのだろうか。

後学の為にも聞いておくべきか。

「……？どうしたの？」

「え……。あ、なんでもありませんよ」

リーナさんが此方の視線に気付いたらしく、尋ねてきた。

なのであたしは何事もなかったかのように振舞った。

あたしが考えてた事がリーナさんに伝わるとやはり恥ずかしいからね。

「そう……。？ならいいのだけれども」

「あの……。リーナさん」

「ん？どうしたの」

「えと……。こんな事あたしが言うのも烏澁がましいかなって思うんですけど、リーナさんは大丈夫だと思います。何でなのかは良くわかんなくて、上手く言えないんですけど。リーナさんはきつと旦那さん

や娘さんと一緒に居る事ができますよ、絶対に」

そう言ったあとに（。D。）ハッ！と冷静になって気づき、俯くあかし。

ホントにあたしってば、何言ってるんだろうか。

何の根拠もないのにあんなこと言っちゃうなんて。

フオローどころか追撃になってたら、どうしよう。

気を悪くしてないの良いんだけど……。

そう思ったあたしはおそろるおそろるリーナさんの方を向く。

すると、リーナさんは

「ふふっ……」

笑っていた。

そして、

「ありがと、あかりちゃん。貴女のおかげでちよつぴりだけど元気が出たわ。うん。そうよね。綺麗事だけど、私が信じてれば、そのうち現実になる日が来るわよね。だって、『言霊』が存在する位なんですよ」

そう言ったリーナさんの表情は何か決意し、それに向かって頑張ろうって感じだった。

その時のリーナさんの表情をあたしは忘れる事ができないだろう。

暫くして、凧優先輩が戻ってきて、ライカと麒麟ちゃんに戦姉妹申請用紙が手渡され、更にライカにはサプライズプレゼント（袋）が手渡された。

ライカがその袋を開けると先程、ライカがお店で見ていた人形とそれと雰囲気似たお人形がセットで入っていた。

「え、これ、ホントに貰ってもいいんですか!？」

ライカは戸惑っていた。

「勿論。大切にしてくれた方がディーラー冥利に尽きるからね」

凧優先輩がそう返す。

「凧優先輩ってディーラーなんですか?」

ライカがそう質問する。

「ええ。ま、『夕菜』っていう別名義でやってるけどね。名前をひつく





## 第030弾 脅迫じみた伝言と参加申請

ライカと麒麟ちゃんの戦姉妹結成から数日後の東京武偵高校。

今の時間は昼休みで、周囲には生徒達の喧騒や会話が鳴り止むことなく響いていた。

その中をプリントの束を持って大きな溜息をつきながら歩く一人の女子生徒。

名を姫神結衣といい、2年で強襲科に所属の「焰の旋刃」の二つ名イクスプロージョンを持つAランク武偵である。

結衣の容姿は茶髪（ロング・アホ毛装備）で碧眼のどっちかといえ  
ば美人に分類される。

だがしかし。残念なのはひんん・・・胸が平坦な所。  
それと、ばk・・・オツムが非常に残念な所である。

「結局のところ言い直して、余計に悪化させてんじゃん。どんだけD  
isりたいんだよ、真優香あ・・・」

此処に居ないはず・・・てか、メメタアな事言うて設定は一応ある  
けどまだ登場しない人物の名を結衣は八つ当たり気味に叫んでいた。

周囲の生徒は「何事か」と思ってギョツとしていたが、結衣の姿を  
見るやいなや、「ああまた結衣（姫神）か」と思ったのか何事も無かつ  
たのかのようにスルーしていた。

どんだけ結衣は普段からこんな事をやっているのだろうか。  
毎度となるとそれはそれで色々な意味で大変な娘である。

閑話休題・・・。（これより Side Akari）

あたしと志乃ちゃんは今日も志乃ちゃんと一緒にお喋りしながら  
お昼ご飯を食べていた。

授業中に（コツソリ）早弁をしたライカはというと、愛読書のマン  
ガをアイマスク代わりにして机にもたれて仮眠・・・昼寝をしてい  
た。

他のクラスメイト達も各々の昼休みの時間を過ごしていた。

その時、がらっと大きな音を立てて、1-Aの教室の扉が開いたの

で、クラスの皆の視線がそこに集まる。

「(あ、結衣先輩だ……)」

そこには、あたしだけじゃなくとも強襲科<sup>アサルト</sup>……いや、東京武偵高校に在籍する生徒ならば、誰もが知っている先輩がいた。

結衣先輩はあからさまに面倒そうな態度で教卓に向かう。

それはもう、あたしじゃなくとも「あ、この先輩、絶対(。 ㇏) マンドクセーって思ってる……」と理解出来る程に。

その証拠に「蘭豹つてば、いくら私の単位が足りてないからってこんな事押し付けなくなつて良いのに……」とボヤきつつ、クリツプボード片手に教室に入ってきた。

その時、あたし達は「いえいえ、それは伝令を命じられて当然なのでは!? 寧ろ、蘭豹先生なりの救済措置なのでは!?」と一斉に心に思った。

そして、1—Aの教卓に着き、

「えつとお……強襲科<sup>アサルト</sup>、2年の姫神結衣、教務科からの伝令。とりま、静聴で。騒がしくして時間延ばしたらトラウマ植えるから」と言い放った。

それを聞いたあたし達は「2年」という単語(と大部分は後半の脅迫)にざわついた。

ここ、武偵高では防衛学校や警察学校と同じく『縦社会』・『封建主義』が強く根付いている。

つまり……武偵高では1年へ2年へ3年へ<sup>マスタース</sup>教務科の順となる。(但し、2年の一部生徒に例外が存在するが)

故に例え、バカで悪い意味で話題に挙がる先輩が相手だとしても失礼は許されないのだ。

先程まで寛いでいた1—Aの生徒達は結衣先輩を前に背筋を伸ばす。

立っている者はキョツケの姿勢を取り、椅子に付いていた者も座り直した。

あたしや志乃ちゃんは勿論、ライカも漫画を片付けて姿勢を正す。最も、あたし達がこんなに迅速に行動するのは「2年」という単語

だけではない。

先程、結衣先輩の脅迫（紛い）の発言と同時にキツチリ殺気が込められていた。

つまりはこの先輩は風優先輩や葵先輩と同じく、「キツチリ有言実行する先輩」なのだ。

そんな結衣先輩が「トラウマを植える」と言っているのだから、伝令時間が延長するとなれば、実際にこちらに凡ゆる手段でトラウマを植えてくるだろう。

あたし達にしてみれば、「そんな事されてはたまったものではない!!」

この一言冥利に尽きるのだ。

そんなあたし達の切なる願いを横目にクリップボード片手に

「今度、行われる4対4戦カルテットの班決め申請の×切が明日にも関わらず、このクラスの申請率が異常にも低いので参加申請しようとしてる奴らは大至急申請するように。以上」

と記載された文章をアレンジしたつぷりで読み上げた。

周知を終えた結衣先輩は教卓に申請用紙の束を置いて、「ああ・・・やっと終わったあ・・・」とボヤきながら教室を後にした。

あたしはそれを「この事実が風優先輩に知られたら、結衣先輩は確実にO★H A★N A★S I（物理）されるだろうな・・・」と思っていた。

（注：実際に実行されましたw w w w w w w w）

・・・結衣先輩が置いていった申請用紙を1枚取ったあたしは、『4対4戦カルテット』ってなんだっけ?」

自分の席に戻ってから、前の席の志乃ちゃんに尋ねてみる。

「1年は全員参加の、4人対4人で戦う実戦形式のテストですよ。そういうえば教務科から『班決め申請をするように』と言われていましたマスターズが、かなり前だったものですからすっかり忘れてしまっていましたね」

志乃ちゃんは4対4戦カルテットの概要を簡潔に解説してくれた。

「へー。インターンもメンバーに混ぜていいみたいなんだなあ」

申請用紙を見つつ、ライカも話の輪に加わってきた。

言いたい事があるのに恥ずかしくて言えない状態なライカを察したあたしは

「じゃあ、あたし達と麒麟ちゃんて申請しようよ。ダメ……かな？」  
ライカが言いたかった事を代弁する事にした。

「良いですね！」

「まあ……4人必要だしな」

志乃ちゃんとライカはあたしの提案を賛成してくれた。

「んじゃ、決まりつと！ゞ(▽、▽)」

笑顔であたしは申請用紙のメンバー構成欄に

「間宮あかり 強襲科 E」

「佐々木志乃 探偵科 A」

「火野ライカ 強襲科 B」

「島麒麟 CVR C」

と、何時もの仲良しメンバーの名前を記入するのだった。

この時はそれが当然だと思いついて深く考えることはなかった。

続くよっ

## 第031弾 顔合わせで相まみえるはバカと不運

数日後、教務科の掲示板に4対4戦カルテットの対戦表が掲示された。

掲示板の周囲には4対4戦カルテットの班申請をした生徒達で賑わっていた。

「うわ、凄い人ばかりだな」

ライカがその人の多さに驚愕する。

「そうですね……。かなり多いですね。でも、何故1年が全員参加とは言え、こんなに4対4戦カルテットの申請者が多いのでしょうか？」

ライカの言葉に賛同した志乃ちゃんが思った疑問を口にする。

「えっと……。確か、この4対4戦カルテットって教務科からの評価対象でその評価が単位と武偵ランクに直結するからじゃないかな？」

その疑問に答えるかのごとく、あたしが発言する。

「なるほど……。それならば、こんなに申請する生徒が多いのも納得ですわ」

麒麟ちゃんがあたしの解答に納得の表情を見せる。

その後、あたし達は生徒達の波の隙間を見つけて上手く移動し、掲示板前に辿り着く。

この移動法も実を言うと風優先輩の指導の賜物であったりする。

掲示板に辿り着いたあたしは自分の名前を探す。

その掲示板には

「第09戦 問宮班 対 高千穂班」

と書かれていた。

対戦相手の名前は……。『高千穂』。

なんかどっかで聞いた事があるよーな、無いよーな名前だ。

「高千穂麗……。強襲科のAランクだぜ」

「確か、C組の級長ですよ」

ライカと志乃ちゃんの情報を聞いて思い出した。

確か、同じ強襲科所属の同学年で、風優先輩との鍛錬仲間である愛沢湯湯ちゃんと愛沢夜夜ちゃん姉妹の仕えてるお人だったっけ。

へえ……。志乃ちゃんとライカも知ってるって事はそこそこの有名な人なんだ……。

「CVRが勧誘した事もある、M属性の男子に大人気の美人ですわ」  
へえ……つまり、高千穂さんの性格はDSか……。  
って事はお嬢様気取りで上から目線で話すのがデフォっぽい感じ  
だなあ……。

そうあたしが思っていた時、背後から、

「——湯湯、夜夜、笑え」

何というか、奇妙な命令が友人の名前と同時に聞こえてきた。  
バツとあたしが振り返ると

仁王立ちで扇を持って高笑いする金髪の女子生徒と後ろに控える  
友人がいた。

3人はEVAもビックリの高いシンクロ率で女王様笑いをしてい  
た。

その笑い声が超音波にきこえなくもない。

笑いが暫く続き、あたし達は何も言わずそれが終わるのを待ってい  
た。

「——湯湯、夜夜、やめッ」

金髪の女子生徒の号令で女王様笑いが止んだ。

止んだので、あたしは思っていた事をツツこむことにした。

「うわ……。なんかヘンなの出たし。あと、何なの？そのキャラ」

『ヘンなの』とは失礼な!!」

あたしの指摘に怒り心頭の金髪の女子生徒。

「ちよwwwあかりwww直球すぎんだろwww」

そのあたしの発言にライカは腹を抱えて笑っていた。

「あ、湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、久しぶり」

金髪の女子生徒が何か怒っていたっぽいけれど、無視して友人に挨拶  
をするあたし。

「ん。久しぶり」

「そっちも元気そうで良かった」

「お陰様でね……。あ、夙先輩が湯湯ちゃん達の事待ってたよ  
？」

「ゴメン……。最近忙しくて来る事が出来なかったんだ……」

『一段落したら顔見せる』って伝えておいて」

「うん。了解」

そして必然的に湯湯ちゃん、夜夜ちゃんと会話が弾むあたし。  
「私を無視するなんて……いい度胸ね!!」

散々無視されてた金髪の女子生徒……高千穂さんは不服だったらしく喰いかかってきた。

「え? ああ……ごめん。忘れてた……。ゴメンゴメン」

あたしは棒読みでそう返した。

「んなつ! 謝罪の意志を見せなさいよ! そう……土下座で!!」

高千穂さんは更にヒートアップしたようだ。

「はあ? 何でそうなるの? イミわかんないんだけど」

あたしは深く溜息をついた。

何故にこんな所で土下座なんてしなくちゃいけないの。

あたしの溜息に更に怒りのボルテージが上昇の高千穂さん。

「……段々と、畜生具合が尻優お姉様に似てきてますの……」  
その様子を見ていた麒麟ちゃんが呆れの表情を見せていた。

「う……麗様、落ち着いて!!」

「そうですよ!! 今日の仕事を忘れちゃダメですよ!!」

湯湯ちゃんと夜夜ちゃんが高千穂さんを必死に宥める。

「(。D。) ハッ! そうだったわ……。私の対戦相手がどんなものか見に来ただけど……。ダメそうな対戦相手ね。お父様の武偵高への寄付が効いたのかしら」

復活した途端に高飛車な物言い。「逃げも隠れもしない」っていう自信の現れだろう。

高千穂さんは組長の腕章もしてるっぽいし、物言いからしてあたしの対戦相手なのだろう。

高千穂さんは嘲笑うかのような視線は「見た目弱っぽそう」なライカの傍にいた麒麟ちゃんを見定めていた。

……実を言うと違うんだけど言わない方がいいだろう。

「(シ・V・) アラマア。戦力にならなさそうなインターンも居るし」



と、バカにするように高千穂さんは持っていた扇の先端で麒麟ちゃんの頬を擦った。

それを麒麟ちゃんの本当の実力を知っているあたしと湯湯ちゃんと夜夜ちゃんは敢えて何も言わずにその様子を見守っていた。

今や麒麟ちゃんの戦姉あねとなったライカは

「しようがねえだろ。戦妹なんだ」

と、サツと麒麟ちゃんを庇う。……が、それに対して高千穂さんは

「あら（・・▽・・）、CVRの戦妹なんて、何に使うんだか」

それはもうまるで退廃的な物を見るかのような目つきで、態とらしく挑発してきた。

その言葉はライカにとつての逆鱗を抉る言葉で一言言われたくなかった言葉らしく、かあああ！と顔を赤くする。

うわ、高千穂さん……煽るの上手いなあ……。血の気は多いとはいえ、あのライカにモノの数秒で着火させたんだから。

「鬨やりてえんなら——そのお顔に泥を塗ってやんよ!!」

なりたてホヤホヤの戦姉アミカ関係を茶化されたライカは高千穂さんへ怒りに任せて握った拳を振りかぶった。

「——ッ!!」

しかしその拳は高千穂さんに届く事はなかった。

振りかぶったライカの右腕は何者かが背後から極めて強引に静止させられたからである。

アームロツク……所謂ところのスタンディング・ハンマーロツクの体勢で。

極めつけに首を捻って背後を見ようとするライカの頬には刃物……苦無の先端が突きつけられていた。

「……ライカ殿、お忍びなされ」

……ライカにこんな芸当が出来る同学年はあたしの知る限り一人しかない。

「風魔、陽菜（陽菜ちゃん）……」

あたしとライカが同時にその生徒の名を口にする。

風魔陽菜ちゃん。

諜報科レザドに所属するBランク武偵。

「風魔」という苗字から想像出来るだろうが、あの「風魔小太郎」の子孫だという噂がある。

その証拠に一人称は「某」で語尾に「ござる」と風優先輩に言わせれば「ステレオタイプの忍者」だとか。

キャラが目立つものの、遠山キンジ先輩の戦妹で風優先輩の弟子でもあるだけあって、1年の中でも上位の強さを誇る。

その証拠に不意打ちとは言え、見事な拘束技術でライカの反撃を受けることなく無力化してみせた。

「流石だね。お見事だよ。陽菜ちゃん」

「この位、あかり殿でも容易き事でござろう?」

「ん・・・まあね。ここまで完璧にはいかないけど」

「そうであつたな。次回の共同鍛錬の時に共に学ぶのが良いでござるな」

「そうだね・・・。陽菜ちゃんがこの場にいるってことは、今回はそっち側なんだね」

「左様。あかり殿の想像通りでござるよ」

陽菜ちゃんとの会話で何となく解りかけたあたしは高千穂さんに質問を投げる。

「高千穂さん、理由を聞いても?」

「ええ、良いわよ。その風魔陽菜は、使えそうだから雇ったのよ。  
4対4戦終了までの契約だね」  
カルテット

高千穂さんは満足そうな顔でそれを自慢げそうに説明してくる。

武偵高では生徒がお金を払って生徒に物事を依頼する事は禁止されてい  
ない。寧ろ、推奨されている。

武偵は民間業であり、報酬を取って働く習慣を学生のうちから身につけさせるのがこの武偵高の方針だからだ。

故に生徒同士が何かを無償で手伝う事は非推奨とされている。

あたしはそれを理解していた為、何も口にする事はなかったが、心にはある疑問が残っていた。

あの陽菜ちゃんが高千穂さんみたいな人の下に簡単に付くとは到底思えない。

何か……言えない理由が有るのだろうか……  
タイミングを見て本人に聞いてみるか……

「……まあ、武偵はカネで動くからな。分かったよ」

ライカの言葉で現実に戻るあたし。

ライカはまるで、「降参、降参」と言いたげな表情を見せる。  
しかしそれは罠である。

「武偵はカネで動く」。その事を認めつつ、もう一つの武偵の習性でもある「不意打ち・騙し討ち・降参したフリはアリなんだよ」を実行したのだ。

「……なあーんて言うと思ったか！」

直ぐ様態度を豹変させ、

ガリッ！

自分の頭部に添えられていた陽菜ちゃんの苦無に噛み付き、そのまま首を捻り陽菜ちゃんの手から凶器クナイを強引に奪いつつ、ライカは拘束されていない下半身をぎゅるんっ！と回して短いスカートを履いていることもお構いなしで右ハイキックを放った。

それと同時に極められた腕も動く事なるが、十分に可動域の範囲内である。

ガシィッ！

ライカの鋭い蹴り足は高千穂さんの側頭部へ届く前に防御されてしまった。

高千穂さん……ライカあの蹴りを簡単に防御するなんて……かなりできる……！

涼しい顔でライカの右ハイを受け止めた高千穂さんは扇と手首を使ってライカの足首アングルを極めるロック。

右腕を背後から陽菜ちゃんに、右足を前から高千穂さんに極められたライカに対して――

——陽菜ちゃんと高千穂さんは  
ぐるん

巧みなコンビネーションで、ライカの身体を右に回転させるような投げ落としを放つてみせた。

その2人のツープラトン技が決まりー  
ドガツ!!

ライカは顔面から土の地べたに叩きつけられる。

「う……………う……………」  
がくつ……………」

「お姉様!!」

「ライカ!!」

麒麟ちゃんとあたしが呼び掛ける。

だが、へんじがない。ただのしかばねのようだ……

「死んでませんか?!<sup>スタン</sup>朦朧で失神しているだけですからね?!そのネタは不謹慎極まりないですわ!」

ナイス?なタイミングで麒麟ちゃんのツツコミがはいる。

「……………こほん。私の顔にドロを、とか言っていたけれど。ドロはお前の方がお似合いよ」

麒麟ちゃんのツツコミを愕然とした表情で見ていた高千穂さんは仕切り直して発言したあと、(クスクスと嘲笑していた。

あーあ。この状況じゃあたし達はもう退く事ができない。

よりもよって教務科の前とかロケーションは最悪。<sup>マスターズ</sup>

だけど、人目があるから売られたケンカから逃げるなんて不名誉だしもつてのほか。

それに何よりもライカの仇討ちをしなくちゃね。

「女子だって、やられっぱなしで引き下がるワケには行かねえんだよ」  
それが武偵高流つてもんだ。

「……………よくもお姉様をー」

<sup>アミカ</sup>戦姉をやられた麒麟ちゃんが陽菜ちゃん目掛けて掌底を放った。

Side Out…

Side Kirin

私の放った掌底は風魔様にアツサリと受け止められてしまいまし

た。

「ちい．．．なかなか、やりますわね。流石は風魔様ですわ．．．」

「そちらも．．．中々に良い一撃でござるな」

「当たり前ですわ．．．！風優お姉様に鍛えられていますもの」

「フツ．．．そうござったか。主様の教えを受けているのであれば納得でござる」

「それを涼しい顔で受けられて、その言葉を貰っても何も嬉しくはありませんわ！」

「それは失敬。しかし、怒りに任せて感情的になりすぎでござるよ」

．．．それもそうですわね。感情的になって大振りになっては受け止められて当然ですわね。

一度ここは冷静になって次の攻撃を組み立てないとですわね。

「麒麟殿との勝負も心躍るような予感がするでござる。しかし、この現況だと得策ではござらぬ」

「．．．何を言っているのですか、風魔様」

私は風魔様の言った意味が理解できず、尋ねます。

風魔様は何も答えず、後ろに視線をみやりました。

その視線の先には高千穂様達が居ます。

「．．．成程、そういう事ですね。だったら、風魔様にも手伝って貰いますわよ？」

「．．．委細承知」

風魔様の了承も得た所で始めるとしましょうか。

結果的には味方も欺くことにもなるでしょうが、仕方ありませんわ。

「敵を欺くにはまずは味方から」と言いますし。

それに高千穂様の鼻を明かすには今は実力は隠しておいた方が良いでしょうしね。

「．．．行くでござるよ？準備はいいでござるな？」

「ええ。大丈夫ですわ」

さて、ここからですわ！

Side Out…

麒麟ちゃんと陽菜ちゃんの撃ち合いが続く。

一手でもミスしたほうが負けを意味する撃ち合いだ。

それでも、お互い本気は出していないようだ。

そして、この撃ち合いの終焉は一瞬だった。

麒麟ちゃんが防御に間に合わず、陽菜ちゃんの一撃を貰い、よろけてしまう。

その隙を逃さなかった陽菜ちゃんは冷淡に

ぱあん！

麒麟ちゃんの両耳を挟み込む様に左右同時にビンタする。

その衝撃で麒麟ちゃんは目を回してしまい、ライカの上に折り重なるようにして倒れてしまった。

陽菜ちゃんが使った今の技は「鼓膜破り」といって、三半規管を機能不全にして倒すという風魔忍者に伝わる危険な技だ。実践においてはその名のとおおり、実際に鼓膜を破ることもある。

「麒麟ちゃん！」

その技の知るあたしは麒麟ちゃんのダメージを確認すべく麒麟ちゃんのもとへ駆け寄る。

その時だった。

左右から迫り来る気配を感じたあたしは気配の感じた方向に取り出した金属矢を投げた。

金属矢はあたしに向かってきた湯湯ちゃんと夜夜ちゃんの<sup>乳</sup>耳の後ろの隆起<sup>突</sup>した骨を掠めた。

「え……なんで……!?!」

「身体が……動か……」

運動機能が麻痺して動けなくなった湯湯ちゃん&夜夜ちゃん

「お前……何をしたの!?!」

高千穂さんは「アリエナイ」的な表情で叫んだ。

「何を……って、人体急所知ってれば解るはずなんだけど……」  
あたしは溜息混じりで答える。



ねた。

「湯湯に聞かれても困るんだけど……。なんだろう……。カオスだ」

湯湯ちゃんも困惑していた。それもその筈である。

湯湯ちゃんの言う通り、今のこの状況はハッキリ言つてカオスだ。

「（ハ、）ハア……先ずは佐々木殿を止めるのが先決でござるな……」

「はい」

陽菜ちゃんが深い溜息をついて湯湯ちゃんと夜夜ちゃんに指示を飛ばす。

湯湯ちゃんと夜夜ちゃんが志乃ちゃんを羽交い締めにして暴走を止め、陽菜ちゃんが腹パンで意識を沈めた。その後の志乃ちゃんは物言わぬ屍になった。（死んでないけど）

「あかり……大丈夫？」

「あつ……ありがとう……」

夜夜ちゃんは何処からともなく取り出したバスタオル<sup>B</sup>をあたしに渡す。

あたしは夜夜ちゃんからタオルを受け取ってクレープ<sup>T</sup>を拭き取つた。

「麗様、大丈夫ですか？」

湯湯ちゃんが高千穂さんの頬をぺちぺちと叩き、笑い転げてる高千穂さんを正気に戻した。

「湯湯……？ええ、大丈夫よ。心配かけたわね」

湯湯ちゃんの御蔭で正気に戻った高千穂さん。

「……佐々木志乃」

志乃ちゃんの名前を呼んだ。

しかし……

「……Ω／＼）チーン」（※死んでない。気絶してるだけ）

返事が……返つてこなかった。

それもその筈である。先程、暴走したが故に既に陽菜ちゃんが沈め



たからである。

「……何故に気絶してるのかしら？ 佐々木志乃は」  
いきなりこんな状況になっていて困惑する高千穂さん。  
困惑するのはまあ……うん。当然のことか。

「えっと……端的に言えば『暴走したから』かな……？」  
あたしが答える。

「……その状況が続けられると、話が進まぬ故、某達の判断で沈めたでござる」

陽菜ちゃんが深い溜息をつきつつ、補足説明する。

「そう……じゃあ、この話をして無駄かしらね」

「……志乃ちゃんの家族と繋がりがあるの？」

「あら……佐々木志乃から聞いたの？」

高千穂さんがあたしの言葉に反応した。

「ううん。志乃ちゃんのお父さんが武装検事だつて聞いた事あるから、今の言葉からの推測だよ」

「そう……。ええ、その通りよ。私のお父様は武装弁護士で佐々木志乃のお父上とは裁判所では犬猿の仲なのよ」

「ああ……そういう事なんだ。武装弁護士の高千穂一族って鳥取出身じゃなかったっけ？」

「鳥取は関係ないっちゃ!!」

あたしの指摘に因州弁で怒鳴る高千穂さん。

どうやら、激昂すると、方言が出るようだ。

「う……麗様……」

「お、落ち着いて……」

湯湯ちやんと夜夜ちゃんが高千穂さんを宥める。

「……オホン。カルテットの班は戦略やバランスを考えて作るべき、  
なのにお前達は仲良しこよしで作った。私達に勝つのは（ゞノ・▽・  
、）ムリムリよ」

『（ゞノ・▽・）ムリムリ』だなんてよく言い切れるよね」

あたしは高千穂さんの言葉に異議を唱えた。

「何？ 文句があるのかしら？」

『有る』と言ったらどうだって言うの?」

あたしと高千穂さんに剣呑が空気が漂い始める。

その時だった。

「えっと……、そこで二人共何やってるわけ? 此処は教務科の前なだけで」

偶然? 通りかかった体操服姿の風優先輩が此方に駆け寄って来て、あたし達に注意を促した。

『何を』って……。唯の事前顔合わせですが、何か?」

高千穂さんが何も無かったかのごとく説明する。

「だったら、そんな剣呑な雰囲気を感じられない筈なだけで?」

「ちよつとしたアドバイスですよ……。それが間宮さんにとっては不服だったようです」

「ふーん。ま、いいけどさ。でもまあ、私的には仲良しこよしでも勝てると思うけどな」

「なっ……。何故そんな事を? 何の根拠もないのに」

「え……。根拠? 私がそうだったから。だから、絶対勝てないなんて無いし。そもそも物事に『絶対』なんて無いし」

風優先輩のぐう正論である。

まあ、些か暴論かもだが。

「世迷言を……。だから、風優先輩……。貴女は愚かな選択をするんですよ」

「……………」

「あろう事か以前の戦姉妹試験勝負でこの私を不合格にしてこんなのを合格にするなんて……。気が狂ってるんじゃないですか?」

「……………」

高千穂さんの言葉を風優先輩は無言で聞いていた。

サラッとあたしの事も D i s r i t t o も風優先輩に罵詈雑言を浴びせていた。

……。高千穂さんは命知らずだな。というか、馬鹿か。

あの風優先輩にあんな事言うなんて、命を投げ捨てるのと同義なのに。

「知らぬが仏」と言うか何というか。

それを察した湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、それに陽菜ちゃんも思っただろう……。

「あ……、バカ」と。

「……ε||（・皿・\*）ハア：だったら試してみる？」

風優先輩は大きな溜息をついて、高千穂さんに提案した。

「良いんですか？私も本気を出しますが」

「だったらそうしろ」

そう言つて高千穂さんに「かかってこいよ」とばかりに指をクイクイ曲げて挑発する風優先輩。

さっきの口調と言い、今の態度といい、完全に怒ってるわ、コレ。

もう結果は……秒殺だろう。

そして、高千穂さんが挑発に乗った。そして……

風優先輩が放った殺気にいとも容易く気圧されて高千穂さんは気絶した。

やっぱりか。こうなるとは思つてた。

風優先輩の殺気はある程度の耐性がなければ絶対に気圧されて気絶するのがオチなのである。

因みにあたしと湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、陽菜ちゃん、それに途中で意識が戻ったライカと麒麟ちゃんは無事である。志乃ちゃんは……まだ気絶したまんまだよ。

気絶した高千穂さんは湯湯ちゃんと夜夜ちゃんが回収していった。

志乃ちゃんはライカに回収して貰った。でも、先程意識が戻ったばかりなので、風優先輩に『鼓膜破り』の処置法を教えて貰っていた麒麟ちゃんに付き添って貰う事にした。

風優先輩は葵先輩に呼ばれて何処かへ行ってしまった。

残ったあたしと陽菜ちゃんは二人きりになったので、少し話すことにした。

「ねえ……どうしてなの、陽菜ちゃん」

『『どうして』とは何の事でござるか、あかり殿』

「解ってるんでしょ。本当は。今はあたし達二人しかいないし、隠さ

なくたって良いよ」

「結論から言えば『依頼』でござるよ」

『依頼』・・・?』

「守秘義務が有る故にこれ以上は言えぬでござるな」

「そう・・・まあ、でも何となく察した。だったら、今度のカルテツト負けられないな、あたし達」

「それは此方の陣営も同じ事・・・。だが現状のままでは、良い戦いには為らぬでござるな」

「だったら、お互いに強化した状態で対峙した方が良いよね」

「そう・・・でござるな。お互い、強化をした後に相まみえる事にするのが良き判断でござるな」

この後、あたしと陽菜ちゃんは無言でグータッチを交わした。

もうこれ以上の言葉はこの場面には不要だろう。

その時、麒麟ちゃんから打ち合わせの旨のメールが届いた。

丁度良い頃合だったので陽菜ちゃんと別れ、あたしはメールで示されていた場所に向かった。

「合宿・・・?」

ミーティングルーム#0917に到着したあたしは麒麟ちゃんから合宿を行う事が決定したことを聞いた。

「はいですの!明日から土日挟みますし、それが丁度良いかと。勿論指導してくださる先輩方も確保済みですわ! 夙優お姉様が」

「そっか・・・。それはいい考えかも。で・・・場所は?」

あたしは合宿の開催場所を尋ねた。

「今、借りれる場所をライカお姉様が探しているのですが・・・。」  
そう言つて麒麟ちゃんはライカの方に視線を移す。

ライカは学内ネットで合宿場所を探していた。

「ダメだ・・・。武偵高の合宿施設が高千穂名義で全て借り抑えられている・・・。」

「うわ、そこまでやるの・・・??えげつないなあ・・・」

あたしの嫌悪感に同意するかのよう(復活の)志乃ちゃんも首を

縦に振っていた。

「それなら・・・私の家を合宿場所として提供します」

志乃ちゃんが提案する。

「・・・それは止めておいた方がいいよ」

しかし、それに風優先輩が難色を示した。

「どうしてですか・・・？理由を教えてください」

志乃ちゃんが風優先輩に問い詰める。

「盗聴・盗撮のリスクあるから。それにこういう風に進むのも高千穂ちゃんの思うツボだもの」

「全て高千穂麗の掌の上と言う事ですか・・・？」

「そういう事。そういうのは覆してナンボだしね。って事で合宿場所は私が提供するけど、良いよね？」

「そういう事ならば異論ありません」

志乃ちゃんが引き下がり、あたし達は今度の土日に合宿を行う事が確定した。

その後、あたし達は改めてカルテットの勝利を誓ったのであった。

その陰で志乃ちゃんが項垂れていたのは別の話である。

続くよっ!!!

## 第032弾 強化合宿、新たなチカラを習得せよ！

合宿当日の「ハイツかちどき」

あたしは合宿の準備を整え、今回の合宿場である風優先輩の自宅に向かおうとしていた。

「ねえ・・・お姉ちゃん、何処行くの?」

自室から出てきた妹・のかが声をかけてきた。

「え・・・?今度の4対4戦カルテットに備えての強化合宿で風優先輩のところ」

あたしがそう答えると

「じゃあさ、あたしも連れてって?」

と、ののかが提案した。

「え、なんで?いや、別にいいけどさ」

あたしが疑問を口にする。

「ホラ、お姉ちゃん、最近外泊多いでしょ?だからさ、そのチエツクも兼ねてさ」

ののかが答える。

「・・・で、本音は?」

あたしが質問する。

すると、ののかの表情が強張る。あたしの質問に核心を突かれたのだろう。

その証拠に「うげっ・・・」と女子中学生らしかぬ声が漏れていた。

「・・・だって、狡いじゃん。お姉ちゃん、なゆおねーちゃんと何度も会ってるんでしょ?あたしだって会いたいもん」

観念したののかはぶくうつと頬を膨らませ、拗ねた表情で白状した。

そのののかの表情に（。▽。）ノ キュンキュン!きたあたしが居ただけ、言わないでおこう。

「・・・で、ののかはヘルメット持ってるの?」

あたしはののかにヘルメット持ってるか聞いた。

「え・・・、お姉ちゃんバイクで行く気なの!」

ののかは大層驚いていた。

「え……うん。そうだけど?」

あたしは平然と答える。

「免許何時取ったの!? バイクなんて持ってたっけ!」

ののかの質問ラッシュ。

「免許は武偵高の自由履修で取った。で、バイクは風優先輩から貰った」

あたしはそれに答える。

「ホントに……大丈夫なの?」

「もう……信用ないなあ。大丈夫だって。不安だったら行くの止めたら?」

あたしが言う

「大丈夫。もう吹っ切れた」

ののかは即答してmyメットを手にあたしと一緒に家を出る。

アパート裏の駐車場に停めてあるあたしのバイク……

スズキ・GSX1300Rハヤブサ(2009年仕様・ソリッドブラックメタリックマジエスティックゴールド)のエンジンを始動させ、出発準備の完了を確認し、あたし達は「ハイツかちどき」を後にした。

バイクを走らせること、およそ15分……

江東区、青海にある今回の合宿場でもある風優先輩の邸宅に到着した。

邸宅と表現したが、実際目の前にあるのは4階建てのビルである。

その規格外さにあたしもののかも空いた口が塞がらなかった。

これに地下に闘技場も付いてるんだから、更に凄い。

風優先輩曰く、この家は「依頼報酬で建ててもらった」って言った。

これの建築を依頼報酬でやるとかどんだけ気前が良いんだ、依頼主。

そしてその依頼報酬にトヨタ・FT86(新車)も加えるとかどんだけ気前が良いんだ、依頼主。

大事なことなので二回言ったあたしである。

バイクを駐車場に停めて、呼び鈴を押した。  
呼び鈴の音と共にオートロックが解除される。

オートロックが解除された玄関を進んで行くと

「あ、いらっしやい。あかり。それとこののかも久しぶりね」

風優先輩が出迎えてくれた。

「こんにちは。風優先輩。今日からお世話になります」

「こんにちは。なゆおねーちゃん。お姉ちゃんがお世話になります」

二人で挨拶をして客間に案内された。

案内された客間（あたし達の自宅より広い）で暫く待っているとライカ達がやってきた。

ライカも麒麟ちゃんもバイクで来たらしい。

最も、麒麟ちゃんはお姉ちゃんの運転だったらしいけど。

そして遅れること数分……。

志乃ちゃんが合流した。

志乃ちゃんはそののかと視線が合い、お互いに挨拶をしていた。

その時、志乃ちゃんのお辞儀は角度で言うと90度位。

それ程、深いお辞儀をしていた。

それを見ていた風優先輩は

「やっぱり、戦妹いもつとって、戦姉いもつと《あね》に似るのかしらねえ……」  
と呟いていた。

お辞儀を終えた志乃ちゃんは何故かヘヴン状態だった。

そして……。「姉妹丼キター（▽）——コレ」とか呟いてや  
がった。

ホントに手出しやがったらOSHIOKIかな。これは（ニッコ  
リ

大和撫子な志乃ちゃんは何処行っただろうか。

近くにいるのであれば直ぐに帰って来い。

その後、あたしとののかは荷物の確認をする。

だって、myマクラが無くて寝られないのは死活問題だしね。

「しっかりした妹さんですわね！」

「だな。ホントにあかりの妹とは思えねーよな（笑）」



麒麟ちゃんと言いかがあたし達のやり取りを見て談笑していた。麒麟ちゃんの発言には、胸を張りたいところだけども……ライカの発言にはちよつとムツとくるところがあるかな。あたし。それってどーいう意味なのさ。読んで字の如くだったら失礼しちゃうよ！全く。

ライカの発言に「あはは……」と苦笑気味のののかである。「それじゃあ、あたしは帰るね。なゆおねーちゃんともつとお話したかったけれど」

ののかは名残惜しそうにしていた。

「ののかは、どうやって帰るつもりなの？よかったら、おくって行くか？」

ののかの心情を察したのか、風優先輩が提案した。

「え……!?良いんですか!?だったら、今すぐお願いします!!」

風優先輩の提案に即座に了承したののか。

独占欲がもう傍から見てるあたしにも解るくらいである。

我が妹恐ろしい子である。

……絶対に志乃ちゃんと結託させないようにしておかなくちやね。

結託されたらたまつたもんじゃないからね。

ののかはあたしに「夜更ししないでね!」と葵先輩オカシみたいな注意をして風優先輩と共に退出したのであった。

Side Out:

Side Nayu

私は今、戦妹いもつとの妹である間宮ののかを後ろに乗せて愛車・カワサキZZR1400(2008年仕様)を彼女の自宅アパートがある勝鬨方面へ走らせていた。

私が彼女を送り届ける事を提案した理由には色々な訳がある。

先ず、「彼女の身を案じて」。

これが一番表向きにしている理由としては最適だろう。

彼女は「間宮」の血筋。

その一族が身につける技術は「裏」に属する人間なれば垂涎モノなのだ。

なので、一族のウエを誘き出すのに人質としての絶好のカモである。

そんな阿呆が寄り付かぬように護衛が要る。

私自身、裏では相当名が通っている。

「氷天の魔女」

それが私に付けられた通り名である。

その通り名は裏の人間にとって畏怖の象徴でもあったりする。

なので先ず、私の存在がある事で襲いかかってくる輩は激減するだろう。

そんな中で襲いかかってくる奴は命知らずのバカだ。

武偵はコロシが御法度……。

日本の武偵法で定められてはいる。

だから、私はそれを破るわけにはいかない……。

武偵・水無瀬風優という表の顔の場面であれば。

だが、私には先程にも言ったとおり、「裏の顔」がある。

そう。

イ・ウーNo. 2、研鑽<sup>ダイオ</sup>派筆頭 『氷天の魔女・水無瀬風優』という顔が。

だから、ヤバくなって表じゃ対処しきれない位にイラツと来たらその時はその時だ。

良くて(一一)。D。(ト)ラウマー植え付けて生存……。

悪ければ……陽の光浴びるところか、体の現存さえも保証はさせなくするだろう。

まあ……そういう事態が起きないのが一番ではあるのだけれども。

そしてもう一つの理由。

それは「ののかの身体に何か蝕んでいる違和感を感じた」である。

先程、あかり達と別れる際にののかは自分のバッグの取っ手を掴み損ねている。

その際にののか自身も困惑していた。

そして姉であるあかりも何か違和感を感じたようだけど気のせいだと思っていたようだ。

だが、私にはアレに見覚えが有る。

アレは毒の効果が浸透してきた事による視力低下の始まり。

今は私の治療術式をののかに発動させてるから暫くは大丈夫なはずだ。

しかし、その治療術式でも完全には消し去る事の出来無い毒……その毒の名は「符丁毒」。

陽菜ちゃんの一族……風魔一族が有してた筈。

なのに、何故ののかにソレが打ち込まれてる……？

……考えたくはないがその毒が何者かに強請取られたのか……？

だとすれば、まさかのアイツの仕業なのか……？

アイツ……モモならやりかねないけどさ。

だとしたら全く迷惑千万だわ。

ただでさえ、黒幕の目星はついているとは言え、武偵殺し……理子の一件が片付かないのに。

何故に同時期に来るのかしらねえ……？

モモが来ると必ずみつちゃんまでオマケで付いてくるし。

「はあ……ふこーだ」

私はこう同僚が同じタイミングで襲って来る事実になんか気にせずにはいらなかった。

「……??なゆおねーちゃん、どうかしたの？」

私に違和感を感じたののか、ののかが尋ねてきた。

「え……あ、ううん。何でもないから心配しないで」

私はののかに心配させまいと答える。

ののかは私の答えに「そっか……。なら良いけど」と納得してくれたようだ。

私とののかを乗せたバイクは街の喧騒と共に、その道を進んでいくのだった。

Side Out:

Side Akari

風優先輩がののかを送り届け終わってから帰還した後、修行の開始となった。

今度行われる4対4戦の競技、『毒の一撃』の基本ルールは風優先輩が帰って来る前に確認を終えた。

その際に今回の指導役である理子先輩、強襲科所属で湯湯ちゃんアサルトの戦兄あにでもある綾瀬悠季先輩あやせゆうき、その幼馴染でパートナーの三嶋絢香先輩みしまあやかが合流した。

あと、もう二人先輩が合流するらしい。

今回の指導メンバーを見てライカが固まっていた。

あたしとその理由を聞いたところ、風優先輩、理子先輩、悠季先輩、絢香先輩。

この4人は去年の『毒の一撃』で開始2.5分で決着。

それを聞いたあたしは啞然と……はならなかった。

「あー……そりやそうだよねー(笑)」としか思えなかったからだ。

風優先輩と組んでいるうちに其の辺の耐性も出来てる気がする。

そう思っていたら風優先輩が帰還し、あたし達は闘技場に集められた。

そして風優先輩の説明が始まる。

「さて……貴女達全員にはこれを使いこなせるようになって貰おうと思うわ」

そう言っ取り出したのは紅い楕円型のペンダントだった。

「あ、あの……それは一体何ですか?」

志乃ちゃんがおぼろげと手を挙げ、質問する。

「これは『シンフォギアシステム』って言って通常武器で通用しない相手に対抗する手段……そして、

使用する者の意志に左右される武器よ。その武器形状も人によって異なるわ」「人によって異なる」とはどういう事なんですか、風優お姉様」

風優先輩の解説に麒麟ちゃんが疑問を投げかける。

「このペンダントを持った時点で脳内に歌詞が浮かぶの。その歌詞によって武器が変わるのよ」

風優先輩はそう言って「実際にやってみるから」と言い、ペンダントを眼前に構えた。

「Imyuteus amenohabakiritron」

風優先輩の語句に反応したペンダントは蒼い光を放つ。

そして、光は一瞬で消え風優先輩の右手には蒼い剣が握られていた。

「蒼刃罰光斬」

風優先輩はその蒼い剣を構え、居合抜きを行う。

居合と共に放たれたエネルギー状の剣圧を×状にして飛ばす。

放たれた剣圧によって展開されていた防御障壁の一角に×状の切れ込みが出来た。

「………」

その威力の高さに啞然となるあたし達だった。

確かにこれを使いこなせる様になれば大きな戦力になるに違いない。

だが、使用方法を誤れば人を殺めかねない。

「この武器による威力は高い。他人を殺めるか否か……それは使用者次第だよ。さあ、貴女達はこれを扱う覚悟はあるかしら？」

風優先輩はあたし達に問い掛けてきた。

そんなのは……愚問だ。今のあたし達にとっては。

あたし達の答えは既に決まっているからだ。

「……あります!!!」

あたし達は声を揃えて力強く宣言するように答えた。

風優先輩はあたし達の答えに納得したのか微笑み、

「良い答え。あかりなら……ううん。貴女達ならそう言うと思ってた。合格。さあ、受け取って」

そう言って、あたし達に先程の紅い楕円型のペンダントを手渡した。

あたし達は早速試しに使ってみることにする。

「Various shulshagana tron」

「Imyuteus amenohabakiron」

「Killter ichhivaltiron」

「Balwisyall nescell gungnir tron」<sup>n</sup>

頭に浮かんだ詠唱を唱えるあたし達。

一通りその形態になったところで志乃ちゃんがこのシンフォギアシステムの解除方法を尋ねていた。

風優先輩が解除方法を教え、その方法で一旦解除する志乃ちゃん。

「Zeios igallima raizen tron」

志乃ちゃんは再び詠唱する。その詠唱は先程とは違っていた。

武器が巨大な鎌でなんと、志乃ちゃんの髪が金色に変化していた。そして魔女帽みたいなバイザー、両肩にアーマーが追加されている。

「へえ・・・志乃ちゃん、それに麒麟ちゃんもその段階に達したのね」

風優先輩は志乃ちゃんと麒麟ちゃんの姿を見て称賛を送っていた。

麒麟ちゃんの姿を見ると、武器はガントレットなのだが、脚部にアンカーユニット、首には長い白のマフラー状のウイングが装備されていた。

風優先輩によると、

あたしが女神ザババのひと振りと言われる鋸武器の『魔鋸・シユルシャガナ』

志乃ちゃんが風優先輩と同じ『絶刀・天羽々斬』、それと先程の『獄

鎌・イガリマ』

ライカが如何にも遠距離武器な感じの『魔弓・イチイバル』

麒麟ちゃんが先程の武器・・・名を『撃槍・ガングニール』

らしい。

発現させたシンフォギアシステムを使いこなすべく、あたし達は同じ武器を扱う先輩の個別指導を受ける事となった。

その結果・・・

あたしには理子先輩、志乃ちゃんが風優先輩と葵先輩、ライカが悠

季先輩、麒麟ちゃんが結衣先輩となった。

あたしの武器・・・シウルシヤガナは高い機動力、広範囲それに加えて手数が多さが長所の武器である。

あたしは理子先輩の指導のもと、その長所を完全に活かす戦法を学び、会得した。

そして、このシウルシヤガナだけが出来るといふ事も教わった。

それを使用するにあたって相当なバランス感覚の強化を強いられしたが、あたしはなんとかそれを使いこなす事に成功した。

修行後の入浴時に各々の修業成果を報告し合ってお互いの情報を共有したりした。

そして、あつという間に合宿は全日程を終了した。

翌日・・・。

第009戦 間宮班VS高千穂班 4カルテット対4戦の競技、『毒ブワッの一撃』が開幕した。

続くよっ！

## 第033弾 開幕、カルテット。穿つは毒の一撃（プワゾン）

4対4戦の当日の正午を少しばかり過ぎた頃。

11区の中央にある車道交差点……その脇にあたしと志乃ちゃん、ライカ、麒麟ちゃんの『間宮班』、それと高千穂さん、湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、陽菜ちゃんの『高千穂班』の面々が集まっていた。

今回の舞台は至ってフツの市街地なのだが……人気がない。それについてはまあ……仕掛け人は風優先輩だろうし驚く事はないだろう。

風優先輩、今回のコレで結界を展開する役を依頼されてるとか言っていたし。

人払い・対衝撃……そこら辺の対策だろう。

「――それでは4対4戦、『毒の一撃』を開始します」

教官として今回の戦いを監督する救護科の非常勤講師の小夜鳴徹さよなきとわる先生がそう宣言した。

小夜鳴先生はこの武偵高では珍しいスーツ姿の美形な男性講師だ。

まあ、その正体は人間ではないけど。

その正体……それは何千年以上も生きる吸血鬼だそうだ。

そして、風優先輩とは旧くから交流があるらしい。

なんでも、「風優先輩が無茶しないか心配だから武偵高の講師をする事にした」らしい。

全くそれが想像できそうだから風優先輩は（色々な意味で）恐ろしい。

そして、あたし自身は小夜鳴先生の真の姿との初対面の時は驚いた。

しかし、ここ最近は「人外との対戦時の対処法」を叩き込まれてるので何かと面会数も多いのもう慣れてしまった。

因みに風優先輩絡みで交流のある麒麟ちゃん、湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、陽菜ちゃんも同様である。



あの巨体であのフットワークの軽さ……あんなの反則や……チートの類だ。

今思い出しただけでも身震いする。そしてそれが本気じゃないのだからさらに恐ろしい。

そんな事も頭の片隅で考えつつ、あたしは小夜鳴先生のルール説明を聞く。

「間宮班は『蜂』、高千穂班は『蜘蛛』の攻撃フラッグを、敵の『目』のフラッグに接触させれば勝利です。フラッグの隠匿、班員間での受け渡し、敵からの奪取、破壊は全てOK。折られたり破かれたり等の破損したフラッグは無効となります」

同時に高千穂班を意識しておく事も忘れない。

「エリア内の物は何を使っても構いません。なお、火器の使用弾薬は非殺傷弾のみ。そして、皆さんの持っているシンフォギアシステムの使用は可能。」

ですが、それに伴うものとして『アルカノイズ』をフィールドにばらまきます」

と小夜鳴先生は黒いゴム弾頭の9mm弾と赤いコアが刻印された黒い結晶をつまんで見せてくる。

「まあ、非殺傷弾が頭部に被弾したり、アルカノイズに囲まれたりしたら運が悪ければ死んじやうこともありますけどね(笑)」

『(笑)』を付けても物騒な台詞でとてもじゃないが教育者が言つて良い様な代物ではない。

しかし、脅迫の為の虚偽、場を和ませる冗談でもなく全てが事実。武偵高……いや、武偵ではコレがデフォルト……危険とは常に隣り合わせなのである。

それは、あたしは風優先輩に散々言われている為、理解はしている。それを別……『運が悪ければ』か……。

こういう場面で……こういう場面だからこそ自分の(デバフスキルな)『不運』が発動しないで欲しい。

こればかりはどうにもならないが、そう思うのだ。

小夜鳴先生によるルール説明が終了し、あたしは『間宮班の代表』と

して、

「お互い、頑張ろう?」

対戦チームのリーダー、高千穂さんに右手を差し出した。

しかし、高千穂さんはあたしのその手を金属製の扇で叩いてそれを拒んだ。

そして、追撃と言わんばかりにあたし達を冷たい目で見下して

「――私と対等なつもり? 不愉快だわ」

吐き捨てる様に言い放つてきやがったのだ。

この対応ならば全力で捻り潰す。

あたし達はそう決めた。

志乃ちゃんは先程の件であたしの手が少し腫れたもあってか、ライカは・・・顔合わせの事もあるのか・・・殺気剥き出しだ。般若が二つ見える。

それに対するあたしと麒麟ちゃんは殺気が剥き出しで無く、然りげ無く内包している。しかしその分、滲み出る殺気の濃厚さは格段に違う。

その背後には・・・青面金剛が2体見える。

それを高千穂班4人は攻撃的な表情で受け止めた。

・・・と言いつつも高千穂さん以外の3人は呆れていた。

このムードは今にも始まりそうな感じだ。

「はいはい。それでは間宮班は南端、高千穂班は北端へ。10分後に試合開始です」

それを如何にも『何時もどおり』と言った感じで小夜鳴先生はニコニコ顔で手を叩いていた。

・・・その内面に「何、おっ始めようとしてんだよ。さっさと移動しろや」と言った感じの本性が内包されていたのには何も言うまい。

高千穂さんは息を吐くと、余裕な表情を浮かべながらその場を離れていった。

それを深い溜息を必死に堪えながらも湯湯ちゃん、夜夜ちゃん、陽菜ちゃんが続く。

その背中を見つめるあたしの手に……志乃ちゃんだけじゃない。ライカ、麒麟ちゃんの手も重なる。

あたし達4人共が同じ方向を向いて、

（——絶対に負けない！）

気持ちが一つになってやる気に満ちた表情になっていた。

11区南端にある公園。

その高台に有る小さな林にあたし達、間宮班は陣取っていた。

そこで、あたしは持ち銃とサブ銃に非殺傷弾の弾倉を挿し、金属針のホルダーと折畳み式の刀が入ったポーチを腰に装着し、革製のオープンフィンガーグローブを拳に填める。

ライカもあたしと同じく、革製のオープンフィンガーグローブを拳に填める。

サーベルを腰に提げた志乃ちゃんは、片耳ヘッドセットの感度を確かめている。

それと同じものはあたし達の耳に装着されている。

これでそれぞれが離れていても会話できる。

万が一……妨害電波による通信遮断が起きても良い様に装備科の同級生……柊舞佳ちゃん（ひいらぎまいちゃん）による改良済みである。

柊さんは卓越した技術を持っていて、1年生ながらもランクはS。

風優先輩の専属技師？でもある機嬢先輩（じーニャン）の戦妹（いもうと）である。

風優先輩経由で仲良くなって、今ではあたしの武装のメンテナンスを請け負ってくれている。

暫くして、手に付着した泥を払いながら麒麟ちゃんが戻ってきた。

「打ち合わせ通り、守るべき『目』のフラッグは埋めて隠しましたわ。攻撃フラッグ——『蜂』の（フラッグ）小旗は各自、服の中に隠してください」

「もう隠してるよ」

そう答えたライカはフラッグを背中に隠したようだ。

あたしはフラッグをスカートの中に、志乃ちゃんはブラウスの胸の中に隠してある。

準備を整えたあたし達は顔を合わせて最終ミーティングを開始し

た。

「攻撃は間宮様と佐々木様で。守備はライカお姉様と私が受け持ちます」

そう語った麒麟ちゃんはあたしの方を向く。

「間宮様。敵は『目』をロッカーなどに入れて鍵をかけるかもしれません」

「うん。汎用の解錠キーを持ってきたよ」

あたしはスカートのポケットから『解錠キー』を取り出して見せた。『解錠キー』とは武偵手帳にも付属している武帝必携のアイテムである。

要は簡易的な鍵開けツールである。

簡易的と言ったが、無論コレの上位版も存在する。

しかし、上位版を使ったとて鍵開けの時間短縮には直結しないのだ。

一番重要なのは・・・個人の技術。

根本的な結末に直結するのだ。

あたしは・・・どちらかといえば上手い方でコインロッカー、安い車なら1〜2分で開ける事が出来る。なので、鍵開け担当も兼任する事となったのだ。

そして、試合開始時刻が音も無く静かに訪れる。

「ではあかりさん、行きましょう」

「うん」

志乃ちゃんとあたしは、周囲を警戒しつつも公園から出撃する。

あたし達は四方に気を配りつつも、11区を北へと進んでいった。

先ずは歩道を進み、道路を渡って裏路地に踏み込んだ。

コッソリと裏路地を抜けたら、もうここは11区の北側。

そう、高千穂班が守護する領域だ。

高千穂班が恐く陣取っているであろう工事現場に向かうには、先ず

此処で見通しの良い大通りを通行せねばならない。

つまりは・・・だ。敵が此処に防衛線を張っていても何ら違和感

も無い。・・・難所という訳だ。

「奥に行くには、此処を通るしかありません。待ち伏せアンブッシュに注意してください」

「うん・・・」

志乃ちゃんがあたしに小声で注意を促し、あたしがそれに小声で頷く。

そして、今まで以上に警戒をしつつも、志乃ちゃんの先導で危険地帯に踏み込んで行く。

今回のカルテットの為に人払いが施されている。

それ故なのか、何時もよりも街並みが不気味に思えてくる。

『疑心暗鬼』。

とは良く言ったものだ。此処が敵地だと思おうと尚更の焦燥感が込上げてくる。

その時だった。

あたしの気配感知に何かが引つ掛かった。

「志乃ちゃん・・・迎撃準備」

「は、はい・・・!」

あたしは志乃ちゃんに迎撃態勢を敷く様に指示し、小太刀を抜いた。

そして、あたし達の死角から湯湯ちゃんの、志乃ちゃんは夜夜ちゃんの小太刀による攻撃を防ぐ。

小太刀を横に薙いで、あたしは湯湯ちゃんを弾き飛ばす。

湯湯ちゃんは弾き飛ばされた衝撃を自分で調整し、上手く着地した。

「へえ・・・やるじゃん。あかり」

「そっちもね・・・湯湯ちゃんっ!!」

再びあたしと湯湯ちゃんの小太刀が切り結ばれた。

そして、暫く鏢迫り合いの応酬が続いた。

その時だった。

あたしの気配察知に何かが引つ掛かった。

その困惑に隙ができる。

「貰った……!」

「あつ……ヤバっ……!」

仕留めにかかる湯湯ちゃんの一撃をあたしは掠る紙一重の所で回避をする。

「戦闘中に考え事なんて……余裕だね。あかり」

「ゴメン、何かヤバイ物来たみたいだから」

「どういう事……?」

「それは——」

あたしの言葉はそこで遮られた。

何故なら『アルカ・ノイズ』。その大群が眼前に居たからだ。

「何で……こんなにつばい……」

「解んないけど……志乃ちゃん……此処は」

「夜夜、此処は……」

「一時休戦して、4人で切り抜ける!!」

あたしと湯湯ちゃんの指示は同じ物だった。

へたすれば死んでしまう事があるのだ。

それなのに敵対がどうか言ってられないのだ。

呉越同舟。

今はこの局面を切り抜ける方が先決だ。

「りよ、了解……!!!」

志乃ちゃんと夜夜ちゃんが賛同し、4人で共同戦線を張ることになった。

あたし達は胸の紅いペンダントを手にとって起動の聖詠を口にする。

「Various shulshaganatron」

「Zeios igalimarainenatron」

あたし達4人を眩い光に包まれ、あたしと湯湯ちゃんはヨーヨー型の鋸武器が、志乃ちゃんと夜夜ちゃんは巨大な鎌が装備される。

志乃ちゃんのは髪が金色に変化していた。そして魔女帽みたいなバイザー、両肩にアーマーが追加されている。

「 $\alpha$ 式 百輪廻!!」

あたしと湯湯ちゃんの鋸武器の格納部から展開された小型の鋸がアルカノイズを切り裂いて行き、道を作る。

「切・呪りeツTおお!!」

そして、進軍した志乃ちゃんと夜夜ちゃんが鎌の刃を3枚に分裂させ、ブーメランのように飛ばして左右から挟撃する事によって、確実に殲滅をしていく。

あたしと湯湯ちゃんの『魔鋸・シユルシヤガナ組』がヨーヨーの糸で相手を包囲する『β式 獄糸乱舞』と織り交ぜつつ脚部のブーツの小型車輪を展開させ、機動力を活かしての攻撃を続ける。

そして志乃ちゃんと夜夜ちゃんの『獄鎌・イガリマ組』がメインで殲滅を行う。

これ続けて暫くした頃。

漸く大技一発で全殲滅出来る範囲までにアルカノイズの数が減った。

「志乃ちゃん!」

「はい!」

「夜夜!」

「うん!」

「禁殺邪輪 Zあ破刃エクLイプsss!!」

あらかじめ志乃ちゃんの両肩から放つロープで対象を絡めとり、地面に固定。同時に志乃ちゃんのアンカーを自身のギアと接続し、アームドギアから巨大な円状の刃を形成し、内側に乗り高速で突進する『非常Z式 禁月輪』と『断殺・邪刃ウオttKKK』で挟撃する。

「禁合β式・Zあ破刃惨無うNN!!」

空中で湯湯ちゃんのアームドギアのヨーヨーを夜夜ちゃんのアームドギアの鎌の柄の先に接続し、巨大な刃が付いた車輪状に変化させ、回転させながら2人が相手に突撃をする。

この大技×2でアルカノイズの大群は総て殲滅され、紅い花火を咲かせた。

4人で協力をしたお陰で無傷だ。

だが、この戦いであたしの蜂フラッグは破損してしまった。

それは向こうも同様で湯湯ちゃんの蜘蛛フラッグが破損してしまっただ。

「あかりさん」

志乃ちゃんがあたしの事を呼んだ。

あたしが志乃ちゃんの方を向くと何か投げ渡された。

それは……蜂の攻撃フラッグだった。

「志乃ちゃん、これって……」

「ごっちは大丈夫です。ですからあかりちゃんは行ってください。……絶対に勝ちましょう！」

あたしは迷ってしまった。

だが、その直後にその迷いは志乃ちゃんの激励とその時の勝気な笑顔で消え去った。

向こうでは湯湯ちゃんが夜夜ちゃんから蜘蛛フラッグを受け取って行動を開始していた。

それを見て私は志乃ちゃんの攻撃フラッグを握り締めて、何よりも覚悟を決めて。

志乃ちゃんに一度領き返してあたしは走り始めた。北の方角へと。

Side | Out :

Side | Raika Hino

あたしの耳に装着したヘッドセットからあかりからの状況報告が入る。

愛沢姉妹と交戦。その直後にアルカノイズの群れの襲撃に遭う。

4人で協力し、退けるも互いの攻撃フラッグが1本ずつ破壊される。

愛沢湯湯が移動を開始し、あかりが本丸へ移動開始。

あかりは北側……高千穂班の陣地深部への侵入したと言えるだろう。

状況としては一進一退と言ったところだ。

そして……移動を開始した愛沢湯湯は……

「恐くは本丸に居るであろう高千穂麗のサポートに向かったのだと思



いますわ。そして、間宮様からのお話を伺うに愛沢姉妹の行動は遊撃的でしたわ」

公園の林に陣取って『目』のフラッグを一緒に守る麒麟が言う。

あかり達が愛沢姉妹と交戦した地点は1-1区の南北を分ける道路付近。

となれば、敵の侵入を待ち伏せてカウンターに転じる作戦なのだろう。

となれば、攻撃は愛沢姉妹に一任し、守備を固める作戦も考えられる。

だが、高千穂のあの性格からしてそれは無いと見て良いだろう。

「守備に最低1人は必要だから、あと1人攻撃手が居るな」

高い木の下でそう言ったあたしの読みは

「——左様。それが、某に御座る」

突如として背後に生じた気配によってあたしの意見は肯定された。

「!?」

あたしが振り返ると——木の上に逆さ吊りでぶら下がっている風魔陽菜と目が合った。

風魔陽菜……!!

アイツは高名な忍者の子孫だと専らの噂だ。気配を遮断しての敵陣への侵入など容易い事だろう。

あたしが風魔の存在を認識した頃には風魔が木から落ちてきてあたしが背に隠していた蜂の攻撃フラッグが掠め取られていた。

……これだから諜報科とは戦りにくい……!!

あたし達、強襲科アサルトと諜報科レザドの戦闘スタイルは正しく正反対。偶にアリア先輩、風優先輩やあかりみたいなオールラウンダー型の例外は存在するのだが、基本的にはあたしの様な強襲系は風魔の様な奇襲系に分が悪い。

そして……その奇襲型の風魔の標的は……麒麟。

そのことに気付いたあたしは直様に風魔を攻撃をしようとするが、その姿はあたしの背後だ。風魔の素早さに追いつかねえ……。

「——御覚悟ッ」

あたしの懸念通り風魔は麒麟に苦無を投げようとしていた。  
「ひいっ……」

麒麟は怯える素振りを見せるがその場から逃げ出そうとしなかった。

その理由は、その足元に埋めて隠したフラッグが有るからだろう。皆の為に退却の出来ない麒麟……。それを救えるのはあたししか居ない。

だが、今あたしは風魔とは背中合わせな状態。裏拳をしたとしても僅かに距離が足りない。

だったら……

あたしは振り返るのを止めて、地面を強く蹴ってバック転。

その状態で放つ部位は腕よりもリーチの長い脚。

アクロバティックな動きであたしはサマーソルト・キックを放つ。

あたしの左足が風魔の脳天に炸裂する……その寸前で

「ッ!!」

風魔はあたしの蹴りを頭上でクロスした両手首で受け止めた。

当てる事は出来なかったが、麒麟へのナイフ<sup>スロイニング</sup>投げを阻む事が出来た。それで十分だろう。

あたしはそのまま苦無で足首を搔き切られぬ様に足を地面に落とすして着地する。

そして風魔と麒麟の間に割り込み、背後の麒麟を守るように両腕を広げ、

「戦妹は戦姉が守る!!」

そう力強く宣言した。

その直後だった。

あたし達を取り囲む様にアルカノイズの大群が押し寄せて来たのだった。

「麒麟……下がってろ。 Kill t e r i c h i i v a l t r o n」

あたしはシンフォギアシステムのペンダントを手に聖詠を唱える。

魔弓・イチイバルを顕現させ、アルカノイズ共の殲滅にかかる。しかし、あたしのイチイバルは遠距離型だ。

近距離のアルカノイズは撃ち漏らしが有ってしまう。

丁度、その難を逃れたアルカノイズは麒麟に襲いかかった。

「麒麟つつつ!!」

あたしは叫び、麒麟の下へ向かおうとするがアルカノイズ共がそれを阻む。

アルカノイズの攻撃が麒麟に迫る。

しかし、麒麟はそれを避けようとしていなかった。

何故だ……麒麟……。

そう思った時、あたしは気づいた。

麒麟が何かを狙っている事に

麒麟はアルカノイズの攻撃を身体を上捻る事でその攻撃を回避し、

「Balwisyall nescell gungnir troln」

自分のシンフォギアシステムのペンダントを握り締め、聖詠を唱えた。

麒麟は武器はガントレット、脚部にアンカーユニット、首には長い白のマフラー状のウィングが装備された形態になった。

そしてそのまま、

「せえええいつ!!」

アルカノイズを上から殴りつけた。

殴られたアルカノイズは消滅した。

「麒麟……お前……」

「あ、ご無事ですか？ライカお姉様」

啞然とするあたしに麒麟は声を掛けてきた。

「ああ……あたしは無事だ」

「そうですか。なら良かったですわ。でしたらライカお姉様と共に戦わせてくださいまし。私は何時までもただ守られるだけの弱い少女ではありませんのよ」

あたしの答えに麒麟は安堵した表情を見せ、自らの共闘を申し込んできた。

その時だ。あたし達の死角からアルカノイズが襲いかかってきた。が、そのアルカノイズはあたし達の直前で斬られて消滅した。

「大丈夫でござるか・・・？お二方」

「風魔（様）・・・!!」

そのアルカノイズを斬り伏せたのは刀型のシンフォギア、絶刀・天羽々斬を装備した風魔だった。

「この局面、此処は一時休戦し共闘するのが最善かと・・・。如何なされる、お二方」

「ライカお姉様・・・」

風魔があたし達3人での共闘を提案し、麒麟があたしに答えを求めらる。

このままではジリ貧なのは确实。だったら・・・

「解った。その提案、呑んでやる。麒麟、指示を頼む」

「了解ですわ。お姉様は遠距離を・・・風魔様はフォローしつつの中距離をお願いします。私は近距離を中心に受け持ちますわ」

「了解！」

「・・・承知」

麒麟の指示を了承したあたしと風魔は自分の攻撃範囲の最適間合いのアルカノイズを確実に殲滅していく。

暫く、殲滅を行いアルカノイズも最初の1/3位までに減った頃だった。

「お姉様は今からフォローに回ってください。風魔様、大技行きますわよー！」

「わ、解った！」

「承知！」

あたしは麒麟と風魔の行く手を阻むアルカノイズをアームドギアとして形成した両手に携える2丁のクロスボウから多連装のエネルギー矢を掃射、高速連射する技、『QUEEN'S INFERNAL』で殲滅していく。

「双星ノ鉄槌 ― DIASTER BLASTER―」

風魔の天羽々斬の刀と麒麟の GANG ニールの槍、二振りのアームドギアによる上段から叩きつけるような同時攻撃を行った。

これが止めとなり、あたし達に襲いかかってきたアルカノイズは総て殲滅された。

何とか無傷で済んだものの、些か疲れた。

こんな状況で風魔に襲われたらひとたまりもない。

そう思っていたら風魔が此方にやって来た。

「・・・なんだよ」

「これを・・・。我が一族に伝わる疲労回復に効く丸薬でござる」

そう言っただけ丸薬をあたしに渡した。

「なんで・・・これを。あたしに？ 一時的に共闘したとは言え、あたし達の同士だろ？ どうして・・・敵に塩を送るマネを・・・？」

「某は唯、手負いのライカ殿に勝利しても面白くない。それだけの事」

『『正々堂々』に勝利してか・・・。全く忍びらしくないな』

「・・・よく言われる事ぞ。まあ・・・これも御館様に似たのでござろうな」

「そうかよ・・・。後悔するんじゃないぞ？」

「ふん。この不肖・・・風魔陽菜が全力を持って御相手仕る」

その直後、風魔の忍術に寄るものなのだろう。

あたしの視界が塞がれる。

あたしは極僅かな足音と風魔の武器である苦無の音を頼りに位置を予測し、改造トンファーで風魔の苦無に寄る一撃を防御する。

こうして、麒麟が見守る中、あたしと風魔の戦いが幕を開けた。

Side Out...

(後半に) 続くよっ！

えくすとら——えでいしよん  
リサのとあるいちにち

此処は、イ・ウーの研鑽派ダイオの寮……居住区。  
で、私の名前がリサ・アウ、エ・デュ・アंक。  
オランダ出身で今は、会計士の仕事の他にメイドさんもやっ  
ています。

まあ……他にも喫茶店や服飾関係の仕事もしています。  
なので……私の朝はかなり早いです。

だって、お腹を空かせて起きてくる人が居ますからね。  
そんな人達の為においしい朝ごはんを作るのがメイドさんの務め  
です。

私は手早く身支度を整えて厨房に向かいます。  
此処の厨房は研鑽派ダイオの党首と幹部2名の意向により、かなり設備が  
整っています。

私が厨房に到着するとそこには先客がいました。

「あ、おはよう、リサ。今日も早いよね」

そう私に声をかけたのは私が所属する研鑽派ダイオの党首、『氷天の魔  
女』・『魔術師』の異名を持つ水無瀬風優みなせなゆさんです。

「はい。メイドさんの朝は早いのが常識なのですよ！」

私はそう返します。

「どんな常識なのよ……。それって……。まあいいわ。手伝っ  
て？」

風優さんは私に手伝いを求めます。

「かしこまりました」

私は了承し、風優さんと皆の朝ごはんを作ります。

暫くして、私の会計士の先輩でもある『鬼の会計監査』こと、桐ヶ谷きりがや  
瑞穂みずほさんも合流して3人で朝ごはんを作ります。

大体出来上がった頃にタイミングよく皆が起きてきます。

起きてきた皆がダイニングに着くのを確認し、盛り付けをし、配膳

していきます。

皆……特に「魔女連合」の食べっぷりが凄いです。

早朝訓練の後なのだからでしょうか。

それを差し引いても……『紅蓮の魔女』、『隠者』こと、ひめがみゆい姫神結衣さんの食べっぷりは凄いです。正直。

通常の5倍サイズの丼茶碗（通称・ヒメわん）で朝から10杯ですよ？

もう、人一倍……どころか、50倍位食べてます。

これで、「まだ少ない方」なのだから吃驚です。

こうして、皆は朝ごはんを食べ終わると、今日の予定をチェックするべく、掲示板に向かいます。

私はそれを見送り、後片付けをしています。

後片付けをしている最中にもヒルダさん、Br……ではなく、徹さん等といった

方々が朝食に次々とやってきます。

なので、凧優さん、瑞穂さん、それに、『水嶺の魔女』こと、きりしまあおい霧島葵さんと協力して対応していきます。

大体皆の朝食が終わったのを確認すると、ようやく私達が朝食の間です。

ですが、次のお仕事の時間も迫っているので、今日の日程確認をしながらとなりますので、結構慌ただしいです。

朝食を終えて洗い物を済ませた私は、お仕事用の道具が入ったトランクを持って

最初のお仕事現場に向かいます。

そのお仕事の内容は……物品購入会の監査です。

大体、3時間ほどで物品購入会の監査をした所で、全て「成立」という形で終了しました。

今回の成果は定価の80%引きの一括支払いで行けることになりました。

成果としてはまあまあといったところでしょうか。

瑞穂さんだったら、95%引きとかフツーに行きますからね。

今日のお相手のココさんは・・・涙目でしたが、後で手作りの杏仁豆腐送っておけば大丈夫でしょうね。

時計を見ると結構いい時間になっていました。

移動時間を含めるともうそろそろ向かったほうがいいでしょうね。

私は昼食のベーグルサンドを食べつつ、次の仕事場所に向かいます。

午後からの私の仕事は主に飲食店の従業員です。

料理の腕前と容姿を買われて採用されました。

真の姿のことは言わない方がいいでしょう。

もしかしての需要があるのかもしれないが。

今はランチタイムも終わり、そんなに忙しくはありませんが、それでもヒマというわけではありません。

お客が次々にお越しになっています。

さて、ここからが私の本領発揮です。

今日も一人でも多くのお客様を笑顔にしないと・・・ですね。

激動のディナータイムも終わり、時間はもう19時を過ぎていきます。

夏になり、日も大分長くなりましたが、段々と薄暗くなっています。

その時、ふと、思い出します。

あ、そういえば今日、8月2日は私の誕生日です。

色々な事があつてすっかり忘れていましたが。

今思い出すと、皆、毎年毎年盛大に祝ってくれるんですね。

それはもう私が「ヘルモイ!!」と連呼するほどに。

今年は例年通りならその事が事前に解るはずなのですが、それがありませんでした。

皆が忘れていいのか・・・いいえ。それは多分ありえませぬ。

何故なら、メンバー全員の誕生日ごとに盛大な誕生日会が行われるのにですよ？



！  
それなのに、私だけ無いのはあまりにも哀しすぎるじゃないですか

ですから、『サプライズパーティー』に強く期待します。

・・・いえ、絶対にそうであってほしいです。

そう思っただけで歩いていくうちに研鑽派ダイオの居住区に到着しました。

どういう結果になるのかは解りませんが、私は何時もどおり玄関の鍵を開けて、

ダイニングへと向かいます。

ダイニングの扉を開けたその時でした。

ぱあんっ

私の顔面めがけてクラッカーの紙吹雪が舞います。

私はいきなりだったので少しびっくりしてしまいました。

『ハッピーバースデー!!リサ!!』

その言葉に私は涙が溢れてきます。

「もー、リサちーってば始まったばかりなのにもう泣いてるし」

「いいじゃない、理子。それだけ嬉しいって事なんだから」

「そうだね、なゆなゆ。いやあ・・・これは企画して良かったよね」

「そうね。流石は私の義妹いもうとだわ!」

「ちよっ・・・ヒルダ、なんで抱きついてんの!?!」

「それは、理子アナタが可愛いからよ!!それ以上もそれ以下もないわ!!」

「ええ!?!何それ意味わかんない・・・。てか、娘ヒルダ止めろよ、父親ブラド」

「無茶言うな。こうなっっちゃ止めらねえよ。だから(´;´) 旦那 ガン

ガレ!」

「OTL」

ヒルダさんが理子さんと暴走して、ブラドさんに助けを求めるも、却下されて理子さんは物凄く項垂れていました。

それを見ると、なんだか微笑ましくして自然と笑みが溢れます。

「あはは・・・なんか、いつもどおりの日常になっっちゃったね、リサ」

「そうですね・・・でも、こんな日常はあつたかくてリサは好きですよっ」

「そっか。じゃあ、私はその日常が長く続くように頑張らないとね」

「はい。期待しています。 凧優」

凧優さんと会話をしていると

「おいしい、リサちー、ちよつといーい？」

理子さんが私を呼んでいました。

「はい。なんででしょうか、理子さん」

「今からさ、ガールズ・バンドのライブステージするんだけど、リサちーやりたい楽器とかある？」

「えつと……リサはベースがやりたいです!!」

「ベースね……。OKだよ！さ、ステージが上がって！」

理子さんに誘われ、私はステージに上がります。

そこにはメンバーが揃っていて、

V o . : 葵さん

G t . : ヒルダさん

B a . : 私

D r . : 理子さん

K e y . : ジャンヌさん

というメンバーでした。

そのメンバーで「六兆星と一夜物語」「FIRE BIRD」「きゅーまい\*flower」等といった曲を演奏しました。

演奏が終わったあと、結構盛り上がり、会場は大盛況です。

ヒルダさんに至っては「るん♪ってきたー！」と言っていました。何なのでしようか……。

そんなこんなで楽しい時間と共に夜も更けていきます。

この時、私は願わくば来年も再来年もまたこんな時間を皆と過ごしたい。

こう思っ止まなかったのです。

余談ですが、このバンドの模様を教授も見たいらしいです。

そして何か閃いたようで、私達が本当にバンドデビューする事になりました。

そして・・・あれよあれよという間に知名度が上がり、イ・ウーの資金源の約4割を占めるようになったのです。

おしまいっ！

## アリアのとあるいちにち

あたしはホームズ4世。

神崎・H・アリア。

シャーロック・ホームズ卿の曾孫。

簡単な自己紹介はさて置いて……今、あたしは超絶に不機嫌である。

いきなりでこんな事を言うのもどうかと思うけれど事実だから仕方ない。

何故と言われれば、その原因は妹であるメヌエット・ホームズからのバースデー・メッセージだ。

家族……妹からのメッセージであれば、通常は嬉しいものではある。

しかし、あたしにメヌからのメッセージの電話が掛かってきたのが日本時間で午前3時30分である。

日本とイギリスの時差が9時間（正確にはサマータイムで―8・0hであるが）とはいえ、時間を考えて欲しい。

イギリスは19時30分で電話を掛けるには丁度良い時間帯なのかもしれない。

しかし、日本はさつきも言ったとおり、午前3時30分である。大体は就寝中である時間帯である。

かくいうあたしも絶賛就寝中だった。しかし、その電話によって叩き起された。

更に輪をかけて前日は作業が長引いて就寝したのが午前1時である。

よって、絶賛寝不足である。朝の日課であるトレーニング準備の為、4時半起きで3時間半は寝れるかと思ったら、大きく狂った。

「あたしの就寝時間の1時間を返せ」  
寝不足な不満をメヌにぶつけたら、更に揶揄われる羽目になった。

解せぬ。物凄く納得がいかない。

このイライラを風穴バーストで晴らしたい……。今直ぐにでも。

しかし、それは出来ない。

元・同居人の怒りを買いたくない。唯其れだけだ。

「今は住んでないからセーフなのでは……」とは思っていけない。風優……水無瀬風優は直感・気配察知においては人間を辞めているレベルだ。

今、ここにあたし達の朝食を作る為にもう既に来ている。

此処で大きな音を出せばO☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆I非回避だろう。

それだけはどれだけ不機嫌であろうが避けたいあたしである。

だが、風穴バーストはしておきたい。

こんな不機嫌な状態で1日を過ごすなんて真っ平ゴメン被るわ。

だったら、完全防音なら問題はないわよね。

そう思ったあたしの実行は迅速だった。

自室を小夜鳴マキナ御用達の「完全防音・防衝撃モード」に変更する。

以前、小夜鳴マキナに愚痴ったら作り替えてくれた。

まさに小夜鳴マキナ様々よね。

変更後、あたしは気が晴れるまで「風穴バースト」をやりまくった。

「風穴バースト」で憂さ晴らししたあたしはトレーニングウェアに着替えて自室を後にする。

リビングに併設されているキッチンには先客が居た。

「おはよ、アリア。今からトレーニング？」

その先客とは言わずもがな風優だった。

「ええ。そうよ。風優、アンタちゃんと寝てるの？」

あたしの発言に「あはは……」と苦笑いの風優。

それで確信した。絶対寝てないわよね。

「んと、まあ30分位寝たし大丈夫よ」

30分て。あたしより少ないじゃない。

「……身体壊さないでよね。体調崩したら元も子も無いんだから」

武偵たるもの体調の自己管理は確りしないといけないものね。

「解ってるって。トレーニング、怪我しない様に気をつけてね」

「ええ。解ってるわよ。じゃあ、行ってくるわ」  
「うん。行ってらっしゃい、アリア」

風優に見送られ、トレーニングの集合場所である人工浮島の埠頭テラスに向かった。

埠頭テラスに到着したあたしは同級生で何かと縁がある綾瀬悠季あやせゆうきと共にトレーニングに勤しむ。

途中であたしの体内に宿るモノの根源である緋緋神……もとい、三嶋絢香みしまあやかも合流する。

フツーに終わるかと思えばそうではなかった。

何故か小夜鳴マキナこよなまきも合流してかなりハードだった。

何とか耐えた自分を褒めてやりたい気分だったわ。

疲れた身体を引き摺りつつも男子寮に戻る。

戻ったあとは少し寝る（二度寝）。

1時間後、起床しシャワーを浴びる。

シャワー後。そこであたしは武偵高の制服に身を包んだ。

今日は祝日だが、やる事がある。

2009年9月23日は「チーム編成」の「直前申請」ジャスト当日だ。

その為の準備が色々あるからだ。

書類は風優のアドバイスもあつて不備はないはずだ。

あと、問題があるとすればキンジよね。

チーム入りを引き受けてくれるといいのだけでも。

そこだけが不安だ。

キンジへの説明は白雪と理子が上手くやってくれるだろう。

あたしはそう願うばかりだった。

風優お手製の朝食を摂り、あたしは準備を整え、スズキ・GSX-

R1000（2009年仕様）K・キャンディKークチェリー×ソリッド

ブラック）に乗って新宿警察署に向かう。

ここにやってきたのは勿論ママへの近況報告だ。

ここ最近は時間無制限で話す事ができるようになっていた。

聞いた話によると風優とその兄である水瀬雄一郎が交渉したらしい。

あたしはその交渉が「交渉（脅迫）」に思えて仕方なかったのはここだけの話である。

丁度いい時間になったので、あたしは新宿警察署を後にしてスズキ・GSX-R1000で武偵高に戻る。

武偵高に戻ったあたしは装備科アムドで防弾制服デイスワイザー・黒ネロを借り、それに着替える。

その着替え中に理子にセクハラされて理子に制裁を加えたのはご愛嬌である。

理子はキンジを迎えに行く為、別れてあたしは撮影場所である探偵科の屋上でキンジ達を待つ。

暫くして風優が到着し、白雪と理子と共にキンジが到着した。

キンジと他愛のない話をした後、あたしはもう1人の待ち人を待っていた。

月初めに絶交状態になっていたレキである。

先週の「エクスプレス・ジャック」以来音信不通になっていたので凄く心配しているのだ。

一応、申請用紙にはレキの名前が記載してあるが、無駄になるかもしれない……。

そう思うとポーカーフェイスを保っているものの、内心は不安で仕方がない。

「大丈夫よ。レキは絶対来るわ」

風優があたしをきゅつと抱きしめた。

おそらく不安になっていているあたしを励ます為なのだろう……。何処がとは言わないが少し息ができない。もうちよつと加減しな

さいよ（困惑）

暫くして、レキが遅れて登場した。

あたしは安堵で心が一杯になった。

今直ぐにでも謝って和解をしたい。

しかし、周囲の目があるので中々話を切り出せないでいた。

それを既に察していたのかキンジと白雪と理子、それに風優が後押

し（強引）してレキと面面向かうことになった。

レキと面面向かった直後に急激に恥ずかしくなつて顔から火が出るほど紅くなつてしまったが、そのお陰？かで本音を言う事が出来て和解出来たんだから、結果オーライで奴よね、これは。

もつと話をしていなかったが蘭豹先生に催促されたので、直前申請<sup>ジャスト</sup>を優先させねば……。

2009年9月23日 午前11時59分55秒。

あたしが属する「チーム・バスカービル」<sup>Baskerville</sup>が承認され、発足した瞬間であつた。

午後からは戦妹のライカ、ライカの戦妹である麒麟、風優に風優の戦妹のあかりと共にシヨツピングに出掛け、休日を楽しんだ。

その後の夕食では、あたしの誕生日会が執り行われ、あたしは風優お手製の「ももまんキャツスル」を心ゆくまで堪能したのであつた。

夕食後にママの弁護士から連絡があり、三度スズキ・GSX-R1000を走らせた。

それから弁護士とママの裁判の準備を済ませて帰ってきたのは夜の11時だつた。

あたしは男子寮ではなく女子寮の自室に到着した。

その直後だつた……。

珍しく、キンジから電話がかかってきた。

何時もとは違った感じだったので返事を返すときにテンパつてしまった……。

キンジとの通話終了後、あたしは緊張しながらも指定された場所……女子寮地下の温室に向かつた。

そして……緊張しつつも薔薇園で待つ事数分。

キンジが到着した。

あたしは何時もどおり振舞おうとしたが、緊張のせいで上手くいかなかった。

そして、薔薇園で修復された跡を見て、キンジとの会話に花が咲く。「で……用事は何？こんな夜遅くにレディーを呼び出すからには、



それなりのご用件でしょうね？」

暫く、語った後に咳払いをしてあたしはキンジに本題を尋ねた。

「11時45分。これもかなり、ギリギリセーフだったな」

が、はぐらかして中々答えを言わないキンジ。

「だから、な・ん・で・す・か」

あたしはキンジの答えにワクワクする顔を必死に面に出さないように必死に抑えつつ、キンジに迫る。

「——今日、誕生日なんだろう」

キンジの言葉に強く肯定するように目を大きく見開いて何度も何度も頷いた。

その後、キンジの質問が続いたが、恥ずかしさが大きく勝ってしまい、1つも言葉で返答が出来なかった。

そして……キンジからの誕生日プレゼント……指輪を貰った。

しかも……キンジが指輪を嵌めてくれたのは左手の薬指。

異性からの夜の呼び出し+プレゼントが指輪+左手の薬指に嵌めてくれた

この数式の答えが成り立つのはすなわち……(求婚!?)

そう思ったら平常心が行方不明となっていた。(当然)

テンパった結果、後ろのミニ噴水に足を引つ掛けてピンポイントに頭から落ちた。

一瞬でパニックだったあたしはそのまんま溺れてしまった。

その後、キンジに助けられたが、意識がグッバイしかけていたのでよく覚えていなかった。

だけど……先週の修学旅行<sup>キャラ・バン</sup>1で理子が言っていた通り……いや、それ以上の事が現実となった。

その確信だけは忘れていなかった。……いや、あたしは忘れる訳にはいかないのだ。

あたしが17歳になった日。

この日の思い出をあたしはずっと忘れない。

それが例え、どんな事であろうとしても……。

F  
i  
n  
⋮

あかりのとあるいちにち

2009年10月25日(日曜日)。

今日はあたし、間宮あかりの16歳の誕生日である。

例年だと、ののかが夕飯時にささやかな誕生日パーティーを催してくれる。

特筆する事はそれだけで、特に普段と変わらぬ日常である。

なので、今年もまたそれと同じだろう。

今日は先程言ったとおり、日曜日。

だが、武偵高の依頼ってのは曜日なんて関係ない。

なので、学校は休日なのだが、依頼がこうして舞い込んで来る事もザラにあるのだ。

なんで、こんなこと言ってるかって？

そんなの、あたしも今日、今から依頼が有るからに決まってるじゃないか。

その内容は言うなれば「NA☆GU☆RI☆KO☆MI」っていうね。

明らかに武偵がするような内容じゃない。

どっちかって言ったら、なゆおねーちゃんや桃さん夾竹桃、みっちゃん水蜜桃の属する組織が請負う依頼だろう(偏見)。

しかし、なゆおねーちゃんは別の依頼が入ってるらしく無理だった。

他の東京武偵高在籍イ・ウーメンバーの方々も同様みたいだ。

なんか大掛かりな殲滅(裏)任務でもあるのだろうか。

それに何故かその任務に麒麟ちゃん、湯湯ちゃん、夜夜ちゃんも同行している。

あの3人はあたしと同じ『強化組』でシンフォギアも使えるので問題無い。

しかしだ。麒麟ちゃん||理子先輩、湯湯ちゃん、夜夜ちゃん||葵先輩という一組(元)が有るとは言え、メンバーの戦姉妹繋がりで呼ばれている。

なら・・・なんであたしを呼んでくれなかったんだろうか。な  
ゆおねーちゃん。

少し寂しさも有るのが本音だ。だが、武偵なんだからそんな事言っ  
てられないことも理解している。

だから・・・その八つ当たり・・・というか、憂さ晴らしを「N  
A☆GU☆RI☆KO☆MI」でぶつけようと思う。

死なない程度なら何をしたらって赦されるよね♪

こういう思考が思い浮かぶあたり、麒麟ちゃんに「間宮様、段々と、  
畜生具合等が風優お姉様に似てきてますわ・・・」って言われて  
も無理ないか（苦笑）

さてこんなこと考えていて時間に遅れるのは御法度だ。

もうそろそろ向かわないとね。

あたしは自宅のガレージに移動し、バイクを始動させる。

バイクはスズキ・GSX1300Rハヤブサ（2009年仕様・ソ  
リッドブラック×メタリックマジエスティックゴールド）である。

因みに、ガレージは以前はなかったんだけど麗ちゃんとバイクの話  
をしてたら、何故か無償で作ってくれた。

お礼を言ったら「べ、別に貴女に感謝されるために作ったわけじゃ  
ないっちゃー！」と返された。・・・ツンデレ乙。そして因州弁  
込みとは新しい。

・・・バイクで移動すること25分。武偵高近くに有る商業ビル  
に到着した。

「旭翔建設」

この地元で結構有名な建設会社である。

その社長さんと依頼内容の確認がある。

「あかり先輩、おはようございますー」

ビルの入口前であたしに声をかけたのが、あたしの戦妹である乾桜  
ちゃんだ。

当初、あたしと桜ちゃんの戦姉妹に難色を示していた教務科。

だが、序列の例外であるなゆおねーちゃんの鶴の一声によってそれ  
が覆った。

そしてなんやかんやであたしと桜ちゃんの戦姉妹が結成された。因みに「新年度になったらもう1人あたしが面倒見る」という条件付きである。

あたしは「2人も面倒見れるのか？」という不安がある。

だが、戦姉妹結成を聞いた時の桜ちゃんの笑顔を見たらそんな事は些事に思った。

なので、今はそんな不安はあまり無い。

まあ、なんとかなるだろう。

桜ちゃんと共に「旭翔建設」のビルへ入っていく。

「よう、久しぶりだな」

「あっ……お前はあの時の！」

ビルのエントランスで出会ったのは「ラグーン台場」での誘拐犯：もとい、

今は「旭翔建設」幹部である二人組だった。

金髪の方は「逢坂悠斗<sup>あいさかゆうと</sup>」と言い、今は綴先生の旦那である。

黒髪の方は「藍沢大和<sup>あいざわやまと</sup>」と言い、今は矢常呂先生の旦那である。

「お前は依頼で此処に来たのか？」

「はい。そんなところです」

「そうか……あの厄介団体にはうってつけだろうな（笑）」

『厄介団体』……ですか？」

悠斗さんの言葉に疑問を持った桜ちゃんが質問をする。

「ああ。何度も何度も粛清されても懲りずに騒いでる連中だ」

「ええ……その団体、バカなんですか……（呆れ）」

悠斗さんの言葉に呆れ返る桜ちゃん。

「ああ……。身も蓋もない位の大バカだ。まあ、大和に比べればマシだな」

そう言つて大和さんの方を見る悠斗さん。

「ああ……納得」

それに納得するあたし達である。

それが不服だった大和さんは異議を申し立てるがあっさり却下されてしまった（笑）

そして、大和さんは「OTL」状態になっていたが、毎回のご愛嬌なのでスルーである。

決して「不憫」とは言ってはいけない。

悠斗さんと大和さんと別れたあたしと桜ちゃんは依頼主の下に向かった。

最上階の会議室であたし達を待っていたのは社長の旭野將文さんだった。

見た目は優しそうだが、なゆおねーちゃんと同じくイ・ウーの現役メンバーで、雷系の能力者である。中でも近接格闘が得意である。

あたしも手合わせをした事があるが、あの速さは反則だ。

その將文さんと打ち合わせを行い、今回の肅清対象の団体の本拠地ビルに向かう。

桜ちゃんを後ろに乗せた状態でバイクで移動する事、15分。

今回の対象である「榎島組総合事務所」に到着した。

以前は旭翔建設ビルから徒歩数分のところに在ったらしいのだが、なゆおねーちゃんと「真優香先輩」になった葵先輩の逆鱗に触れてビルが壊滅したようだ。

その後、引越して今の場所になったらしい。

その団体に同情はしない。だって、聞くからに完全な自業自得だからだ。

で、突入方法はなゆおねーちゃんと同じである。

シンプルに後ろから潜入とかはせずにもう真正面からの突破。

がちや

扉を開けたあたしと桜ちゃんを迎えたのは

「ザッケンナカラーッ！」

「スツゾカラー！」

「チエラツカラー！」

「ルルアツクアラ！」

「ワドルナツケングラ！」

「ワメツカラー！」

「ドカマテツパダラー！」

「ヤクザスラングを喚く構成員の皆様でした。  
それとアルカノイズ多数。」

「V a r i o u s   s h u l   s h a g a n a   t r o n」  
「S e i l i e n   c o f f i n   a i r g e t - l a m h   t r o  
n」

対ノイズ用武器「シンフォギア」を顕現させるあたしと桜ちゃん。  
あたしがヨーヨーや鋸が主武器である「紅刃・シウルシャガナ」、  
桜ちゃんが鎖付きの短剣が主武器である「銀腕・アガートラム」で  
ある。

「えっと、O☆HA☆NA☆SHI　しましうか？」  
とびっきりの笑顔で言い放つ。

もう、構成員の皆様には死なない程度に無事は保証しない。  
そして、アルカノイズ共は塵になる。

それはもう確定事項だ。

異論反論等は赦さない。さあ、往生の時間だよ？

一時間半後、思ったより早く終了したあたし達は將文さんの下へ報  
告を行う。

報告の後、あたしは依頼報酬として「新築の住居」を貰った。

破格すぎるが気にしたら負けだろう。

桜ちゃんを送り届けた後、あたしは一度家に戻る。

シャワーを浴びて、着替えてが終わった後は、気分転換がてらに遊  
びに行く事にする。

行き先は・・・とりま、渋谷・新宿方面かな。

私服姿のあたしは再びバイクに乗り、移動を開始する。

この時、武装を忘れてはいない。キッチリ持っている。

因みに銃はマイクロUZIではない。

最近、葵先輩から貰ったトールラス・レイジングブルModel 4  
44 (Ultralite) である。サブ銃として使用しているが  
最近はプライベートの場合、こつちを携行することが多い。何かと使  
い勝手もいいからね。

渋谷↓新宿とウィンドショッピングを楽しんだあたしである。  
昼食は渋谷109内のカフェで秋限定のパンケーキを食べた。  
その道中でお買い物中の綴先生と矢常呂先生と出会い、更に何時もと違ってポニテ姿のゆとり先生と出会う。確か、なゆおねーちゃん曰く「ゆとり先生がポニテなのは傭兵関係の依頼が有る時とその前後だけ」だったから、おそらく事後だろう。  
そして、旦那であるなゆおねーちゃんのお兄さんとデート中の蘭豹先生と出会った。

蘭豹先生と雄一郎さんは二人で楽しそうなムードをしていたので、そこに割り込むのは野暮だと思い、話しかけるのは止めた。  
そしてそのカップルを黒い怨オーラを発しながらストーキングする結城ルリ先生を見つけたが、あたしは関わらないことにした。  
だって、関わったら最期っぽい感じするし。シニタクナイ。  
それに100%碌でもない事確定だろうし。  
あの人のカンも異常なので完全に気配を消してその場を脱した。  
それから池袋にも赴き、ショッピングを夕方まで楽しんだ。  
さて、もうそろそろ帰ろうか。  
そう思ったときになゆおねーちゃんからメールが入った。  
その内容は「19時に私の家に来て欲しい」という内容だった。  
今の時刻が18時15分。  
今から移動するば間に合うだろう。  
目的地のなゆおねーちゃんの自宅に向けてあたしは日が暮れてビルの灯りが綺麗になりだした街を横目にバイクを走らせた。

指定時刻の5分前に到着したあたしはリサ先輩の案内で多目的ルームに案内された。

その入口であたしを待っていたのは

『Happy birthday!!あかり(ちゃん)(さん)!!!』

この誕生日を祝うお祝いの言葉と無数のクラッカーの嵐だった。

事前に何も聞かされていなかったから結構驚いた。

もう本当に「サプライズ」としては十五分位に。



そして、そのままあたしの誕生日パーティーが開催された。

葵先輩となゆおねーちゃん作の絶品料理に舌鼓を打ち、

志乃ちゃん、ライカ、麒麟ちゃん、桜ちゃん、ののか、なゆおねーちゃん、結衣先輩、葵先輩、アリア先輩、キンジ先輩、白雪先輩、理子先輩 e t c : と沢山の人から色々な誕生日プレゼントを貰った。

そして最後の大トリでヒルダ先輩、葵先輩、リサ先輩、理子先輩、ジャンヌ先輩のバンド演奏が行われた。

このバンドは最近はライブチケットはプレミアになるほどの人気さを誇っている。

その証拠にこのバンドが参加したアドシードは例年の盛り上がり  
の比にならないくらいの大盛況だったらしい。

そんなバンドの演奏をナマで聴けるんだから、あたしは幸せである。

明日も、そしてこれからもあたしには色々な出来事が訪れるだろう。

だけど、この日の思い出は絶対に忘れない。

そして、来年も再来年もずっと今日みたいな日が訪れるように。

あたしは諦めずに前に進んでいく。

そう改めて誓ったあたしであった。

おしまい。

## 超聖戦？バレンタインデー

2011年2月14日（月曜日）

この日の東京武偵高校は何時もとは違う緊張感があつた。

今日は聖バレンタインデー。

女子が意中の男子にチョコレートを贈るといいう一大イベントである。

例年、東京武偵高では（主に蘭豹のせい）バレンタインデーが全面禁止となっており、チョコレートを渡した女子は勿論、貰った男子も教師陣（主に蘭豹）に処断される。しかし、隠れてチョコレートを渡す生徒が多く、密かな聖戦状態であつた。

それが今年もまた、今日この日に開幕する………と、思いきや違つたのだつた。

その理由は禁止理由の筆頭であつた蘭豹にあつた。

6月に発生した「教師陣結婚ラッシュ」によつて、蘭豹にも兄さん……水瀬雄一郎<sup>旦那様</sup>というチョコレートを渡す相手が出来た為、今年から東京武偵高校ではバレンタインデーが『公認イベント』となつたのだ。

これにより、「密かな聖戦」は「超聖戦」に発展する事となつたのだつた。

これは、そんな東京武偵高校のバレンタインデーを綴つた物語である。

この日の東京武偵高校の面々は朝からだというのに何処か血走つていた。

……… 比喩でもなくガチで。男子も女子も。

私・水無瀬風優は東京武偵高の校門に入るなり、大きなため息をついた。

何故ならば………

「「「ウオオオオオ……水無瀬の手作りチョコおくくくく」」」

「「「私が全部独り占めしてやるんだからあああああ」」」

「「「チョコレートハオレガゼンブイタダク・・・!!」」」  
「「「訳： 風 優 様 の チョコは私のモノ、誰にも渡さん  
「「「n y s m n t y k h s b t w t s h n m n、 d r n m w t s n  
!!」」」

私が作った（手作り）チョコの独占目的で私に襲いかかる生徒達。  
その大半は暴徒化していて、中には理性が吹っ飛んでいる奴らもい  
る。

その証拠に日本語がグツバイしている。

「（ん・ん・ん）バーカ。誰がお前らみたいなやつにチョコを渡すんだ  
よ。義理でも御免こうむるわ。・・・だからさ、ちよいと頭冷やそつ  
か」

私はとびつきりの笑顔で言い放ち、

「リク・ラク ラ・ラック ライラック」

ト・シユンポライオン、 デイアーコネートー・モイ・ヘー、 クリユスタリネー・バシレイア  
「契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、  
タイオーニオン・エレボス・ハイオーニエ・クリユスタレ  
とこしえのやみえいえんのひようが!!」

高速詠唱で広域氷結魔法のえいえんのひようがを発動させる。

これによつて、暴徒共のいる範囲はほぼ絶対零度となる。

無論、範囲は15 Ft（4.5 m）に抑えてある。

150 Ftも凍らせる必要ないし。

更に・・・

「オムニア・イン・マグニファイケ・カルケレ・グラキエーイ・インクルーデイテ ムンドウス・ゲラーンス  
「全てのものを妙なる氷牢に 閉 じ よ “ こおるせかい”」

“ こおるせかい” を発動し、暴徒共を氷柱に封印した。

あと、威力もだいぶ抑え目である。下手したらコレだけで殺せちや  
うからぬ。

「朝からド派手な技を放つんだな。師匠」

「あ、ジャンヌ。おはよ。だってチマチマ相手してたらめんどいもの」

「確かにこの多さの相手には骨が折れるな」

「でしょ」

「で、こやつらは何故に師匠を狙ったのだ？」

「チョコ」

「え？」

「ホラ、今日はバレンタインデーでしょ。だから私の手作りチョコを

独占しようとしたのよ」

「そんな理由なのか。なんと言うか、師匠も大変だな」

「ホントに勘弁してほしいわ、全く。……あ。ジャンヌ、これあげる」

私はラッピングされた紙袋をジャンヌに渡す。

「これは……?」

「今日はバレンタインデーでしょ。だから、友チョコ」

「私に……? 本当に良いのか!？」

「良いに決まってるわよ。じやなきや渡してないし」

「そうか……ありがとう。師匠」

紙袋を受け取ったジャンヌは私に笑顔でお礼を言った。

その時のジャンヌの笑顔にきゅんっ(\*´μ`\*)ってなったのは此処だけの話。

ジャンヌと別れた私は教室に向かう最中に暴徒共を沈めつつも、カツエ↓曹操四姉妹↓マキナ↓リーナの順に出会い、手作りのチョコを渡していった。

そして、教室に着いた時には私は疲労困憊で机に突っ伏していた。

私が机で死にかけていると、理子が話しかけてきた。

「オハヨー、なゆなゆ……って、大丈夫!？」

「理子は私のこれが大丈夫に見えるの?」

私は疲労による不機嫌さマシマシで答える。

「うん。少なくとも理子の目にはそう見えない。一体どうしたのさ?!」

理子はえらく驚愕した表情を見せ、此方に問いかけてきた。

「バレンタインデー」

「あ、何となくだけど理子察した。ご苦勞様」

「ん……」

私はそう一言答えるのが精一杯だった。

その直後だった。

「……ウオオオオ……水無瀬の手作りチョコおくら……」

「……私が全部独り占めしてやるんだからあああああ……」

「「「チヨコレートハオレガゼンブイタダク……!!」」」  
「「「訳： 風 優 棟 の チヨ コは私のモノ、誰にも渡さん  
「「「n y s m n t y k h s b t w t s h n m n、d r n m w t s n  
!!」」」

再び暴徒が現れ、今度は教室に押しかけてきた。

中にはクラスメイトも混ざっている。

私は疲労困憊な体を無理矢理にでも起こそうとした。

……が、理子に止められた。

「なゆなゆはもう限界近いんでしょう？だから、休んでて。こいつらは理子が始末するから」

「ありがと……でも殺すなよ?」

「くふふ、どういたしまして。今の理子は武偵だもん。殺しはしな  
いって」

「じゃあ……頼んだ」

「(。 ㇏) ヽ リョーカイ!! 理子にお任せあれ。——ラス・テル・

マ・スキル・マギステル」

「ウーナス・フルゴル・コンキデンス・ノクテム・  
闇夜切り裂く 一条の光 イン・メア・マヌー! エンス・ 我が手に宿りて イニミークム・エダット 敵を喰らえ  
フルグラティオー・アルピカンス!  
白き雷!!!」

速度重視の稲妻が放射され、暴徒共を襲った。

これに耐えられる暴徒共は居るはずもなく、全員痺れて沈んだ。

「(。 ㇏) ㇏ 3 フウ 一丁上がりつと。なゆなゆー? 終わったよ」

「ありがと……助かったわ。ハイ、これ。そのお礼ってわけじゃないんだけどね」

私はラッピングされた紙袋を理子に渡す。

「え……これって、チヨコレート……だよね?」

「そうよ。バレンタインデーの……ね」

「え……もしかして理子にくれるの!?!」

「ええ。いつも何かと世話になってるしき、そのお礼つてのもかねての友チョコよ」

「そっかあ……ありがとね。なゆなゆ!……そのお礼って訳でもないんだけどさ、理子もこれ、あげる!」

そう言つて理子は私に可愛くラッピングされた袋を私に手渡した。

「あ、ありがとう。理子」

私は少し照れつつもお礼を言つて受け取る。

「そのチョコは本命に近い友チョコだからね！」

そう言つて理子は何処かに行つてしまった……。

暫くして朝礼が始まったので理子から貰つたチョコレートは鞆に大切に仕舞つた。

午前中の一般科目の授業が終わつて、昼休み。

ここでも……波乱はフツーにあつた。

暴徒共を沈め、白雪に追われるヒルダを匿つて、そのお礼にチョコ貰つた。

無論、私もヒルダにチョコを渡した。

そしたら、偶然ワトソンにも出会い、チョコ交換を行つた。

ワトソン……男装してるとは言え、あの見た目で女子力高いとか反則だろ……。

その次は白雪が案の定暴走してたので沈めた。

そして正気に戻つた後、私は白雪ともチョコレート交換を行つた。

まあ……そこに至るまでに大戦争あつたのは言わないでおこう。

午後からの専門科目。

強襲科でも私は暴徒制圧から逃れられなかつた。

鎮圧の際にあかりと桜が協力してくれたので、その御礼も兼ねて二人に私はチョコをあげた。

その際に私はあかりからチョコレートを貰つた。

あかりからのチョコを受け取つた際に私は探偵科の授業を抜け出した志乃と麗のコンビに襲われた。

だが、一瞬のうちにあかりと桜のコンビによつて沈められ、志乃と麗はそれぞれ、ゆとりと蘭豹に連行された。二人共、結構お冠で殺気が溢れ出ていたので、二人は死なないけれど無事では済まされないうらう。

そんな事があつたが、私はその後、偶然出会つた結衣にチョコレートを渡し、葵とチョコレートを交換した。

葵に渡し終わったとき、ここ最近はずっと実体化して「三嶋花梨」として学校生活を送っている瑠璃神は

自身を慕う後輩達に囲まれていた。

花梨自身、人見知りなところもあるので、結構戸惑っていた。

私は「ヤバくなったら助けるとしますか……」というスタンスでそれを見守っていた。

なお、後日その事を花梨に伝えたら数日拗ねられて、機嫌を直すのに私が苦労したのは別の話である。

そして放課後。

私はというと、何故か女子寮の薔薇園に居た。

そしてその場には友人の綾瀬悠季が居た。

今は……何故か二人つきりである。

「……で、風優俺に何の用だ」

「ひゃい!？」

私はあまりの恥ずかしさに声が裏返ってしまった。

「……おい、風優、お前大丈夫なのか？顔もなんか紅いようだし……」

「うえ!? な、なんでも……ない! なんでもないってば!」

私はテンパって平静を装った。

その時だった。

私はあんまりにもテンパりすぎて薔薇園に広がる池（深い）に落ちそうになった。

「危ねえ!!」

それを抱き留めて私が落ちそうになるのを未然に防ぐ悠季。

その体制は……なんていうか……お互いの顔が近い。

もう私はこの状態でも気を抜いたら昇天してしまいそうだ。

「つと……大丈夫か?」

「う……うん」

悠季は私をそのまま近くにあった椅子に座らせる。

そして、至近距離に近づいて……

おでことおでこを合わせていた。

どうやら悠季は私に熱がないか確かめているのだろう。

その間も私の体温は確実に上がっていた。

「うーん……熱は無えみたいだけど……もしあれなら俺が寮まで送っていくか?」

悠季は私が体調が悪いと勘違いしてるらしく、私を寮まで送っていくと提案した。

「ううん……大丈夫だから」

「……?そうか?まあ……無理はすんなよ。俺は今から依頼あるし行くな」

「……待って」

立ち去ろうとする悠季を私は引き止めた。

「なんだ?」

振り返って引き留める私の方を見る悠季。

「あの……さ、これ……受け取って……欲しいの……ダメ……かな……?」

私は勇気を振り絞って悠季にチョコレート（本命）を渡す。

「これを……俺に?」

「うん……」

「そうか……。ありがとな、凧優。俺、凄く嬉しいよ」

悠季の言葉に私は背後の薔薇が咲き誇ったかのような笑顔になった。

それは……至極当然である。

なんせ……悠季、絶賛片思い中の彼に本命のチョコを渡せて。

そして「嬉しい」と言ってもらえたのだから。

「なあ……凧優」

「なに?」

「ホワイトデー、期待してても良いぜ?」

「ん。期待して待ってる。ねえ、悠季」

「なんだ?」

「今さ、少しだけでも……私を……抱いて」

「……解った」

その後数分間、悠季と私は抱き締め合っていたのだった。



この事もあって今年のバレンタインデーは私にとって忘れてたくても忘れられない最高の思い出になったのだった。

尚、余談だが悠季と私の二人っきりの空間は緋緋神絢香と瑠瑠神瑠樺と璃璃神凛花と瑠璃神花梨にバツチリその模様を目撃&録画され、緋緋神絢香の永久保存版コレクションの一つとなったのは別の話である。

Fin.

## 理子のとあるいちにち

2010年3月31日（水曜日）

年度末の1日とも言えるこの日。

今日はあたし、峰・理子・リユパン4世の誕生日である。

誕生日といえど、ぶっちゃけ何時もとは変わらない。

風優を始めとするイ・ウーメンバーから誕生日パーティーを開催してくれるのが毎年の恒例となっている。

風優達はあたしには内緒で準備を進めているのだろうが、こういう系を催す側が多いあたしにとっては大体の推測がついてしまう。

だが、知っている事を明かすほどあたしも野暮ではない。

知らないという体を貫き通すのが最善といえるだろう。

まあ、あたしと同室の風優はそれもお見通しだろうが。

話を戻す。

現在時刻は4時。

何時もだったら学校も春休み真っ只中なので爆睡中な時間である。

だが、今日はそうもいかない。

何時もは風優が皆の朝食をリサと葵と瑞穂さんと共に作る。

しかし、風優は昨日から夜通しの任務に出掛けている不在なのだ。

なのでその代役としてあたしが登板というわけだ。

着替え等を済ませ、あたしは厨房に向かう。

「あ、おはよー理子。今日は代わってくれてありがとうね」

その途中で任務が終わって朝帰りの風優と会う。

余程ハードな任務だったのだろう。

風優は結構フラフラだった。

「うん。おはよ、なゆなゆ。別に気にしないで。部屋の鍵開いてるし早く休んだら？」

「うん……………そーする……………」

受け答えも何時もとは違い虚な感じがした。

「これ、ヤバイよね……………?!」

そう判断したあたしは手刀で風優を気絶させた。

そしてそのままお姫様抱っこで風優を部屋のベッドまで運ぶことにした。

自室の風優のベッドに運び終えたら風優をパジャマに着替えさせる。

この途中でどさくさ紛れにセクハラしてやろうかと思っただが必死に堪えた。

起きた後の制裁は御免被るからだ。

あたしとて命は惜しいからな。

それにこの後チャンスは有るだろうしね。

風優を寝かせた後、あたしは改めて厨房に向かった。

厨房でリサ達と合流し、共に皆の朝食を作る。

結衣の食べっぷりが凄いで済まされないので結構疲れた。

それを平然とやってのける風優達は改めて凄いと感じた。

皆の朝食が終わってあたし達の朝食タイムである。

今日はこの後の予定まで余裕があったので比較的ゆっくり出来た。

朝食が終わったあたしはこの後は任務も武偵校の依頼も無いので部屋で書類仕事である。

自室に戻ったあたしは執務室に籠る。

そして机の後ろの棚から書類を取り出し、片付けていく。

あたしはこう見えてイ・ウー研鑽派におけるNo. 2の位置付けにいる。

風優の秘書位置でもあるのだがそれは置いておこう。

何が言いたいかつていうと……書類の量が多い。

予算編成の承認、新年度における新人育成指導要綱、任務における人員配置……

と、内容も多岐にわたる。

その上司の位置にいる風優は更に書類の量が多いし文句は言えまいて。

ま……文句を言っても書類が減るわけじゃないので頑張るとしよう。

あたしが頑張つてイ・ウー関連の書類を完了させ、休憩がてら一息

ついていたその時だった。

コンコン。

執務室のドアがノックされた。

「どーぞ」

あたしはノックをした人物に執務室へ入るように促す。

「理子ちゃん、おはよう」

「あ、るーりん。どうしたのさ」

執務室へ入ってきた人物は武偵高の制服に身を包んだ風優の相棒の瑠璃神こと、三嶋花梨だった。

「ちよつと理子ちゃんにお願いがあつてさ」

「お願い？」

「うん。風優のことなんだけど」

「なゆなゆの……？」

「うん。風優のさ、補助頼みたいなあ……て思つてさ」

「あーそつか。この後、るーりん依頼入つてたっけ」

「そうなの。理子ちゃん予定空いていたしどうかなつて」

「えつと、なゆなゆの朝のお風呂の補助だったよね」

「うん」

「理子のこの書類もなゆなゆ起きる頃には終わつてるだろーし別にいいよ」

「ありがと。あ……私、もう時間だし行くね？」

「いってらう。怪我しないよーに頑張つてね」

「うん。ありがとね」

花梨はあたしに風優の入浴のお世話を頼み、退出した。

まさかのチャンスが到来だった。

風優は低血圧で朝……特に寝起きがかなり弱い。

その為、毎朝入浴して目を覚ますのだ。

しかし、その行為を風優単体で行えた試しがない。

以前に風優が一人で行つた際は……脱衣場で寝ていた。しかも全裸で。

これにはあたしを含め全員が「ファツ!？」と驚愕したものだ。

故にそれ以降、誰か（主に花梨）が補助をしている。

さて……現在の時刻は9：30。

風優が起きてくるのは11：00頃。

あと1時間半か……。

それまでに武偵高関連の書類終わらせないとね。

さて……気合入れて頑張りますか……。

あたしは机に置いてある桃色の縁どりの伊達メガネをかけて再び書類作業を行った。

50分後。

気合入れて頑張ったお陰で書類仕事は完了した。

まさか……あたしが探偵科の主任生徒に任命されるとは思ってもみなかった。

主任生徒制度。

それは今回新設された制度である。

3年生の中から1名選ばれて教師と同等の権限を持つ……  
らしいがぶつちやけ「教師の雑用係」である。

それで、その主任生徒が発表されたのだが……

強襲科・情報科↓水無瀬風優

強襲科（副）↓神崎・H・アリア

情報科（副）↓ジャンヌ・ダルク

探偵科↓峰・理子・リュパン4世

通信科↓三嶋瑠樺

鑑識科↓三嶋凜花

車輛科↓武藤剛気

諜報科↓ヒルダ・ツペシユ

救護科↓小夜鳴マキナ

装備科↓機嬢

狙撃科↓綾瀬悠季

衛生科↓エル・ワトソン

SSR↓星伽白雪

CVR↓リーナ・ツペシユ

物の見事に知り合いっぱっかりだった。

「偶然って凄いやねえ……………」

と遠い目になったのは此処だけの話である。

暫く机で寛いでいると、執務室のドアが開いた。

「りこ……………」

「なゆなゆ……………？ どうしたの？」

執務室に入ってきたのは眠りから覚めたばかりの凧だつた。

その証拠に語彙力も低下しきっている。

「おふろ……………」

「あー、うん。解った行こっか」

「うん……………」

その後、まさかと思ひあたしは凧の方を見た。

案の定、凧はそのまま眠りについていた。

「フアツ!」

まさか此処で力尽きるとは思っていなかった。

想定外の出来事で驚愕の声が出してしまった。

仕方ないので、髪の毛の操作で凧をお風呂に連れていくことにした。

その際、セクハラを忘れずに行い個人的に堪能するあたしである。

大浴場に到着し、脱衣場で凧の脱衣を行う。

堪能も忘れずに行うのは言わずもがなである。

凧を一人で入浴させるのも不安だ。

それに丁度汗を流したかったのであたしも一緒に入浴することにする。

入浴中に凧を堪能していたら途中で凧の意識覚醒。

そして制裁を受けたのはお約束なあたしであった。

詳細を書きたいが全年齢版では無くなるので割愛しておこう。

入浴後はあたしと凧で昼食を摂る。

昼食後はお出掛けだ。

メンバーはあたし、凧、麒麟、あかりの四人である。

此処最近はこのメンバーで出掛ける頻度はかなり高い。

何故かは知らないがこのメンバーで行くのが一番楽しいのだ。無論、他のメンバーと行くのも楽しいのだけでも。

居住区からあたしは風優と二人乗りで今回の目的地である渋谷に向かう。

あたしの愛車であったベスパは後輩に譲るつもりでいる。

その為、今日はあたしの新しいバイクを見に行こうと思っている。何と料金は一括で風優が払ってくれるみたいだ。

風優曰く、「誕生日プレゼント」らしいので有り難く頂戴しておこう。

途中、勝鬨であかりと麒麟と合流する。

あかりも風優と同じく大型のオートバイを乗りこなしている。

それでまだ乗ってから1年経過していないんだから驚きである。

暫く、バイクで移動後、目的地であるモーターショップに到着した。

あたしは事前に目星を付けていたのですんなり決まった。

あたしが選んだのはイタリアのオートバイメーカーが発売している

『MV Augusta F4』

である。色も鮮やかな赤であるから気に入ったのだ。

お値段は2100000円程だったが風優が一括で支払った。

この時、その光景をあたし達は誰も驚いていなかった。

つくづく「慣れてって怖い」そう思う。

オートバイ購入後は渋谷でショッピングを楽しみまくった。

中でもあかりオススメのパンケーキはリピーターまっしぐらの美味しさだった。

その後、序でに麒麟のオートバイも購入した。

車種は『ヤマハ・YZF-R1（2009年式）』である。

支払いは………風優がシャーロック・ホームズ持ちにしていた。

風優のそのえげつなさに戦慄したあたし達なのは余談である。

居住区に帰ると安定のあたしの（サプライズ）誕生日パーティーが催された。

同期や、武偵高の面々からプレゼントを貰い、あたしは涙が出ちゃうほど嬉しかった。

まあ、ヒルダに関してはあまりのガチさにドン引きしたけども。

その後は安定のバンドタイムに突入したのでそれもおもしろいっし楽しんだ。

数年前には憧れた存在だった今この瞬間にあたしはいる。

あの当時の環境は今でも正直思い出したくもない。

だが、あの環境だったから今のあたしがある。

だってもしもあの環境にあたしが居なかったらあたしは……………

あたしは風優と出会えていなかった。

そして皆と出会えていなかった。

こんな風を楽しむこともなかっただろう。

だからそういう意味ではあの環境にも感謝はしている。

今のこの瞬間は終わってしまうけれど。

願わくば来年も……………その後ずっとこうして楽しい時間を送りたい。

これがあたし、峰・理子・リュパン4世の1番の願い。

ねえ、カミサマこの願い叶えてくれたって良いよね……………？

Fin……………